酒津 - 水江遺跡 範囲確認調査
上水島遺跡 範囲確認調査

倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告　第16集

倉敷埋蔵文化財センター

2017.3

序

岡山県倉敷市の中心部を流れる高梁川は、吉井川、旭川と並んで県下三大河川のひとつに数えられています。これらの河川は、古くは古代吉備の国の基盤となった肥沃な土地を生み出しましたが、倉敷市内平野の大部分もまた、この高梁川が運ぶ土砂の堆積作用と近世以降の干拓によって形成されたもので、長い歴史の中にあっては、現在の倉敷市の地形はつい最近になって出来上がったとも言えるでしょう。

本報告書には、高梁川河口付近の河川敷に立地する酒津－水江遺跡と、同じく高梁川河口沖合に位置する上水島遺跡の、どちらも範囲確認調査の成果を収録いたしました。

酒津－水江遺跡は、古くから酒津式土器を多く出土する遺跡として有名でしたが、河川の増水などによる遺跡破壊が年々進行するような状況であったため、遺跡の範囲や内容を明らかにするための確認調査を、昭和53年度から実施いたしました。18年間にわたる調査の結果、酒津－水江遺跡は大きく二つの遺跡に分かれることが明らかとなったため、それぞれ「酒津遺跡」、「水江遺跡」として周知するなど、遺跡を保護していくうえでの貴重な所見が得られた調査となりました。

上水島遺跡では、全島を対象として確認調査を行った結果、丘陵上からは旧石器時代の遺物が、東西の浜辺からは縄文時代の遺物や奈良・平安時代の飯蛸壺などが確認され、三か所の遺跡としてその詳しい範囲を遺跡地図に記載することができました。トレンチによる確認調査のため、個々の遺跡の詳しい内容については不明な点も少なくありませんが、瀬戸内島嶼部における遺跡のあり方を示すものとして注目されます。

本書が、倉敷市における埋蔵文化財の保護や調査研究の基礎資料として活用されるとともに、多くの市民の方が郷土の歴史を学ぶきっかけとなれば幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査ならびに報告書の作成にあたりまして、ご指導ご協力を賜りました関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成29年3月31日

倉敷市教育委員会
教育長　井上正義

例　言

1　本書は、 昭和53年度～平成7年度にかけて実施した酒津－水江遺跡、ならびに平成元年度に実施した上水島遺跡の範囲確認調査報告書である。

2　本書の執筆は、第1章を鍵谷、第2章を小野が担当し、各遺跡の石器に関する部分の執筆および全体の編集は藤原が行った。また、報告書の作成にあたっては倉敷埋蔵文化財センター嘱託員内田智美、那須玲子、日下美樹の協力を得た。

3　発掘調査における遺構の写真撮影は各担当者が行い、遺物の写真撮影は藤原が行った。

4　本書の挿図に使用した高度値は海抜高であり、方位はいずれも磁北である。

5　本書第1・57・61図に使用した地形図は、国土地理院発行の1/25,000・1/50,000地形図を複製、加筆したものである。

6　本書に関係する出土遺物、実測図、写真等はすべて倉敷埋蔵文化財センターで保管している。

目　次

序

第１章 酒津－水江遺跡範囲確認調査 …… 1

第１節　遺跡の位置と名称 …… 1

第２節　調査に至る経緯と経過 …… 2

１　調査に至る経緯 …… 2

２　調査の経過と概要 …… 2

第３節　確認調査の概要 …… 5

１　調査の方法 …… 5

２　調査の体制と整理作業 …… 5

３　年度別調査の概要 …… 6

第４節　出土遺物 …… 46

第５節　ま と め …… 52

出土遺物観察表 …… 57

第２章 上水島遺跡範囲確認調査 …… 59

第１節　位置と環境 …… 59

第２節　調査に至る経緯と経過 …… 61

１　調査に至る経緯 …… 61

２　調査の経過 …… 62

第３節　調査の概要 …… 63

１　確認調査の概要 …… 63

２　遺　物 …… 74

第４節　ま と め …… 88

出土遺物観察表 …… 90

挿図目次

第１図　遺跡の位置 …… 1
第２図　年度別調査対象区域図 …… 3
第３図　第1次北半調査地点位置図…… 6
第４図　第1次南半調査地点位置図…… 6
第５図　第2次北半調査地点位置図…… 7
第６図　第2次北半調査地点柱状図１…… 8
第７図　第2次北半調査地点柱状図２…… 9
第８図　第2次南半調査地点柱状図１…… 9
第９図　第2次南半調査地点柱状図２…… 10
第10図　第2次南半調査地点位置図…… 11
第11図　第3次調査地点柱状図…… 12
第12図　第3次調査地点位置図…… 13
第13図　第4次調査地点位置図…… 13
第14図　第4次調査地点柱状図１…… 14
第15図　第4次調査地点柱状図２…… 15
第16図　第5次調査地点柱状図…… 15
第17図　第5次調査地点位置図…… 16
第18図　第6次調査地点位置図…… 16
第19図　第7次調査地点位置図…… 17
第20図　第8次調査地点位置図…… 17
第21図　第6次調査地点柱状図…… 18
第22図　第7次調査地点断面図…… 19
第23図　第8次調査地点断面図…… 20
第24図　第9次調査地点位置図…… 21
第25図　第9次調査地点断面図１…… 22
第26図　第9次調査地点断面図２…… 23
第27図　第10次調査地点位置図…… 24
第28図　第10次調査地点断面図･遺構図１‥ 25
第29図　第10次調査地点断面図･遺構図２‥ 26
第30図　第11次北調査地点位置図…… 27
第31図　第11次南調査地点位置図…… 27
第32図　第11次北調査地点断面図…… 27
第33図　第11次南調査地点断面図…… 28
第34図　第12次調査地点位置図…… 30
第35図　第13次調査地点位置図…… 30
第36図　第12次調査地点断面図…… 31
第37図　第13次調査地点断面図…… 32
第38図　第14次調査地点位置図…… 33
第39図　第14次調査地点断面図…… 34
第40図　第15次調査地点位置図…… 35
第41図　第15次調査地点断面図１…… 36
第42図　第15次調査地点断面図２…… 37
第43図　第16次調査地点位置図…… 38
第44図　第16次調査地点断面図･遺構図 … 39
第45図　第16次トレンチ2竪穴住居 …… 39
第46図　第16次トレンチ3断面図･遺構図‥ 40
第47図　第17次調査地点位置図…… 41
第48図　第17次調査地点断面図･遺構図 … 42
第49図　第17次調査地点断面図１…… 43
第50図　第17次調査地点断面図２…… 44
第51図　第18次調査地点位置図…… 44
第52図　第18次調査地点断面図…… 45
第53図　出土遺物１ …… 47
第54図　出土遺物２ …… 49
第55図　出土遺物３ …… 50
第56図　出土遺物４ …… 51
第57図　遺跡の立地とその範囲 …… 52
第58図　酒津遺跡時代別出土地点分布図 … 54
第59図　水江遺跡時代別出土地点分布図 … 55
第60図　遺跡の位置 …… 59
第61図　周辺の遺跡 …… 60
第62図　トレンチ位置図 …… 64
第63図　土層断面・平面図１ …… 66
第64図　土層断面・平面図２ …… 67
第65図　土層断面・平面図３ …… 68
第66図　土層断面・平面図４ …… 69
第67図　土層断面・平面図５ …… 70
第68図　土層断面・平面図６ …… 71

第69図　土層断面・平面図７ …… 72
第70図　土層断面・平面図８ …… 73
第71図　縄文土器１ …… 75
第72図　縄文土器２ …… 76
第73図　縄文土器３ …… 77
第74図　土師器 …… 78
第75図　須恵器 …… 79
第76図　黒色土器・緑釉陶器 …… 80
第77図　製塩土器 …… 80
第78図　土　錘 …… 81
第79図　飯蛸壺１ …… 82
第80図　飯蛸壺２ …… 83
第81図　石器１ …… 84
第82図　石器２ …… 85
第83図　石器３ …… 86
第84図　石器４ …… 87
第85図　遺跡の範囲 …… 89

図版目次

図版１　酒津－水江遺跡
1　第4次トレンチ1断面
2　第4次トレンチ2断面
3　第5次トレンチ1断面
4　第7次トレンチ3断面
5　第8次トレンチ1北壁断面
6　第8次トレンチ3全景
7　第9次トレンチ2北壁断面
8　第9次トレンチ7北壁断面

図版２　酒津－水江遺跡
1　第9次トレンチ12溝状遺構
2　第10次トレンチ2ピット
3　第10次トレンチ5溝状遺構
4　第10次トレンチ7ピット
5　第10次トレンチ8ピット
6　第11次トレンチ4全景
7　第12次トレンチ1西壁断面
8　第13次トレンチ1南壁断面

図版３　酒津－水江遺跡
1　第13次トレンチ2全景
2　第13次トレンチ9東壁断面
3　第15次トレンチ8北壁断面
4　第16次トレンチ1南壁断面
5　第16次トレンチ2住居跡
6　第16次トレンチ2住居跡遺物出土状況
7　第16次トレンチ2住居跡近接
8　第16次トレンチ3ピット

図版４　酒津－水江遺跡
1　第16次トレンチ3住居跡
2　第17次トレンチ1完掘状況
3　第17次トレンチ1住居跡
4　第17次トレンチ4東壁断面
5　第17次トレンチ5全景
6　第17次トレンチ8全景
7　第13次トレンチ2調査風景
8　第16次トレンチ3調査風景

図版５　酒津－水江遺跡 出土遺物（１）
図版６　酒津－水江遺跡 出土遺物（２）
図版７　上水島遺跡
1　トレンチ３西壁断面
2　トレンチ６全景
3　トレンチ９北壁断面
4　トレンチ11東壁断面
5　トレンチ14遺物出土状況
6　トレンチ15西壁断面
7　トレンチ20北壁断面
8　トレンチ23北壁断面

図版８　上水島遺跡
1　トレンチ28遺物出土状況
2　トレンチ28北壁断面
3　トレンチ30東壁断面
4　トレンチ30ピット完掘
5　トレンチ31ピット上面
6　トレンチ31土器出土状況
7　トレンチ31北壁断面
8　トレンチ32東壁断面

図版９　上水島遺跡
１　トレンチ36西壁断面
２　トレンチ42蛸壺出土状況
３　トレンチ42ピット１
４　トレンチ43全景
５　トレンチ44東壁断面
６　トレンチ46南壁断面
７　トレンチ53西壁断面
８　トレンチ54全景
図版10　上水島遺跡 出土遺物（１）
図版11　上水島遺跡 出土遺物（２）
図版12　上水島遺跡 出土遺物（３）
図版13　上水島遺跡 出土遺物（４）
図版14　上水島遺跡 出土遺物（５）
図版15　上水島遺跡 出土遺物（６）

第１章　酒津－水江遺跡範囲確認調査

第１節　遺跡の位置と名称

酒津－水江遺跡は、岡山県三大河川の一つである高梁川が瀬戸内海に注ぎ込む少し手前、倉敷市街地の北西にあたる河川敷に位置しており、弥生時代から中世までの遺物が確認されている。現在の高梁川は、遺跡の北西に位置する酒津八幡山の東側を迂回した後、水流を南西に向きを変え水島港へ流れ込んでいるが、これは明治末年から大正期にかけての河川改修によるものである。それ以前は、酒津八幡山を境に水流が東西に二分され、西高梁川は八幡山の西側を抜けた後ほぼ現在の高梁川の流路を通り、一方、東高梁川は八幡山の東からまっすぐ南下し連島の東側を通って、それぞれ瀬戸内海へ注いでいた。したがって、酒津－水江遺跡は、この東西高梁川の堆積作用により八幡山の東から南にかけて形成された沖積地に立地するものであるが、元々は遺物の濃密な分布が確認されていた上手の酒津地区と下手の水江地区に存在する別々の遺跡として認識されており、当初から「酒津－水江遺跡」と呼ばれていたわけではなかった。この遺跡名が使われたのは、昭和48年刊行の『倉敷考古館研究集報第8号』(1)で、酒津地区の中心遺跡であった酒津遺跡と、水江地区の中心遺跡であった新屋敷遺跡(2)を、河川敷一帯に広がるより大きな遺跡の一部と捉え、「酒津－水江地区」の遺跡として一括して報告されたのが最初である。そして、昭和50年に刊行された『倉敷市文化財分布図』(3)において「酒津－水江遺跡」として記載されて以来、一般的にその名称で周知されるところとなった。

第１図　遺跡の位置（Ｓ＝1/50,000）

なお、当該確認調査の結果、酒津－水江遺跡は当初認識されていたとおり、酒津地区を中心とする部分と水江地区を中心とする部分に分けることができ、両者の間には遺跡の存在しない部分が一定の面積を占めることが明らかとなった。この成果を受けて、倉敷市教育委員会では前者を酒津遺跡、後者を水江遺跡と呼称することとし、平成17年に刊行した「倉敷市遺跡地図（倉敷・庄地区）」(4)ではその範囲を明記し、一般に周知しているところである。したがって、「酒津－水江遺跡」という名称の遺跡は、本報告書を刊行する時点では存在していないことを記しておく。

第２節　調査に至る経緯と経過

１　調査に至る経緯

前節で述べたとおり、酒津－水江遺跡はその大部分が河川敷に位置しているため、大雨などによる増水のたびに河床が洗われ、そうした後の河原には土器片等の散布がかなり広範囲にわたって認められていた。こうしたことは遺跡の規模がかなり大きいことを示していたが、増水のたびに流路や河床の様子が変わるため、遺物の分布状況だけでは遺跡の範囲を推定することは困難な状況であった。また、上手の一部では遺物包含層が地表に露出している場所も見られたが、その多くは平時の水面以下にあり、上には厚く土砂が堆積していることも、通常の踏査による表面観察ではほとんど内容の把握には至らない原因となっていた。そして、当時増水後の河原では、比較的大きな土器片等を簡単に拾うことができたためこれらを採集する人も多く、中には盗掘まがいの行為も見られたようである。

このように、酒津－水江遺跡は、古式土師器である酒津式土器を多く出土する重要遺跡でありながら、その詳しい内容が不明なまま、流水や盗掘などにより遺跡の破壊が日々進行している状況であった。こうした中、倉敷市教育委員会では、遺跡の範囲や性格を明らかにし将来の保存対策の基礎資料とするため、昭和53年度から酒津－水江遺跡の範囲確認調査を順次行っていくこととなった。

２　調査の経過と概要

調査は、上手の酒津地区から下手の水江地区に至る河川敷内を対象に、昭和53年度（第1次）から平成7年度（第18次）までの18年間にわたって実施した。

第1次調査は、笠井堰の上流と下流の中洲を中心として行い、下流の中洲ほぼ全面で、弥生時代～中世の遺物包含層が確認されている。第2次調査は、笠井堰下流の中洲南端付近から古水江渡しまでの高梁川東岸約1.5㎞を対象として行った結果、北半部で遺物包含層（弥生～中世）が確認されたものの、南半部ではほとんど確認することができなかった。

第1次調査で対象とした笠井堰下流の中洲から南へ約1㎞までの部分を対象に、第3次～第6次調査を行った。第3次･第4次調査では中洲の東半部分を中心に遺物包含層（弥生～中世）が確認されたが、第5次・第6次調査では、第5次調査の北東端に設定したトレンチ1か所のみでしか確認されず、酒津地区を中心とする遺跡の南端がほぼ明らかとなった。

第7次～第11次調査は、古水江渡しを挟んで北東約100ｍから南西約800ｍまでの区域を対象に行った。第9次および第10次調査では、堤防寄りのトレンチを中心に遺物包含層（弥生～中世）が確認されており、かつて造成工事で多くの酒津式土器が確認された西阿知浄水場から続くと思われる、水江地区を中心とする遺跡の広がりを押さえることができた。一方、第10次の南西半および第11次南調査地点のトレンチからは遺物包含層は確認されておらず、この遺跡の南端が明らかとなった。

第12次～第14次調査は、酒津八幡山南端付近の高梁川右岸を対象に行い、その結果、第12次と第13次調査区が重なる部分のトレンチで弥生時代および奈良時代～中世の遺物包含層が確認された。

第15次調査は、第2次調査と第11次調査（北調査地点）の際に、湧水等で確認できなかった水江地区の遺跡の北端を明らかにすることを目的として、古水江渡しの上流を対象に行った。その結果、古水江渡しの北東約100ｍあたりが遺跡の東端になることが判明した。第16次調査では、笠井堰下流

第２図　年度別調査対象区域図（Ｓ＝1/10,000）

の中洲部分にあって、遺物包含層が河岸断面に露出しているため、増水による流失の危険性が高い3か所について、内容把握の確認調査を行った。その結果、2か所のトレンチから古墳時代の住居跡が確認されるなど、水流による侵食を受けながらも比較的良好な保存状態で遺構が残っていることが判明した。第17次調査は、第3次調査において人力による掘削のため十分な調査ができていない部分について、改めて重機を用いて遺跡範囲の確認を行ったものである。その結果、中洲の東岸を中心としたトレンチから、弥生時代および中世の遺物包含層が確認された。第18次調査は、第12次および第13次調査において酒津八幡山南端東側の河岸段丘上で遺跡が確認されていることから、その西側を対象として行ったが、いずれのトレンチからも遺物・遺構は確認されなかった。

第３節　確認調査の概要

１　調査の方法

本確認調査の対象地は高梁川の河川敷内で、かなり広範囲になることが想定されたので、調査を開始した昭和53年当初は、終了年度を決めず毎年継続的に2～3週間の調査を実施していく方針であったようである。広い面積を調査対象とする場合、基準となるポイントを決めそこからメッシュ状に杭を打ち割り付けていくのが普通であるが、本確認調査の場合、対象地が一級河川の河川敷であるため、毎年梅雨時などには河床が水没することも珍しくなく、継続的な使用に耐える基準杭を調査地内に設定することは困難であった。そのため、年度ごとに、調査対象地近くの高梁川右岸と左岸に設置されている建設省（現在国土交通省）基準杭を結んだラインをもとに、基準となるポイント杭をその年の調査地内に設定し、そこからメッシュ状に25ｍ間隔で杭を延ばしトレンチの位置確定を行った。

本確認調査では、基本的に2ｍ ×2ｍの試掘坑により土層等の確認を行っているが、段丘などの斜面部分については垂直に削って断面確認を行っている地点がある。本報告では、前者を「トレンチ」、後者を「カット」と呼称し、それぞれに連番をふって記載している。また、調査地点位置図ではトレンチを「T」、カットを「C」の文字で表し、それぞれの位置を「■」と「●」で示した。

トレンチ等の掘り下げは、昭和60年度（第8次調査）まではすべて人力のみで行っており、そのため、土砂の堆積が厚いところでは2ｍ以上の掘削が必要で、湧水や斜面崩壊など、調査は困難を極めたようである。また、こうした状況により内容の確認ができなかった地点については、後に再確認のための調査を実施している。昭和61年度以降は小型の重機（バックホー）を調査に投入し、河川改修後の厚い堆積土を除去することで、調査の効率も格段に上がることとなった。

２　調査の体制と整理作業

調査にあたっては、学識経験者ならびに関係行政機関等の職員からなる「酒津－水江遺跡文化財調査委員会」が組織され、毎年倉敷市教育委員会との委託契約に基づき、調査や資料の整理、事務作業などが行われた。確認調査が始まった昭和53年当時は、倉敷市にはまだ埋蔵文化財専門職員がいなかったため、委員会の専門委員には（財）倉敷考古館の職員が委嘱され、実質的な調査および整理作業が行われた。そして、昭和58年には倉敷市の専門職員が2名に増えたこともあり、昭和59年度以降の調査は倉敷市教育委員会が主体となって実施し、第15次以降の調査についてはその概要の報告を行っている[5]。なお、昭和50年代の古い時期の調査に関して、図面や写真あるいは資料の一部に

現在確認できないものや対照できないものがある。したがって、本報告書の内容には、調査終了時の実績報告を元に書かれた部分が含まれていることをあらかじめ記しておく。

３　年度別調査の概要

（１）第１次調査（昭和５３年度）

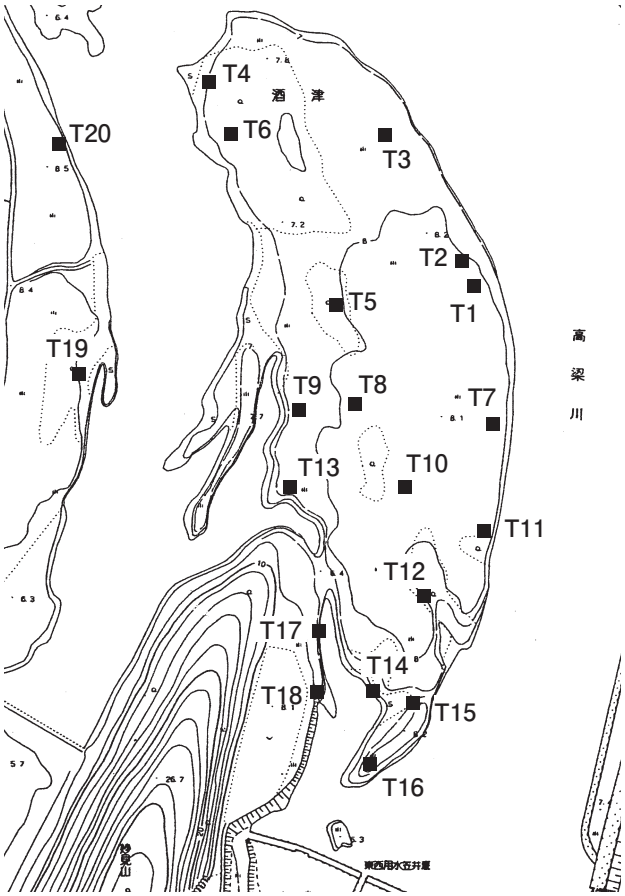
【調査期間】　昭和54年3月12日～3月24日

【調査委員会】

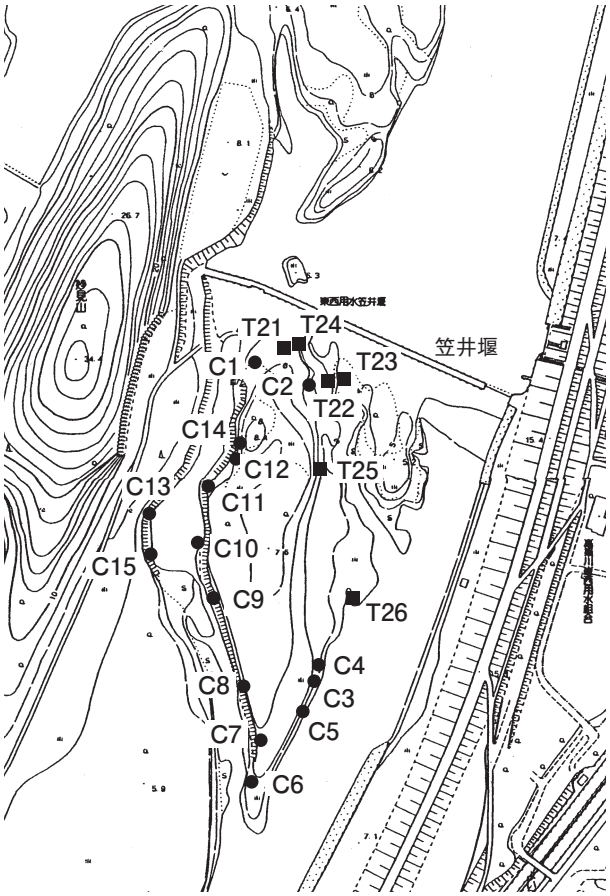
委員長	赤木本蔵	岡山県文化財保護協会 会長	専門委員	間壁葭子	（財）倉敷考古館　学芸員
副委員長	三島一夫	倉敷市教育委員会 教育長	〃	藤田憲司	〃　〃
委　員	大森昭郎	倉敷市教育委員会 社会教育部長	〃	河本　清	岡山県教育庁 文化課
専門委員	間壁忠彦	（財）倉敷考古館 館長	〃	小野一臣	倉敷市教育委員会 社会教育指導員

笠井堰の上流と下流の中洲を中心として、トレンチ26か所、カット15か所による調査を行っている。上流の中洲に設定した20か所のトレンチ（T1～T20）では、T1とT2において灰黒色の遺物包含層が確認されたものの、他のトレンチでは、地表下約40cmあたりで湧水が激しくなり、以下の掘り下げはできなかったようである。

下流の中洲では、東岸及び西岸に設定した15か所すべてのカットと、湧水で調査不能となったT22とT23以外のすべてのトレンチで遺物包含層が確認されているようであるが、土層図等が残っておらず、詳細な内容については不明である。また、T24では土坑墓3基が検出され、完形の小皿や高台付椀などが出土しているが、この遺構の詳しい状況についても明らかでない。



第３図　第1次北半調査地点位置図（S＝1/5,000）



第４図　第1次南半調査地点位置図（S＝1/5,000）

（２）第２次調査（昭和54年度）

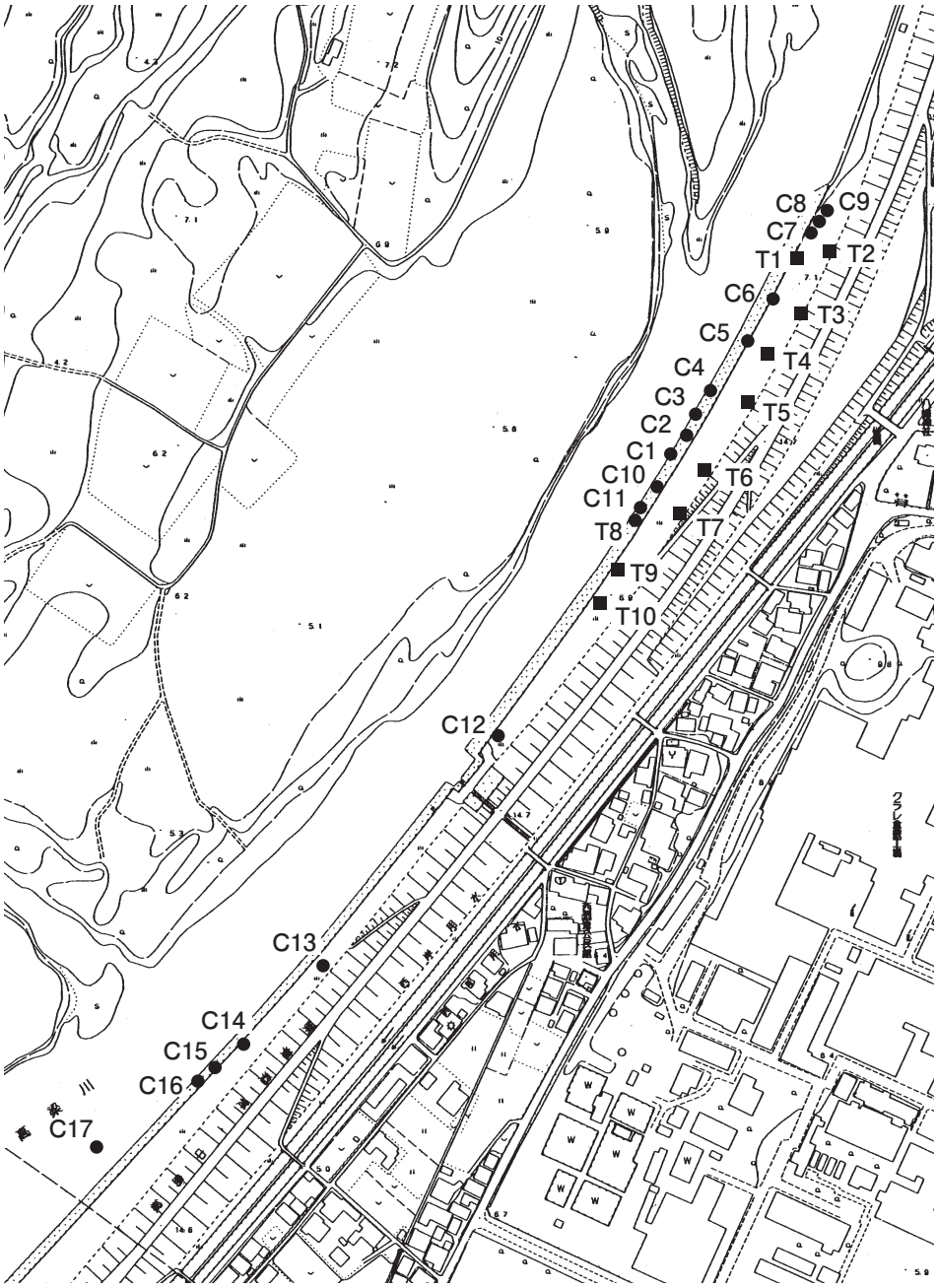
【調査期間】 昭和54年10月15日～11月1日

【調査委員会】

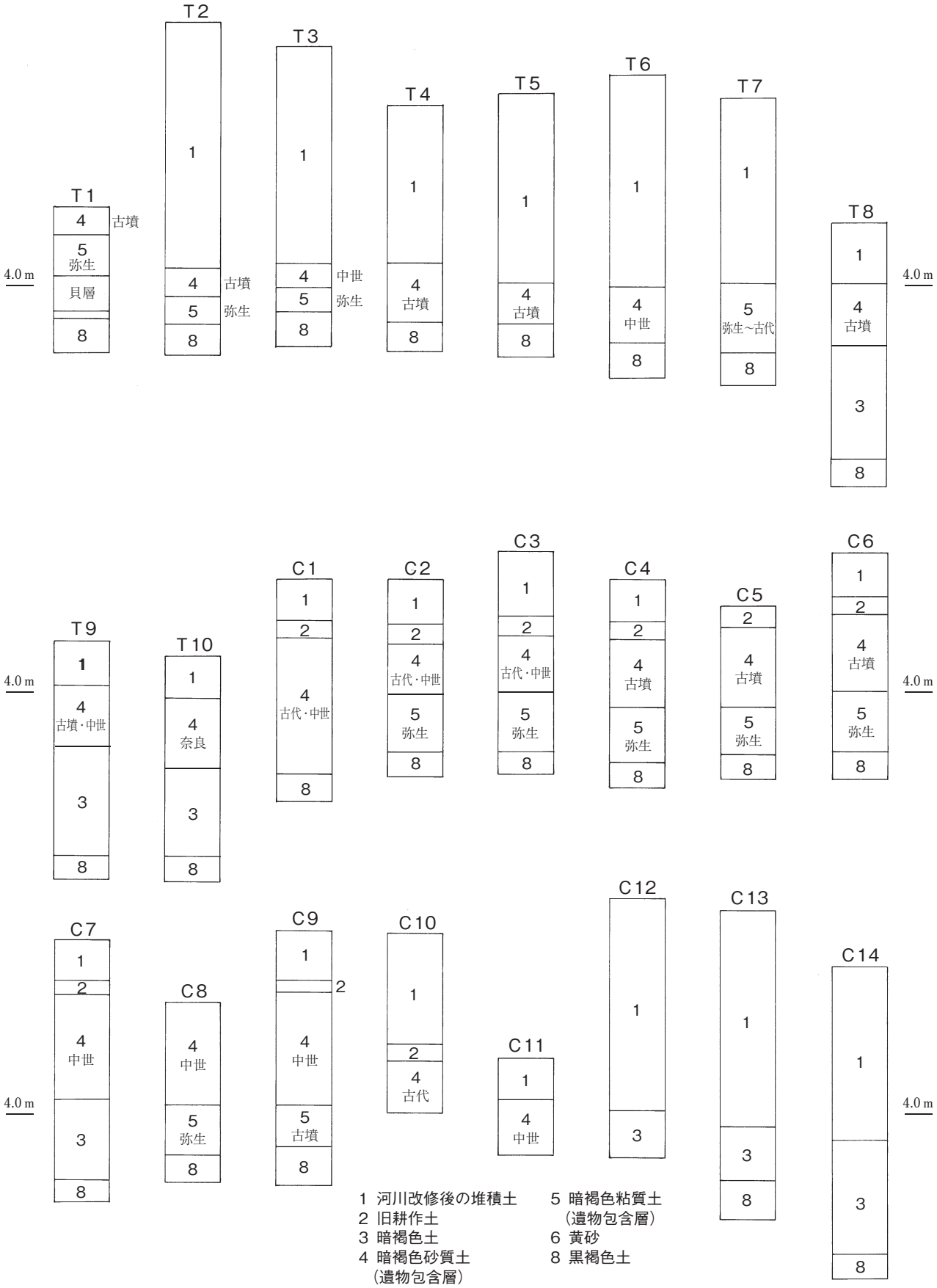
委員長	赤木本蔵	岡山県文化財保護協会 会長
副委員長	三島一夫	倉敷市教育委員会 教育長
委　員	大森昭郎	倉敷市教育委員会 社会教育部長
専門委員	間壁忠彦	（財）倉敷考古館 館長
〃	間壁葭子	〃　学芸員
専門委員	藤田憲司	（財）倉敷考古館 学芸員
〃	河本　清	岡山県教育庁 文化課
〃	福本　明	倉敷市教育委員会 文化課
〃	小野一臣	〃　社会教育指導員

第1次調査で実施した笠井堰下流の中洲南端付近から、高梁川東岸沿いに約1.5㎞下った古水江渡しまでの区間を調査対象とし、トレンチ30か所、カット20か所による調査を行っている。

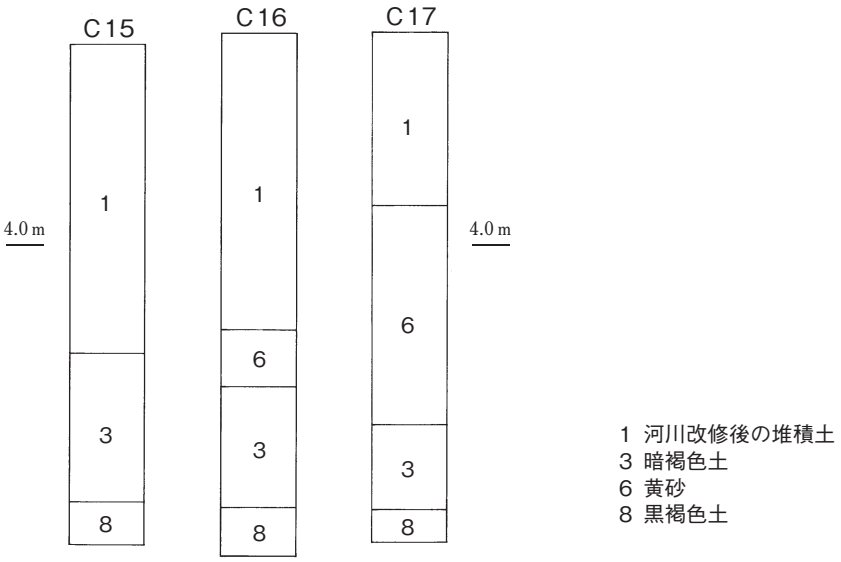
調査区の北端部分は、『研究集報第8号』の中で貝塚が残されていると記載のあるD地点付近にあたり、実際T1から弥生時代の貝塚が確認されている。貝層は、標高4.0mあたりで厚さ30㎝ほど堆積しており、出土している土器から弥生中期に属するものと思われる。T1の周辺では、T2・T3・T7およびC4～C6・C8で弥生中期の土器が出土しており、当時期の遺跡が一定の広がりを持っていることが推定される。また、C12より北の20か所すべての調査地点で遺物包含層が確認されたものの、これより南のトレンチ等では標高4.0m以下は砂層もしくはシルト層と



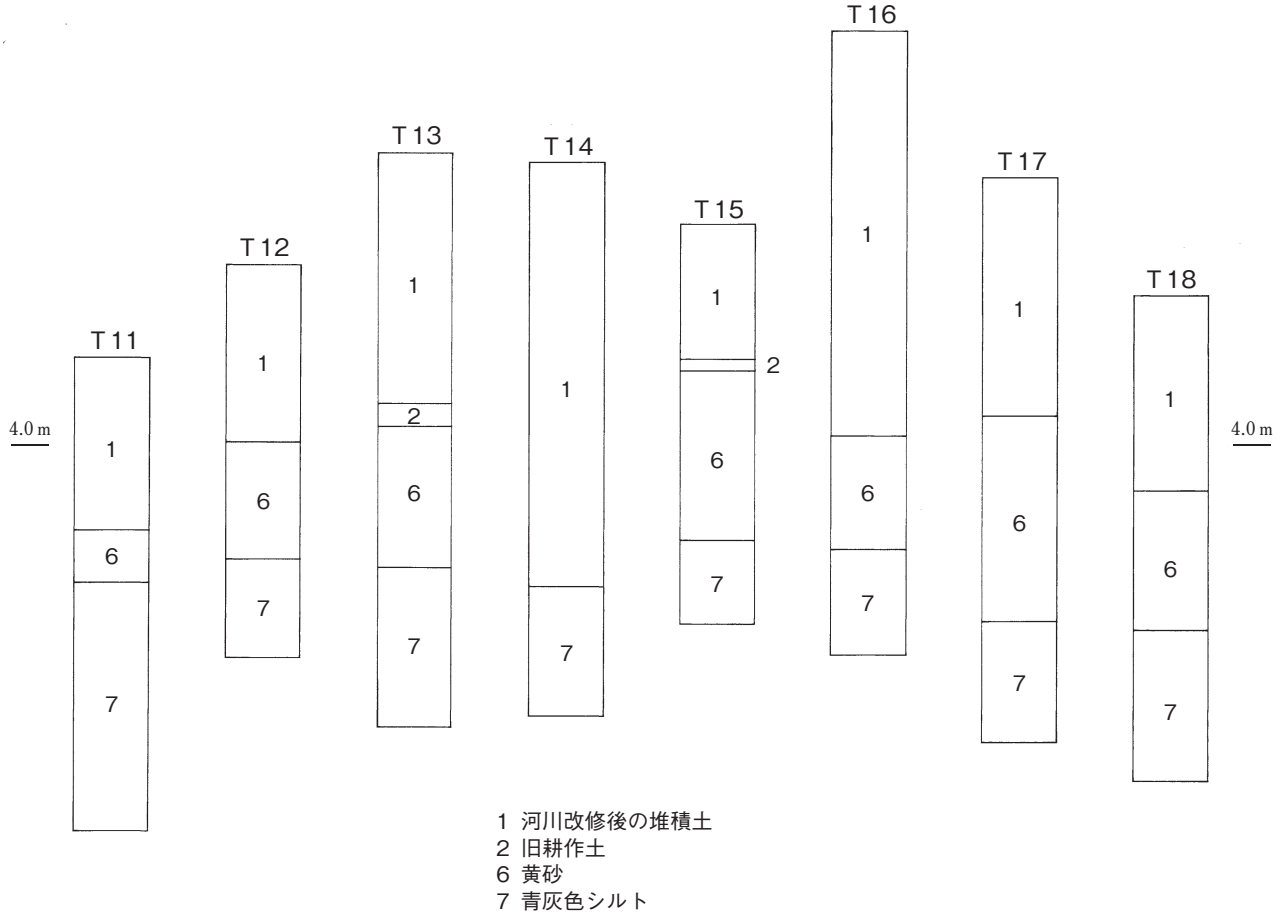
第５図　第２次北半調査地点位置図（Ｓ＝1/5,000）



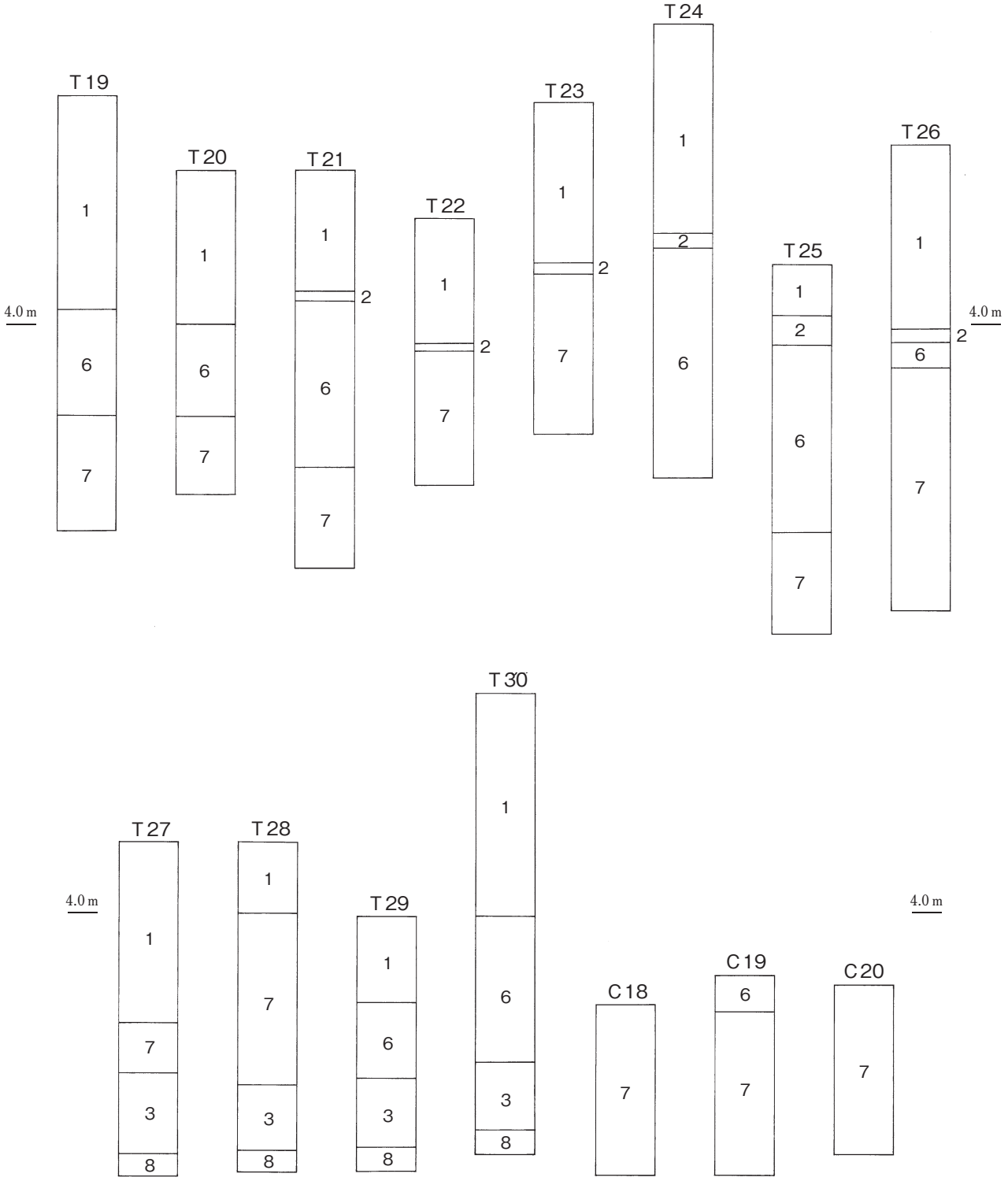
第６図　第２次北半調査地点柱状図１（Ｓ＝1/40）



第７図　第２次北半調査地点柱状図２（S＝1/40）



第８図　第２次南半調査地点柱状図１（S＝1/40）



第９図　第２次南半調査地点柱状図２（S＝1/40）

なるものが多く、酒津地区の遺跡の南端がこの付近にあることが明らかとなった。

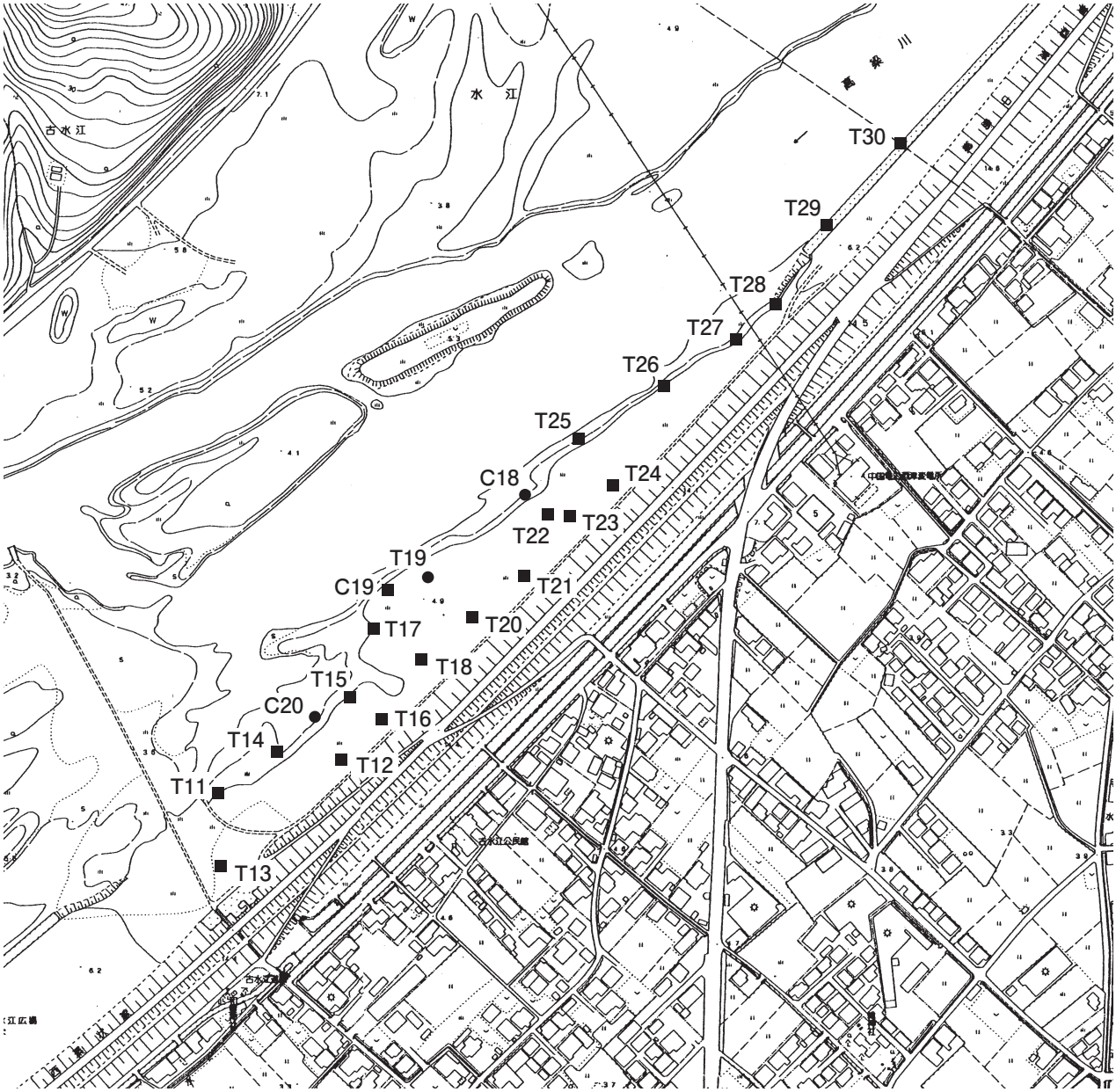
（３）第３次調査（昭和55年度）

【調査期間】 昭和56年3月16日～3月31日

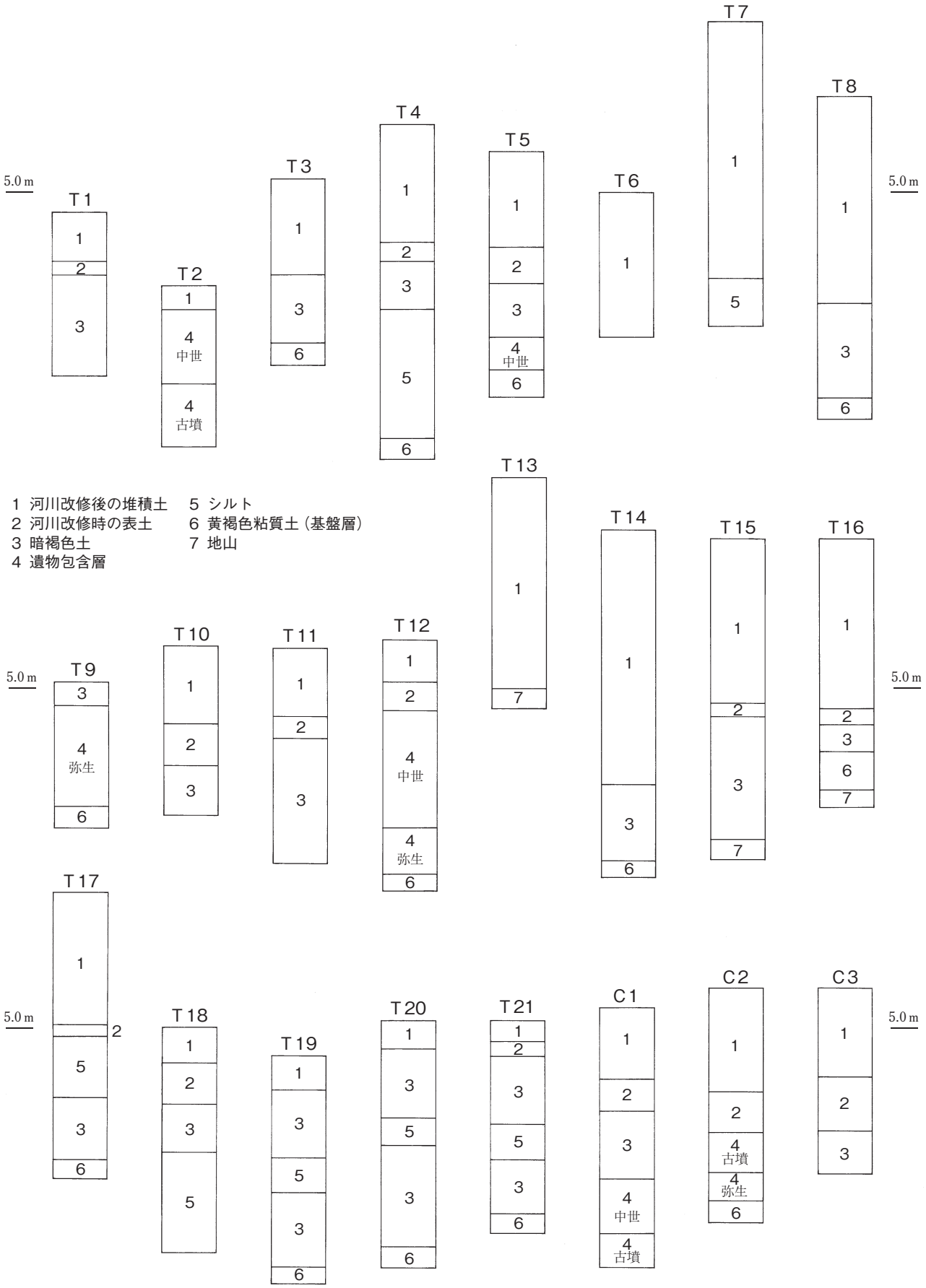
【調査委員会】

委員長	赤木本蔵	岡山県文化財保護協会 会長	専門委員	藤田憲司	（財）倉敷考古館 学芸員
副委員長	三島一夫	倉敷市教育委員会 教育長	〃	河本　清	岡山県教育庁 文化課
委　員	洲脇　滋	倉敷市教育委員会 社会教育部長	〃	小野一臣	倉敷市文化財保護審議会 委員
専門委員	間壁忠彦	（財）倉敷考古館 館長	〃	福本　明	倉敷市教育委員会 文化課
〃	間壁葭子	〃　学芸員	〃	脇本　裕	〃　〃

第3次調査は、第2次調査で確認している遺跡の広がりを明らかにするため、笠井堰下流の中洲部分を対象として、トレンチ21か所、カット3か所による調査を行った。これらの内、遺物包含層が



第10図　第２次南半調査地点位置図（Ｓ＝1/5,000）



第11図　第３次調査地点柱状図（S＝1/40）

確認されたのはT2・T5・T9・T12およびC1・C2で、調査区域の北端から中洲の東岸にかけての部分である。これらの包含層下面（遺跡のベースとなる基盤層の上面）の高さを見てみると、最も高いのがT9で標高約4.4m。次いで高いのがT5・T12・C2で標高3.7m前後、最も低いのがT2・C1で標高3.2m前後となっている。これらのことから、第1次調査において笠井堰下流の中洲で確認された遺跡は、細い流路を挟んで南側へ広がっていくものの、調査区の南西方向へはあまり続かず、第2次調査区北端部の方向へ延びていくものと思われる。

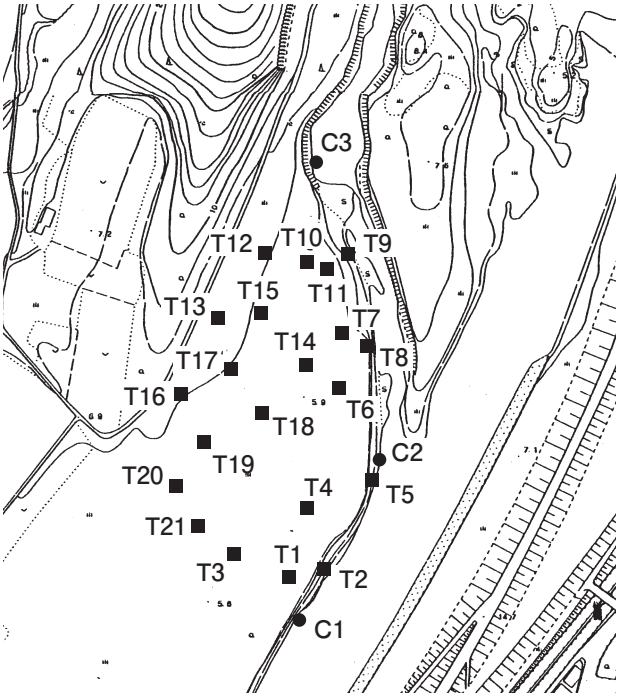
（４）第４次調査（昭和56年度）

【調査期間】 昭和57年3月8日～3月26日

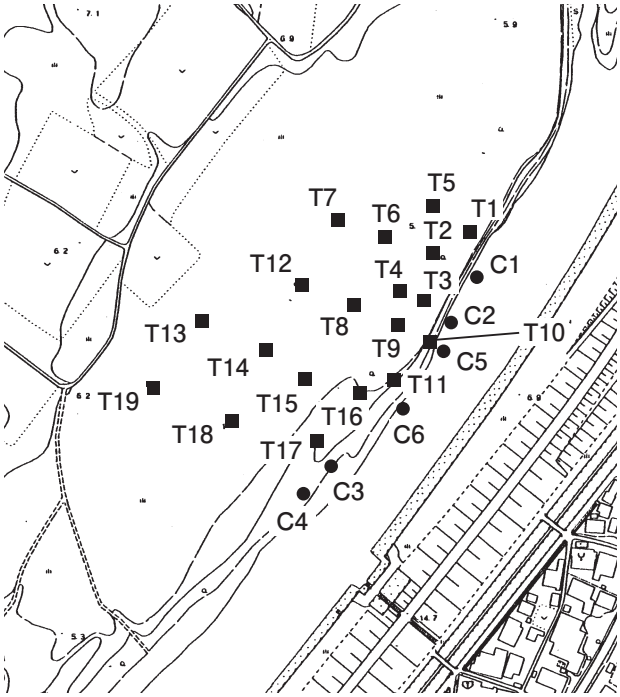
【調査委員会】

委員長	赤木本蔵	岡山県文化財保護協会 会長	専門委員	藤田憲司	（財）倉敷考古館 学芸員
副委員長	三島一夫	倉敷市教育委員会 教育長	〃	河本　清	岡山県教育庁 文化課
委　員	宮本昭三	倉敷市教育委員会 社会教育部長	〃	小野一臣	倉敷市文化財保護審議会 委員
専門委員	間壁忠彦	（財）倉敷考古館 館長	〃	福本　明	倉敷市教育委員会 文化課
〃	間壁葭子	〃　学芸員	〃	脇本　裕	〃　〃

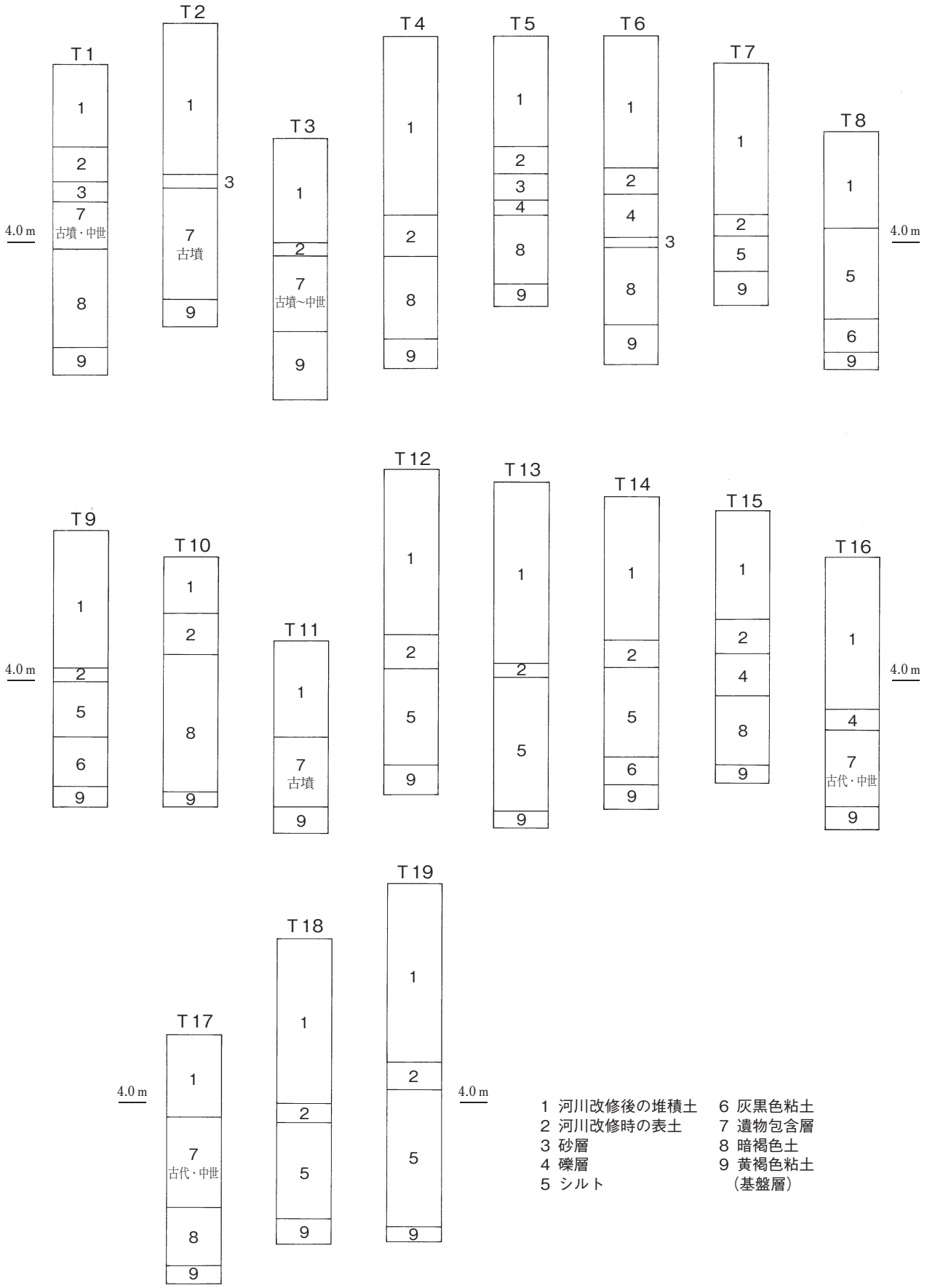
第4次調査は、第3次調査区から南へ続く中洲部分約200mを対象として、トレンチ19か所、カット6か所を設定して調査を行った。遺跡のベースとなる黄褐色粘土層（基盤層）は調査区全域で確認され、その高さはおおむね標高3.0～3.4mの間に収まるが、T5では3.7mとやや高く、T17では2.8mとやや低くなっている。遺跡が確認されたトレンチ（T1～3・T11・T16・T17）やカット（C1・C6）では、この基盤層の直上に遺物包含層である暗褐色粘土層が見られ、主として古墳時代以降の土器を含んでいるが、C6では弥生土器も確認されている。T1～T3およびC1付近は、かつて酒津式土器が多く採集されている地点であり、水流により徐々に侵食を受けながらも中洲の東岸寄りの部分では、ある程度の広がりを持って遺跡が残存していることが確認された。一方、調査区の西半、遺物包含層



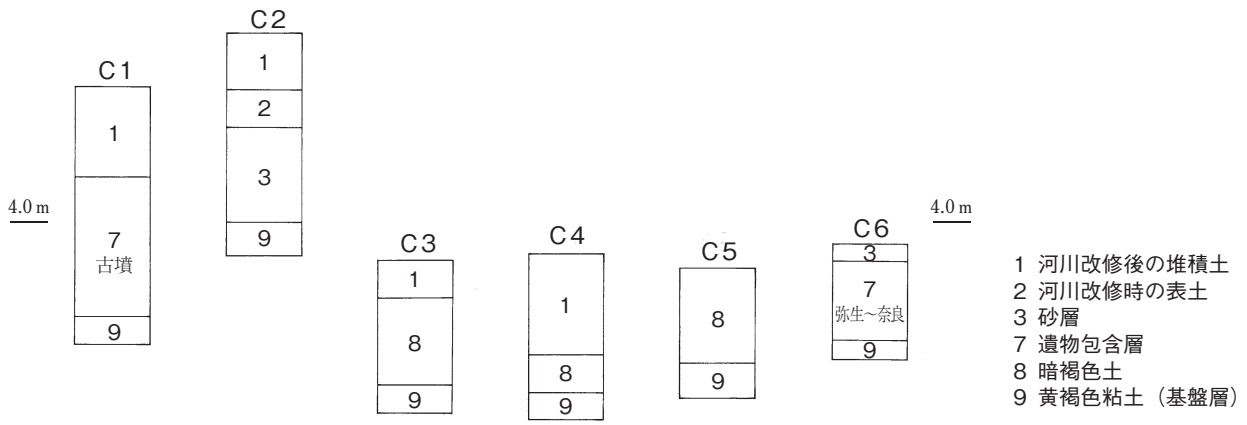
第12図　第3次調査地点位置図（S＝1/5,000）



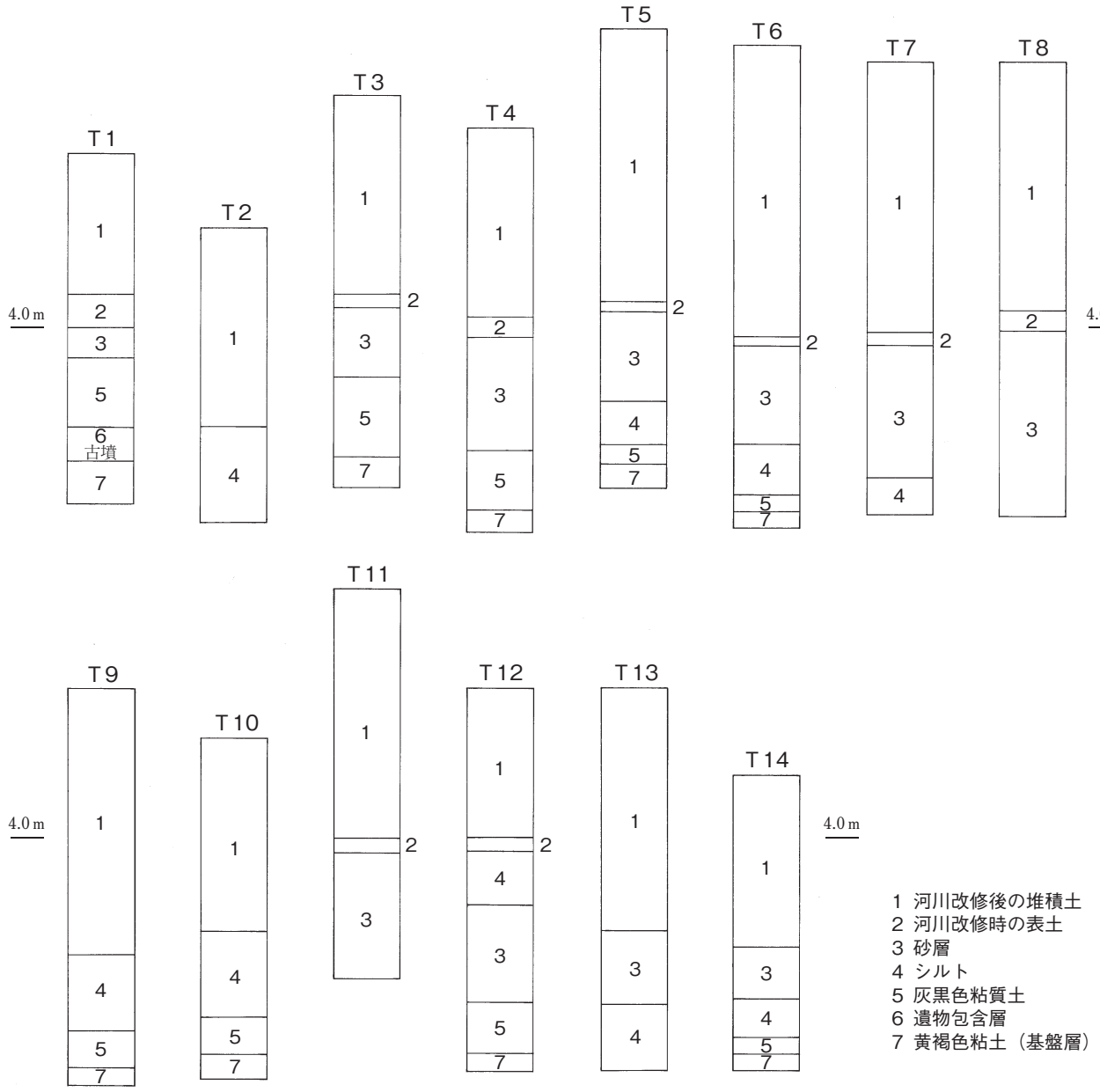
第13図　第4次調査地点位置図（S＝1/5,000）



第14図　第４次調査地点柱状図１（Ｓ＝1/40）



第15図　第４次調査地点柱状図２（Ｓ＝1/40）



第16図　第５次調査地点柱状図（Ｓ＝1/40）

が確認されなかった調査地点の多くでは、基盤層上に厚く堆積したシルト層が見られることから、かつては湿地状を示していたと思われ、第3次調査区の南西部において遺物包含層がほとんど確認されなかった状況と合致する。

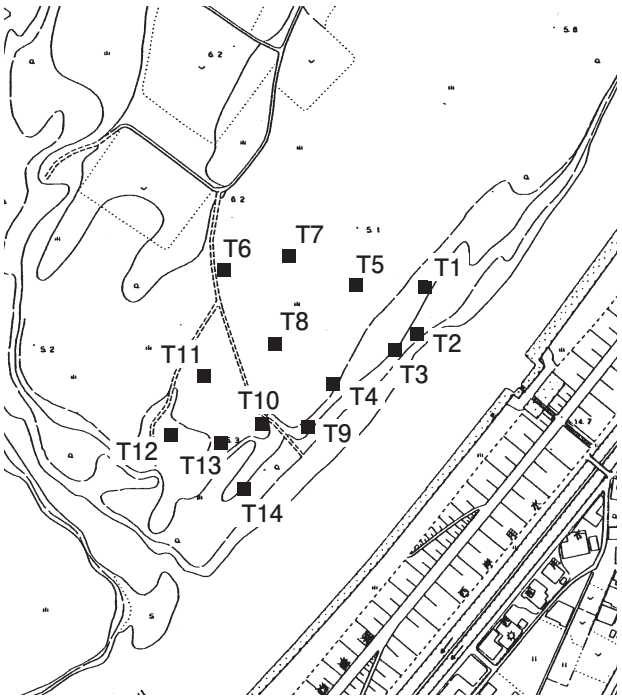
（５）第５次調査（昭和57年度）

【調査期間】　昭和58年3月3日～3月15日

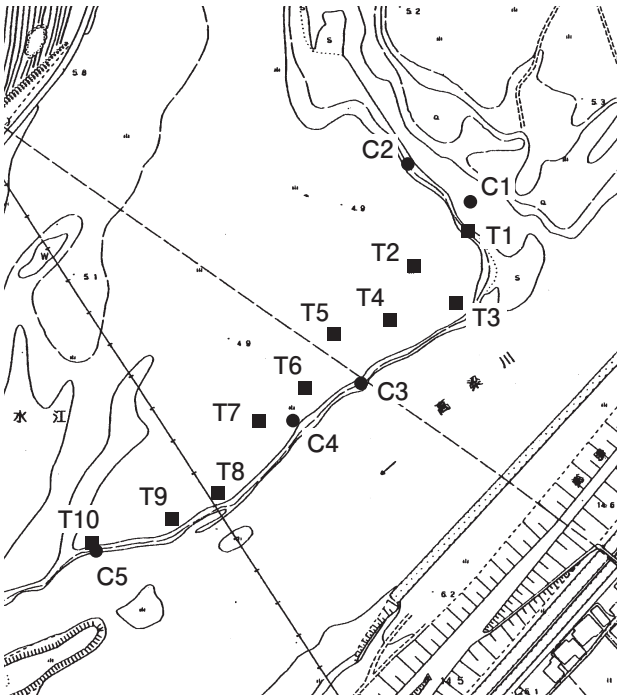
【調査委員会】

委員長	三島一夫	倉敷市教育委員会 教育長				
副委員長	宮本昭三	倉敷市教育委員会 社会教育部長	専門委員	河本　清	岡山県教育庁 文化課	
専門委員	間壁忠彦	（財）倉敷考古館 館長	〃	小野一臣	倉敷市文化財保護審議会 委員	
〃	間壁葭子	〃 学芸員	〃	福本　明	倉敷市教育委員会 文化課	
〃	藤田憲司	〃 学芸員	〃	赤松伸咲	〃	社会教育指導員

第5次調査は、前年度調査区から南西へと延びる中洲部分、東西約200mの区間を対象に、トレンチ14か所を設定して行った。基本的な土層としては、上から河川改修後の堆積土、改修時の表土、そしてその下は旧来の堆積土である砂層あるいはシルト層となり、標高3m前後でベースとなる黄褐色の粘土層（基盤層）が確認できる。4次調査区と同様、遺物包含層はこの黄褐色粘土層の直上に存在するが、今回の調査ではT1において古墳時代の土師器及び須恵器を含む土層が確認できたのみである。基盤層の高さを細かく見てみると、T1・T3・T5で高く標高約3.2m、次いでT4・T6が標高約2.9m、そして低いところでT10･T12･T14が標高約2.7m、最も低いのがT9の標高約2.6mとなっている。これらのことから、調査区内における基盤層の高さについては、北東部で高く南西へ行くに従い徐々に低くなっていく様子を読み取ることができる。そして、今回の調査において、基盤層の標高が高いT1においてのみ遺物包含層が確認されていることと合わせて考えれば、第1次調査以降中洲で確認している遺跡の南端がこの付近になる可能性が高いと思われる。



第17図　第５次調査地点位置図（Ｓ＝1/5,000）



第18図　第６次調査地点位置図（Ｓ＝1/5,000）

（6）第６次調査（昭和58年度）

【調査期間】 昭和59年3月20日～3月29日

【調査委員会】

委員長	三島一夫	倉敷市教育委員会	教育長	専門委員	藤田憲司	（財）倉敷考古館	学芸員
副委員長	宮本昭三	倉敷市教育委員会	社会教育部長	〃	小野一臣	倉敷市文化財保護審議会	委員
専門委員	間壁忠彦	（財）倉敷考古館	館長	〃	福本　明	倉敷市教育委員会	文化課学芸員
〃	間壁葭子	〃	学芸員	〃	鍵谷守秀	〃	〃

第6次調査は、前年度調査区から南へ続く中洲の東岸を中心に、トレンチ10か所、カット5か所を設定して行った。基本的な土層としては、河川改修後の堆積土の下には明治期の旧耕作土が見られ、その下には砂質土ないしは砂あるいはシルトが厚く堆積しており、最下層は標高2.5m前後で暗褐色の粘土となっている。この暗褐色粘土層は、上流域の調査（第3～5次調査）では遺物包含層となることが多い土層であるが、今回の調査では遺物を含んでいない。また、その上面の高さは、上流域では標高3.5m前後なのに対し、今回の調査では多くのものが標高2.5m前後で、1m程度低くなっており、遺跡が存在した時期には湿地的な状況であったと考えられる。

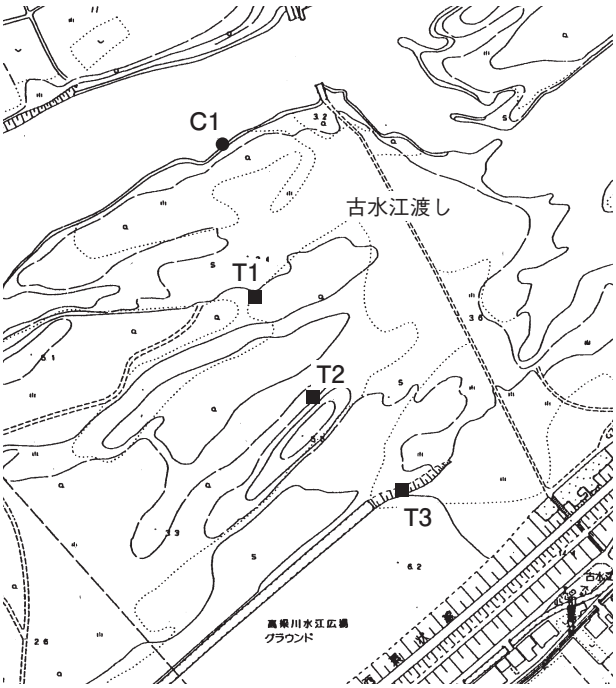
（7）第７次調査（昭和59年度）

【調査期間】 昭和60年3月11日～3月16日

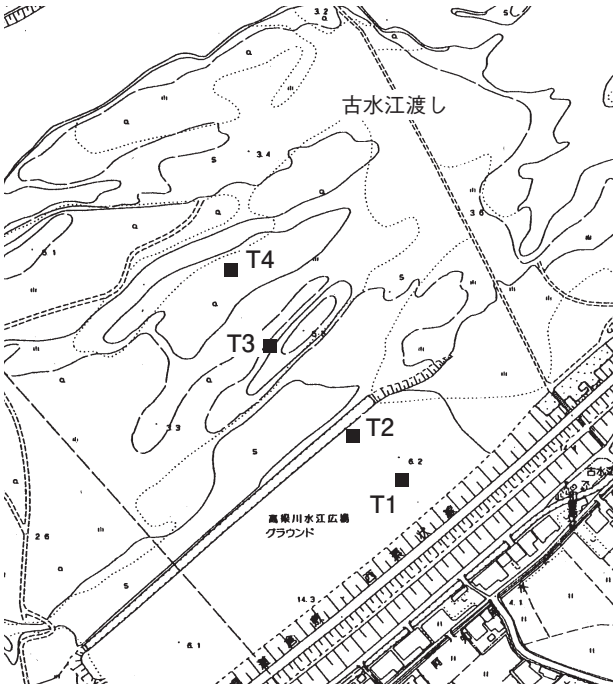
【調査委員会】

委員長	三島一夫	倉敷市教育委員会	教育長				
副委員長	宮本昭三	倉敷市教育委員会	社会教育部長	専門委員	小野一臣	倉敷市文化財保護審議会	委員
専門委員	間壁忠彦	（財）倉敷考古館	館長	〃	福本　明	倉敷市教育委員会	文化課学芸員
〃	間壁葭子	〃	学芸員	〃	鍵谷守秀	〃	〃

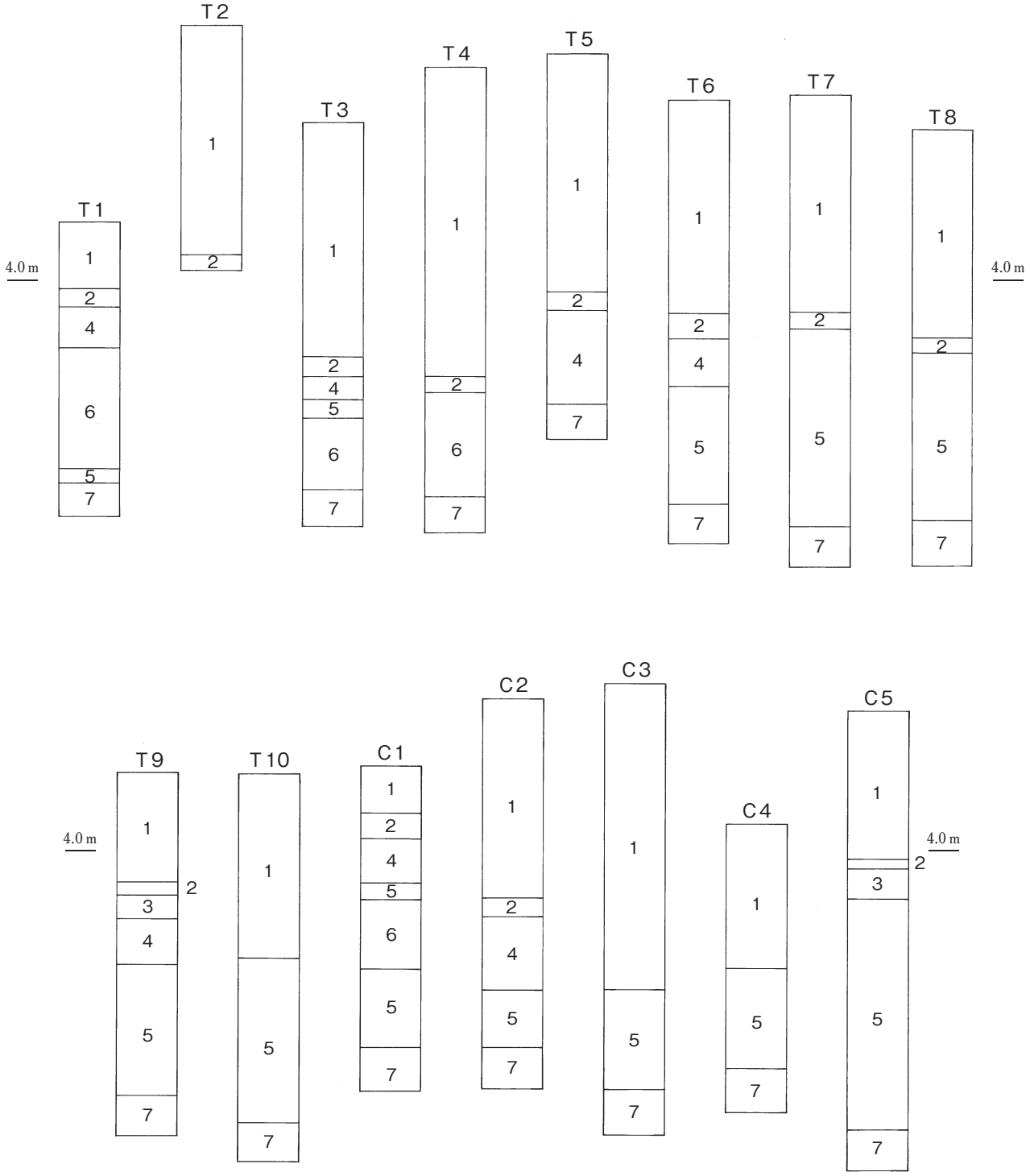
第6次までの調査により酒津地区の遺跡の範囲がほぼ確定したため、第7次調査では水江地区の遺跡の広がりを確認するため、古水江渡しの南東約100m付近を対象に、トレンチ3か所、カット1か



第19図　第７次調査地点位置図（S＝1/5,000）



第20図　第８次調査地点位置図（S＝1/5,000）



第21図　第６次調査地点柱状図（S＝1/40）

所を設定して調査を行った。

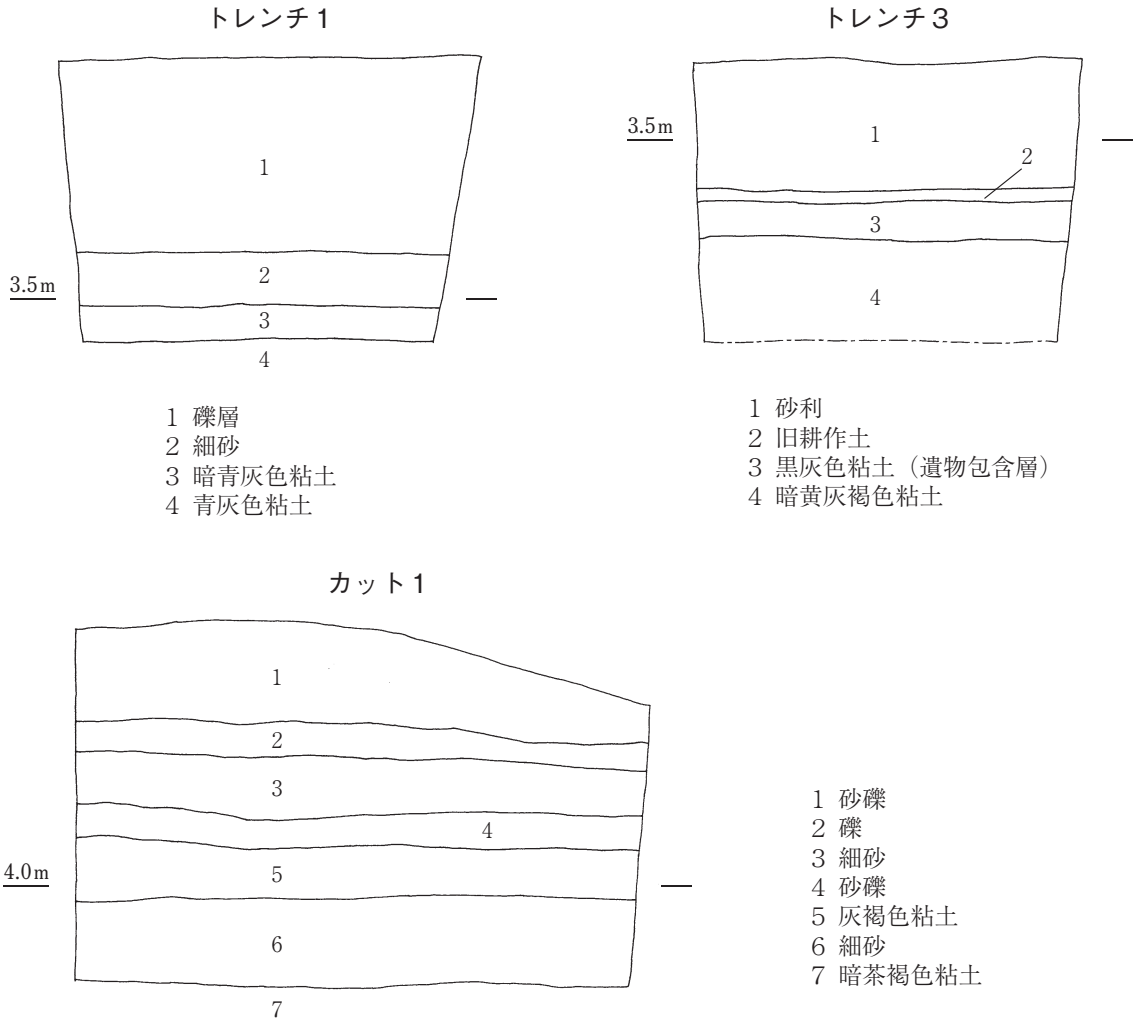
T1及びC1では、標高約3.5mまでは砂礫や砂が厚く堆積しており、そこから下は青灰色あるいは茶褐色の粘土層となっている。どちらもこれ以下で湧水が激しくなったため、ボーリングステッキによる土層確認を行ったところ、標高2.5mあたりまでは粘土層が続いているようである。T3では、旧耕作土直下で、古墳～奈良時代の須恵器や土師器を含む黒灰色の粘土層を確認した。この下は、標高約2.5mまでは暗黄灰褐色の粘土で、遺物は含まれていなかった。なお、T2については、砂礫層の除去作業中、湧水によりトレンチ壁面が崩壊したため、調査を断念した。

（8）第８次調査（昭和60年度）

【調査期間】　昭和61年3月10日～3月17日

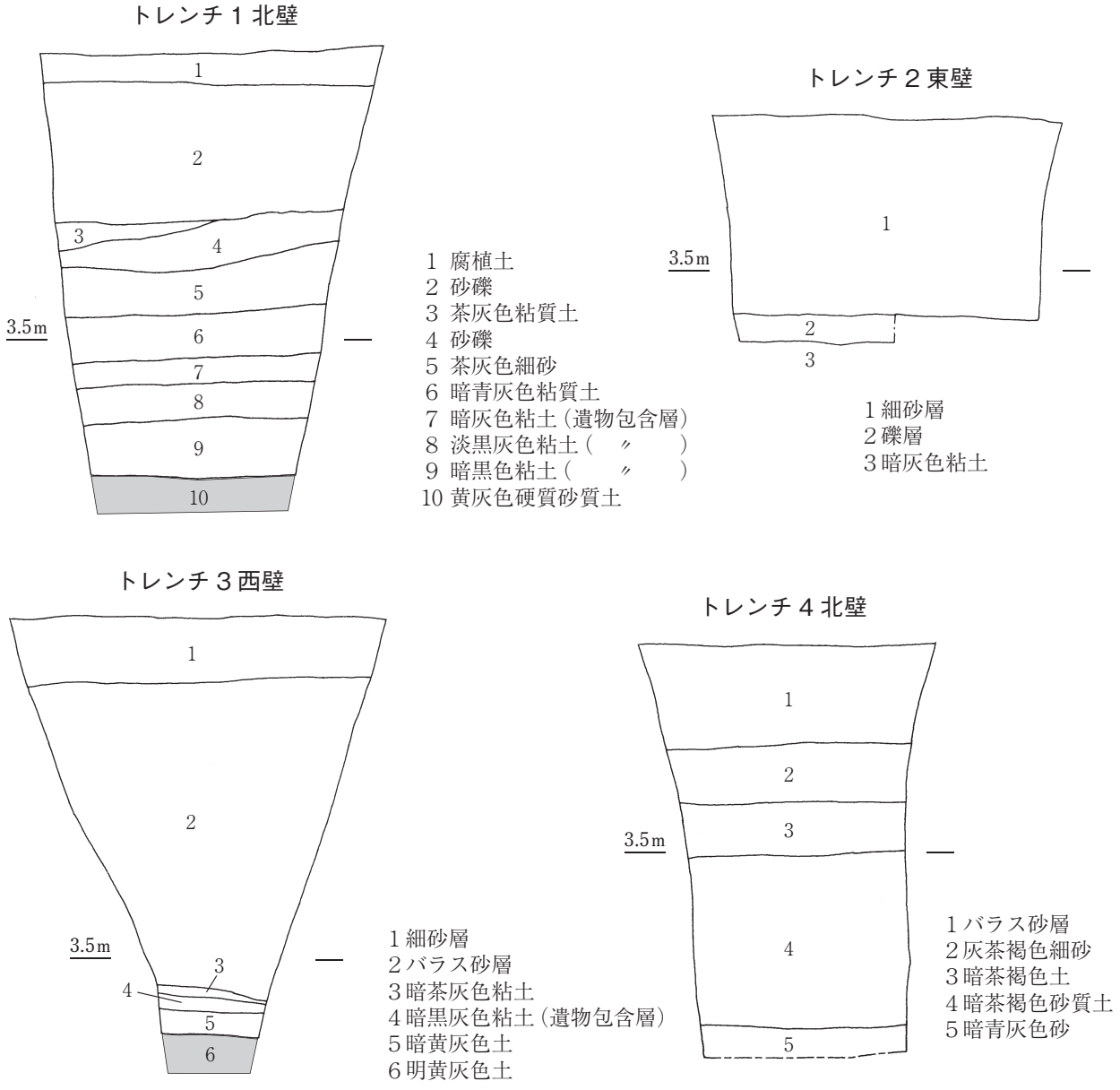
【調査委員会】

委員長	今田昌男	倉敷市教育委員会 教育長			
副委員長	宮本昭三	倉敷市教育委員会 社会教育部長	専門委員	小野一臣	倉敷市文化財保護審議会 委員
専門委員	間壁忠彦	（財）倉敷考古館 館長	〃	福本　明	倉敷市教育委員会 文化課学芸員
〃	間壁葭子	〃　学芸員	〃	鍵谷守秀	〃　〃



第22図　第７次調査地点断面図（S＝1/40）

第８次調査は、第７次調査区から南西へ約50ｍのラインにトレンチ４か所を設定して行った。T1では、表土下約1.8ｍまでは砂礫が厚く堆積しているが、そこから下は暗灰色系の粘土層となっており、中世（７層）及び古墳～奈良時代（８・９層）の遺物包含層に分けられる。この粘土層の下は、遺跡のベース（基盤層）と思われる黄灰色の硬質砂質土となっており、その上面の高さは標高約2.7ｍである。T2は、地表下約1.2ｍまでは細砂が堆積しており、これ以下は湧水が激しくなったためボーリングステッキによる土層確認を行った。これによれば、約20㎝の礫層の下は暗灰色粘土となっており、40㎝以上の厚みがあるようである。この粘土層は、T1における遺物包含層と酷似するが、ボーリング調査のため遺物等は確認できなかった。T3では、地表下約2.2ｍで旧表土と思われる層を検出し、この直下に厚さ10㎝程度の暗黒灰色粘土層（４層）が存在する。須恵器や土師器などの破片が含まれており、古墳時代の包含層と考えられる。この下は、20㎝ほどの間層を挟んで基盤層と思われる明



第23図　第８次調査地点断面図（Ｓ＝1/40）

黄灰色土となる。基盤層の標高は約3.0ｍで、T1よりやや高くなっている。T4では、地表下約2.3ｍまでは砂礫層など近代以降の堆積土が厚く認められ、この下は暗青灰色の砂層となっており、常時滞水している状況が窺える。これ以下は湧水による壁面崩壊の危険があるため調査を断念したが、ボーリングステッキによる調査によれば、暗青灰色砂層はまだ80㎝は続くようである。

（9）第９次調査（昭和61年度）

【調査期間】　昭和62年3月17日～3月31日

【調査委員会】

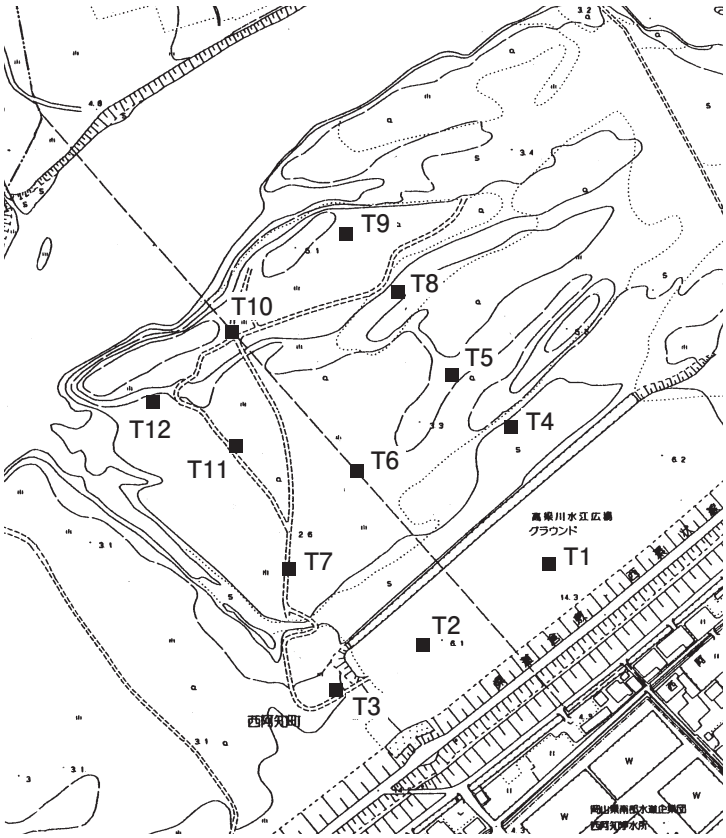
委員長	今田昌男	倉敷市教育委員会 教育長		専門委員	小野一臣	倉敷市文化財保護審議会 委員	
副委員長	宮本昭三	倉敷市教育委員会 社会教育部長		〃	福本　明	倉敷市教育委員会 文化課学芸員	
専門委員	間壁忠彦	（財）倉敷考古館 館長		〃	鍵谷守秀	〃	〃
〃	間壁葭子	〃	学芸員	〃	小野雅明	〃	〃

調査対象区域は、第8次調査区域のすぐ南西、古水江渡しの下流約200ｍから約400ｍにかけての河川敷で、2ｍ×2ｍのトレンチを任意に12か所設定して調査を行った。

高梁川東岸の堤防沿いに3か所のトレンチ（T1～T3）を設定した。いずれのトレンチにおいても、土師器片や須恵器片を含む厚さ20～30㎝の黒灰色粘質土が確認され、おおむね古墳～奈良時代の遺物包含層と思われるが、T3では弥生土器も含まれていた。各トレンチで確認した微高地の基盤層（黄灰色硬質砂質土）の高さは、T1で標高約2.5m、T2で標高約2.7m、T3で標高約2.6ｍを測る。

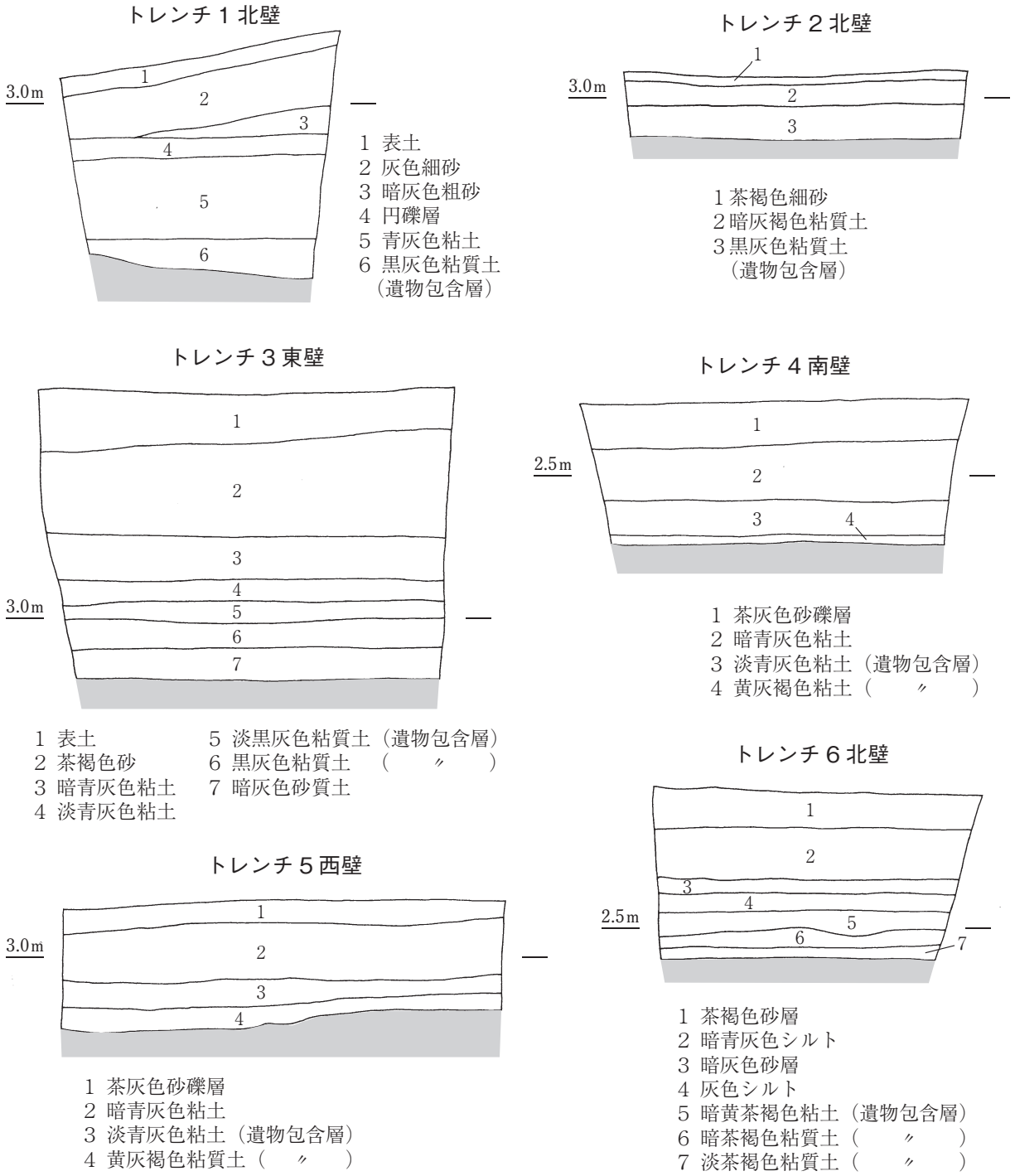
T1－T3ラインから北西へ約100ｍのライン付近に4か所のトレンチ（T4～T7）を設定した。いずれのトレンチにおいても、基盤層直上で、厚さ20～30㎝の遺物包含層が確認された。この遺物包含層は、青灰色系あるいは茶褐色系を呈する粘質土で、2～3層に分けることができる。T4～T6では、おおむね上層には中世、下層には古墳～古代の遺物を含んでいるが、T7の下層には弥生中期の土器片やサヌカイト片が含まれている。各トレンチにおける基盤層の高さは、T4・T5で標高約2.5m、T6で約2.3m、T7で約3.2ｍを測る。

T1－T3ラインから北西へ約200ｍのライン付近に5か所のトレンチ（T8～T12）を設定した。T8～10については湧水による土砂の崩壊が激しく、標高約3.0ｍ前後までしか掘削できなかったが、ボーリングステッキによる土層調査では、砂礫層やシルト層が標高2ｍ前後まで続くと思われ、遺物包含層や基盤層は確認できなかった。T11では、標



第24図　第９次調査地点位置図（S＝1/5,000）

高約3.3ｍで基盤層と思われる黄灰色粘質土が確認されたものの、遺物包含層は認められなかった。T12では、標高約3.2ｍの基盤層直上に、2層に分かれる厚さ20㎝程度の遺物包含層が見られ、弥生土器やサヌカイト片を含んでいる。遺構としては、基盤層を掘り込む形で南北方向に延びる幅約80㎝、深さ約20㎝の溝状遺構と、溝の肩付近でサヌカイトのチップからなる直径20㎝程度の石片溜まりを確認した。出土遺物等から、どちらも弥生時代中期後葉に属すると思われる。



第25図　第９次調査地点断面図１（Ｓ＝1/40）

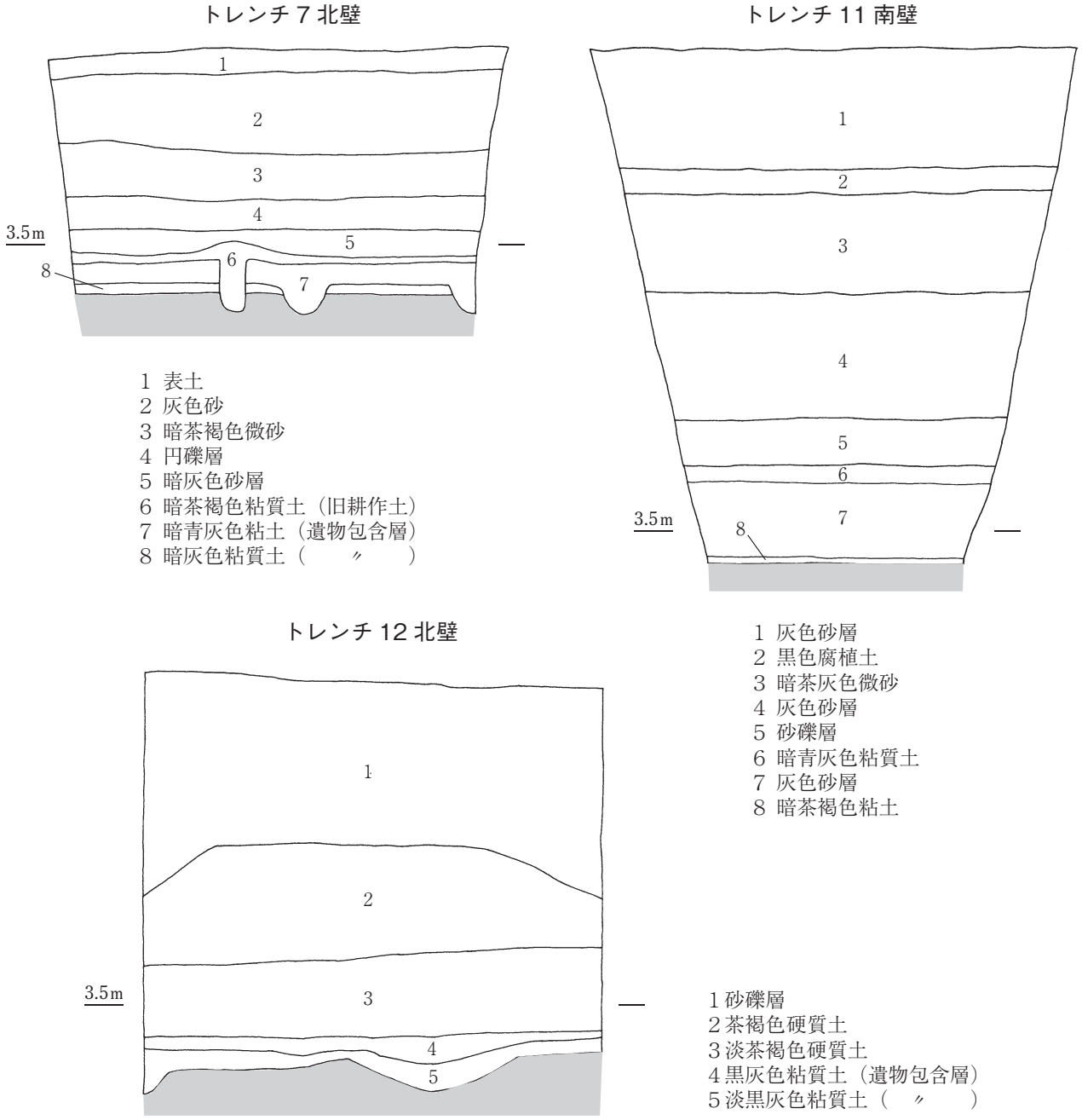
（10）第10次調査（昭和62年度）

【調査期間】 昭和63年3月14日～3月31日

【調査委員会】

委員長	今田昌男	倉敷市教育委員会	教育長	専門委員	小野一臣	倉敷市文化財保護審議会	委員
副委員長	宮本昭三	倉敷市教育委員会	社会教育部長	〃	福本　明	倉敷市教育委員会	文化課学芸員
専門委員	間壁忠彦	（財）倉敷考古館	館長	〃	鍵谷守秀	〃	〃
〃	間壁葭子	〃	学芸員	〃	小野雅明	〃	〃

調査対象区域は、第9次調査区域のすぐ南西、古水江渡しの下流約400mから約700mにかけての河川敷で、2m×2mのトレンチを任意に12か所設定して調査を行った。

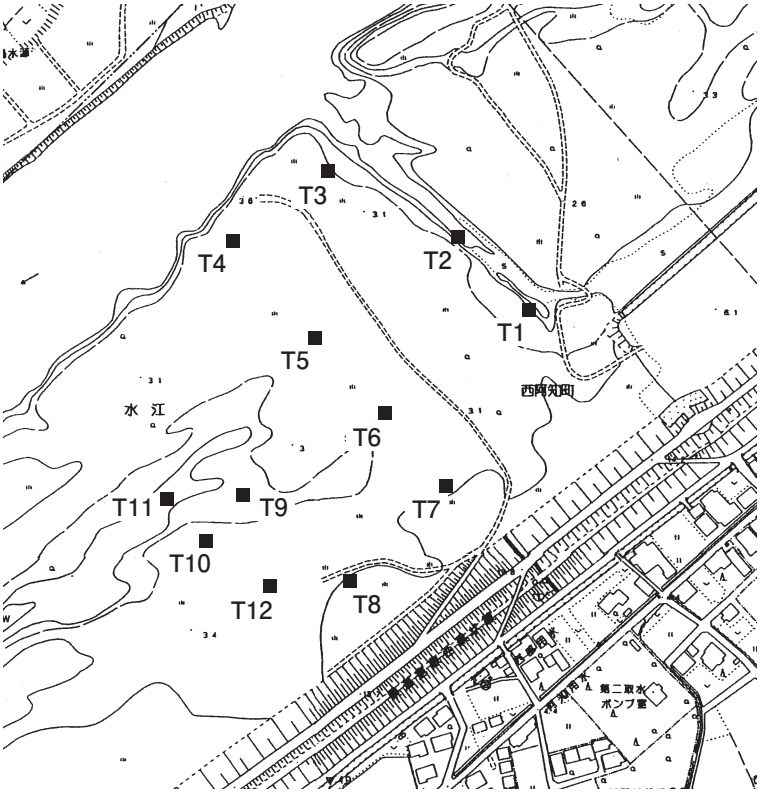


第26図　第９次調査地点断面図２（Ｓ＝1/40）

古水江渡しから約400ｍ南西のラインに3か所のトレンチ（T1～T3）を設定した。T1では、地表下約1.5ｍで、2層からなる厚さ約30㎝の遺物包含層（2・3層）を確認した。須恵器片ならびに土師器片が含まれており、おおむね奈良～中世に属するものと思われる。また、この包含層の下は微高地の基盤層と思われる黄灰色硬質土となっており、標高は約3.2ｍを測る。T2においても、標高3.5ｍ前後の高さで2層（4･5層）からなる遺物包含層を確認した。上層では径約30㎝のピット2基を検出し、埋土からは須恵器片や土師器片等が出土した。また、下層では、トレンチの壁面にかかる形でピット1基が検出され、細片ではあるが弥生土器が出土している。基盤層の高さは標高約3.3ｍで、T1よりわずかに高くなっている。トレンチ3では、地表下2.5ｍ、標高約2.0ｍまで掘り下げを行ったもののすべて砂礫層で、遺物包含層や基盤層は確認できなかった。

T1－T3ラインから南西へ100ｍ付近にT4～T7を設定した。T5では、標高約2.6ｍで基盤層である淡黄灰色硬質土に達し、その直上には古墳時代の土器を含む2層からなる遺物包含層（3・4層）が認められる。また、基盤層の上面で、幅約60㎝深さ約40㎝の南北に延びる溝状遺構を検出し、埋土からは古墳時代初頭の土器片が出土した。T6では、幅3ｍ以上深さ70㎝以上の溝状遺構を断面において確認した。溝は標高約3.1ｍの基盤層から掘り込んでおり、埋土からは弥生時代中期の土器片やサヌカイト製の石包丁が出土している。T7では、砂礫層の直下に厚さ約40㎝の遺物包含層（2・4・5層）が見られ、3層の遺構面を確認した。検出された遺構はいずれも径約15～65㎝のピットで、埋土には土師器椀や小皿など中世に属するものが含まれていた。このトレンチにおける基盤層の高さは、標高約3.0ｍを測る。なお、T4については、標高約2.8ｍまで掘り下げを行ったが、すべて砂礫層で壁面崩壊の危険があったため以後の調査は中止した。

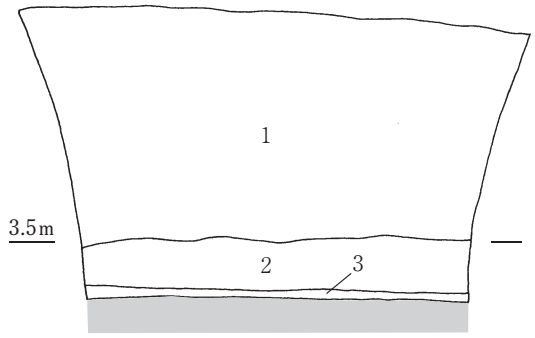
T4－T7ラインから南西へ100ｍ付近にT8～T12を設定した。T8では、砂礫層直下に、4層からなる遺物包含層が存在し、主として中世の土器を含んでいる。遺構としては、標高約2.6ｍを測る基盤層上面で、径約50㎝のピット1基を検出した。T10では、標高約1.9ｍで基盤層と思われる暗黄褐色土に至るが、いずれの土層からも遺物等は出土しなかった。T9・T11については標高1.3ｍ付近まで、T12については標高約2.1ｍまで掘り下げを行ったが、遺物包含層や基盤層は確認できなかった。



第27図　第10次調査地点位置図（S＝1/5,000）

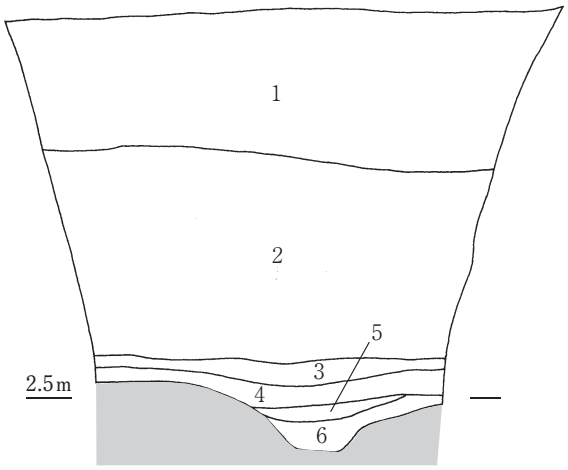
第10次調査では、T1・T2・T5～T8で遺物包含層が確認され、そのうちT1以外の5か所からは遺構も検出

トレンチ１西壁

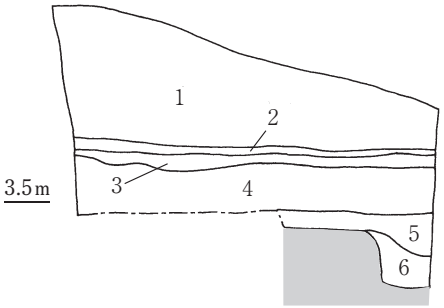


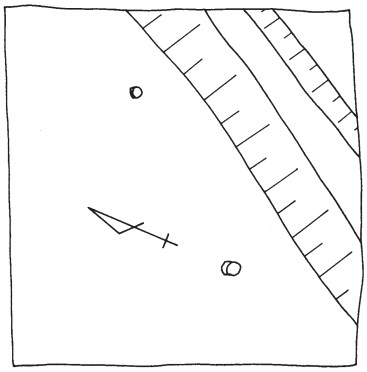
１砂礫層
２暗青灰色粘土（遺物包含層）
３淡青灰色粘土（　　〃　　）

トレンチ５東壁

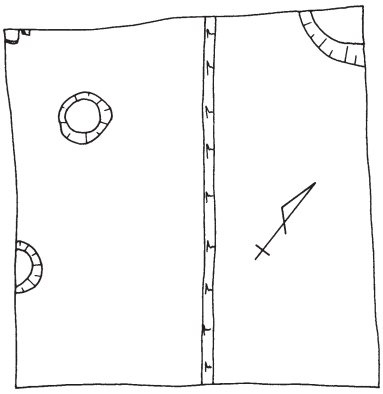


トレンチ２北壁



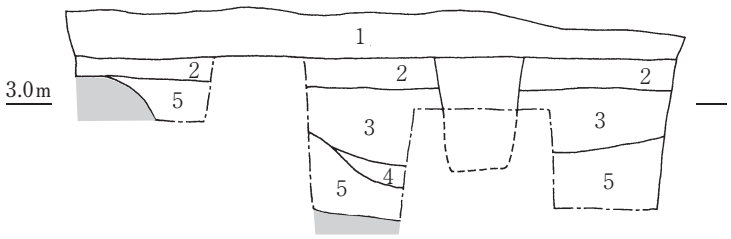


１ 灰色細砂層
２ 砂礫層
３ 淡黒灰色土（遺物包含層）
４ 暗茶褐色土（　　〃　　）
５ 暗灰色砂層
６ 黒灰色土



１ 砂礫層
２ 暗黄灰色微砂
３ 灰色粘質土
４ 暗灰褐色粘土（遺物包含層）
５ 暗黄灰色土（　　〃　　）
６ 黒黄灰色土

トレンチ６東壁



１ 砂礫層
２ 暗茶褐色土（遺物包含層）
３ 淡黒灰色土（溝埋土）
４ 暗黒灰色土（　〃　）
５ 暗灰色砂質土（〃）

第28図　第10次調査地点断面図・遺構図１（Ｓ＝1/40）

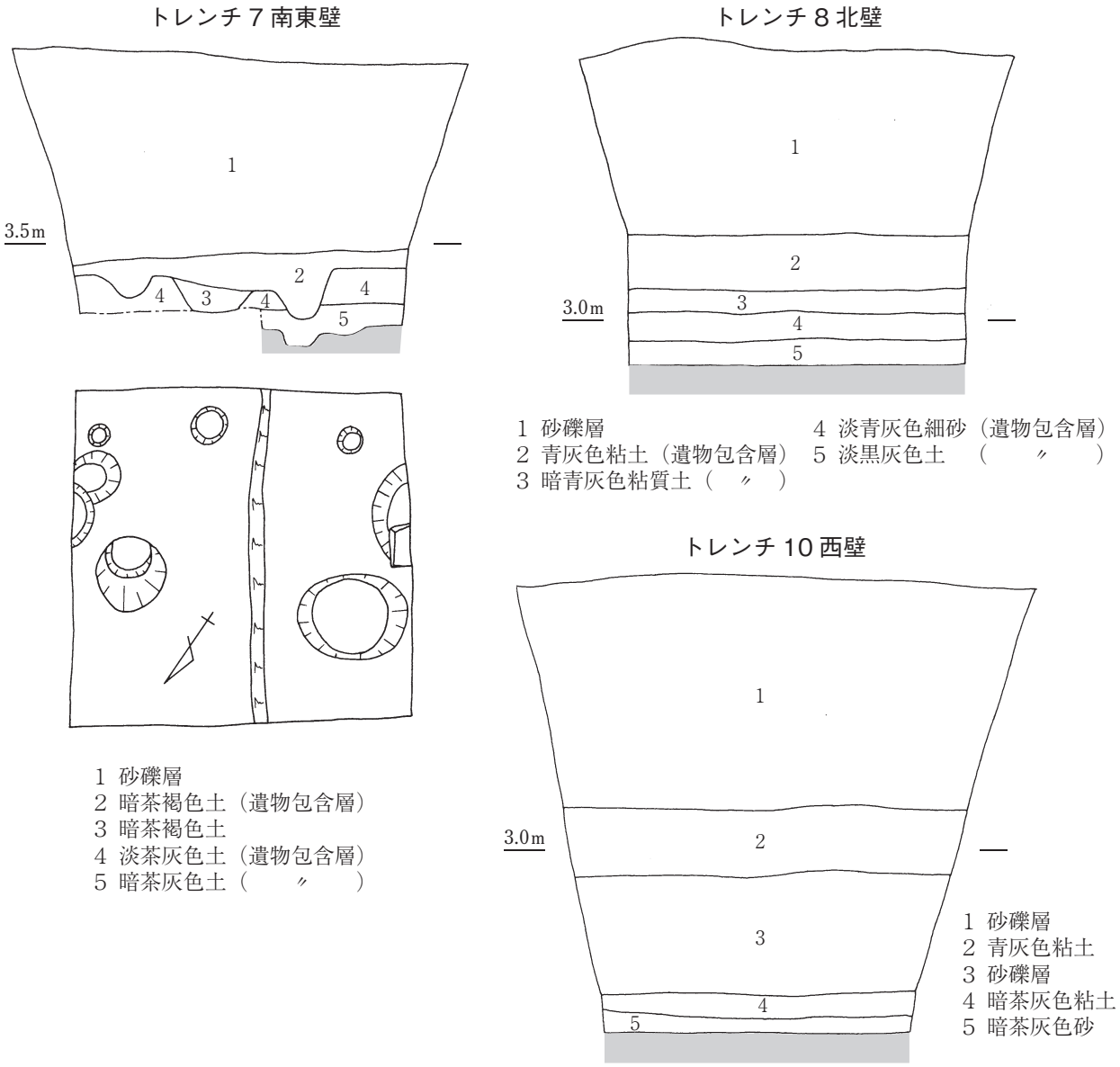
されるなど、調査区の東半を中心として良好な状態で遺跡が残存していることが判明した。また、確認された基盤層の高さを比べてみると、T1・T2・T6・T7付近が高く3.0mを超えており、T5・T8で2.6m、そしてT10では1.9mと低くなっている。これらのことから、遺跡が存在する微高地は調査区の南西に向かって徐々に下がっていく状況が窺える。

（11）第11次調査（昭和63年度）

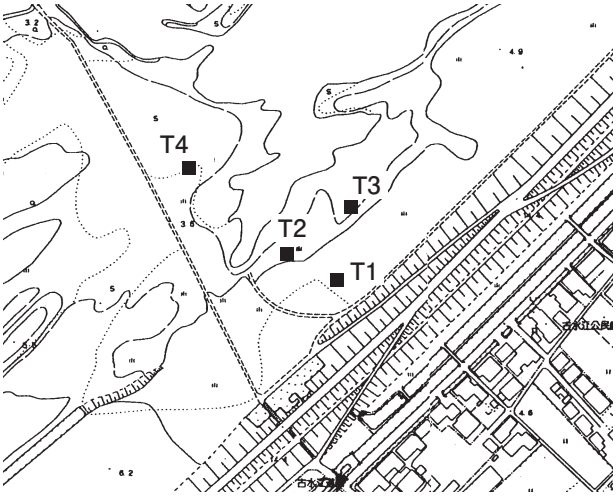
【調査期間】 平成元年3月24日～3月31日

【調査委員会】

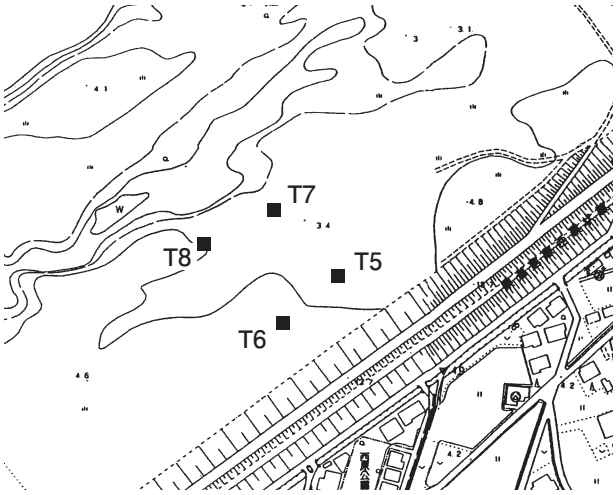
委員長	今田昌男	倉敷市教育委員会 教育長	専門委員	小野一臣	倉敷市文化財保護審議会 委員
副委員長	花岡洋右	倉敷市教育委員会 社会教育部長	〃	福本　明	倉敷市教育委員会 文化課学芸員
専門委員	間壁忠彦	（財）倉敷考古館 館長	〃	鍵谷守秀	〃　〃
〃	間壁葭子	〃　学芸員	〃	小野雅明	〃　〃



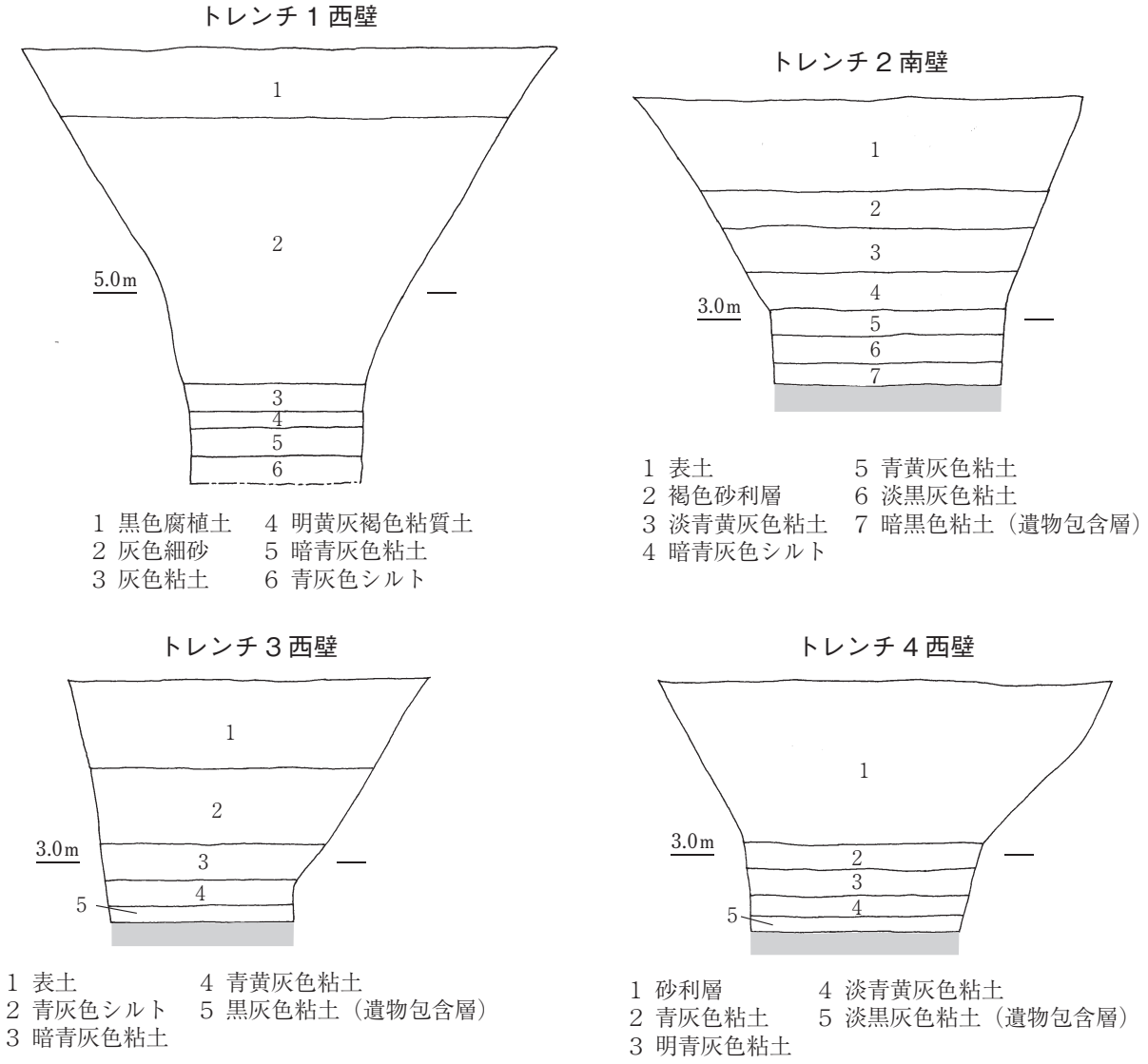
第29図　第10次調査地点断面図・遺構図２（Ｓ＝1/40）



第30図　第11次北調査地点位置図（Ｓ＝1/5,000）

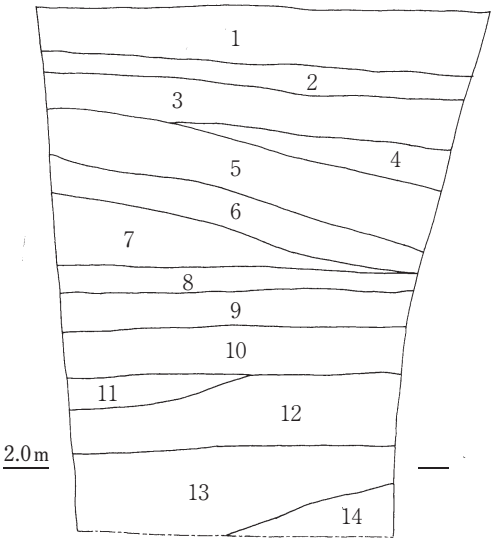


第31図　第11次南調査地点位置図（Ｓ＝1/5,000）



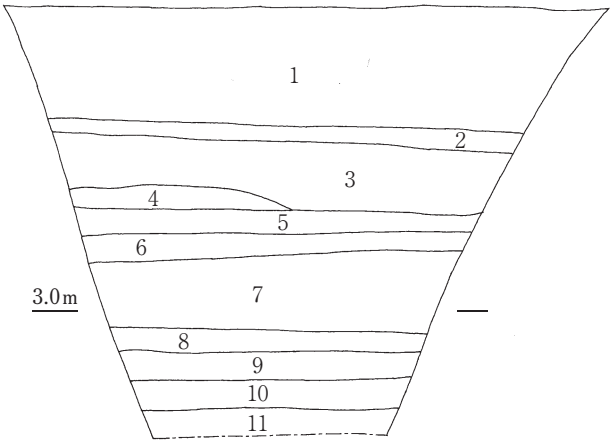
第32図　第11次北調査地点断面図（Ｓ＝1/40）

トレンチ５南壁



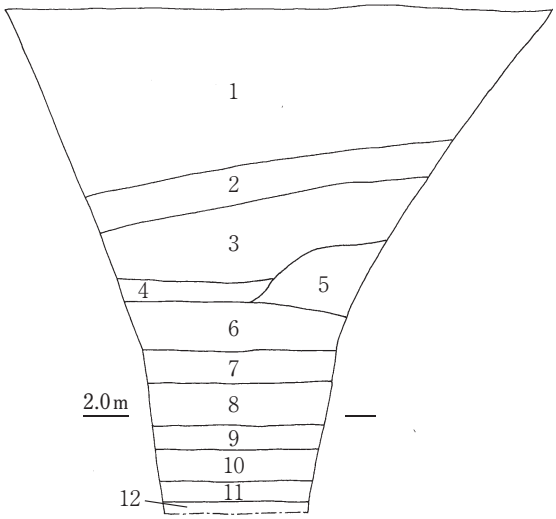
1 暗茶褐色砂質土
2 暗青灰色粘土
3 暗灰褐色粘質土
4 灰色細砂層
5 灰褐色砂質土
6 灰褐色砂利
7 灰褐色砂質土
8 暗灰色粘質土
9 褐色砂利
10 灰褐色砂質土
11 褐色砂利
12 暗灰褐色砂質土
13 青灰色シルト
14 青灰色砂利

トレンチ６南壁



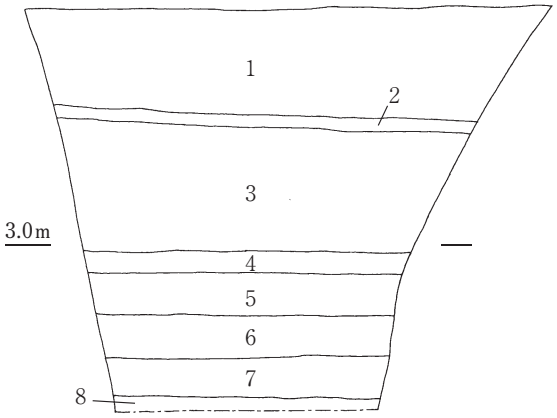
1 暗茶褐色砂質土
2 黒褐色土
3 暗灰褐色微砂
4 灰色砂
5 暗灰褐色砂質土
6 淡灰色粘土
7 暗灰色砂利
8 暗灰色粘質土
9 暗灰褐色砂質土
10 青灰色シルト
11 青灰色砂利

トレンチ７西壁



1 暗灰色細砂
2 暗黒褐色腐植土
3 暗灰色細砂
4 灰色砂利
5 淡褐色砂
6 暗灰色細砂
7 灰色砂利
8 暗灰色粘質土
9 暗灰褐色粘質土
10 灰色砂利
11 明灰褐色粘質土
12 淡灰色砂利

トレンチ８西壁



1 灰色細砂
2 暗黒褐色土
3 灰色砂利層
4 暗灰色細砂
5 灰色粗砂
6 灰褐色微砂
7 暗灰褐色微砂
8 青灰色砂利層

第33図　第11次南調査地点断面図（Ｓ＝1/50）

調査対象区域は、前年度調査区から続く古水江渡しから南西約800ｍ付近（南調査地点）と古水江渡しの上流約100ｍまで（北調査地点）の2か所である。北地点については、第2次調査（昭和54年度）において既に確認調査を実施しているが、当時人力による調査のため遺物包含層のレベルにまで到達していない部分もあることから、今回改めて調査を行ったものである。調査は、北地点に4か所（T1～T4）、南地点に4か所（T5～T8）、合計8か所を設定して行った。

T1では、地表下約1.8ｍで旧耕作土と思われる灰色粘土層に到達し、その下には2層の灰色系粘質土がみられ近現代の土器片をわずかに含んでいる。これ以下は青灰色のシルト層となり、地表下約2.4ｍで壁面崩壊の危険があるため調査を中止したが、ボーリングステッキの調査によれば、地表下約3.0ｍ（標高約3.3ｍ）まではシルト層が続くようである。T2～T4では、いずれのトレンチにおいても標高約2.6ｍで、基盤層と思われる黄灰色の硬質粘土を確認した。基盤層の直上には、厚さ10㎝程度の厚みを有する黒灰色粘土が堆積しており、わずかではあるが古墳時代の土器を含んでいる。

南地点では、高梁川東岸堤防沿いにT5･T6を設定した。両トレンチとも砂礫層が厚く堆積しており、T5では地表下約3.5ｍ（標高約1.5ｍ）、T6では地表下約2.8ｍ（標高約2.2ｍ）まで掘り下げを行ったが、遺物包含層や基盤層は確認できなかった。T5－T6ラインから北へ約50ｍ付近に設定したT7・T8においても基本的土層は同じで、砂礫層や砂層、粘土層などが厚く堆積しており、遺物包含層や基盤層は確認できなかった。なお、T7では地表下約3.3ｍ（標高約1.4ｍ）、T8では地表下約2.7ｍ（標高約1.9ｍ）までの掘り下げを行っている。

北地点の調査結果から、第2次調査では確認できなかったが、水江地区の遺跡の東端が古水江渡しの東にまで延びていることが明らかになった。一方、南地点の調査結果によれば、この遺跡の西端が今回の調査区域までは延びていない可能性が高いと思われる。

（12）第12次調査（平成元年度）

【調査期間】　平成2年3月8日～3月31日

【調査委員会】

委員長	今田昌男	倉敷市教育委員会 教育長	専門委員	小野一臣	倉敷市文化財保護審議会 委員
副委員長	花岡洋右	倉敷市教育委員会 社会教育部長	〃	福本　明	倉敷市教育委員会 文化課学芸員
専門委員	間壁忠彦	（財）倉敷考古館 館長	〃	鍵谷守秀	〃　〃
〃	間壁葭子	〃　学芸員	〃	小野雅明	〃　〃

第11次調査により水江地区の遺跡の西端がほぼ確認できたことから、第12次調査では同遺跡の北側への広がりを確認するため、酒津八幡山の南端、旧西高梁川と現在の高梁川が合流する付近の河川敷を対象に、トレンチ11か所を設定して行った。

八幡山の先端部から山沿い約100ｍの区間にトレンチ4か所（T1～T3･T11）を設定した。T1では、地表下約1.2ｍ以下で黄灰色～灰褐色を呈する厚さ約60㎝の遺物包含層を確認した。包含層は4層に分層可能で、上層3層には主として奈良時代～中世の土器片を含み、最下層（6層）には少量ではあるが弥生中期の土器片が含まれる。遺物包含層の直下は、基盤層である黄灰色硬質土となっており、その高さは標高約3.8ｍを測る。T2およびT11においても、4層に分層可能な遺物包含層が確認され、主として奈良時代～中世の土器片と若干の弥生土器を含んでいるのも同様である。検出された基盤層の高さは、T2で標高約3.4ｍ、T11で約4.8ｍである。T3では、表土直下で花崗岩の岩盤となっており、

河川改修時に丘陵先端を削平した跡と思われる。

T1・T2で確認された遺跡の広がりを確認するため、その南側にT4・T6を設定したが、どちらも砂礫層が厚く堆積ししており、湧水のためT4では標高約3.0m、T6では標高約3.3m以下の掘り下げはできなかった。

八幡山南端から古水江渡しに至る道路の西側にトレンチ5か所を設定した。流路沿いに設定したT5・T10では遺物包含層は確認されなかったが、基盤層に相当すると思われる黄灰色の硬質粘土層がみられ、その高さはT5で標高約2.8m、T10で標高約2.9mと、ほぼ同レベルであった。最も丘陵寄りのT7では、腐植土の下に厚さ約1.3mの造成土（2～5層）がみられ、河川改修時のものと思われる。地表下約2.7m（標高3.6m）で湧水のため調査不能となったが、造成土以下の層では遺物は全く出土しなかった。T8・T9においても腐植土直下から砂礫層が続き、T8では地表下約1.6m（標高2.8m）、T9では地表下約2.2m（標高3.7m）の高さで湧水のため調査不能となったが、遺物等は確認できなかった。

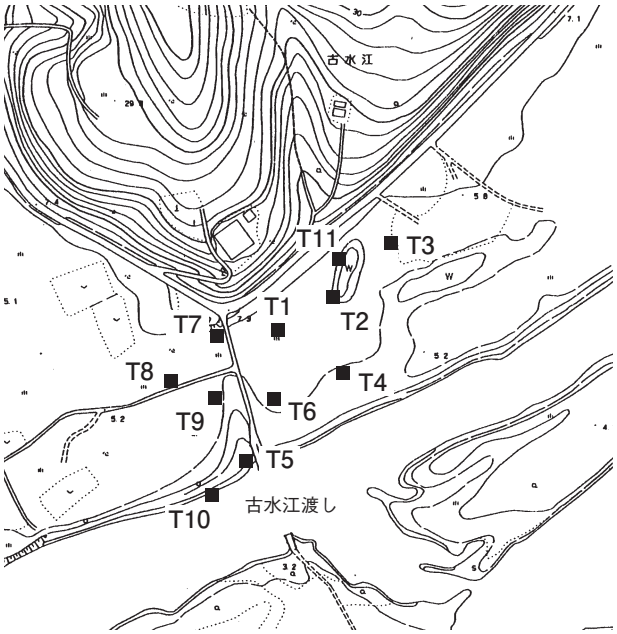
第12次調査では、山寄りに設定したT1・T2・T11の3か所で遺物包含層が確認された。立地としては山裾の微高地上であり、河川敷内の遺跡とはやや異なる感があるが、距離的な面から考えれば、同一遺跡として捉えるのが適当と思われる。

（13）第13次調査（平成２年度）

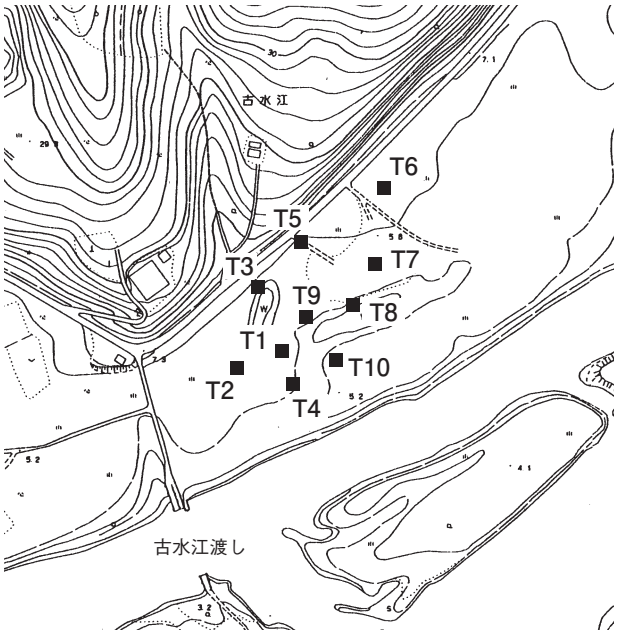
【調査期間】　平成3年3月14日～3月29日

【調査委員会】

委員長	今田昌男	倉敷市教育委員会 教育長	専門委員	福本　明	倉敷市教育委員会 文化課学芸員
副委員長	岡田三朗	倉敷市教育委員会 社会教育部長	〃	鍵谷守秀	〃　〃
専門委員	間壁忠彦	（財）倉敷考古館 館長	〃	小野雅明	〃　〃
〃	間壁葭子	〃　学芸員	〃	谷岡孝久	〃　〃
〃	小野一臣	倉敷市文化財保護審議会 委員			

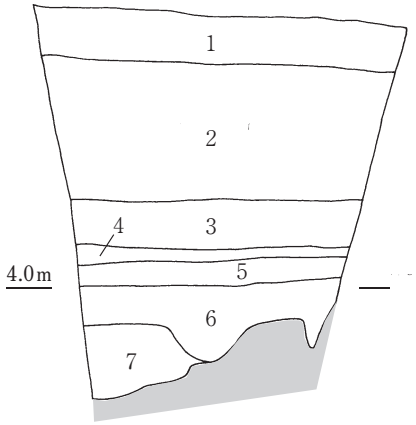


第34図　第12次調査地点位置図（S＝1/5,000）



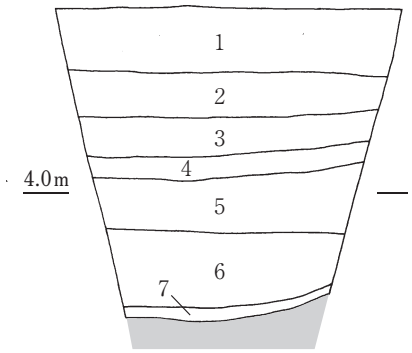
第35図　第13次調査地点位置図（S＝1/5,000）

トレンチ１西壁



１ 暗茶褐色腐植土
２ 暗茶色土
３ 淡黄灰色硬質土（遺物包含層）
４ 淡灰褐色硬質土（　〃　）
５ 灰褐色硬質土（　〃　）
６ 暗灰褐色粘質土（　〃　）
７ 黄灰色土

トレンチ２北壁

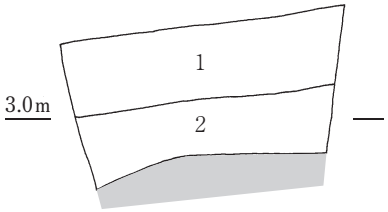


１ 黄褐色砂
２ 茶褐色粘質土
３ 暗茶褐色粘質土（遺物包含層）
４ 暗灰色粘質土（　〃　）
５ 灰褐色粘質土（　〃　）
６ 淡褐色粘質土（　〃　）
７ 暗褐色硬質土

トレンチ３北壁

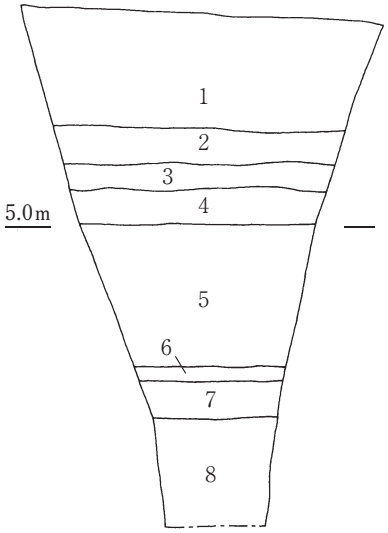
１ 暗灰色砂　２ 茶色砂

トレンチ５南壁



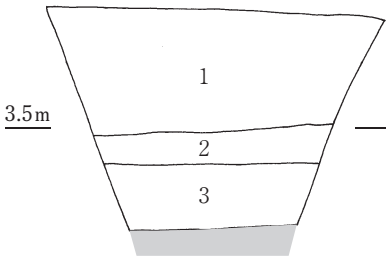
１ 暗茶褐色腐植土
２ 暗青灰色シルト

トレンチ７北壁



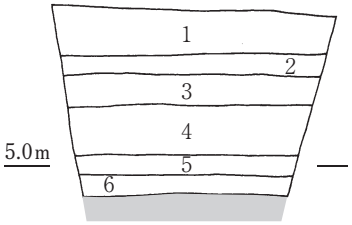
１ 腐植土
２ 黄褐色造成土
３ 暗黒灰色造成土
４ 暗茶色造成土
５ 暗黄灰色造成土
６ 暗灰褐色粘質土
７ 灰褐色粘質土
８ 黄褐色細砂

トレンチ10東壁



１ 腐植土
２ 黄灰褐色粘質土
３ 暗灰褐色粘質土

トレンチ11西壁

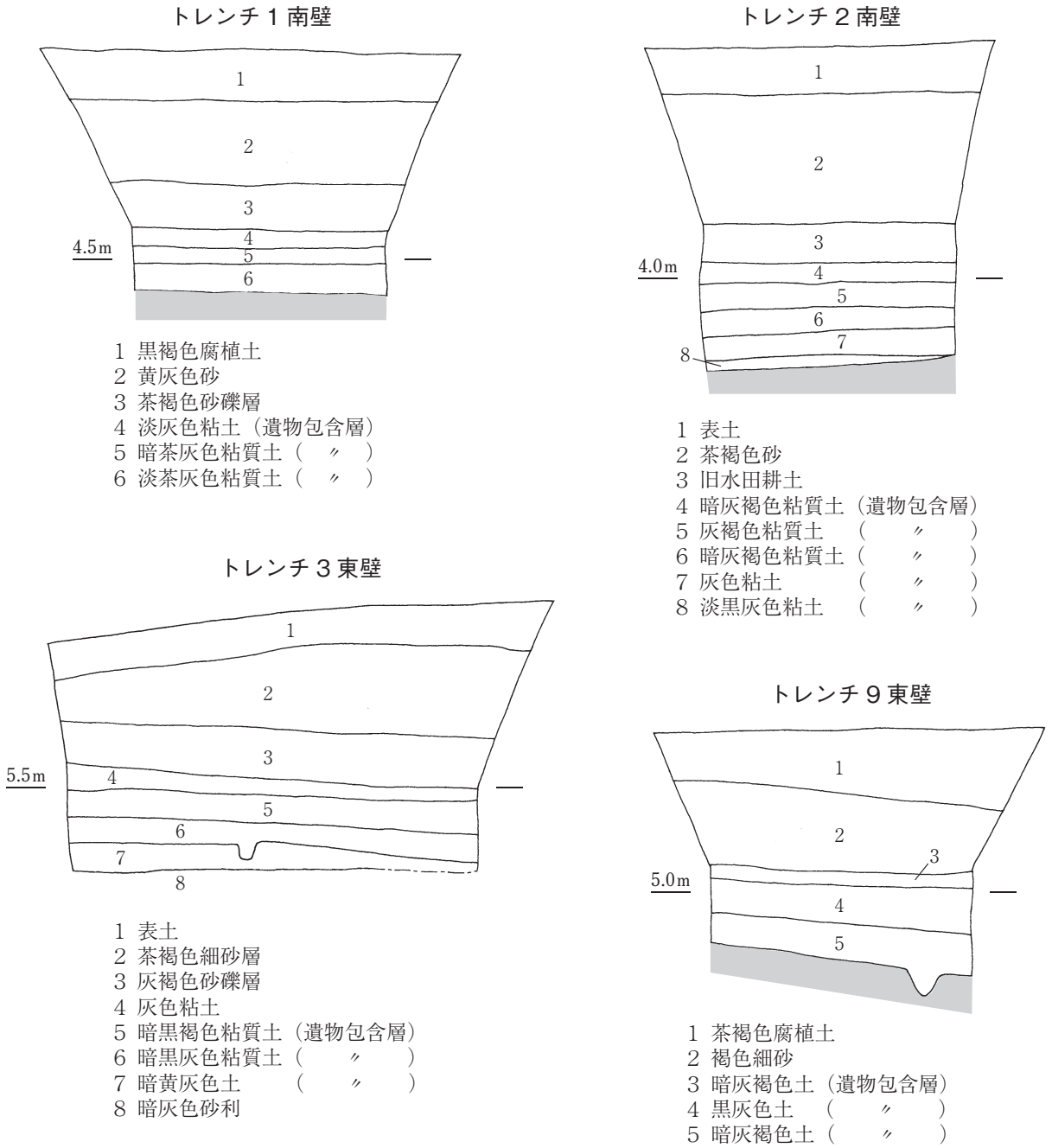


１黄茶色砂
２淡茶色粘質土
３灰褐色粘質土（遺物包含層）
４淡灰褐色粘質土（　〃　）
５暗灰褐色粘質土（　〃　）
６暗灰色粘質土（　〃　）

第36図　第12次調査地点断面図（Ｓ＝1/40）

調査対象区域は、12次調査において遺跡が確認された調査区東半部を含め、北東方向へ約100m延長した区域とした。調査は2m×2mのトレンチを任意に10か所設定し、土層観察を中心に行った。

第12次調査において遺物包含層が確認されたトレンチの周辺に、4か所（T1～T3・T9）のトレンチを設定した。T3を除く3か所では、基盤層である黄褐色粘土層の直上で遺物包含層が確認された。T1の包含層は厚さ約40cmで、中世土器や須恵器片等を含み3層に分層できる。T2の包含層は厚さ約60cmで5層に分層でき、主として中世土器を含んでいる。T9の包含層は厚さ約50cmで3層に分層でき、いずれの層にも炭や灰、焼土などが多く含まれる。出土遺物としては、弥生土器やサヌカイト片、



第37図　第13次調査地点断面図（S＝1/40）

中世土器などがある。確認された基盤層の高さは、T1で標高約4.3m、T2で約3.5m、T9で約4.6mを測る。T3では厚さ約40㎝の遺物包含層を確認したものの、この層以下は砂利層となっており、掘り下げ可能な範囲では他のトレンチで検出した基盤層は確認できなかった。包含層は3層に分層でき、上層（5･6層）には古墳～奈良時代と思われる須恵器が、下層（7層）には弥生土器が主として含まれる。

T5～T8では、河川改修後の堆積と思われる砂礫層の下は花崗岩の岩盤となっており、それぞれの高さはT5で標高約7.0m、T6で約5.5m、T7で約4.9m、T8で約4.7mを測る。第11次調査のT3においても、砂層の下がすぐ岩盤になっている状況がみられることから、河川改修時に行われた丘陵先端部を削平は、比較的広範囲に及ぶ可能性がある。

なお、古水江渡しの流路沿いに設定したT4・T10については、いずれも湧水による土砂崩壊が激しいため、調査を断念した。

（14）第14次調査（平成３年度）

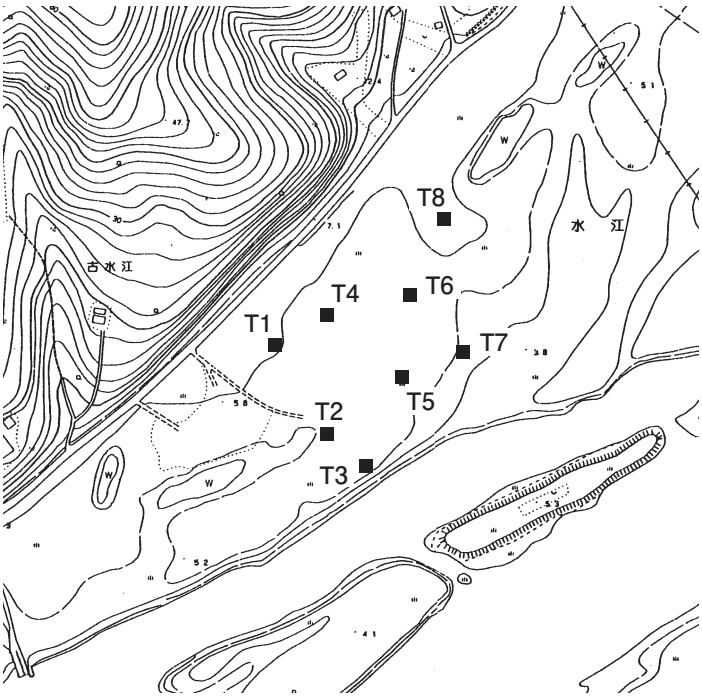
【調査期間】　平成4年3月23日～3月31日

【調査委員会】

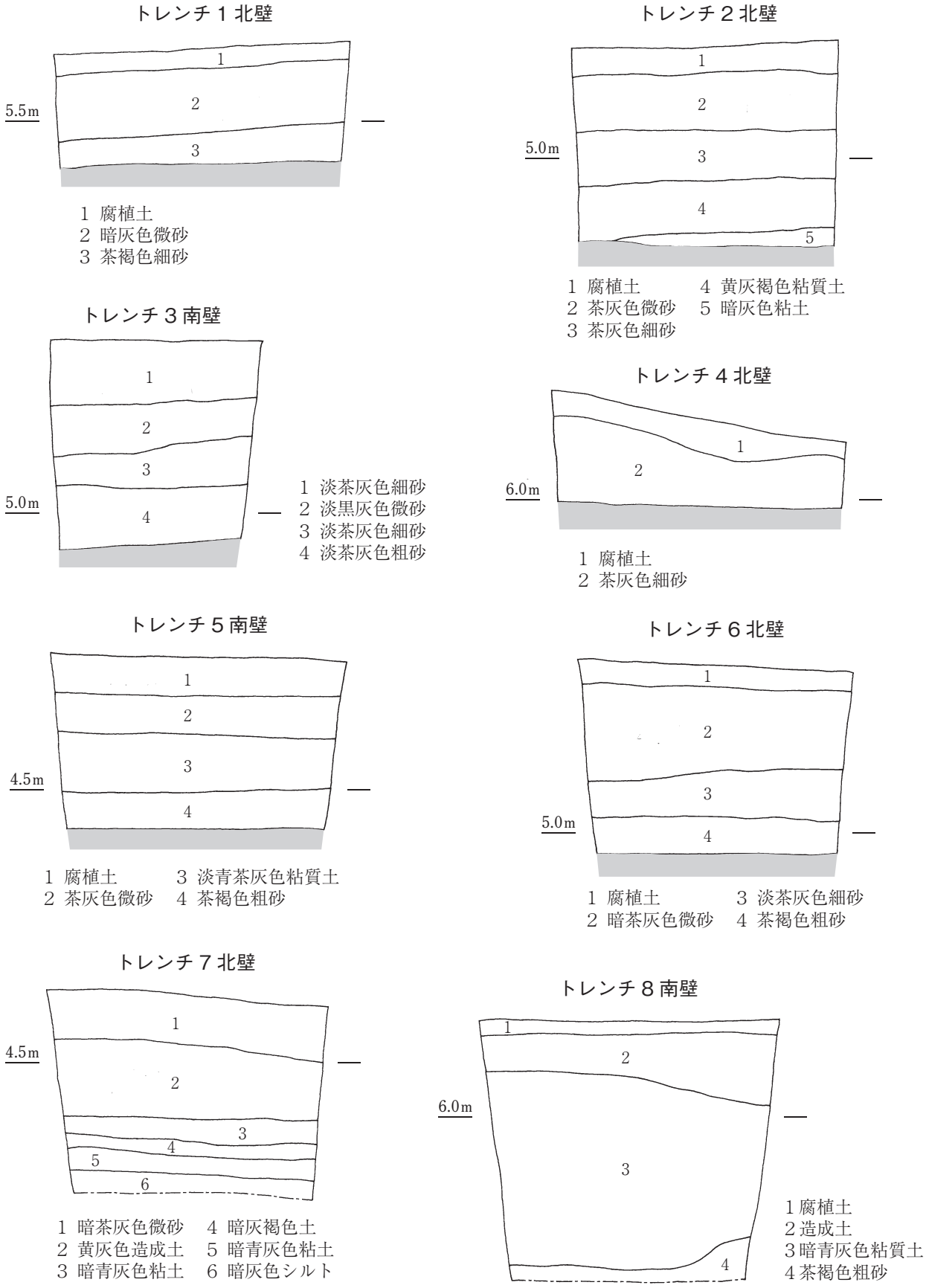
委員長	今田昌男	倉敷市教育委員会 教育長	専門委員	福本　明	倉敷市教育委員会 文化課学芸員
副委員長	三好繁光	倉敷市教育委員会 社会教育部長	〃	鍵谷守秀	〃　〃
専門委員	間壁忠彦	（財）倉敷考古館 館長	〃	小野雅明	〃　〃
〃	間壁葭子	〃　学芸員	〃	藤原好二	〃　〃
〃	小野一臣	倉敷市文化財保護審議会 委員			

第12次・13次調査において確認した遺跡の広がりと河川改修時に削平された丘陵先端部縁辺における遺跡のあり方を見るため、13次調査区から上流部分約200mを調査範囲とし、任意に7か所のトレンチを設定して調査を行った。

T1～T3では、厚さ80～140㎝にわたって目の細かい流砂や造成土が堆積しており、その下に地山と思われる黄赤褐色の軟質な岩盤がみられ、北側から延びていた丘陵を削平した跡と思われる。それぞれの岩盤の標高は、T1で約5.2m、T2で約4.4m、T3で約4.8mを測る。調査区中央部付近に設定したT4～T6においても、2～4層の流砂層の下で軟質な黄赤褐色の岩盤が確認され、それぞれの標高はT4で約5.9m、T5で約4.6m、T6で4.9mであった。一方、上流部分に設定したT7・T8では、地表下1.7～2.0mまで掘り下げを行ったものの、T1～T6で確認された岩盤はみられず、確認できた最下層はシルトあるいは粗砂となっていた。したがって、削平された丘陵はT7－T8ラインまでは延びておらず、こ



第38図　第14次調査地点位置図（S＝1/5,000）



第39図　第14次調査地点断面図（Ｓ＝1/40）

の付近から上流部分はかつて湿地状を呈していたと思われる。なお、遺物としては、T6の岩盤直上層から須恵器小片が1点出土したのみである。

（15）第15次調査（平成４年度）

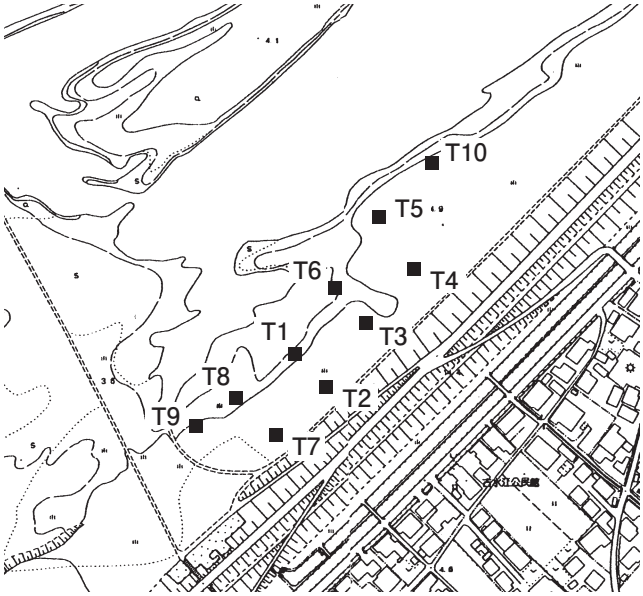
【調査期間】 平成4年11月30日～12月11日

【調査委員会】

委員長	今田昌男	倉敷市教育委員会 教育長	専門委員	鍵谷守秀	倉敷市教育委員会 文化課学芸員
副委員長	三好繁光	倉敷市教育委員会 社会教育部長	〃	小野雅明	〃 〃
専門委員	間壁忠彦	（財）倉敷考古館 館長	〃	藤原好二	〃 〃
〃	間壁葭子	〃 学芸員	〃	中野倫太郎	〃 〃
〃	小野一臣	倉敷市文化財保護審議会 委員	〃	片岡弘至	〃 〃
〃	福本　明	倉敷市教育委員会 文化課学芸員			

昭和63年度に実施した第11次調査（北地点）により、水江地区の遺跡が古水江渡しの北側にまで延びていることが明らかになっていたが、さらに上流部分については、人力による調査のため掘り下げが十分ではないトレンチも少なくなかった。第15次調査ではこの遺跡の北端を確認するため、第11次調査区の堤防寄りを含めた南北約250mを調査対象区とし、任意にトレンチ10か所を設定して調査を行った。

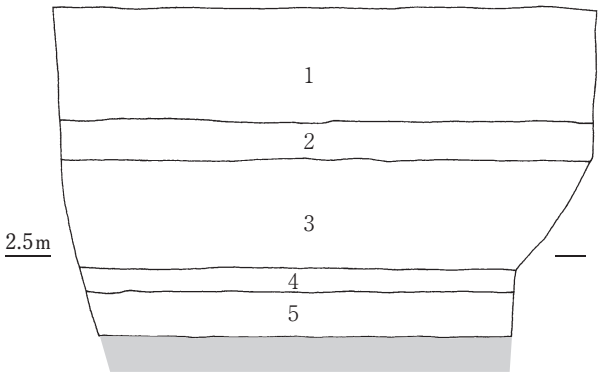
高梁川東岸の堤防から約50m離れたラインに6か所のトレンチ（T1・T5・T6・T8～T10）を設定した。最も南端のT9では、地表下約1.2mまでは流砂層がみられ、その下には砂層を挟みながら青灰色系あるいは黒褐色系の粘質土が堆積している。これらのうち上層（6・7層）からは須恵器片、下層（8層）からは弥生土器片が出土しているが、その量は概して少ない。8層の下は微高地の基盤層と思われる黄褐色の粘質土となっており、その高さは標高約2.1mを測る。T8における土層は、流砂層の構成に若干の違いがあるものの、基本的にはT9と同様で、基盤層上に青灰色あるいは黒褐色の粘質土が堆積している。これらのうち、4・5層はT9の6・7層に対応していると思われるが、T8の4層には須恵器のほか中世土器も含まれていた。T8における基盤層の高さは、T9と同じ標高約2.1mを測る。他の4か所のトレンチにおいても、T8・T9と同様、流砂層の下に数層の粘質土が堆積しその下が基盤層となっているが、遺物包含層は確認されなかった。T5の地表下約1.2mの高さでみられる垂直の落ち込みは、明治期までにおける水田耕作に関係する遺構と考えられる。なお、各トレンチにおける基盤層上面の標高は、T1･T5で約2.1m、T6で約2.0m、T10で約1.9mを測り、T8・T9の2.1mと合わせればこの付近の基盤層は標高2.0m前後の高さで、ほぼ水平となっていることがわかる。



第40図　第15次調査地点位置図（S＝1/5,000）

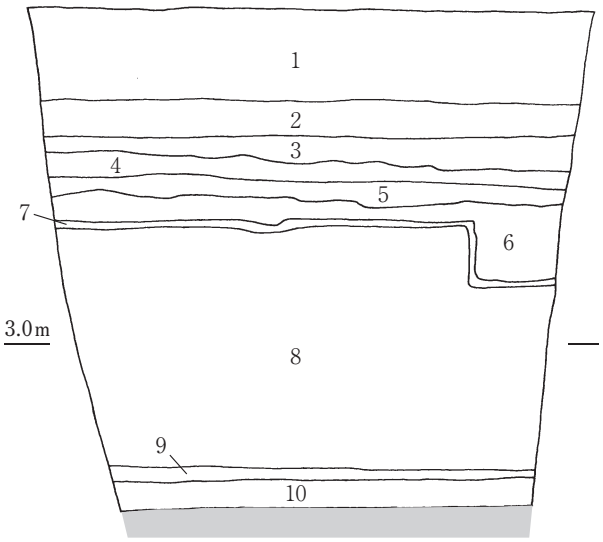
高梁川東岸の堤防沿いに4か所のトレンチ（T2～T4、T7）を設定したが、いずれのトレ

トレンチ１北壁



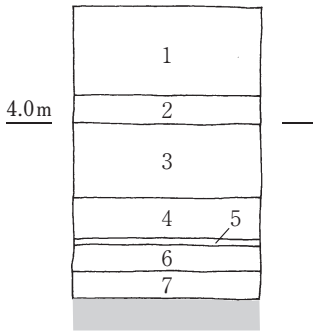
1 表土
2 黄橙色粘質土
3 青灰色粘質土
4 灰色粘土層 (7.5Y 6/1)
5 灰色粘土層 (7.5Y 4/1)

トレンチ５北壁



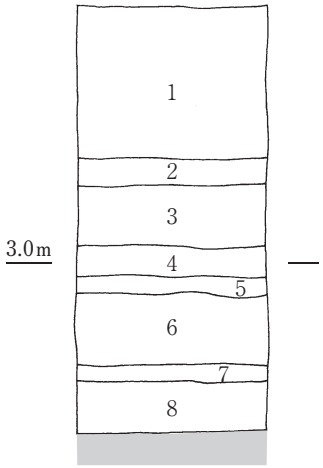
1 オリーブ褐色砂
2 黄褐色バラス土
3 黄橙色粗砂
4 緑灰色粘質土(7.5GY5/1)
5 緑灰色粘質土(7.5GY6/1)
6 黄褐色粗砂
7 灰白色細砂
8 緑灰色粘土
9 暗青灰色粘質土(5B4/1)
10 暗青灰色粘質土(5B2/1)

トレンチ８北壁



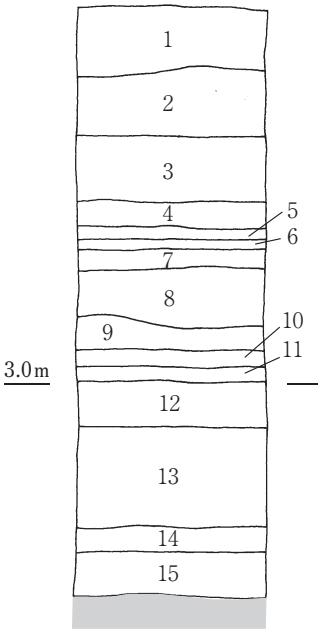
1 黒褐色砂質土
2 暗灰色粘質土
3 明黄褐色砂
4 青灰色粘質土(遺物包含層)
5 青灰色粘質土(　　〃　　)
6 黒褐色粘質土(2.5Y3/2)
7 黒褐色粘質土(10Y3/2)

トレンチ９北壁



1 黒褐色砂質土
2 黄褐色砂
3 黄色砂
4 青灰色粘質土
5 オリーブ灰砂
6 青灰色粘質土(遺物包含層)
7 青灰色粘質土(　　〃　　)
8 黒褐色粘質土(　　〃　　)

トレンチ 10 北壁

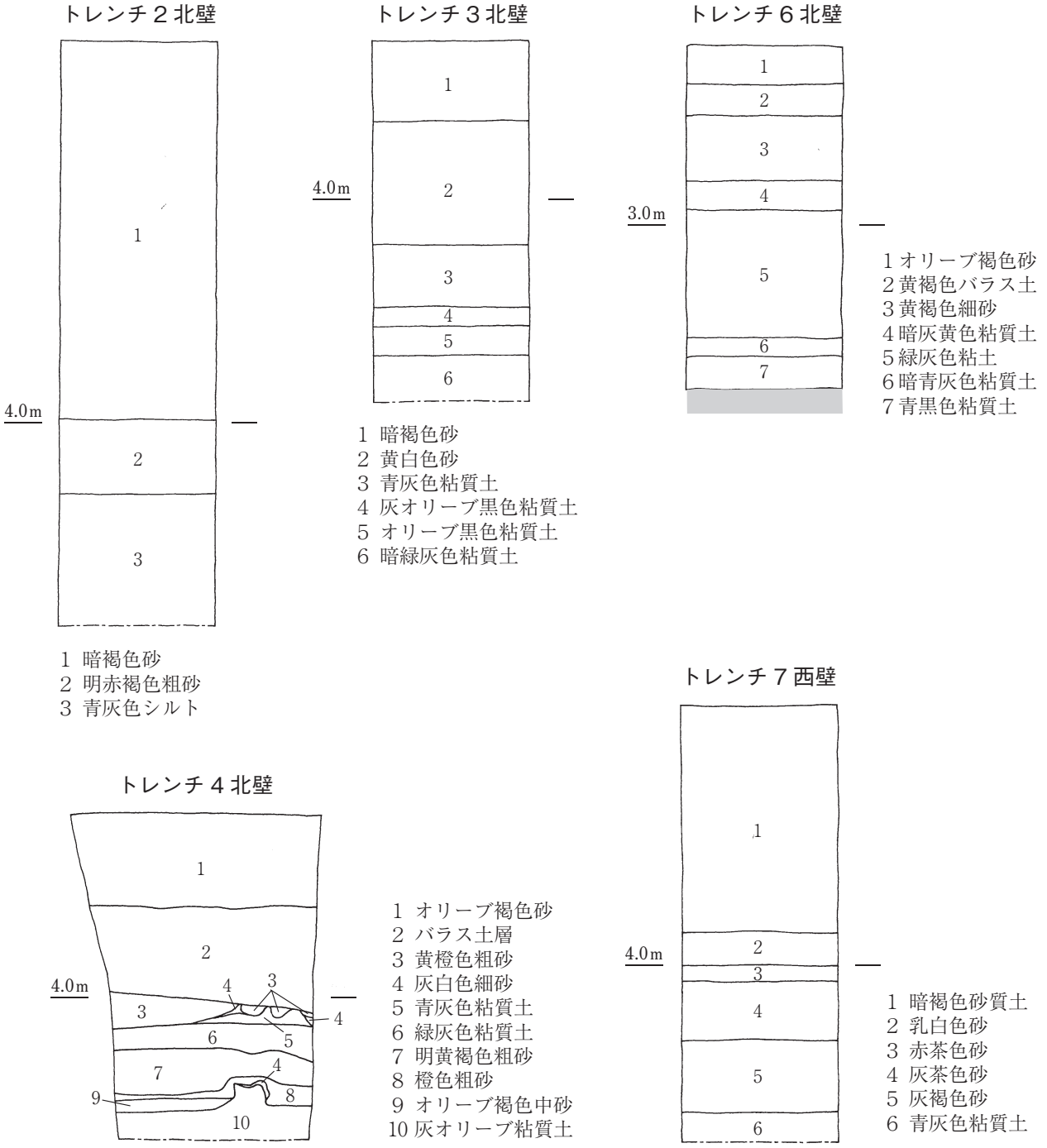


1 オリーブ褐色砂
2 黄褐色礫層
3 黄橙色粗砂
4 黄橙色粘質土層(5YR 8/2)
5 黄橙色粘質土層(5YR 7/2)
6 黄橙色砂
7 灰白色細砂
8 青灰色砂
9 黄褐色粘質土
10 黄褐色砂
11 緑灰色粘質土層(10GY 5/1)
12 緑灰色粘質土層(5G 5/1)
13 暗緑灰色粘土
14 青灰色粘土
15 黒褐色粘質土

第41図　第15次調査地点断面図１（Ｓ＝1/40）

ンチにおいても遺物包含層ならびに基盤層は確認されなかった。T2およびT7では、地表下2.6～2.8mまでは流砂層が厚く堆積しており、その下はT2では青灰色のシルト、T7では青灰色の粘土となっている。T3では、地表下約1.2mまでは流砂層で、その下には灰色系粘質土が4層みられる。T4の流砂層の下にみられる畦状の遺構は、T5と同様の水田耕作に関係するものと考えられる。

第15次調査の結果、微高地の基盤層は流路沿いでは調査区の北端まで認められるものの、遺跡としては第11次調査のT3より上流へは延びないことがほぼ確定し、また、調査区の堤防寄りの部分は、



第42図　第15次調査地点断面図２（Ｓ＝1/40）

当時流路か湿地状を呈していたことが改めて確認された。

（16）第16次調査（平成５年度）

【調査期間】　平成6年3月8日～3月31日

【調査委員会】

委員長	山田錦造	倉敷市教育委員会	教育長	専門委員	鍵谷守秀	倉敷埋蔵文化財センター	学芸員
副委員長	川上昌城	〃	教育次長	〃	小野雅明	〃	〃
専門委員	間壁忠彦	（財）倉敷考古館	館長	〃	中野倫太郎	〃	〃
〃	間壁葭子	〃	学芸員	〃	片岡弘至	〃	〃
〃	小野一臣	倉敷市文化財保護審議会	委員	〃	藤原好二	倉敷市教育委員会	文化課学芸員
〃	福本　明	倉敷埋蔵文化財センター	学芸員				

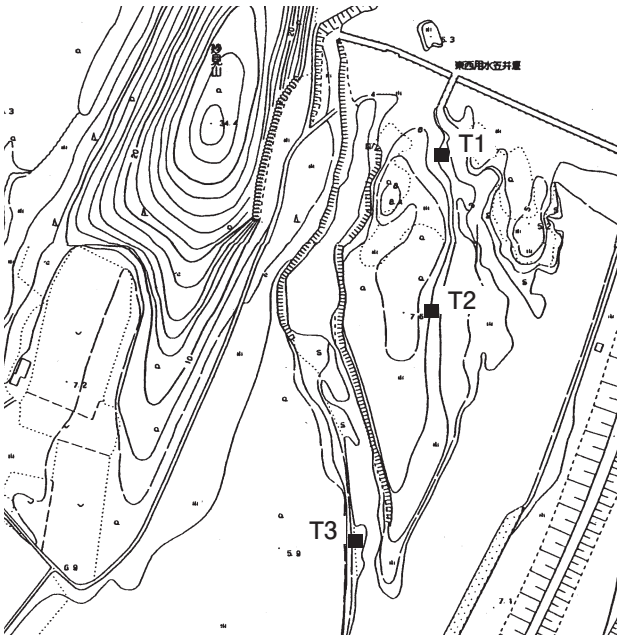
第1次調査（昭和53年度）において、比較的良好な状態で遺跡が残存していることが確認されていた笠井堰下流の中洲部分については、遺物包含層が露出している部分も少なくなかったが、増水のたびに包含層が削り取られ多くの遺物が流失していた。そこで、第16次調査では、遺跡流失の危険性が高いと思われる中洲の北端部、中央部東側、および南端部の3か所について、4m×4mのトレンチを設定して確認調査を行った。

笠井堰のすぐ下流、中洲の北端部にT1を設定した。周辺の河岸段丘斜面には厚さ40㎝程度の遺物包含層が露出していたが、当該トレンチでは、増水に伴う砂礫層が地表下約1.1mまで厚く堆積しており、遺物包含層の多くは既に流失している状況と思われる。遺構としては、トレンチの南西部で落ち込み状の遺構を、南東部で浅い土坑をそれぞれ1基検出した。

落ち込み状遺構はゆるやかに段状に落ちており、深さはトレンチ南西隅で約40㎝を測る。埋土中には、古墳時代の土師器や須恵器が含まれている。土坑は、この落ち込み状遺構によって西側を切られているが、一辺1m程度の隅丸方形を呈すると思われる。深さは約12㎝と浅く、遺物は出土しなかった。

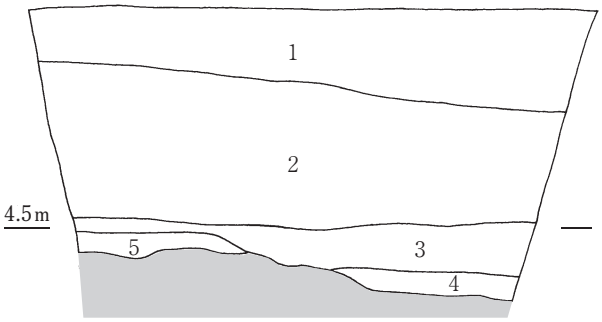
中洲のほぼ中央部には増水等でできた大きな窪地があり、底の部分には茶褐色の遺物包含層が露出し、多くの土器片が散布している。この窪地の西寄りにT2を設定し調査した結果、トレンチの東端は水流により南北方向に削られていたが、西半部から土坑、溝状遺構、竪穴住居跡などが検出された。

トレンチの北西隅で検出された土坑は、表土下約50㎝の高さから掘り込まれており、深さは約40㎝を測る。埋土中からは土師器片が出土している。トレンチの西端近くで検出された溝状遺構は、南北方向に延びる大きなもので、北壁と南壁の断面観察によれば基盤層と思われる黄褐色土から急角度で掘り込まれている。深さは約70㎝で、



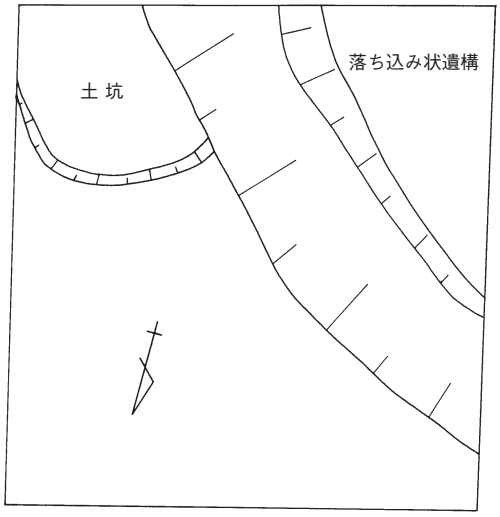
第43図　第16次調査地点位置図（S＝1/5,000）

トレンチ１南壁

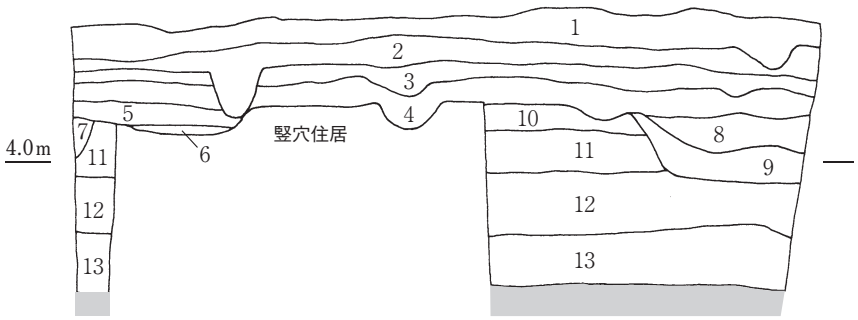


1 砂礫層
2 砂層
3 黒灰色土（落ち込み状遺構埋土）
4 黒黄灰色土（　　〃　　）
5 暗灰褐色土（土坑埋土）

トレンチ１遺構図

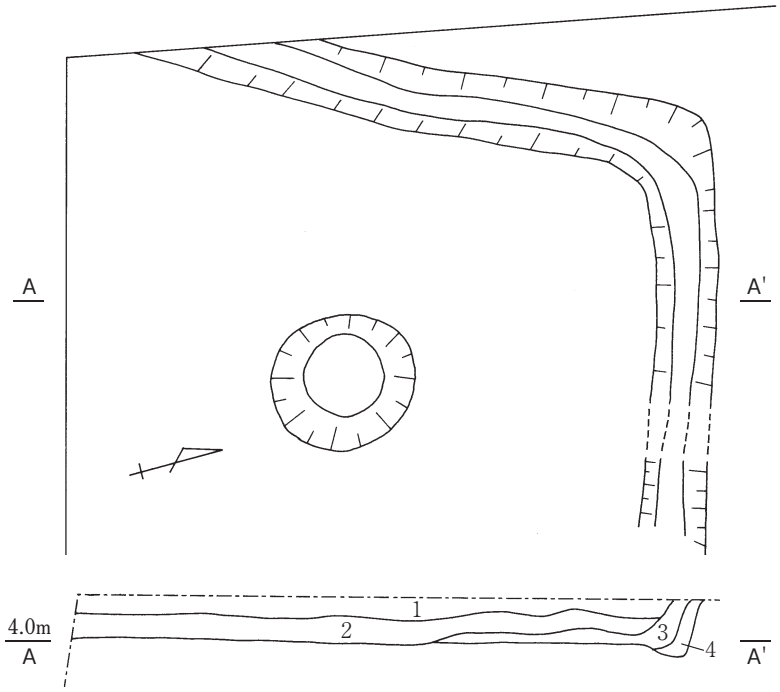


トレンチ２西壁



1 黄褐色土
2 褐色土
3 黄褐色土（10YR 5/3）
4 黄褐色土（10YR 4/3）
5 黒褐色土
6 灰黄褐色土（壁体溝埋土）
7 褐灰色土
8 暗褐色土（土坑埋土）
9 黒褐色土（　　〃　　）
10 灰黄褐色土
11 暗褐色土
12 黒褐色粘質土（溝埋土）
13 黒褐色粘質土（　〃　）

第44図　第16次調査地点断面図・遺構図（Ｓ＝1/40）



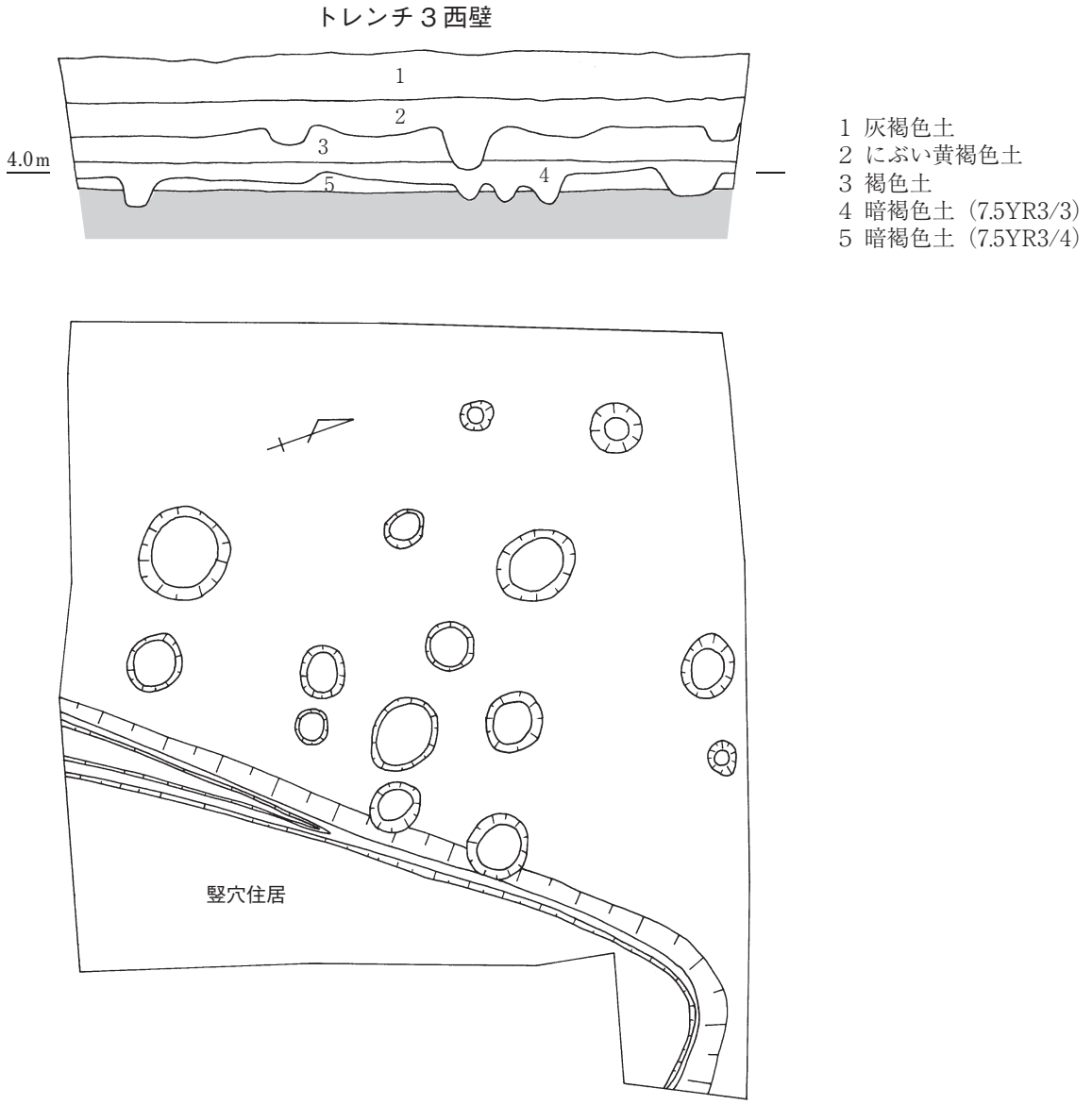
1 灰褐色土
2 褐色土
3 暗褐色土
4 暗灰褐色土

第45図　第16次トレンチ２竪穴住居（Ｓ＝1/20）

底面はほぼ水平となっており、埋土からは弥生中期の土器片も出土している。トレンチの南半で検出された竪穴住居は、全体の1/4程度であるため規模については不明であるが、平面プランは隅丸方形を呈している。検出面からの深さは約10㎝で、壁面に沿って幅15㎝ほどの溝がめぐっている。住居に伴う柱穴は1基検出されており、径約40㎝、深さ約25㎝を測る。床面からは土師器の高杯や甑などが出土しており、おおむね古墳時代中期に属すると思われる。

中洲の南端部、T2と同様窪地状を呈する部分にT3を設定し調査を行った結果、竪穴住居跡ならびに2時期に分かれるピット群を検出した。

竪穴住居はトレンチの東半で検出され、隅丸方形の平面プランをもつ。全体の大きさは不明であるが、一辺4.2m 以上で、検出面での深さは約40㎝を測る。壁体に沿って幅約10㎝、深さ約7㎝の浅い溝が巡るが、住居跡西側で2本に分かれており、修復ないしは拡張の痕跡と思われる。住居内埋土



第46図　第16次トレンチ３断面図・遺構図（Ｓ＝1/40）

には少量ながら土師器の壺や高杯などが含まれており、これらの特徴からおおむね古墳時代前期に属するものと思われる。検出された2時期のピット群のうち、上層のピット群は褐色土（2層）に伴うもので、下層のピット群は暗褐色土（4層）に伴うものであり、それぞれ15基と7基が確認されている。時期についてはほとんど遺物が含まれていないため明らかではないが、上層のピット群については、その一部が竪穴住居跡の壁体溝を切り込んでいることから、古墳時代前期以降のものと思われる。

（17）第17次調査（平成６年度）

【調査期間】　平成7年3月2日～3月31日

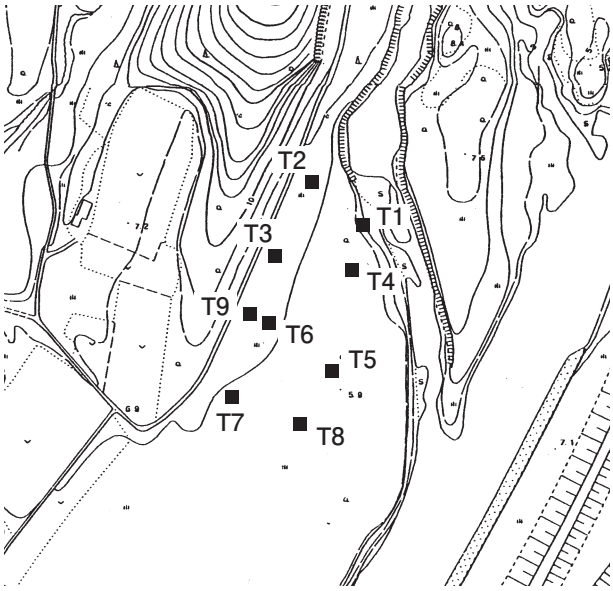
【調査委員会】

委員長	山田錦造	倉敷市教育委員会	教育長	専門委員	鍵谷守秀	倉敷埋蔵文化財センター	学芸員
副委員長	佐々木將勝	〃	教育次長	〃	小野雅明	〃	〃
専門委員	間壁忠彦	（財）倉敷考古館	館長	〃	中野倫太郎	〃	〃
〃	間壁葭子	〃	学芸員	〃	片岡弘至	〃	〃
〃	小野一臣	倉敷市文化財保護審議会	委員	〃	藤原好二	倉敷市教育委員会	文化課学芸員
〃	福本　明	倉敷埋蔵文化財センター	学芸員				

第17次調査は、昭和55年度（第3次）に既に調査を実施しているものの、当時人力のみで十分な掘り下げが行えなかった部分もあることから、第16次調査対象区域から南へ続く中洲を対象区域とした。調査は、遺跡流出の危険性がある調査区北端の川岸付近に5m×5mのトレンチ（T1）を設定したほか、対象区域内に2m×2mのトレンチ8か所を設定して行った。

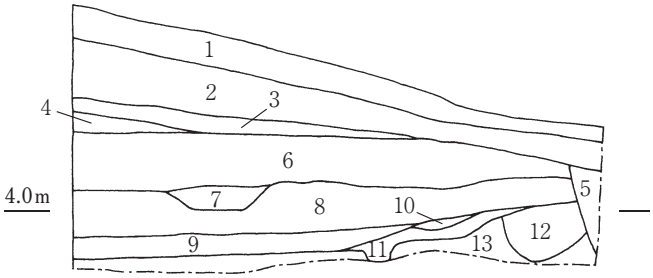
T1では地表下約60㎝で、2層からなる厚さ約60㎝の中世包含層（6・8層）を確認した。上層の包含層は灰褐色の粘質土で、このレベルで土坑4基、ピット15基を検出した。土坑のうち最も大きなものは、2.8m×3.2m 以上の不整形を呈し深さは約25㎝である。埋土からは、土師器の椀や小皿、土鍋のほか、須恵質土器片などの中世土器が比較的まとまって出土した。検出されたピットは径30㎝程度のものが多いが、深さは15㎝未満のものがほとんどで、建物としてまとまりのあるものは認められない。下層の灰黄褐色粘質土の面においてもピット10基が検出されたが、いずれも径20㎝未満の小さいもので深さも浅かった。中世包含層の下では、標高約3.9mの高さで、竪穴住居の一部を検出した。住居跡は、幅約20㎝の壁体溝が弧状に廻っており、径約50㎝、深さ約50㎝の柱穴が1基確認できた。出土遺物から、弥生時代中期末頃のものと思われる。

調査区の西端、妙見山の丘陵寄りにT2・T3・T6・T7・T9を設定した。T2・T6では標高約4.0m、T3では標高約4.6m 以下は灰色系のシルト層となっており、遺物包含層は確認できなかった。これらのシルト層の始まりを確認するため、T6の西方丘陵側にT9を設定した。調査の結果、厚く堆積した砂礫層の下、標高5.2m 付近で赤褐

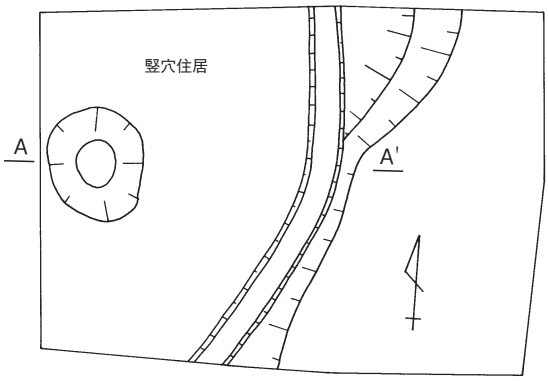


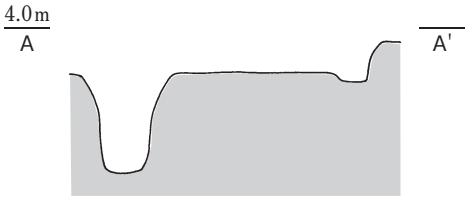
第47図　第17次調査地点位置図（S＝1/5,000）

トレンチ１北壁東半

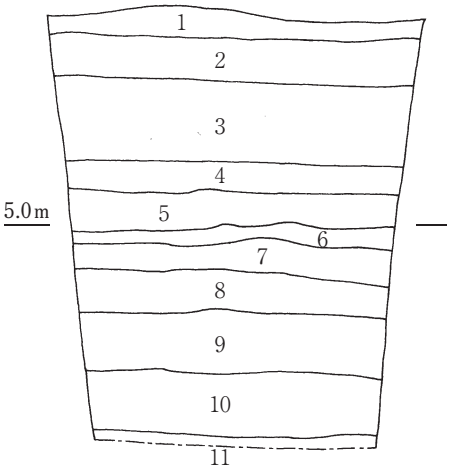


1 表土
2 黄褐色粗砂
3 灰黄褐色粘質土（10YR 5/2）
4 灰黄褐色粘質土（10YR 4/2）
5 灰色粘質土
6 灰褐色粘質土（遺物包含層）
7 褐色粘質土
8 灰黄褐色粘質土（遺物包含層）
9 にぶい黄褐色粘質土（住居埋土）
10 黒褐色土（　〃　）
11 褐色粘質土（　〃　）
12 褐色粘質土
13 明褐色粘質土



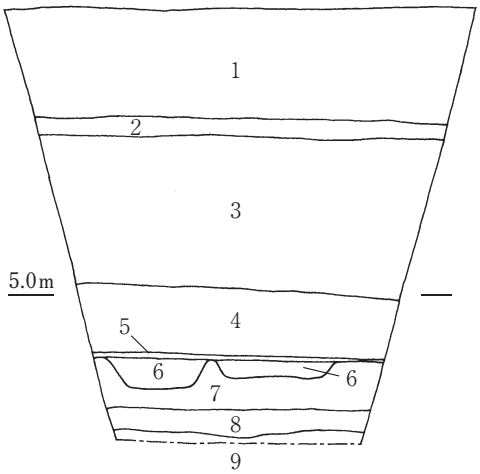


トレンチ２北壁



1 表土
2 にぶい黄橙色粗砂
3 暗オリーブ褐色微砂
4 黄褐色粘質土
5 黄橙色花崗岩風化土
6 褐灰色微砂
7 にぶい黄褐色微砂
8 灰色砂質土（10Y5/1）
9 灰色砂質土（7.5Y5/1）
10 灰黄色細砂
11 灰色シルト

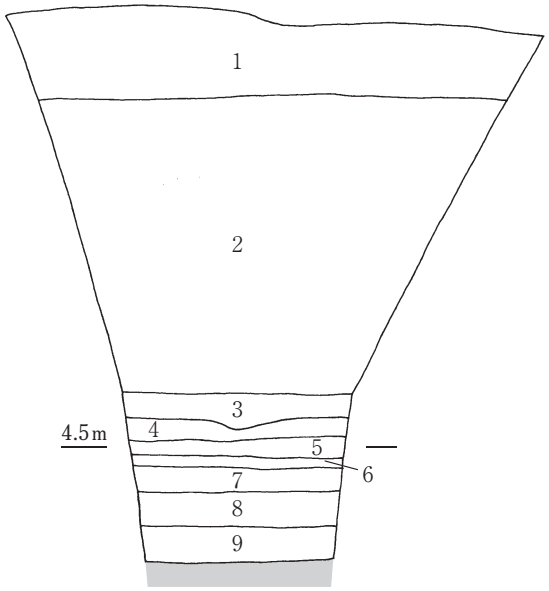
トレンチ３北壁



1 表土
2 黄灰色粗砂
3 明黄褐色花崗岩風化土
4 にぶい橙色粘質土
5 明褐色粘質土
6 褐灰色粘質土
7 灰色シルト（N5/）
8 灰色シルト（7.5Y4/1）
9 灰色シルト（N4/）

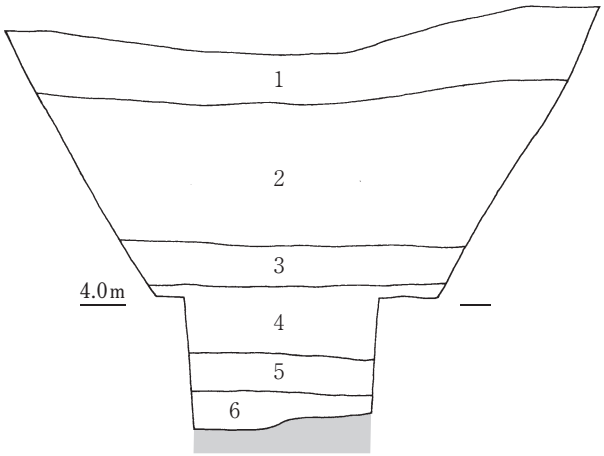
第48図　第17次調査地点断面図・遺構図（Ｓ＝1/40）

トレンチ４東壁



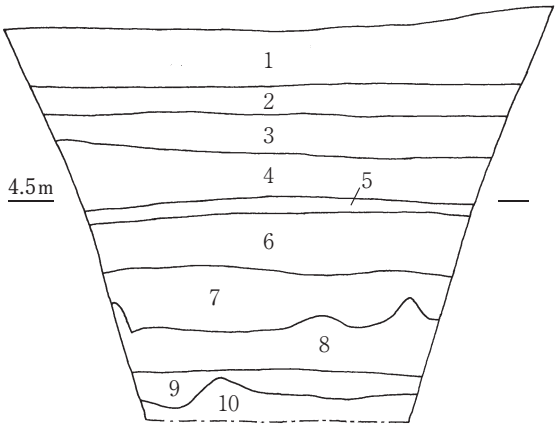
１ 表土
２ 褐色砂礫
３ 褐色微砂
４ 灰褐色粘質土（中世包含層）
５ 暗褐色粘質土（　　〃　　）
６ 褐灰色粘質土（　　〃　　）
７ にぶい黄褐色粘質土（弥生包含層）
８ 灰黄褐色粘質土（　　〃　　）
９ 暗褐色粘質土（　　〃　　）

トレンチ５西壁



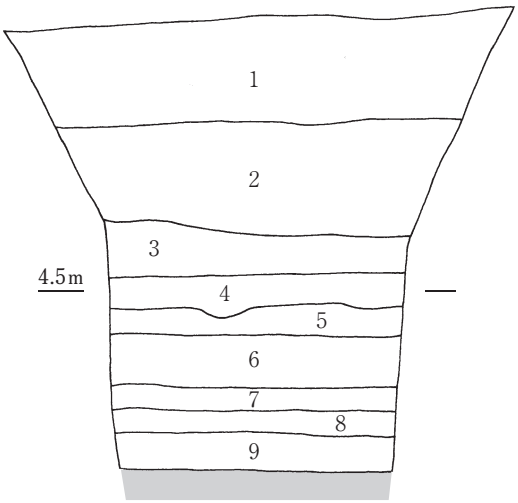
１表土
２にぶい黄褐色砂礫
３にぶい黄褐色粘質土
４にぶい黄褐色粘質土（中世包含層）
５灰黄褐色粘質土（弥生包含層）
６褐色粘質土（　　〃　　）

トレンチ６壁



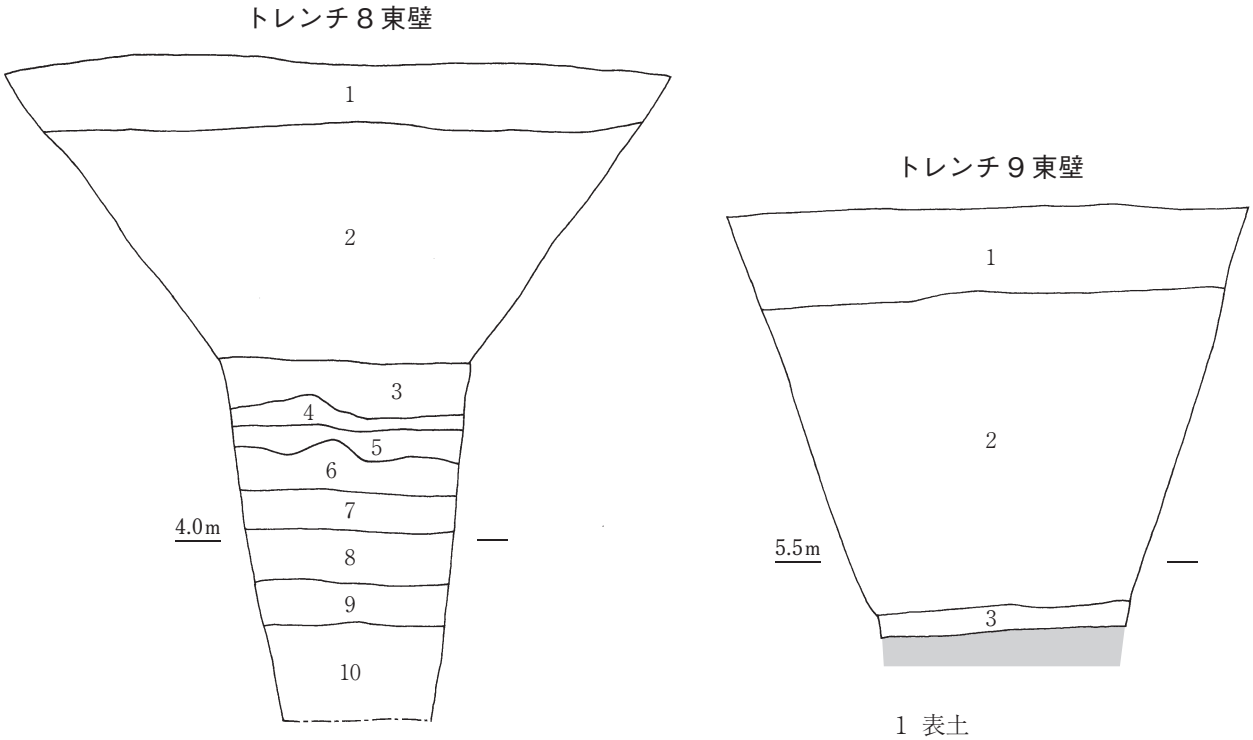
１ 表土
２ 明黄褐色粗砂
３ 褐灰色粗砂
４ にぶい黄橙色砂質土
５ 明黄褐色砂質土
６ 黄灰色砂質土
７ 灰黄褐色粘質土
８ 灰色シルト
９ 暗緑灰色シルト
10 緑灰色シルト

トレンチ７東壁



１ 表土
２ にぶい黄褐色砂礫
３ 褐灰色粘質土
４ にぶい黄褐色砂質土
５ 暗オリーブ褐色土
６ 灰黄褐色粘質土
７ にぶい黄褐色粘質土（10YR 5/4）
８ にぶい黄褐色粘質土（10YR 4/3）
９ 暗灰黄色粘質土

第49図　第17次調査地点断面図１（Ｓ＝1/40）



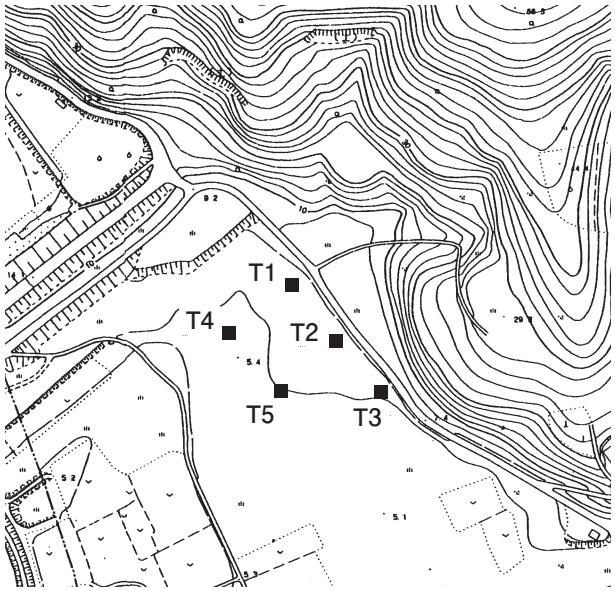
1 表土
2 にぶい黄褐色細砂
3 造成土
4 褐灰色粘質土
5 にぶい黄橙色微砂
6 にぶい黄褐色粘質土(中世包含層)
7 にぶい黄褐色粘質土(　〃　)
8 灰黄褐色粘質土(　〃　)
9 褐灰色土(シルト状)
10 黒褐色土(　〃　)

1 表土
2 オリーブ褐色微砂
3 灰色砂質土

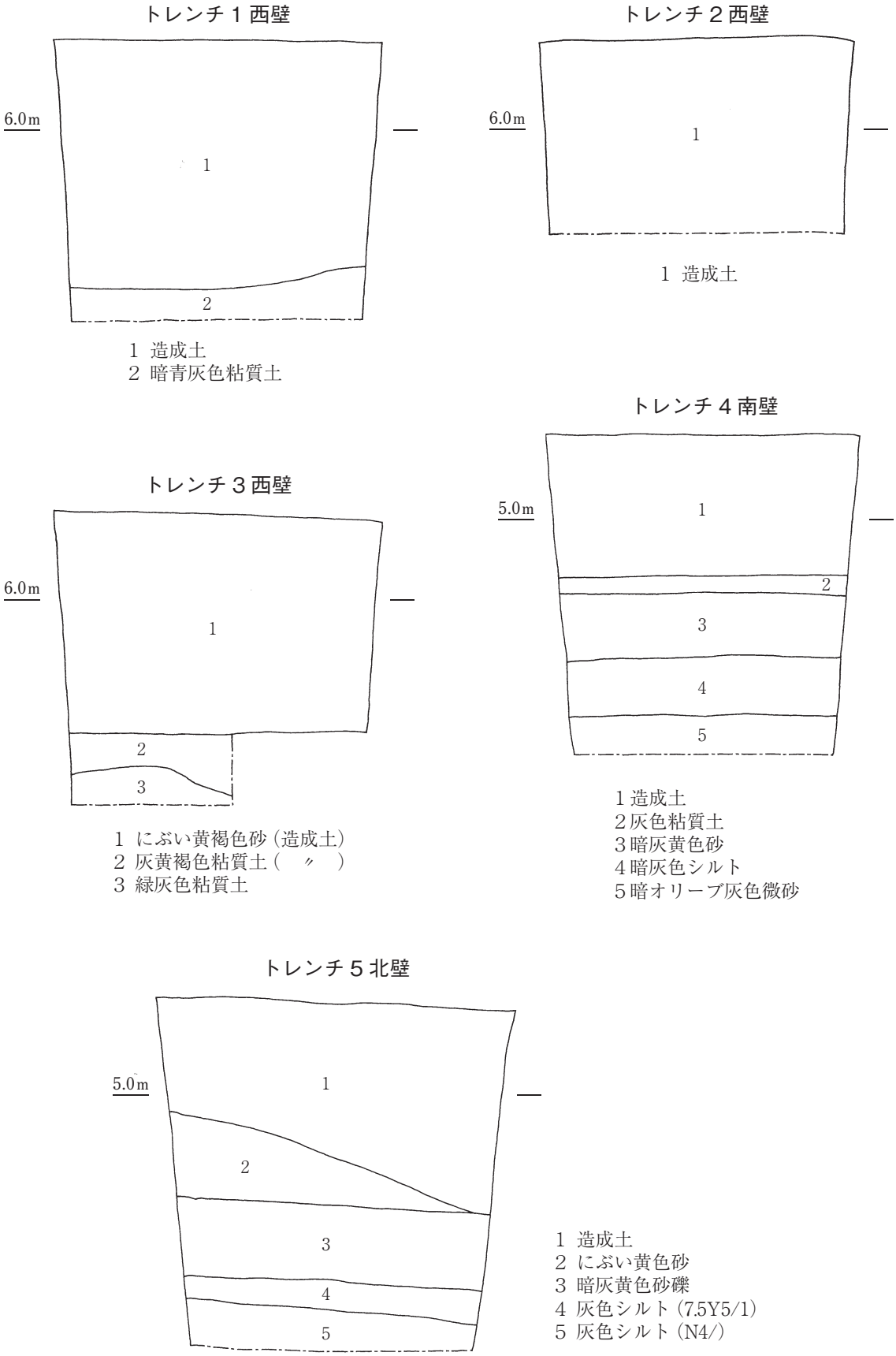
第50図　第17次調査地点断面図２（Ｓ＝1/40）

色の地山土が確認され、シルト層は認められなかった。T6では地山が確認されていないことから、地山はT9からT6に向かって急に落ち込んでいき、その間でシルト層の堆積が始まるものと思われる。T6の南方約50mの地点に設定したT7においてもシルト層は確認できず、標高3.6m付近で硬質の黄褐色粘質土となっている。この層は、周辺では弥生時代のベース（基盤層）となる土層であるが、このトレンチでは遺物包含層は確認されなかった。

T3－T7ラインから東へ約50mの位置にT4・T5・T8を設定した。T4では、基盤層の直上に弥生時代の包含層があり、その上に中世の包含層が存在する。どちらの包含層も3層からなり厚さは30～50cmを測るが、遺物の量は概して少ない。T5における土層の状況も基本的にはT4と同様で、基盤層直上に弥生の包含層が存在し、その上に中世の包含層が認められる。包含層に含まれる遺物がそれほど多くないのもT4と同じである。



第51図　第18次調査地点位置図（Ｓ＝1/5,000）



第52図　第18次調査地点断面図（Ｓ＝1/40）

T8では、標高4.5m付近で3層からなる中世の遺物包含層を確認したが、この下は、わずかに弥生土器片を含むシルト質の強い土となっており、T4・T5で確認された基盤層は認められなかった。確認された基盤層の標高は、T4で3.9m、T5で3.4mと、下流に行くにしたがい低くなっており、T8付近で湿地へと変わっていくものと思われる。

（18）第18次調査（平成７年度）

【調査期間】　平成8年3月21日～3月31日

【調査委員会】

委員長	山田錦造	倉敷市教育委員会	教育長	専門委員	鍵谷守秀	倉敷埋蔵文化財センター	学芸員
副委員長	佐々木將勝	〃	教育次長	〃	小野雅明	〃	〃
専門委員	間壁忠彦	（財）倉敷考古館	館長	〃	中野倫太郎	〃	〃
〃	間壁葭子	〃	学芸員	〃	片岡弘至	〃	〃
〃	小野一臣	倉敷市文化財保護審議会	委員	〃	藤原好二	倉敷市教育委員会	文化課学芸員
〃	福本　明	倉敷埋蔵文化財センター	学芸員				

第12次および第13次調査により、酒津八幡山の南端部東側で小範囲ながら遺跡が確認されている。そのため、八幡山南端部西側の山裾あるいはかつての砂洲状の高まりに遺跡が存在する可能性を考え、第18次調査は、柳井原堰の下流付近を対象区域としてほぼ50m間隔に5か所のトレンチを設定して行った。

山裾に沿ってT1～T3を設定した。T1・T3では、地表下約1.7mまで厚く造成土がみられ、その下はシルト状の粘質土となっており、遺物等は確認されなかった。T2では、地表下1.3mあたりで湧水が始まり、壁面崩壊の恐れがあるため地表下2.0m付近までしか掘り下げができなかったが、確認できた土層はすべて造成土であった。

T1－T3ラインから南西へ約50mのライン上にT4・T5を設定した。T4では、1mほどの造成土の下に旧耕作土と思われる灰色粘質土が認められたが、その下は砂層あるいはシルト層となっており、遺物等は出土しなかった。T5では旧耕作土はみられず、造成土の下は砂礫層とシルト層が続いており、遺物等は確認できなかった。

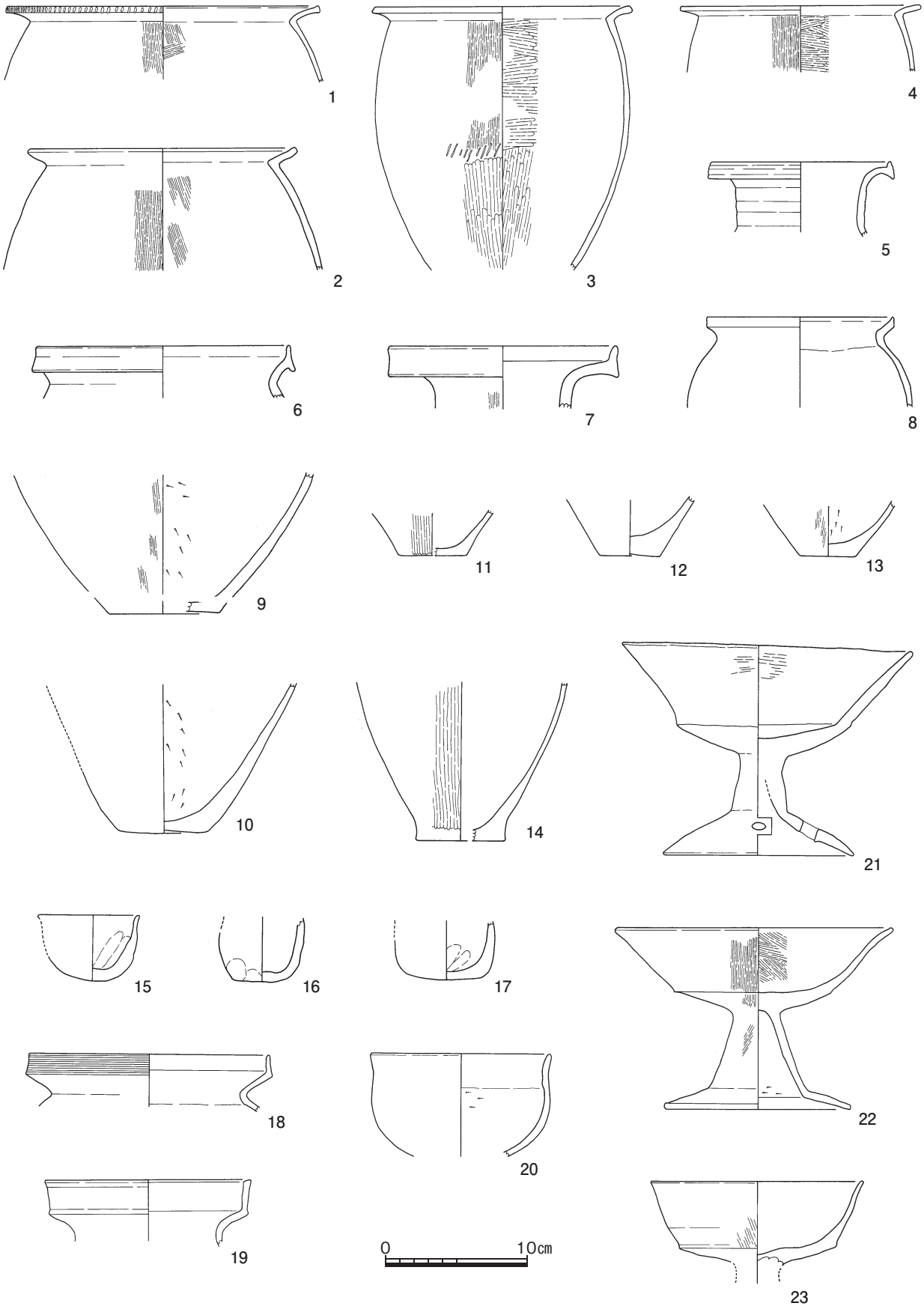
各トレンチの状況から、この付近一帯は以前大規模な造成が行われたようであるが、それまでは湿地の状況を呈していたと思われ、遺跡の存在は確認できなかった。

第４節　出土遺物

18次にわたる範囲確認調査で出土した遺物は整理用コンテナ20箱程度と少なく、その多くは包含層出土の遺物で小片のものが多い。したがって、遺構から出土した土器等を含め図化できたものは少ないが、以下で簡単に説明を加えたい。

弥生土器（第53図1～14）

1～**4**は、「く」の字形に屈曲する口縁部をもつ甕で、いずれも頸部内面に明瞭な稜線を有する。わずかに口縁端部を上方へ肥厚させるもの（**1**・**2**）と器壁の厚みが均一なもの（**3**・**4**）がある。**1**は肥厚させた口縁端部に、**3**は胴部中程に、それぞれ板状工具による刻み目を施している。外面の調整は細かいハケメが見られるが、**3**では胴下半部にヘラミガキを施している。内面の調整は、細かいハケメ



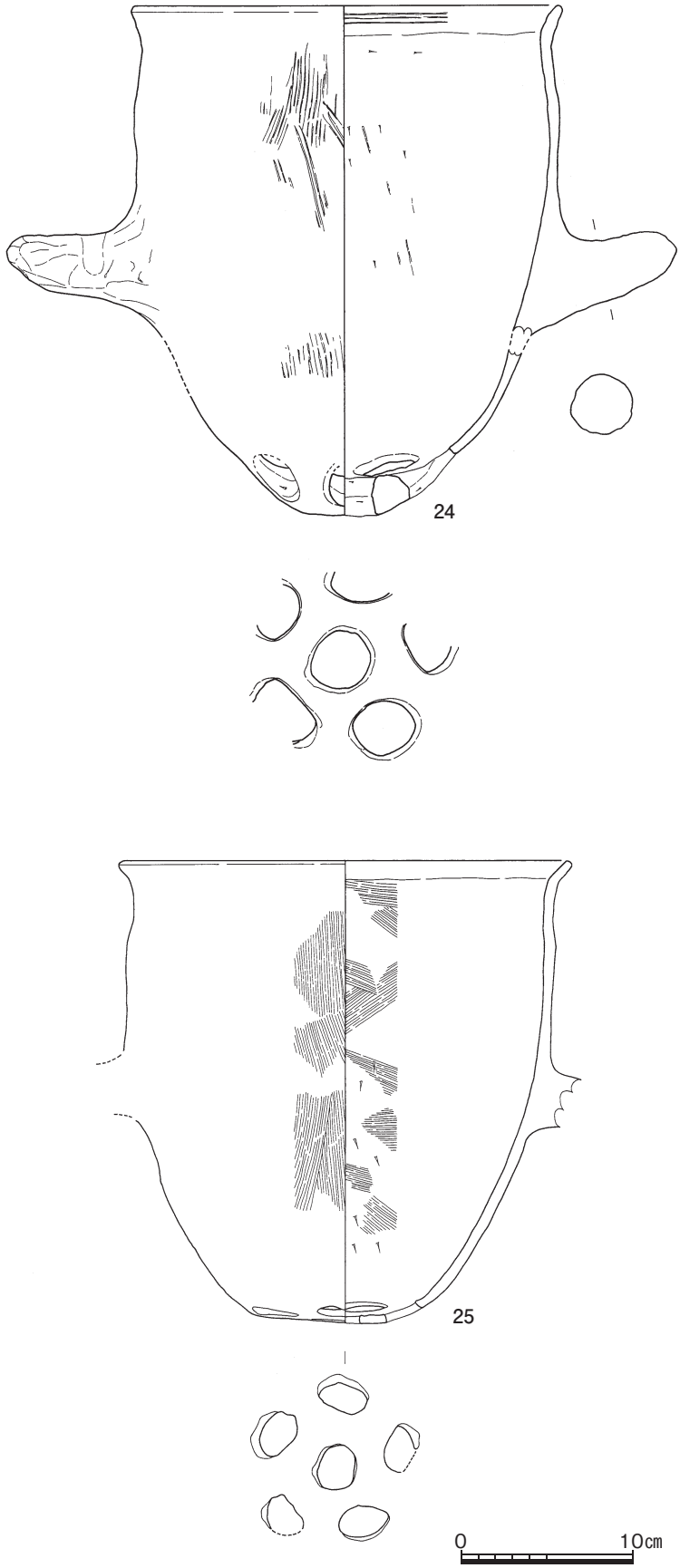
第53図　出土遺物１（Ｓ＝1/4）

のものとヘラミガキのものが見られる。なお、**3**と**14**は2T1（第2次調査のトレンチ1を意味する。以下も同じ。）の貝層から出土したもので、胎土や色調、調整などが酷似しており、同一個体の可能性が高い。**5**は、上下に肥厚させた口縁端部に3条の細い凹線をもち、頸部にはやや幅広の浅い凹線が4条巡る。器表面が荒れているものの、頸部外面にはハケメの痕跡がわずかに残っている。**6**は、上下に大きく拡張した口縁端部に浅い線が巡り、外面にはハケメの痕跡が残る。**7**は、口縁端部をほぼ垂直方向へ大きく肥厚させるが、凹線は見られない。**8**は、口縁端部をわずかに上方へつまみ上げ、幅の狭い端面を作っている。頸部内面以下にはヘラケズリの痕跡が認められる。これらの土器の特徴から、**1**～**4**は弥生時代中期中葉、**5**は中期末葉、**6**～**8**は後期後葉の時期に収まると思われる。

土師器1（第53図15～23、第54図24・25）

15～**17**は、4C6（第4次調査のカット6を意味する。以下も同じ。）の土坑から出土した手づくね土器である。**15**は丸底で、口縁端部はやや外反気味に薄く仕上げている。**16**・**17**は平底からほぼ垂直に立ち上がる胴部を有し、**16**の外面には赤色顔料の痕跡が見られる。**15**・**17**の内面には指による掻き取り跡が認められる。**18**は手づくね土器と同じ遺構から出土した甕で、上方に大きく立ち上がる口縁端部の外面には、櫛状工具によるナデの跡が明瞭に残る。**19**は、ほぼ垂直に立ち上がる二重口縁を有し、その上端部は平坦に仕上げ、浅く細い凹線を1条巡らす。内外面とも強いヨコナデにより仕上げている。**20**は、球状の胴部にわずかに外反する口縁部をもつ鉢で、底部を欠いているものの丸底になると思われる。内面の頸部以下にはヘラケズリを行っている。**21**は4C6から出土した高杯で、ほぼ完形に復元できた。明瞭な段をもって開く深めの杯部と短めの脚柱部を有し、脚部には径1.2㎝程度の穿孔が4か所見られる。摩滅により器面の調整は明らかではないが、杯部の内外面については横位の粗いハケメがわずかに確認できる。**22**は16T3の竪穴住居から出土した高杯で、杯の一部を欠く以外は完形である。杯部は段をもって大きく開き、その先端は丸く収める。脚柱部下端から大きく屈曲して脚部に至り、その先端には幅の狭い端面を作る。脚部に穿孔は認められない。杯外面にはタテ方向の、内面には不定方向のハケメが見られ、脚部内面と脚柱部外面にもハケメの跡がわずかに残る。**23**は16T2の竪穴住居から出土した高杯の杯部である。段をもって立ち上がる口縁部はあまり開かず、深めの杯部を形成している。器面の摩滅により調整は明らかではないが、外面の一部にハケメの痕跡を認めることができる。**24**・**25**は甑で、口径・器高ともほぼ同程度の大きさをもつが、底部の形が**24**はやや尖り気味の丸底であるのに対し、**25**は径10㎝程度の平底となっている。**24**は浅黄橙色の明るい色調を呈しており、胴部上半の一部に赤色顔料の痕跡が残っている。外面と口縁部内面には粗いハケメを施し、頸部以下の内面はヘラケズリ後ナデにより仕上げている。胴中央部の把手は長さ7㎝程度で、指押さえによる成形の跡が顕著に残る。底部の円孔は6個あり、中央の1か所を囲むように5個配置している。円孔部分の器壁は厚く作られており、最大で約2㎝の厚みを有する。**25**は、内外面とも浅黄色を呈するが、口縁端部に**24**と似た赤色顔料が付着している部分がある。把手は2か所とも根元とから欠いているが、残存部分から**24**よりはやや細身のものになるようである。底部の円孔は6ヵ所でその配置は**24**と同様であるが、大きさはやや小さめである。調整は、外面は細かいハケメで、内面は頸部以下にヘラケズリ後ハケメである。

これらの土師器については古墳時代に属すると思われるが、その特徴や伴出関係から、**15**～**18**・

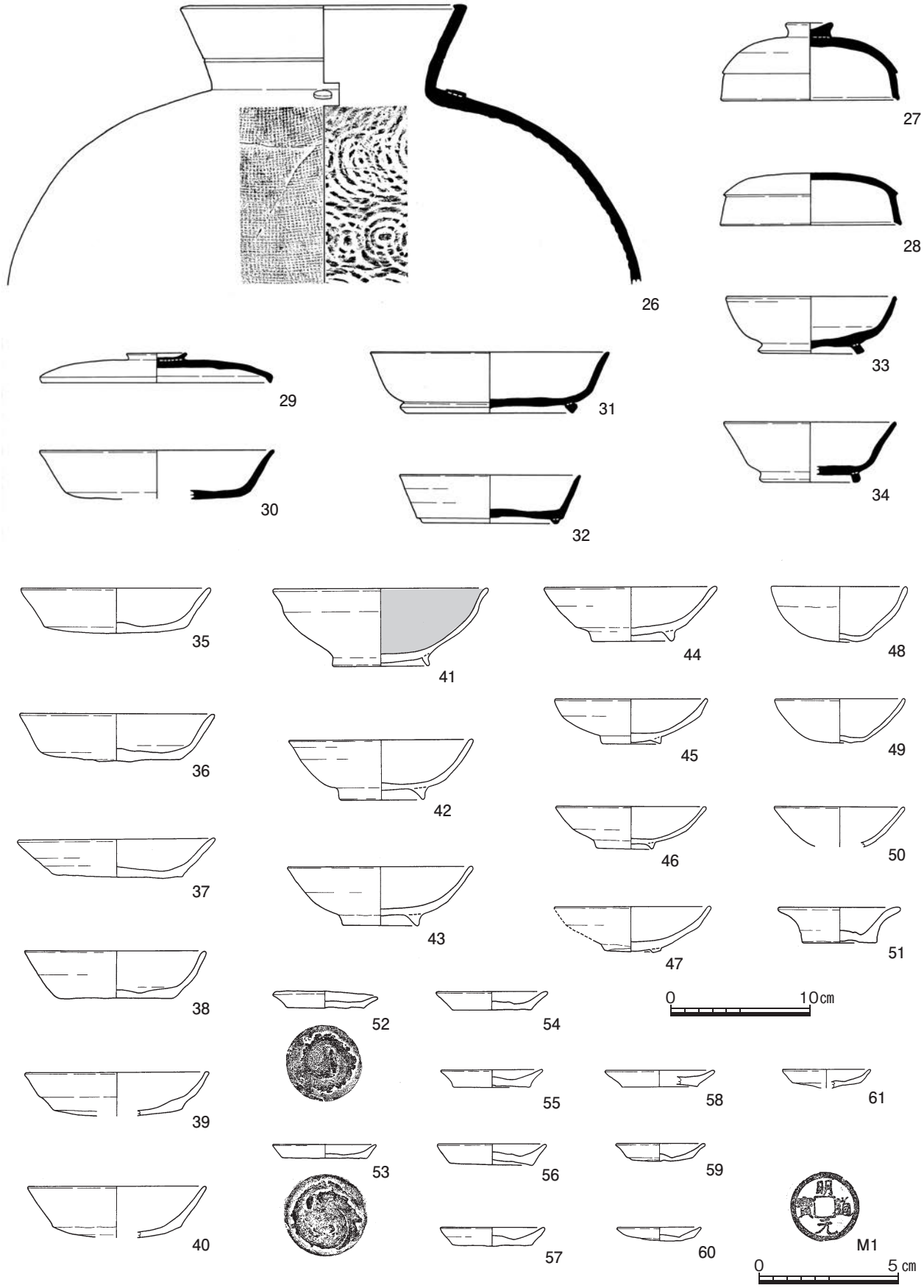


第54図　出土遺物２（Ｓ＝1/4）

21は古墳時代初頭、**19**・**22**は古墳時代前期、**20**・**23**～**25**は古墳時代中期の時期がそれぞれ考えられる。

須恵器（第55図26～34）

26は、口径約20㎝、胴部最大径45㎝以上を測る大型の甕である。口縁部は、胴部から「く」の字形に屈曲して直線的に立ち上がり、その端を少し内側につまみ出すことで、幅約1㎝の水平な平坦面を作っている。口縁部の中程やや下寄りに1条の沈線が巡り、屈曲部近くには直径1.3㎝、高さ4㎜程度の円形浮文が付く。外面には目の細かい格子目タタキ、内面には円形の当て具跡が明瞭に残っている。**27**は高杯の蓋で、口径12.7㎝を測る。天井部と口縁部の境には断面三角形状の段を有し、貼り付けのつまみは中央部を少し凹ませている。天井部外面にはヘラケズリを行い、その他はすべてヨコナデにより仕上げている。**28**・**29**は杯蓋である。**28**は、平坦な天井部とわずかに外に開く口縁部を有し、天井部と口縁部の境には**27**と同様明瞭な段を形成している。調整も天井部外面にはヘラケズリを行い、その他はヨコナデにより仕上げている。**29**は、平らな天井部からあまり屈曲せずに口縁部に至り、その先端を下方向へ少し肥厚させている。口径16.4㎝に対し器高2.1㎝と、かなり扁平である。同じく扁平なつまみは内側が凹まされて、浅い皿状の形体となっている。**30**～**34**は杯で、**31**～**34**には断面方形の高台が付く。杯部の立ち上がりは、ほぼ直線的なもの（**32**）やわずかに外反



第55図　出土遺物３（Ｓ＝1/4・1/2）

するもの（**30**・**31**・**34**）、緩やかに内傾するもの（**33**）などがある。

これらの須恵器の時期について、**26**～**28**については古墳時代中期後半から後期初頭、**29**～**34**についてはおおむね奈良時代から平安時代初頭に収まる時期がそれぞれ考えられる。

土師器2（第55図35～61）

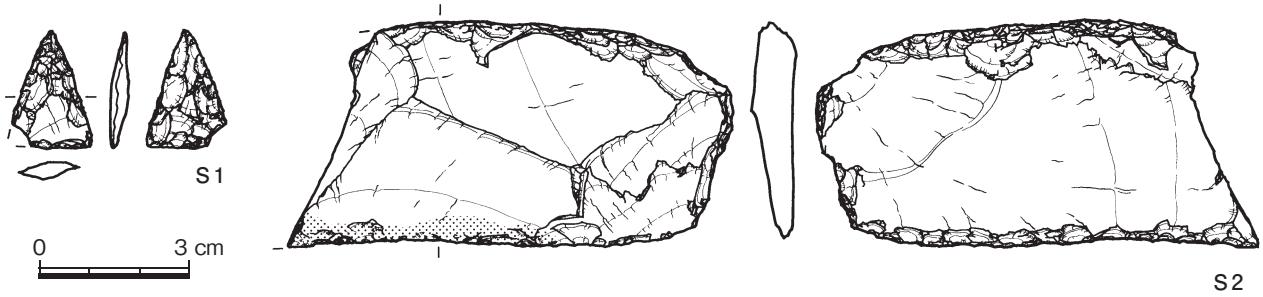
35～**40**は杯で、口径はおおむね13～14㎝のものが多い。このうち**35**・**38**・**42**・**43**・はそれぞれ1T24の同一土坑から出土しているようであるが、遺構の詳細については不明である。**40**を除いて器表面の摩滅が激しく細かな調整は不明であるが、**38**・**39**の底部にはヘラ切りの痕跡が認められる。器形は、底部から直線的に立ち上がるもの（**36**・**37**・**40**）やや内湾するもの（**38**・**39**）、緩やかに外反するもの（**35**）などがある。**41**～**47**は高台付きの椀である。**41**は内面黒色土器で、復元口径15.6㎝、器高7.0㎝を測る。内面はナデにより仕上げており、ヘラミガキの痕跡は認められない。外面もナデ仕上げで、丹塗りが確認できる。**42**～**44**は、杯の形状に似た浅めの椀に断面三角形の高台が付くもので、調整は内外面ともナデ仕上げのようである。**45**～**47**は口径11㎝前後の小型の椀で、高台径は小さく高さも低い。調整は、内外面ともナデにより仕上げている。**48**・**49**は高台の付かない椀で、底部外面の指頭圧により内面に浅いヘソ状の隆起がみられる。**50**は底部を欠いているが、無高台の椀と思われる。**51**は皿で、一般的な小皿に比べ外反する立ち上がりが大きく、器高は5.4㎝を測る。底部内面には、細い粘土紐を巻いた部分がヘソ状の隆起として残っており、外面にはヘラ切り痕が認められる。**52**～**61**は小皿で、口径7.4～8.0㎝に収まる一群（**52**～**58**）と6㎝台の一群（**59**～**61**）に分けることができる。前者は灰白色あるいは浅黄色の明るい色を呈し、焼成は良好であるが器表面が摩滅しているものが多い。底部はどれもヘラ切り未調整である。後者はにぶい橙色を呈し、全体的に作りが粗雑である。

これら土師器の時期については、**35**～**44**・**51**を平安時代後期から鎌倉時代初頭、**45**～**50**を13世紀末～14世紀初め頃としておきたい。小皿については時期の特定が難しいが、**52**～**58**についてはおおむね12世紀後半から13世紀前半、**59**～**61**については14世紀台の時期をそれぞれ考えておきたい。

その他の遺物（第55図M1、第56図S1・S2）

M1は17T4の中世包含層から出土した「明道元寳」で、径2.5㎝を測る。1032年初鋳の北宋銭で、文字面の錆は少なく、銭名は明瞭に確認できる。

S1は9T12から出土したサヌカイト製の平基鏃で、長さ2.32㎝、残存幅1.56㎝、厚さ0.35㎝、重量0.9gを測る。**S2**は10T6から出土したサヌカイト製の打製石包丁で、長さ4.44㎝、残存幅8.69㎝、

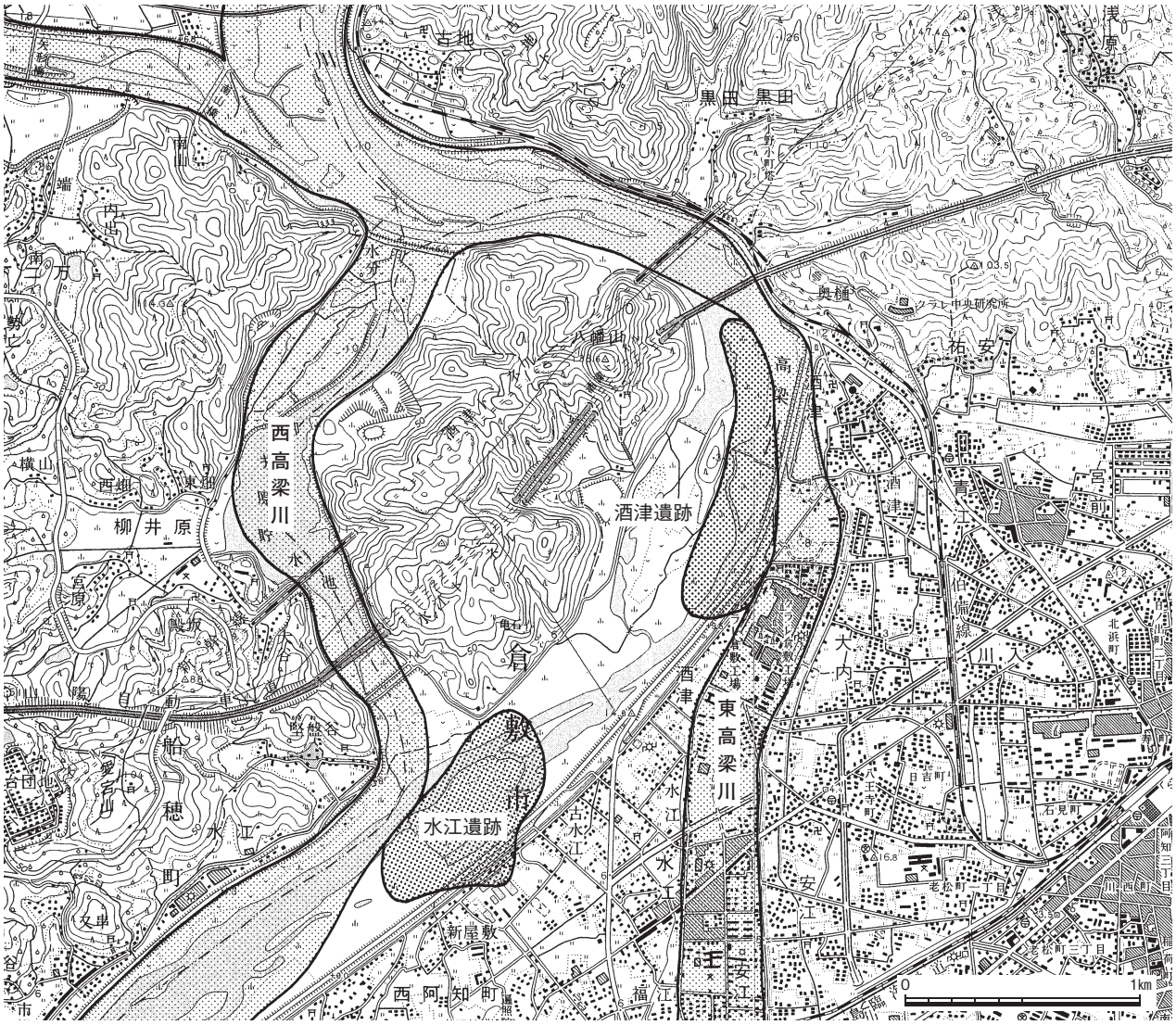


第56図　出土遺物４（Ｓ＝2/3）

厚さ0.81㎝、重量39.8gを測る。残っている抉りはやや浅く、背部は丹念なつぶし加工が行われている。刃部はやや内反しており、使用に伴う摩耗痕が認められる。

第５節　まとめ

酒津－水江遺跡範囲確認調査は、毎年高梁川が増水するたびに損壊を受けていた遺跡の保存対策のため、その基礎資料となる範囲・性格等を明らかにすることを目的として、昭和53年度から開始された。特に年限を設けず行われた調査は、厚く堆積する砂礫層や湧水などにしばしば阻まれながら、結果として平成7年度までの18年間にわたり実施された。最終的に調査対象となった面積は、酒津八幡山の東側から南側にかけての河川敷約80万㎡で、調査を行った地点は265を数える。確認調査は基本的に小規模なトレンチによるものであったため、遺跡の詳細な内容までは明らかにすることはできなかった。しかしながら、その範囲については、北側の酒津地区を中心とする部分と南側の水江地区を中心とする部分に分かれることがほぼ確実となり、現在ではそれぞれ酒津遺跡、水江遺跡として周知や保護を図るなどの成果につながっている。そこで、調査終了後20余年の時が過ぎてはいる



第57図　遺跡の立地とその範囲

ものの、18年間にわたる範囲確認調査によって明らかになった点を整理し、両遺跡の概要としてまとめることで結びとしたい。

遺跡の範囲

酒津遺跡の範囲としては、第57図に示すように、笠井堰北の中洲を北端とし、西は妙見山の東裾、東は酒津貯水池のすぐ西を通って南へ広がり、笠井堰から約550ｍあたりを南端とする地域が考えられる。笠井堰北の中洲部分については、遺物包含層が確認された1Ｔ1および1Ｔ2以外のトレンチでは湧水のため掘り下げが十分ではないが、周辺地形やボーリングステッキの調査により、他のトレンチにおいても同様の包含層が存在する可能性が強いとされており、現段階では遺跡の範囲に含めるのが妥当と考える。遺跡の南東隅については、第2次調査の北端部分において、堤防寄りの広い範囲で弥生時代の貝層を含め遺物包含層が確認されており、現在の堤防下まで延びている可能性が強い。妙見山と酒津八幡山との間を含め、このあたりから南へ約500ｍまでの河川敷西半部分については確認調査を行っていないが、このあたりは元来遺物の散布が非常に少なく、現在細い流路がいくつかある部分である。また、土砂採取に伴う工事においても遺物包含層と思われる有機土層がこの付近では確認されていないことから、地形的に見て東高梁川の支流がかつて妙見山の西側を流れていた可能性が高く、この部分に遺跡が成立する微高地は存在しないものと思われる。

水江遺跡については、第57図に示したとおり、酒津八幡山の南端付近をその北限とし、そこから南へ約900ｍまでの河川敷がその範囲として想定できる。遺跡の北端とする部分については、遺物包含層が確認されたトレンチはごく小範囲にとどまり、河川敷南半を中心とするトレンチ群とは立地がやや異なるため、酒津八幡山南端山裾に存在する別の小規模な遺跡と考えることも可能である。しかしながら、水江遺跡と同様、この遺跡が弥生時代から中世にいたる長期間にわたって営まれていることや、直線距離にして200ｍあまりしか離れていないことなどから、現段階では水江遺跡の一部として考えている。遺跡の大部分は河川敷内に位置するが、かつて南部水道企業団の濾過池工事の際に多くの酒津式土器が出土し、新屋敷遺跡として報告された部分については水江遺跡と一体のものと考え、現在の堤防を越えやや南へ張り出す遺跡の範囲を想定している。ただし、平成7年度に実施した同企業団の浄化施設整備工事に伴う確認調査(6)では、遺物・遺構等は検出されておらず、南への張り出しはそれほど大きくならないと思われる。

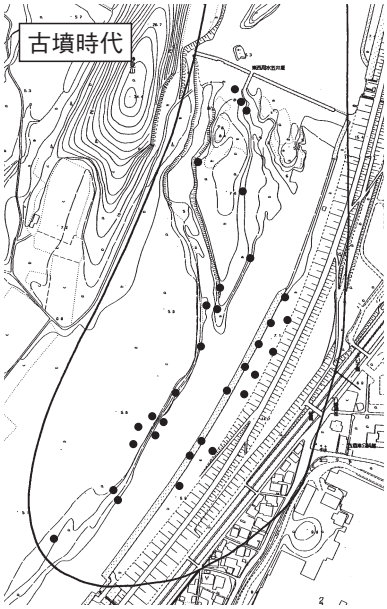
遺跡の変遷

高梁川の河川敷で採集されていた土器には、弥生時代から中世にいたる各時代の土器が含まれており、酒津－水江遺跡は長期間にわたって存続した遺跡であるとの認識が調査前からあったが、当該調査の結果、二つに分けることが可能となったそれぞれの遺跡においても、各時代の遺物包含層が確認されることとなった。ここでは、包含層が検出された地点を、それに含まれる土器の時代ごとに整理し比較することで（第58図･第59図･表1）、遺跡の範囲やその変遷状況について概観してみたい。なお、土層図のない第1次調査の遺物については、包含層出土遺物かどうかの判断できないため、比較的遺物量が多いもののみを包含層出土遺物とした。また、1Ｔ1および1Ｔ2出土遺物については現在確認できないため、遺跡の北半部分については分布図に示す範囲から除外している。

まず、酒津遺跡について分布を見てみると、弥生時代の土器が確認されている地点は27か所で、

その分布は笠井堰下流の中洲から細い流路を挟んで南側の堤防付近までに集中しているのがわかる。これまでの調査で確認された最も古い時期の土器は弥生時代中期中葉のもので、それらの多くは2T1～2T3を中心とする堤防付近の地点から出土している。また、2T1からはこの時期の貝塚も検出されていることから、まず中期中葉頃にこの付近を中心として人々の生活の営みが始まり、弥生後期にかけて北側の中洲へとその居住区を拡げていったことが想定される。

次の古墳時代には、弥生時代の区域をほぼ含みさらに下流方向へとその範囲を拡げ、5T1が酒津遺跡の中では最も南に位置する地点となる。笠井堰下流の中洲に位置する16T2と16T3では、古墳時代中期と前期の竪穴住居がそれぞれ確認されており、居住区域と



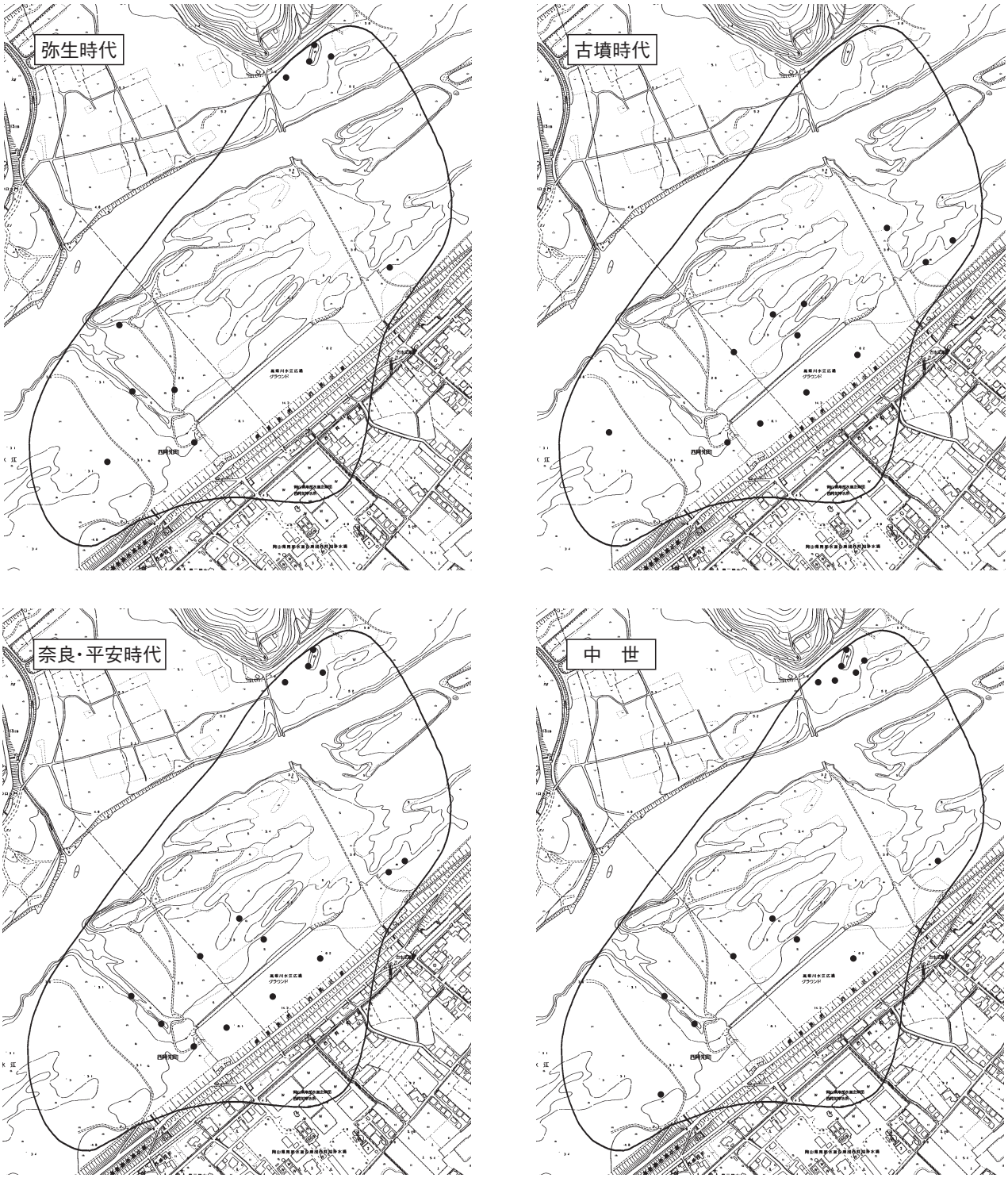
第58図　酒津遺跡時代別出土地点分布図

	弥生時代	古墳時代	奈良・平安時代	中世
酒津遺跡	1T21 1T25 1C2 1C3 1C6 1C7 1C9 1C11 1C14 2T1 2T2 2T3 2T7 2C2 2c3 2C4 2C5 2C6 2C8 3T9 3T12 3C2 4C6 16T2 17T1 17T4 17T5	1T21 1C2 1C3 1C6 1C7 1C11 2T1 2T2 2T3 2T4 2T5 2T7 2T8 2T9 2C4 2C5 2C6 2C9 2C10 3T2 3C1 3C2 4T1 4T2 4T3 4T11 4C1 4C6 5T1 16T1 16T2 16T3	1T24 2T7 2T10 2C1 2C2 2C3 4T3 4T16 4C6	1T24 1T26 2T3 2T6 2T9 2C1 2C2 2C3 2C7 2C8 2C9 2C11 3T2 3T5 3T12 3C1 4T1 4T3 4T16 4T17 17T1 17T4 17T5 17T8
	27 地点	32 地点	9 地点	24 地点
水江遺跡	9T3 9T7 9T12 10T2 10T6 12T1 12T2 12T11 13T9 15T9	8T1 8T3 9T1 9T2 9T3 9T4 9T5 9T6 10T5 11T2 11T3 11T4	8T1 9T1 9T2 9T3 9T4 9T5 9T6 10T1 10T2 12T1 12T2 12T11 13T1 15T8 15T9	8T1 9T4 9T5 9T6 10T1 10T2 10T7 12T1 12T2 12T11 13T1 13T2 13T9 15T8
	10 地点	12 地点	15 地点	14 地点

表１　時代別出土地点一覧表

して安定したものになっていたと思われる。

奈良・平安時代になると、その分布は遺跡の南端部分を中心に8か所と、笠井堰のすぐ下流に1か所（1T24）の、計9地点のみとなり、弥生時代から古墳時代へと遺跡の範囲を拡大してきた状況がこの時期に一変することになる。土器による時代認定の誤差を差し引いても、この差はある程度そうした実態を示していると思われ、その理由としては高梁川の河川氾濫により人々の居住に適さない状態



第59図　水江遺跡時代別出土地点分布図

が長期間続いたなどの可能性が考えられる。

続く中世になると、笠井堰下流の中洲ではやや希薄ではあるものの、妙見山のすぐ南にもある程度の分布が認められるなど、出土地点数としては少ないがその範囲としてはむしろ弥生・古墳時代よりも拡がっているように思われる。したがって、遺跡の範囲という視点で見るならば、酒津遺跡については中世の頃が最も遺跡の規模を拡大していた時期と言えるであろう。

次に水江遺跡の分布状況について見てみると、まず弥生時代については、遺跡の西半と北端付近にある程度のまとまりが確認できるが、中央部にはほとんど認められない。これらの地点で確認できた最も古い土器は、酒津遺跡と同様弥生時代中期中葉の土器で、少量ではあるが12T1から出土している。したがって、遺跡の成立時期は酒津遺跡と同じ頃と考えられるが、弥生土器の出土量は全体的に概して少なく、分布状況から見てもこの時代はまだそれほど安定した居住区域ではなかったと考えられる。

続く古墳時代では、遺跡の中央部と東端の堤防付近に分布が広がってくる一方、分布が集中していた北端部分では全く確認できなくなる。この部分については、続く奈良・平安時代から中世にかけて再びまとまった分布が認められることから、この時期のみ生活に適さない状況となっていた可能性が高いが、河川氾濫の影響を受けにくい地点であり、その理由については明らかでない。

奈良・平安時代および中世については、先に記したように北端部分に再び分布が見られるようになるが、それ以外の部分については多少濃密の差はあるものの、全体的には古墳時代の分布範囲と大きな違いは認められない。したがって、水江遺跡については、古墳時代以降中世に至るまで、居住区域として比較的安定した状態を保っていたことが想定される。また、遺跡の中央部付近については、古墳時代以降、分布のまとまりが引き続いて認められることから、新屋敷遺跡として報告された堤防外のエリアを含め、水江遺跡の中心的区域と考えられそうである。

以上、遺物包含層が確認された地点を時代別に整理し、その分布状況から酒津遺跡と水江遺跡の規模あるいは範囲の変遷について概観したが、小規模調査による資料の限界もあり、現段階では大まかな傾向として提示しておきたい。

註

（1）間壁葭子「倉敷市酒津－水江遺跡」『倉敷考古館研究集報 第8号』 倉敷考古館 1973
（2）間壁忠彦「倉敷市酒津及新屋敷遺跡出土の土器」『瀬戸内考古学第2号』 1958
（3）『倉敷市文化財分布図』 倉敷市教育委員会 1975
（4）『倉敷市遺跡地図（倉敷・庄地区）』 倉敷市教育委員会 2005
（5）『倉敷市埋蔵文化財調査年報2 -1992年度-』 倉敷市教育委員会 1993
『倉敷埋蔵文化財センター年報1 -1993年度-』 倉敷市教育委員会 1994
『倉敷埋蔵文化財センター年報2 -1994年度-』 倉敷市教育委員会 1995
『倉敷埋蔵文化財センター年報3 -1995年度-』 倉敷市教育委員会 1996
（6）『倉敷埋蔵文化財センター年報3 -1995年度-』 倉敷市教育委員会 1996

出土遺物観察表

番号	調査年次	トレンチ等	種　別	器　種	法　量（cm）			色　調	胎　土	特　徴
					口 径	(底・高台・脚) 径	器 高			
1	2次	T1	弥生土器	甕	(22.2)	－	－	灰白色 5Y7/1	0.5㎜砂粒	
2	16次	T2・13層	弥生土器	甕	(19.0)	－	－	灰黄褐色 10YR5/2	0.5㎜砂粒	
3	2次	T1	弥生土器	甕	(18.4)	－	－	灰赤色 2.5YR4/2	0.5㎜砂粒	
4	2次	T1	弥生土器	甕	(17.0)	－	－	灰白色 2.5Y8/1	0.5 ㎜砂粒	
5	17次	T1・9層	弥生土器	壺	(12.6)	－	－	灰白色 2.5Y8/3	1㎜砂粒	口縁部
6	16次	T2・Pit2	弥生土器	壺	(18.0)	－	－	浅黄色 2.5Y7/4	0.5㎜砂粒	口縁部
7	16次	T2・Pit2	弥生土器	壺	(16.2)	－	－	にぶい橙色 5YR7/4	0.5㎜砂粒	口縁部
8	4次	C6・土坑？	弥生土器	甕	(13.2)	－	－	にぶい黄色 2.5Y6/3	1㎜砂粒	
9	16次	T2・溝埋土	弥生土器	底部	－	(8.0)	－	浅黄色 2.5Y7/3	2㎜砂粒	底部　外面黒斑
10	16次	T2・Pit3	弥生土器	底部	－	6.2	－	にぶい赤褐色 5YR5/3	1㎜砂粒	底部
11	17次	T1・住居柱穴	弥生土器	底部	－	(4.8)	－	褐灰色 10YR4/1	0.5㎜砂粒	底部
12	1次	C11	弥生土器	甕	－	4.4	－	灰褐色 7.5YR5/2	0.5㎜砂粒	底部
13	16次	T2・溝埋土	弥生土器	底部	－	(4.0)	－	にぶい黄橙色 10YR7/3	0.5㎜砂粒	底部
14	2次	T1	弥生土器	底部	－	(6.4)	－	にぶい橙色 5YR6/4	0.5㎜砂粒	底部
15	4次	C6・土坑？	土師器	手づくね土器	－	－	4.6	にぶい黄橙色 10YR7/2	1㎜砂粒	
16	4次	C6・土坑？	土師器	手づくね土器	－	4.1	－	灰白色 10YR8/2	1㎜砂粒	赤色顔料
17	4次	C6・土坑？	土師器	手づくね土器	－	5.5	－	にぶい黄橙色 10YR7/2	0.5㎜砂粒	
18	4次	C6・土坑？	土師器	甕	(17.0)	－	－	にぶい黄橙色 10YR7/3	0.5㎜砂粒	口縁部
19	16次	T3・住居埋土	土師器	壺	(14.6)	－	－	にぶい黄橙色 10YR7/2	0.5㎜砂粒	口縁部
20	4次	T11	土師器	鉢	(12.8)	－	－	にぶい橙色 7.5YR7/3	1㎜砂粒	
21	4次	C6・土坑？	土師器	高杯	20.5	13.6	15.0	にぶい橙色 5YR7/4	0.5㎜砂粒	
22	16次	T3・住居埋土	土師器	高杯	19.6	13.1	12.9	明褐灰色土 7.5YR7/2	1㎜砂粒	
23	16次	T2・住居床面	土師器	高杯	15.1	－	－	にぶい黄橙色 7.5YR6/4	0.5㎜砂粒	
24	4次	T11・7層	土師器	甑	23.3	－	29.8	浅黄橙色 7.5YR8/6	1㎜砂粒	赤色顔料
25	16次	T2・住居床面	土師器	甑	26.6	－	27.0	浅黄色 2.5Y7/3	2㎜砂粒	赤色顔料
26	13次	T3・6層	須恵器	甕	(20.4)	－	－	紫灰色 5P6/1	1.5㎜砂粒	
27	1次	C5	須恵器	高杯蓋	(12.7)	－	5.6	灰色 N6/	0.5㎜砂粒	
28	4次	T2	須恵器	杯蓋	(13.0)	－	3.9	灰色 N6/	1㎜砂粒	
29	12次	T1・5層	須恵器	杯蓋	(16.4)	－	2.1	灰色 7.5Y6/1	1㎜砂粒	
30	12次	T1・5層	須恵器	杯	(16.8)	(13.4)	(3.5)	灰色 5Y4/1	1㎜砂粒	
31	4次	C6	須恵器	杯	17.2	12.5	4.4	灰色 N6/	1㎜砂粒	
32	4次	T3	須恵器	杯	(13.0)	(9.8)	3.5	灰白色 N7/1	0.5㎜砂粒	
33	12次	T1・6層	須恵器	杯	(12.4)	(7.8)	4.2	灰色 N7/	0.5㎜砂粒	
34	12次	T1・6層	須恵器	杯	(12.4)	(7.2)	4.4	暗灰色 N3/	0.5㎜砂粒	
35	1次	T24・土坑？	土師器	杯	(13.6)	(10.4)	3.3	灰白色 10YR8/2	0.5㎜砂粒	
36	1次	T24	土師器	杯	14.1	10.1	3.5	浅黄色 2.5Y7/4	1㎜砂粒	完形
37	1次	T24	土師器	杯	14.4	9.4	2.9	灰白色 10YR8/2	0.5㎜砂粒	
38	1次	T24・土坑？	土師器	杯	13.1	8.3	3.4	灰白色 10YR8/2	0.5㎜砂粒	底部ヘラ切り
39	1次	T24	土師器	杯	(13.2)	(9.4)	－	灰白色 10YR8/2	1㎜砂粒	底部ヘラ切り
40	12次	T2・4層	土師器	杯	(12.8)	(9.4)	－	灰白色 2.5Y8/2	0.5㎜砂粒	
41	10次	T7・2層	土師器	高台付椀	(15.6)	(7.0)	5.7	にぶい橙色 5YR6/3	0.5㎜砂粒	内面黒色土器・丹塗り
42	1次	T24・土坑？	土師器	高台付椀	13.2	6.2	4.4	灰白色 10YR8/2	0.5㎜砂粒	完形

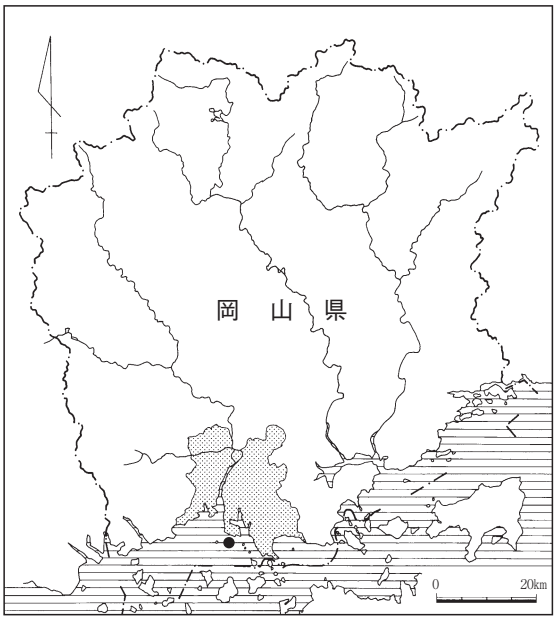
（　）は復元値

番号	調査年次	トレンチ等	種　別	器　種	法　量（cm）			色　調	胎　土	特　徴
					口 径	(底・高台・脚) 径	器 高			
43	1次	T24・土坑？	土師器	高台付椀	(13.2)	5.4	4.3	にぶい橙色 7.5YR7/4	0.5㎜砂粒	
44	1次	C2	土師器	高台付椀	12.5	5.8	4.0	浅黄橙色 10YR8/3	1㎜砂粒	
45	10次	T7・2層	土師器	高台付椀	(11.0)	(4.4)	3.3	灰白色 10YR8/2	1㎜砂粒	
46	12次	T1・5層	土師器	高台付椀	10.8	4.0	3.1	灰白色 2.5Y8/2	1㎜砂粒	
47	10次	T7・2層	土師器	高台付椀	(12.3)	4.0	3.3	灰白色 10YR8/2	0.5㎜砂粒	
48	10次	T7・Pit7	土師器	椀	9.8	－	4.0	淡黄色 2.5Y8/3	1㎜砂粒	
49	10次	T7・2層	土師器	椀	9.4	3.7	3.2	にぶい橙色 7.5YR7/3	0.5㎜砂粒	
50	10次	T7・2層	土師器	椀	(9.4)	－	－	にぶい黄橙色 10YR7/3	0.5㎜砂粒	
51	12次	T2・4層	土師器	皿	(8.8)	(5.4)	2.6	浅黄色 2.5Y7/3	0.5㎜砂粒	底部ヘラ切り
52	1次	T24・土坑？	土師器	小皿	7.6	5.6	1.2	浅黄色 2.5Y7/4	0.5㎜砂粒	完形 底部ヘラ切り
53	1次	T24	土師器	小皿	7.5	6.0	1.0	浅黄色 2.5Y7/4	0.5㎜砂粒	完形 底部ヘラ切り
54	12次	T2・5層	土師器	小皿	(8.0)	(5.8)	1.4	にぶい黄橙色 10YR7/2	1㎜砂粒	底部ヘラ切り
55	1次	T24・土坑？	土師器	小皿	(7.4)	(5.6)	1.3	灰白色 10YR8/2	0.5㎜砂粒	底部ヘラ切り
56	17次	T1・中世土坑	土師器	小皿	7.9	6.0	1.5	灰白色 10YR8/2	0.5㎜砂粒	底部ヘラ切り
57	17次	T1・中世包含層	土師器	小皿	(7.6)	(5.8)	1.4	にぶい黄橙色 10YR7/3	0.5㎜砂粒	底部ヘラ切り
58	1次	T24・土坑？	土師器	小皿	(8.0)	(5.4)	1.2	灰白色 10YR8/2	0.5㎜砂粒	底部ヘラ切り
59	10次	T7・2層	土師器	小皿	6.5	4.3	1.3	にぶい橙色 7.5YR6/4	微砂粒	底部ヘラ切り
60	10次	T7・2層	土師器	小皿	6.1	5.0	1.1	にぶい橙色 7.5YR6/4	微砂粒	底部ヘラ切り
61	17次	T1・中世包含層	土師器	小皿	(6.4)	－	－	にぶい橙色 5YR6/4	0.5㎜砂粒	底部ヘラ切り

（　）は復元値

第２章　上水島遺跡範囲確認調査

第１節　位置と環境



第60図　遺跡の位置

上水島遺跡は倉敷市下津井字水島に所在する。遺跡が立地する上水島は水島工業地帯の南沖合に浮かぶ面積約25ヘクタールの小島である。島の地形は、標高51.2mを最高所とする丘陵地とその西側と東側に広がる平坦地（本報告では西の浜、東の浜と呼ぶ）からなる。西の浜の南西に広がる標高4m前後の平坦地の大部分は、かつてこの島にあった製錬所から排出された鉱滓を埋め立ててできた陸地であり、もともとの地形ではない。昭和50年に刊行された「倉敷市文化財分布図」では、縄文時代遺物と師楽式製塩土器が散布する単一の遺跡として周知されていた。しかし、今回の確認調査の結果、丘陵部から旧石器時代の遺物が出土し、西の浜と東の浜では縄文時代～奈良・平安時代の遺物が出土する遺跡であることが新たに判明した。そのため、これら3つの地区を上水島遺跡、上水島西の浜遺跡、上水島東の浜遺跡として平成13年刊行の「倉敷市遺跡地図（児島地区）」で周知している。

瀬戸内海の水島灘に浮かぶ上水島周辺には、倉敷市の鷲羽山遺跡、宮の鼻遺跡、下津井松島遺跡や香川県坂出市の櫃石島、与島などの塩飽諸島に残された旧石器時代の遺跡が数多く存在する。現在の瀬戸内海が形成される前の時代、これらの遺跡地は丘陵の頂部であり、その眼下には平原や湿原が広がる環境であったと推測されている。人々は狩猟具であるナイフ形石器を携え、食糧を求めて歩き、また、石器の材料として、香川県の金山、国分台に産出するサヌカイト石材を入手するために移動する生活を行っていたと考えられている。縄文時代になると、海面上昇とともに瀬戸内海が形成され、現在のような島々が誕生した。児島の沿岸部には、北から福田貝塚、広江・浜遺跡、溝落遺跡、阿津走出遺跡などの縄文時代の遺跡が営まれた。上水島西の浜遺跡においては、南・東側の眺望が丘陵で閉ざされるという地形的条件もあり、海の向こうに見えるのは倉敷市玉島地区の南岸である。ここには、縄文貝塚として有名な中津貝塚や西元浜貝塚が直線距離にして10㎞程のところに存在する。また、縄文時代に限られるが、サヌカイト以外の石器石材として当地域で利用された流紋岩が上水島西の浜遺跡で出土することも注目すべきであろう。その石材を産出するのが沙美海岸の東方台地で、周辺にある小原南遺跡や沙美東海岸遺跡と深いかかわりがあったことが想像される。

弥生時代には、児島の内陸部で中期の遺跡が営まれた。島嶼部では櫃石島にある大浦浜遺跡から前期の遺物がまとまって出土している。

古墳時代には、後期に土器製塩が盛んに営まれた。師楽式製塩土器を出土する遺跡としては、湾戸

遺跡、広江・浜遺跡、金浜遺跡、塩生遺跡、通生遺跡、大室遺跡、阿津走出遺跡、大浦浜遺跡、六口島大首遺跡などがある。

ところで、上水島の西2kmのところにある下水島では遺跡は確認されていないが、両島に付けられた水島という地名については、大宝元年（701）、役行者の弟子である義学がまじないにより海水を鹹味のない霊水に変えたことから水島と号すといった記述がある。今日では、水を補給するためにこの島に船を寄せることが古くからしばしばあったことがこの記事の背景にあると理解されているが、古代における上水島の性格を推測することのできる資料である。上水島周辺の奈良・平安時代の遺跡には、広江・浜遺跡や大浦浜遺跡がある。広江・浜遺跡では緑釉、灰釉陶器を含む土器類や土錘、飯蛸壺などが出土している。瀬戸大橋建設に伴う大浦浜遺跡の発掘調査では、奈良・平安時代の製塩に関する遺構が検出され、平安前期頃までの製塩土器が多量に出土した。漁具では土錘、釣鐘形の飯蛸壺も多くみられる。また、奈良三彩、金銅製帯金具、皇朝十二銭など祭祀に関係する遺物も出土しており、そこで行われた祭祀は製塩や漁撈といった生産にかかわる国家的規模の儀式であったと評価され

1 上水島西の浜遺跡　2 上水島遺跡　3 上水島東の浜遺跡　4 福田貝塚　5 湾戸遺跡
6 広江・浜遺跡　7 金浜遺跡　8 溝落遺跡　9 塩生遺跡　10 宮の鼻遺跡
11 通生遺跡　12 大室遺跡　13 鷲羽山遺跡　14 阿津走出遺跡　15 下津井松島遺跡
16 大浦浜遺跡　17 六口島大首遺跡　18 西元浜貝塚　19 中津貝塚　20 沙美東海岸遺跡
21 小原南遺跡

第61図　周辺の遺跡（S=1/120,000）

ている。

さて、最後に上水島の製錬所について少しふれてみる。上水島では、明治の後半から昭和初期にかけて銅の精錬が行われており、現在でもその工場施設の一部が残っている。1903年（明治36）に神戸の鈴木商店が操業し、水島製錬所と呼ばれた。鈴木商店は1915年（大正4）に玉野市日比の杉山製銅所を買収し、新たに銅・亜鉛・鉛・錫等の精錬をはじめることになり、翌年に古河合名会社へと経営が移った。第一次世界大戦の戦争景気に乗り、活況を呈していたが戦後の不況により、昭和3年3月に製錬所を閉鎖し、従業員は島を離れたということである。

今回の踏査で確認された製錬所の施設跡としてまずあげられるのが、島の中央の尾根（標高46.8m）に築かれた3本の大煙突で、20～25mの間隔で東西方向に並んでいる。中央および東の煙突は基部が残っており、鉱滓を固めた煉瓦（カラミ煉瓦）を積んで構築されている。西の煙突はほとんど残っておらず、痕跡として方形のくぼ地が確認されたに過ぎない。これらの煙突は、ふもとにあった溶鉱炉で発生した煤煙を斜面に築いた煙道を経由して天高く排出するものである。煙道は焼物の窖窯に似たトンネルのような形状で、天井部分は崩落しているものの比較的残りは良い。中央と東のものはカラミ煉瓦で築かれ、西のものは花崗岩の切石で作られている。こちらは天井の一部が残っており、アーチ形になるように石材を加工して丁寧に構築している。煙道を構築した材料と中央の低煙突が建造される前の写真（絵葉書）から、3基の高炉は西、東、中央の順に築かれたと思われる。西の煙道の最下部はアーチ状の口を開けた状態で残っているが、中央と東の煙道は斜面の途中で崩壊し、切断されたような状態で残っている。溶鉱炉などの主要な施設に関係すると思われる遺構は確認できない。西の浜の西端付近の山際には、コンクリートで囲われた溜池2基を有する煉瓦積の建物跡が確認され、その反対側の東端には山の法面に沿ってカラミ煉瓦を積み上げた重厚な外壁が全長60mくらいの長さで残っている。その他の遺構としては、西の浜と東の浜を行き来するトンネル2基。両地区に井戸1基ずつ（西の浜のものは花崗岩切石材の井戸枠をもつ）。南東の尾根上に建物跡（古河合名私立水島尋常高等小学校跡）が認められた。

第２節　調査に至る経緯と経過

１　調査に至る経緯

上水島遺跡の確認調査は、上水島に計画されたリゾート開発に伴い実施されたものである。

1987年に総合保養地域整備法（通称リゾート法）が制定され、これを契機としてリゾート開発が全国的なブームとなっていた。翌年には瀬戸大橋が開通し、開発の波は備讃瀬戸地域の離島にも及んだ。平成元年1月、倉敷市教育委員会文化課に建設会社の社員が来庁し、上水島にリゾート施設を建設する計画について開発事前協議が行われた。計画の内容は具体的なものではなく、土地利用計画の素案であったが、丘陵中心には分譲別荘地やフィールドアスレチックが計画され、西端の埋め立て地にホテル施設、マリーナ施設を配備し、西の浜の平地部はスポーツ施設、東の浜にはビーチ施設の建設計画を示していた。上水島遺跡の保護に配慮しつつも大規模な造成を行う予定であるため、上水島全島を対象に遺跡の範囲確認調査を実施することとなった。

２　調査の経過

調査は、平成元年10月２日から同年12月１日にかけて実施した。現場へは毎日渡船で通い、西の浜の海岸を発着地とした。調査を始めるにあたり、まず水平位置と標高を把握する作業を行った。島の東寄りに位置する標高51.2ｍの三角点を原点と決め、磁北を基準にしてグリッドを組んだ。確認調査の方法については､2ｍ×2ｍのトレンチを設定して遺構の検出と土層観察を行った。発掘作業は、基本的に人力で行い、適宜重機も使用した。トレンチの配置は、島の丘陵尾根に28か所、西の浜に24か所、東の浜に5か所の計57か所で、調査面積は228㎡である。はじめに島の南東端にトレンチ1を設定し、尾根上を北東方向に移動しながら調査を進めた。調査が始まって間もなく浅い層からサヌカイト剥片が出土することが判明し、ナイフ形石器、石核、細石刃核なども加わると旧石器時代の包含地であることがはっきりと認識された。丘陵上の調査が終わってみると、28か所のうち遺物が出土しなかったトレンチがわずか6か所で、丘陵尾根の広い範囲に遺跡が分布していることが確かめられた。

丘陵部の調査を終えて、西の浜の北から南に向かって調査を進めた。西の浜では、縄文土器、石器類、古代の土師器、須恵器、飯蛸壷などの遺物を含む包含層が確認され、9か所のトレンチでピット、土坑が検出された。この地区では、製錬所時代に社員住宅が軒を連ねており、当時の造成のようすや排水管、カラミ煉瓦を並べた遺構などの生活跡が発見された。

続いて行った東の浜の調査でも遺跡の広がりを確認した。この地区にも、かつて社員住宅が建てられており、遺物包含層が造成による攪乱を受けていることが判明したが、各トレンチから飯蛸壷、古代の土器類、縄文土器、石器類などの遺物が出土した。

確認調査の終了間際には製錬所関連の遺構を写真に収め、大まかな位置を記録した。12月１日に機材を撤収し､調査を完了した。その後､この開発計画は進展することはなく､遺跡は現状を保っている。

＜調査日誌抄＞

平成元年10月２日　機材搬入。丘陵上で調査基準杭の設置作業。
10月９日　西の浜で調査基準杭の設置作業。
10月12日　調査基準杭の設置作業終了。丘陵上の通路を確保するための伐採作業開始
10月14日　伐採作業終了。
10月18日　T（トレンチ）1、T2、T3の掘開作業。T2からサヌカイト剥片等出土。
10月20日　T5、T6からサヌカイト剥片等出土。
10月23日　T11からサヌカイト製石器等出土。
10月31日　T28からサヌカイト製石器等出土。
11月２日　西の浜の調査開始。T29、T30から飯蛸壷等出土。
11月４日　T30、T31、T32の包含層（黒褐色砂）掘り下げ。T31でピット検出。
11月11日　T36で縄文時代遺物出土。T 40では切土整地されていることが判明。
11月14日　T42の包含層（黒褐色砂）掘り下げ。
縄文時代遺物、飯蛸壷、古代土師器等出土。
11月15日　T42、T43でピット検出。
11月20日　T50、T51、T52では遺物は出土せず、西の浜の調査終了。
11月22日　倉敷市文化財保護審議会委員の視察。

11月25日　T53、T54、T55、T56、T57から飯蛸壷、縄文土器等出土。
11月27日　東の浜の確認調査を完了。
12月１日　機材撤収。

上水島遺跡発掘調査委員会

委員長	今田昌男	倉敷市教育委員会　教育長
副委員長	花岡洋右	倉敷市教育委員会　社会教育部長
委　　員	間壁忠彦	倉敷市文化財保護審議会　会長
専門委員	福本　明	倉敷市教育委員会　文化課学芸員
〃	鍵谷守秀	倉敷市教育委員会　文化課学芸員
〃	小野雅明	倉敷市教育委員会　文化課学芸員
監　　事	三宅正廣	倉敷市教育委員会　社会教育次長
事務局長	小野盛樹	倉敷市教育委員会　文化課課長補佐
書　　記	香西文雄	倉敷市教育委員会　文化課文化財係長

（肩書き及び役職名等はいずれも調査当時）

第３節　調査の概要

１　確認調査の概要

今回の確認調査では、周知の遺跡である上水島遺跡の分布範囲を把握するため、西端地区を除く上水島全島を調査対象とした。調査では便宜上、丘陵尾根、西の浜、東の浜の3地区に分けて、2m×2mのトレンチを57か所に掘開して行ったが、その概要は以下のとおりである。

（1）丘陵尾根の調査（T1 ～ T28）

上水島の背骨をなす丘陵地は、南北600m、東西500mの範囲を占め、頂部は標高40 ～ 50mのやせ尾根となっている。尾根上における基本的な層序は、表面の腐植土層の直下に花崗岩バイラン土の堆積がみられ、遺物はこの層中に含まれている。その下には花崗岩の岩盤あるいはそれが風化した地山（基盤層）が存在し、この層の上面までを掘開して土層断面を記録した。今回の調査では、丘陵尾根で明瞭な遺構は確認されていない。

上水島南西端の尾根に設定したT1 ～ T4では、表土の下に厚さ20㎝程度の浅い堆積層があり、T2､T4では表土直下の堆積土からサヌカイト剥片が出土した。T3では黒色土器椀の小片が出土した。

西の浜の南西に位置する半独立丘の頂部に設定したT5からもサヌカイト剥片が出土した。

丘陵地の中央やや西寄り､製錬所の大煙突が3基並ぶ尾根に設定したT6 ～ T9のうち､T6､T9では、表土直下の浅い層に旧石器時代の遺物が含まれており、T6からは硬質安山岩製細石刃核が出土した。T8では煙突の建設時に溝が掘られていることが確認された。その埋土である茶褐色粗砂と表土層から比較的多くのサヌカイト剥片が出土した。

尾根の鞍部に設定したT25 ～ T27では、堆積層の厚さは20㎝前後で、厚い流土の堆積は認められなかった。T26、T27からわずかながらサヌカイト剥片等が出土し、T27では縄文後期（彦崎ＫⅡ式段階）の土器片が出土した。

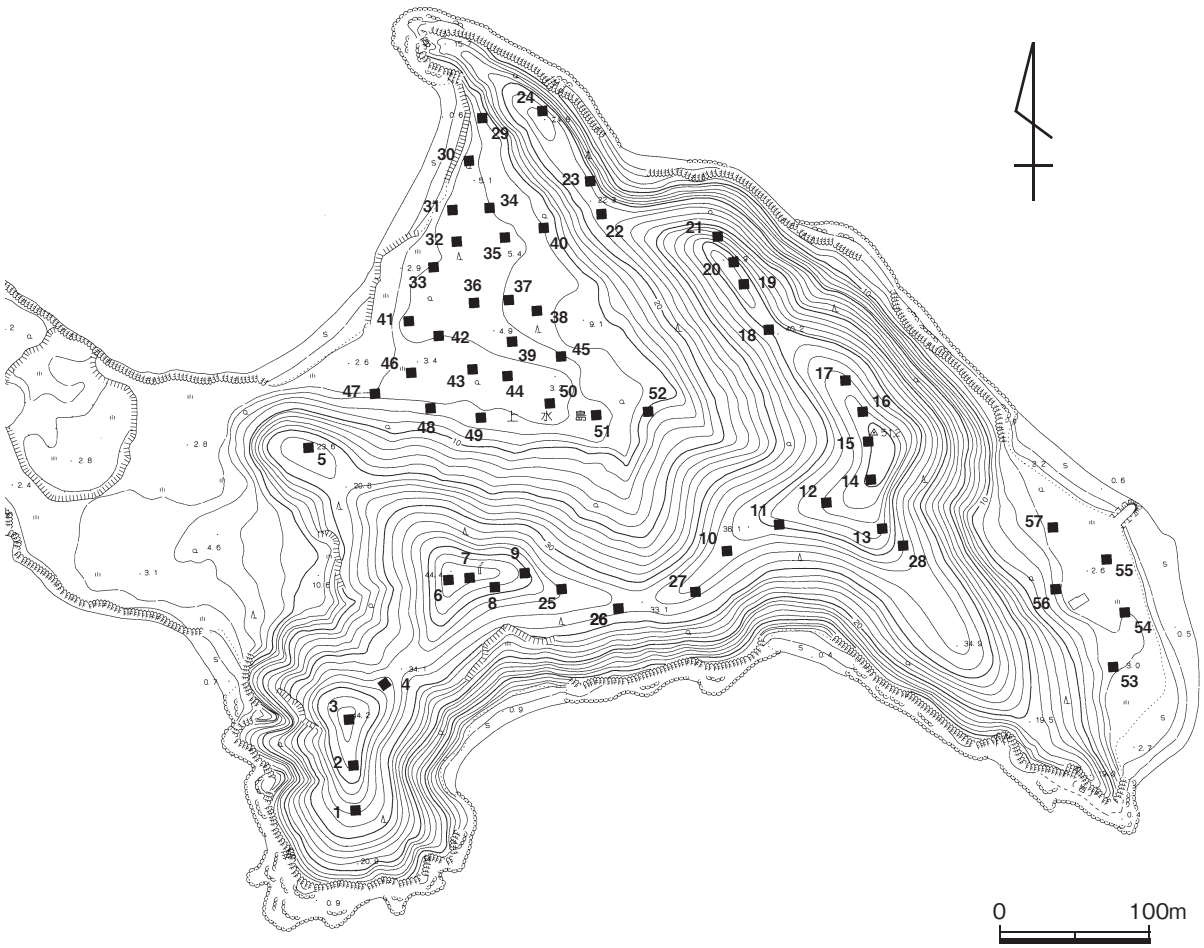
丘陵地の東寄り、標高51.2mの三角点を中心とした尾根に設定したT10～T21、T28でも、T12、T16、T18以外のトレンチから旧石器時代を中心とした遺物が出土した。T11では、厚さ約40cmの堆積層がみられ、ナイフ形石器、石核が出土した。T14からはサヌカイト剥片等とともに石鏃が出土した。T28からは縄文土器、スクレイパー、石鍬などが出土した。また、T10、T15、T17からは土師器小片が出土し、T21からは土師器椀が出土した。T19では表土直下から須恵器高台付杯や土師器の小片が出土した。

丘陵地北端の頂部に設定したT24からは遺物は出土しなかったが、その少し南側の鞍部に設定したT22、T23では土器の出土がやや目立っている。T22からは縄文中期前葉の土器、土師器が、T23からは石鏃、縄文後期の土器片、土師器が出土した。

（2）西の浜の調査（T29～T52）

西の浜は上水島の北西部に位置し、東と南を丘陵地で囲まれ、北西に海浜が広がる低地である。縄文時代以降、上水島における活動はこの地区を中心に展開したと考えられる。調査にあたっては、海浜に近い標高4m前後の平坦地に重点を置き、北から南の順にトレンチを配置した。

T29では、表土の下は整地層（2層）、造成層（3～6層）となっており、地表下60cmで遺物を含まない褐色粗砂が現れた。造成は明治・大正期の製錬所社員住宅に関連したものと考えられる。茶褐色



第62図　トレンチ位置図（S=1/5,000）

土（3層）から土師器、須恵器、土錘、飯蛸壺などが出土した。

T30では、地表下40～50㎝までが造成層で、その下には黒褐色砂（4層）がみられ、この層から縄文土器、サヌカイト剥片、土師器、須恵器、製塩土器、土錘、飯蛸壺などが出土した。全体の出土量は整理用コンテナ１箱分で、トレンチごとの総量で比較しても最多である。土器のほとんどは、器種を判断しかねるような小片である。その内訳は、土師器の細片と飯蛸壺の破片が大半を占めており、その中に縄文土器が少量含まれ、須恵器、製塩土器はわずかの量である。黒褐色砂の下は暗赤褐色砂（6層）で、この層を掘り込んだ2基のピット（P1、P2）が検出された。検出面からの深さはP1が35㎝、P2が15㎝である。埋土には縄文土器、土師器、須恵器、飯蛸壺などが含まれている。また、6層の上面を中心に縄文土器が出土した。6層の下、地表下約80㎝（標高約3.3m）で遺物を含まない明黄褐色砂が現れた。この不純物を含まない黄褐色系の海砂層を基盤層、遺物を多く含む黒褐色系の砂層を遺物包含層として認識し、以降の土層観察の目安とした。

T31では上層の攪乱が顕著であった。遺物を含む茶褐色土（5層）、暗茶褐色土（6層）までが攪乱されたものと考えられる。その下には遺物包含層である黒褐色砂（7層）、淡黒褐色砂（8層）が続き、黄褐色砂（9層）をはさんで黒褐色砂（10層）がみられた。包含層から出土した遺物の内訳はT30の状況と同様で、ここでは石鏃が加わる。その下は遺物を含まない黄色灰色砂となり、地表下約110㎝（標高約2.8m）で基盤層が現れた。10層を掘り込んだ3基のピット（P1～P3）が検出され、埋土から縄文土器、土師器、須恵器、飯蛸壺等が出土した。各ピットの検出面からの深さは20㎝くらいである。

T32でも現代の攪乱が認められ、砂質層でない黒褐色土（7層）まで後世の影響を受けている可能性がある。黒褐色砂（8層）、淡黒褐色砂（9層）は、縄文時代から古代の遺物が含まれる遺物包含層である。ここで注目されるのが、石鏃、スクレイパーなどの製品やサヌカイト、流紋岩の剥片といった縄文時代の石器類の多さである。基盤層を掘り込んだピット1基が検出された。平面形は1m×0.7mくらいの楕円形で、検出面からの深さは20㎝である。埋土は9層の土と区別できないが、縄文土器を中心とした遺物が含まれていた。基盤層上面の標高は約3.0mで、上面は凹凸が著しい。

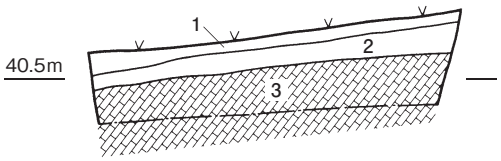
T34でも包含層である黒褐色砂（4層）が確認された。標高約3.5mで基盤層が現れ、上面には浅い凹凸が無数にみられた。

T35ではカラミ煉瓦（長40㎝×幅15～17㎝×高22㎝）を一列に並べた遺構が検出され、それに接して構築物の跡が確認された。上層を破壊されながらも包含層の黒褐色砂（8層・9層）は残っているが、周囲の状況から判断すると、大部分は攪乱を受けていると思われる。

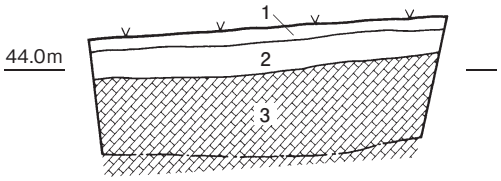
T36では、黒褐色砂（5層）、淡黒褐色砂（6層）の包含層の下、標高3.1mの高さで基盤層が現れた。また、基盤層を掘り込んだ小ピット群（P1～P9）が検出された。このうち、P1、P4、P7、P8の埋土には縄文土器、土師器が含まれ、P1からは石鏃が出土した。検出面からの深さは、P2が30㎝、P5が10㎝、P4、P8が5㎝くらいである。

T37では排水管や攪乱坑が検出されたが、包含層の淡黒褐色砂（6層）、黒褐色砂（7層）は残っている。基盤層上面の高さは約2.8mで、上面ではピット3基（P1～P3）が検出され、各ピットから土師器、飯蛸壺などの小片が出土した。検出面からの深さは、P2、P3が10㎝前後である。

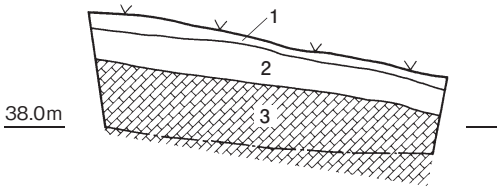
海浜に近いT41では厚い造成層の下に包含層の黒褐色砂（5層）がかろうじて残っていた。上面は



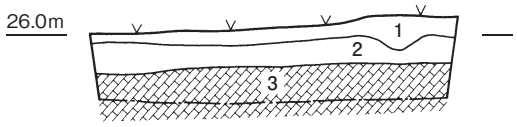
Ｔ２西壁
1 黒色腐植土
2 暗黄灰褐色土（サヌカイト剥片）
3 黄褐色花崗岩風化土（地山）



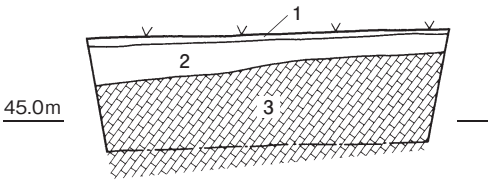
Ｔ３西壁
1 黒色腐植土
2 暗黄灰褐色土（黒色土器）
3 黄褐色花崗岩風化土（地山）



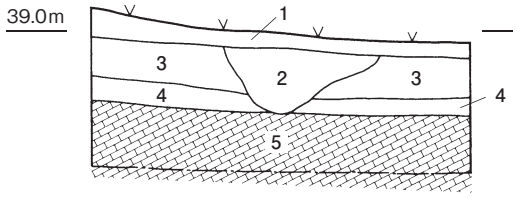
Ｔ４北壁
1 暗灰色腐植土
2 暗黄灰褐色粗砂（サヌカイト剥片）
3 淡黄褐色粗砂（地山）



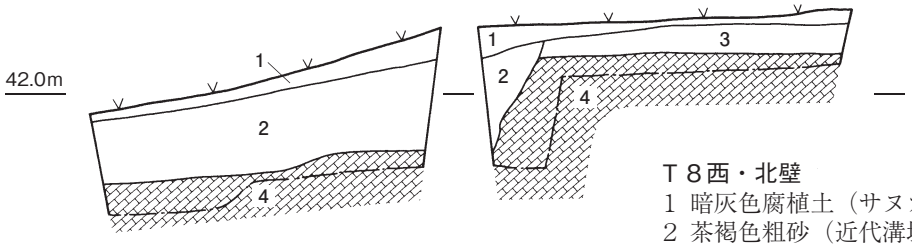
Ｔ５北壁
1 暗灰色腐植土
2 暗黄灰褐色粗砂（サヌカイト剥片）
3 淡黄褐色粗砂（地山）



Ｔ６北壁
1 暗灰色腐植土
2 暗黄灰褐色粗砂（サヌカイト剥片・細石刃核）
3 黄褐色風化花崗岩（地山）

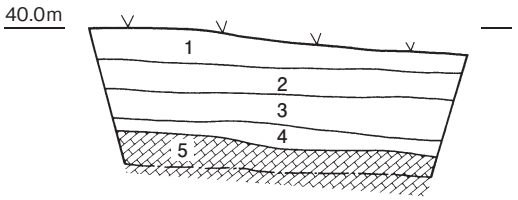


Ｔ10北壁
1 黒色腐植土
2 暗褐色土（根による攪乱）
3 茶褐色粗砂（サヌカイト剥片・土師器）
4 黄褐色粗砂
5 橙色粘質土（地山）

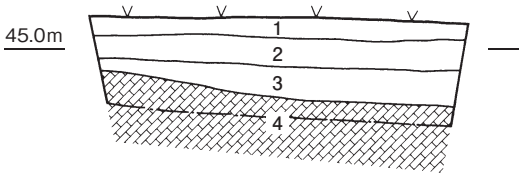


Ｔ８西・北壁
1 暗灰色腐植土（サヌカイト剥片）
2 茶褐色粗砂（近代溝埋土・サヌカイト剥片）
3 淡茶褐色土
4 淡黄褐色粗砂（地山）

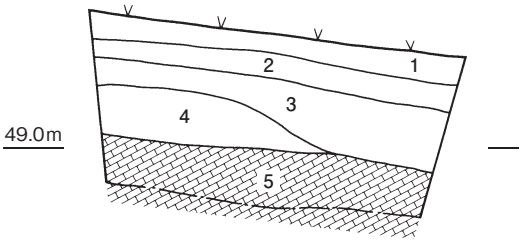
第63図　土層断面・平面図１（Ｓ=1/40）



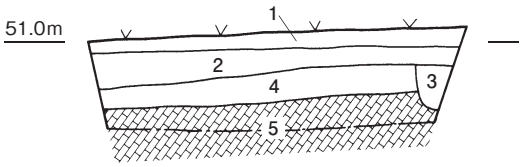
Ｔ11東壁
1 暗灰色腐植土
2 黄茶褐色粗砂（サヌカイト剥片）
3 淡茶褐色粗砂（ナイフ形石器・石核）
4 淡黄茶色土
5 明黄茶色粘質土（地山）



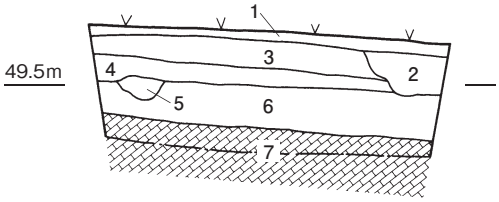
Ｔ13北壁
1 暗灰色腐植土
2 淡黄茶色土（サヌカイト剥片）
3 淡茶褐色土（礫含む）
4 明黄茶色硬質土（地山）



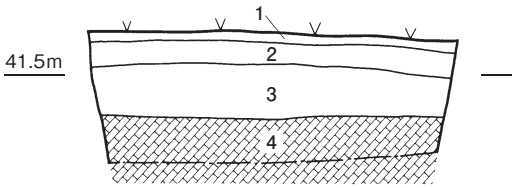
Ｔ14北壁
1 暗褐色腐植土
2 暗灰黄色土（サヌカイト剥片・石鏃）
3 灰黄褐色土（サヌカイト剥片）
4 明黄灰色硬質土（サヌカイト剥片）
5 黄灰色土（地山）



Ｔ15西壁
1 暗灰色腐植土
2 淡茶褐色土（サヌカイト剥片・土師器）
3 淡灰褐色粗砂（ピット埋土）
4 灰黄褐色土（サヌカイト剥片・土師器）
5 褐灰色硬質土（地山）

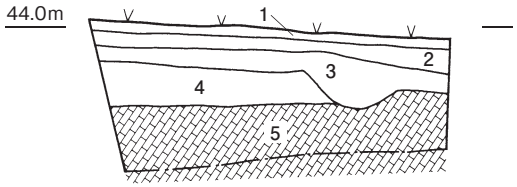


Ｔ17北壁
1 暗灰色腐植土
2 淡茶褐色土（根による攪乱）
3 灰黄褐色土（サヌカイト剥片・土師器）
4 灰褐色土（サヌカイト剥片・土器）
5 褐灰色土（根による攪乱）
6 淡灰黄褐色粗砂
7 灰黄褐色粗砂（地山）

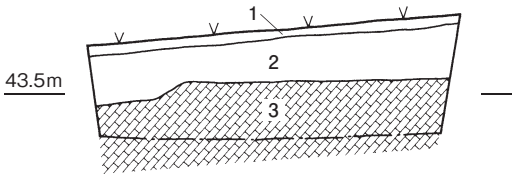


Ｔ19北壁
1 黒褐色腐植土
2 淡茶褐色土（土師器・須恵器坏）
3 褐色粗砂
4 灰黄褐色硬質粗砂（地山）

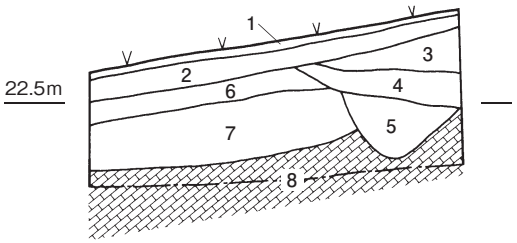
第64図　土層断面・平面図２（Ｓ=1/40）



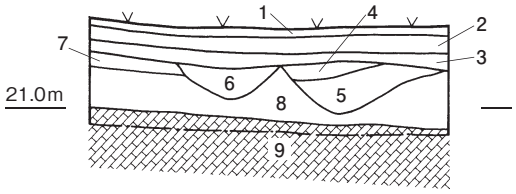
Ｔ20北壁
1 黒褐色腐植土
2 灰黄褐色粗砂（サヌカイト剥片）
3 淡茶褐色粗砂
4 灰黄褐色粗砂
5 黄灰褐色粗砂（地山）



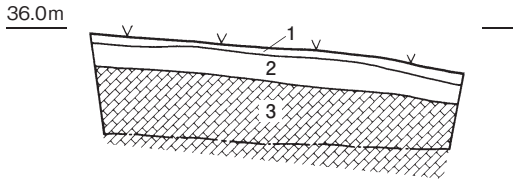
Ｔ21東壁
1 黒褐色腐植土
2 暗褐色粗砂
（サヌカイト剥片・土師器椀）
3 灰黄褐色粗砂（地山）



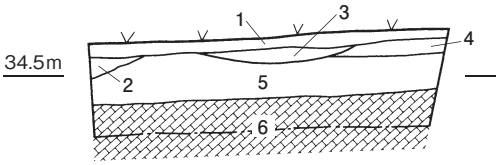
Ｔ22北壁
1 黒褐色腐植土
2 茶褐色粗砂（縄文・土師器）
3 黄褐色粗砂（縄文・土師器）
4 暗褐色粗砂（縄文・土師器）
5 暗黄褐色粗砂
6 淡褐色粗砂（縄文・土師器）
7 明黄褐色粗砂
8 黄灰色風化花崗岩（地山）



Ｔ23北壁
1 黒褐色腐植土（石鏃）
2 暗褐色粗砂（縄文土器・土師器）
3 赤褐色粗砂（石鏃・土師器）
4 茶褐色粗砂（土師器）
5 黒褐色粗砂（土師器）
6 褐色粗砂
7 黄灰色粗砂（サヌカイト剥片・土師器）
8 黄褐色粗砂
9 黄灰色風化花崗岩（地山）

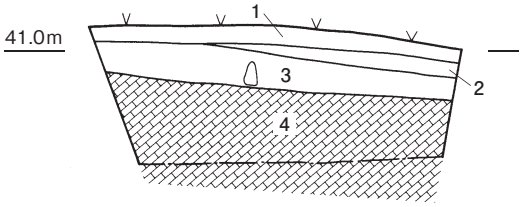


Ｔ26北壁
1 黒褐色腐植土
2 淡褐色土（サヌカイト剥片）
3 暗茶褐色花崗岩風化土（地山）

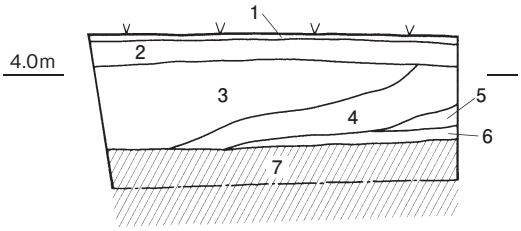


Ｔ27北壁
1 黒褐色腐植土
2 淡褐色粗砂（攪乱坑）
3 灰黄褐色土
4 灰黄褐色粗砂
5 淡褐灰色粗砂
（サヌカイト剥片・縄文土器）
6 淡灰黄褐色粗砂（地山）

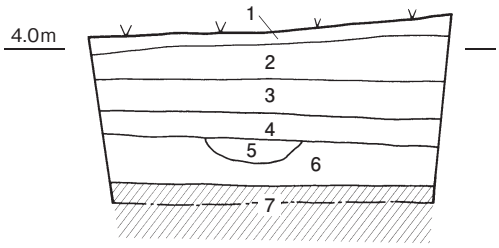
第65図　土層断面・平面図３（Ｓ=1/40）

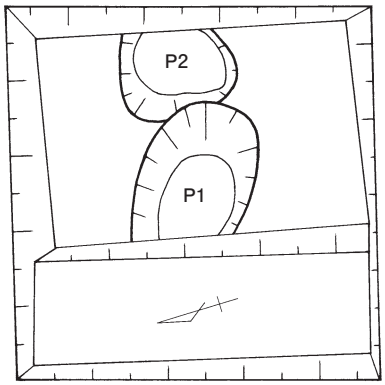


Ｔ28北壁
1 黒褐色腐植土
2 暗赤褐色土（縄文土器）
3 黄褐色土（スクレイパー・石鏃）
4 黄灰色土（地山）

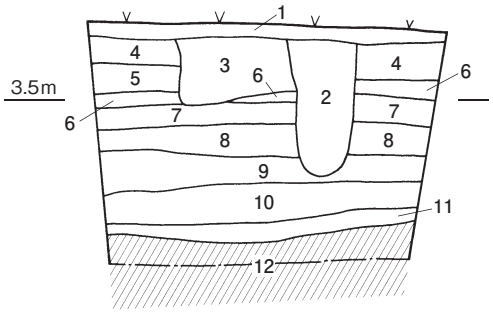


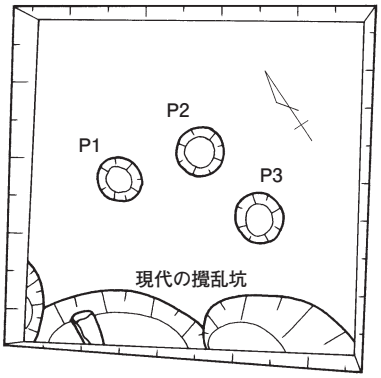
Ｔ29西壁
1 黒色腐植土
2 黄灰褐色土（縄文土器・古代土器類）
3 茶褐色土（造成土、古代土器類・飯蛸壺）
4 淡褐色土（造成土）
5 黄褐色土（造成土）
6 黒褐色土（造成土、炭）
7 褐色粗砂（基盤層）





Ｔ30東壁・平面
1 褐灰色腐植土
2 灰黄褐色土（造成土）
3 褐灰色土（造成土）
4 黒褐色砂（飯蛸壺、古代土器類）
5 褐灰色砂（P2埋土）
6 暗赤褐色砂（縄文土器）
7 明黄褐色砂（基盤層）

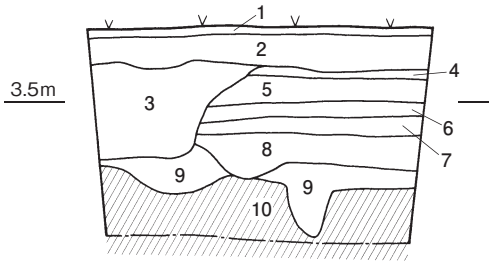


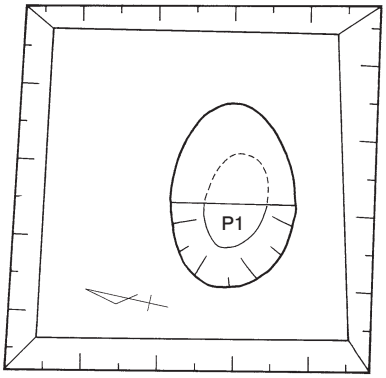


Ｔ31北壁・平面
1 褐灰色腐植土
2 攪乱坑埋土
3 攪乱坑埋土
4 褐灰色土（造成土）
5 茶褐色土（縄文土器・古代土器類・飯蛸壺）
6 暗茶褐色土（縄文土器・古代土器類・飯蛸壺）
7 黒褐色砂（縄文土器・古代土器類）
8 淡黒褐色砂（縄文土器・古代土器類）
9 黄褐色砂
10 黒褐色砂（縄文土器・石鏃）
11 黄灰色砂
12 明黄褐色砂（基盤層）

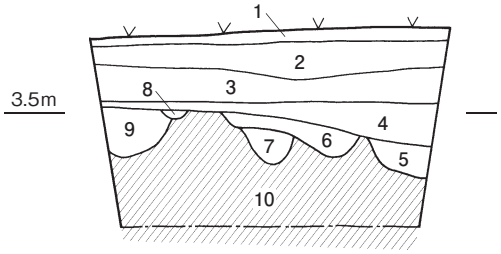
0 1m

第66図　土層断面・平面図４（Ｓ=1/40）

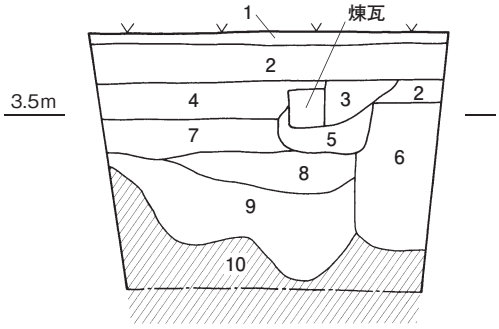




Ｔ32東壁・平面
1 褐灰色腐植土
2 黄灰色土（造成土）
3 攪乱坑埋土
4 暗灰褐色土（縄文土器・古代土器類・飯蛸壺）
5 茶褐色土（縄文土器・古代土器類・飯蛸壺）
6 暗茶褐色土（縄文土器・飯蛸壺）
7 黒褐色土（縄文土器・飯蛸壺）
8 黒褐色砂（縄文土器・サヌカイト剥片）
9 淡黒褐色砂
10 明黄褐色砂（基盤層）



Ｔ34南壁
1 褐色腐植土
2 褐灰色土（造成土）
3 暗茶褐色土（飯蛸壺）
4 黒褐色砂（古代土器類・飯蛸壺）
5 黒色砂（土錘・飯蛸壺）
6 暗茶褐色砂（土錘・飯蛸壺）
7 黒色砂（飯蛸壺）
8 暗褐色砂（飯蛸壺）
9 暗赤褐色砂（飯蛸壺）
10 明黄褐色砂（基盤層）

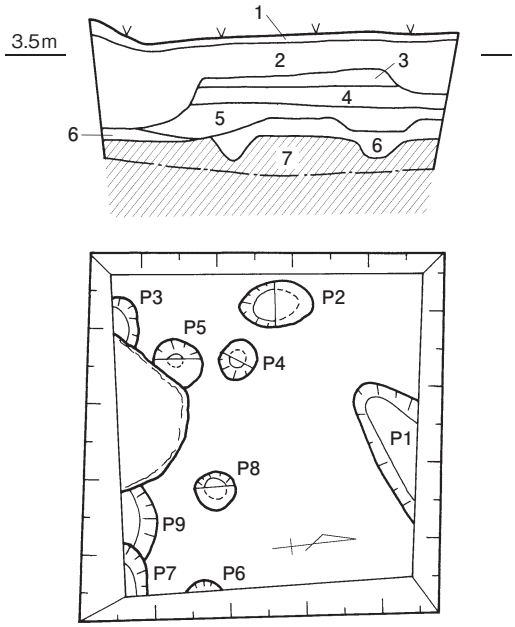


Ｔ35東壁
1 褐色腐植土
2 黄灰色土（造成土）
3 灰褐色土
4 黄灰色土と灰褐色土の互層（造成土）
5 灰褐色土
6 暗灰褐色砂（構築物の掘り方埋土）
7 茶褐色土（飯蛸壺）
8 黒褐色砂（古代土器類・飯蛸壺）
9 黒褐色砂（古代土器類・飯蛸壺）
10 明黄褐色砂（基盤層）

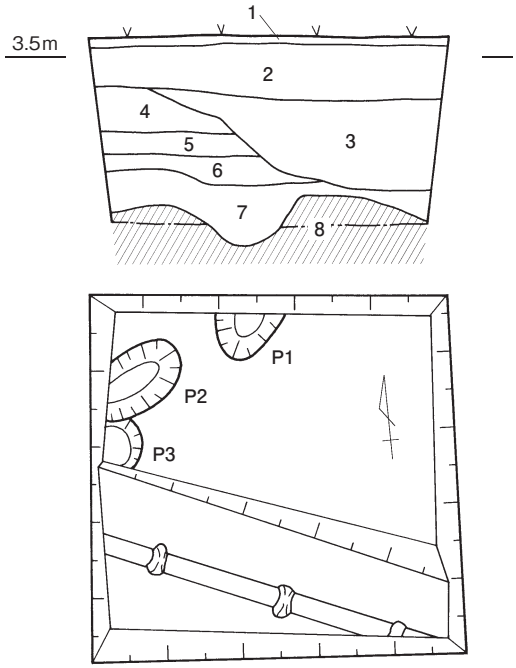
第67図　土層断面・平面図５（Ｓ=1/40）

攪乱を受けていたが、現代の遺物に混じって縄文土器、三彩の小片などの遺物が含まれている。基盤層上面の標高は約2.1ｍである。

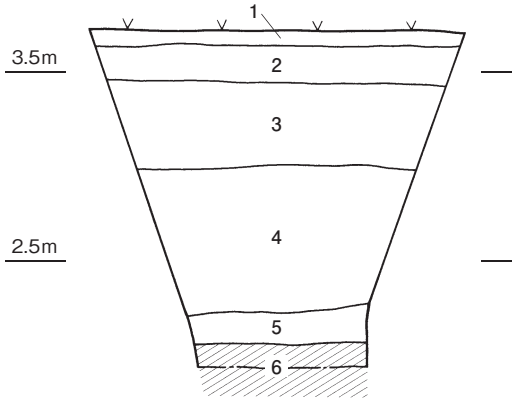
Ｔ42でも縄文時代、古代の遺物を含む包含層である黒褐色土（5層）、淡黒褐色粗砂（8層）が確認され、この層から石鏃、スクレイパーなどの石器が比較的多く出土した。また、8層を掘り込むピット（P1）と基盤層を掘り込むピット3基（P2～P4）が検出された。断面観察によっても、P2の埋土と包含層の土を区別することは困難であり、基盤層の上面まで掘り下げなければ遺構の輪郭がつかめな



Ｔ36西壁・平面
1 黒褐色腐植土
2 褐灰色土（造成土）
3 淡茶褐色土
（縄文土器・古代土器類・飯蛸壺）
4 茶褐色土
（縄文土器・古代土器類・飯蛸壺）
5 黒褐色砂（縄文土器・飯蛸壺）
6 淡黒褐色砂（縄文土器・サヌカイト剥片）
7 明黄褐色砂（基盤層）



Ｔ37北壁・平面
1 黒褐色腐植土
2 灰黄色土（造成土）
3 攪乱坑埋土
4 灰黄色土と灰色土（造成土）
5 褐灰色土
6 淡黒褐色砂
7 黒褐色砂
8 明黄褐色砂（基盤層）



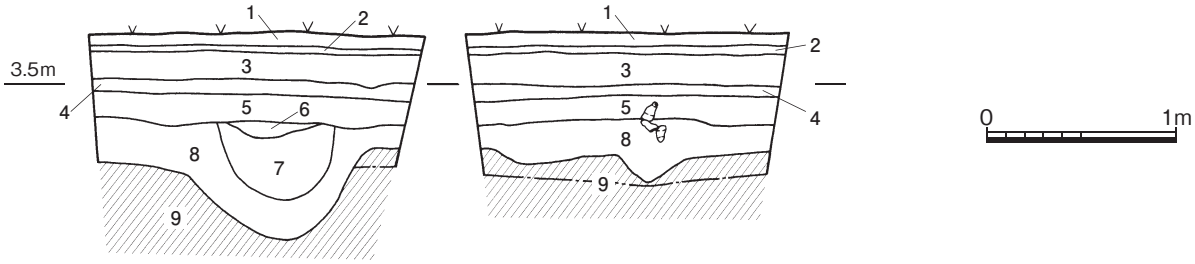
Ｔ41北壁
1 黒褐色腐植土
2 灰黄色土
3 鉱滓の集積（造成土）
4 煉瓦と礫（造成土）
5 黒褐色砂（縄文土器・現代の瓦）
6 灰白色砂（基盤層）

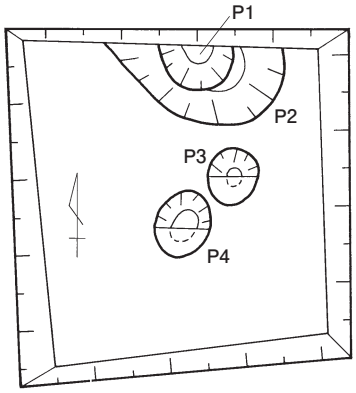
0 1m

第68図　土層断面・平面図６（Ｓ=1/40）

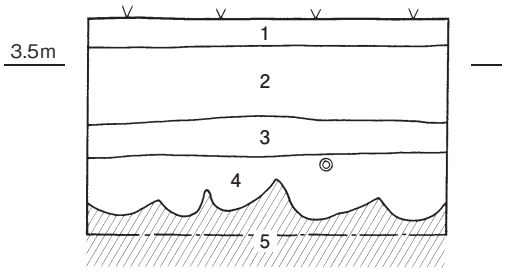
かった。P3、P4の深さは10㎝程度である。基盤層上面は標高3.1ｍくらいの高さに位置する。

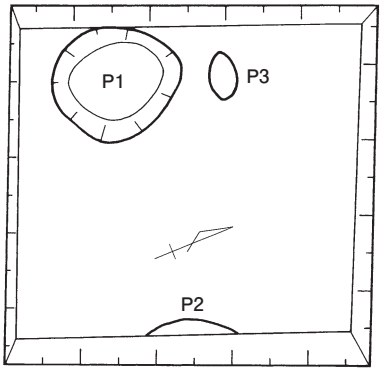
Ｔ43では基盤層を掘り込んだピット３基（P1 ～ P3）が検出された。P1は径約60㎝のいびつな円形で検出面からの深さは30㎝くらいである。遺物はP2から土師器が少量出土した程度である。標高2.8ｍくらいの高さで現れた基盤層上面は波打つように乱れる。



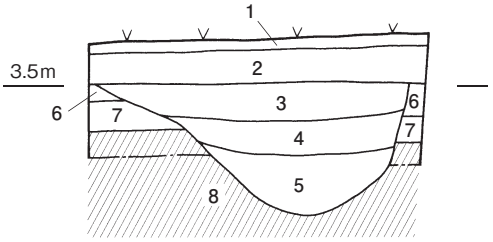


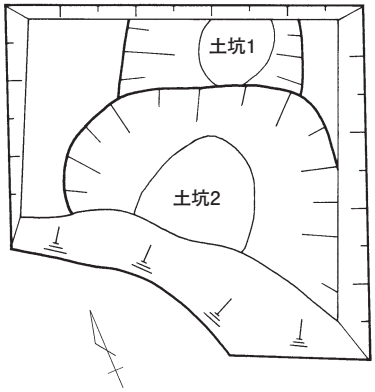
Ｔ42北・東壁・平面
1 煉瓦敷
2 黄灰色土（縄文土器・飯蛸壺）
3 灰黄褐色土（縄文土器・飯蛸壺）
4 褐灰色土（縄文土器・飯蛸壺）
5 黒褐色土（縄文土器・古代土器類・飯蛸壺）
6 褐灰色土（P1埋土・縄文土器・サヌカイト剥片）
7 灰黄褐色土
（P1埋土・縄文土器・サヌカイト剥片）
8 淡黒褐色粗砂（縄文土器・古代土器類・飯蛸壺）
9 明黄褐色砂（基盤層）





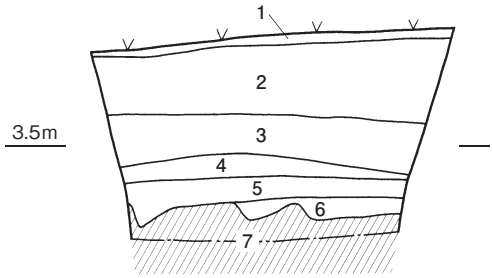
Ｔ43西壁・平面
1 煉瓦敷
2 灰褐色土と黄灰色土（造成土）
3 明赤褐色土（飯蛸壺）
4 黒褐色粗砂
（縄文土器・サヌカイト剥片・飯蛸壺）
5 明黄褐色砂（基盤層）

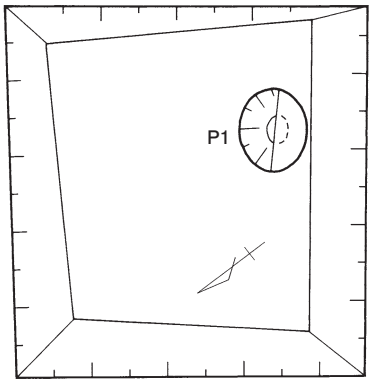




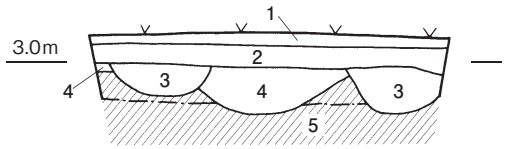
Ｔ46北壁・平面
1 整地層
2 灰黄褐色土（造成土）
3 褐灰色粗砂（土坑1埋土）
4 褐灰色粗砂（土坑1埋土）
5 暗褐色粗砂（土坑1埋土）
6 黒褐色粗砂
7 淡黒褐色粗砂
8 灰黄色粗砂（基盤層）

第69図　土層断面・平面図７（Ｓ=1/40）

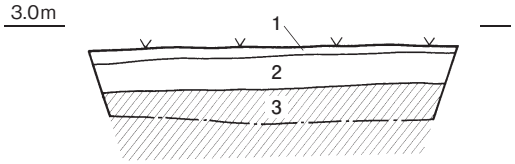




Ｔ48東壁・平面
1 褐色腐植土
2 明黄褐色粗砂（丘陵からの流土）
3 煉瓦積（造成土）
4 暗灰黄色硬質土
（縄文土器・古代土器類・飯蛸壺）
5 褐灰色土
（縄文土器・古代土器類・飯蛸壺）
6 淡黒褐色粗砂
（縄文土器・古代土器類・飯蛸壺）
7 灰黄色粗砂（基盤層）



Ｔ53西壁
1 褐灰色腐植土
2 暗赤褐色土（造成土）
3 黄灰褐色土（攪乱坑）
4 黒色砂質土
（縄文土器・古代土器類・飯蛸壺）
5 黄灰褐色粗砂（基盤層）



Ｔ54西壁
1 褐灰色腐植土
2 褐色砂質土（造成土）
3 黄灰褐色粗砂（基盤層）

第70図　土層断面・平面図８（Ｓ=1/40）

Ｔ46では、包含層の黒褐色粗砂（6層）、淡黒褐色粗砂（7層）から基盤層までを掘り込む土坑2基が検出され、埋土から縄文土器、土師器、須恵器、飯蛸壺などの小片が出土した。基盤層上面の高さは、標高3.2ｍくらいである。

Ｔ48では基盤層を掘り込んだピット1基が検出された。平面形は45㎝×35㎝の楕円形で、検出面からの深さは15㎝である。埋土には土師器などの小片が含まれる。また、褐灰色土（5層）から三彩の小片が出土した。基盤層上面の高さは標高3.2ｍくらいである。

この他のトレンチについて概要を述べる。Ｔ33は鉱滓の集積層のため、Ｔ39はコンクリートの基礎のために掘削できなかった。Ｔ38、Ｔ44、Ｔ45、Ｔ47では包含層の黒褐色砂が確認されたが、出土遺物の量はきわめて少量であった。Ｔ49では基盤層まで破壊を受けていたが、もともとは包含層が存在していたと考えられる。Ｔ50、Ｔ51でも深部にまで掘削が及んでいたが、遺物包含層が存在したとは

考えられない状況であった。遺物 T40、T52では基盤層である花崗岩の上に丘陵からの流土が堆積しており、遺物包含層は認められなかった。

（3）東の浜の調査（T53 ～ T57）

東の浜は、上水島の東端に位置し、西に丘陵を背負い、東は海浜が広がる標高3 ～ 4mくらいの狭い低地である。

T53では表土直下の造成土である暗赤褐色土（2層）から縄文土器、古代土器類、飯蛸壺などの遺物が多く出土した。その下の黒色砂質土（4層）が遺物包含層と認識され、地表下20㎝の高さ（標高約3.0m）で基盤層が現れる。また、4層を掘り込む攪乱坑（3層）が認められ、この中にも多くの遺物が含まれる。

T54では造成土である褐色砂質土（2層）から古代の土器類、飯蛸壺、近世土器類が出土し、その下、標高約2.7mの高さで基盤層が現れる。遺物包含層が攪乱を受けた状況と判断される。

T55 ～ T57でも T54と状況がほぼ似ており、表土、遺物を含む造成土、基盤層の層序が確認された。しかし、この場所には製錬所の社員住宅が建てられており、当時の造成工事などによって遺物包含層が破壊されたと推測される。

２　遺　物

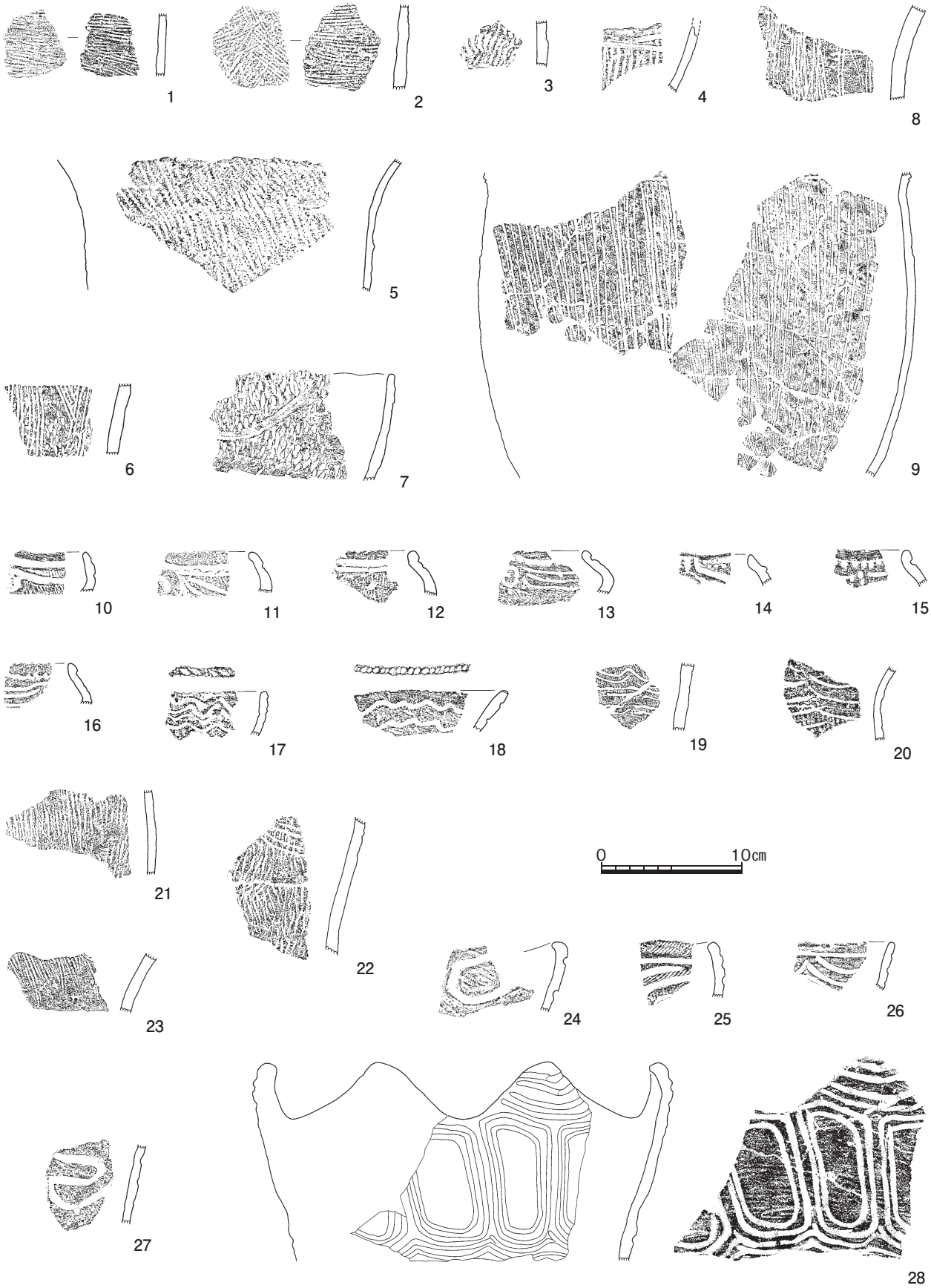
（1）縄文土器（第71～73図）

1、**2**は内外面に二枚貝条痕がみられ、羽島下層式と考えられる。**3**はＲＬ縄文を地文とし、低い貼り付け突帯の上にＣ字形爪形文を付ける。**4**はＲＬ縄文地に半截竹管により直線が描かれる。破片の上端は、疑口縁のように一旦丸くおさめたのち粘土を積み上げたようすがうかがえる。**5**は胴部から口縁部に至る部分である。ＲＬ縄文が付けられる。**6**、**7**は節の大きなＲＬ縄文を地文とし、半截竹管による平行線文が描かれる。**8**の地文は不明であるが、縦位の平行線が描かれる。**3**は船元Ⅰ式、**4** ～ **8**は船元Ⅱ式～船元Ⅲ式と考えられる。**9**は地文として縄文は付けられず、半截竹管による縦位の平行線が密に引かれる。破片上端に半截竹管による細かい波状文が描かれているように見えるため、里木Ⅱ式と思われる。

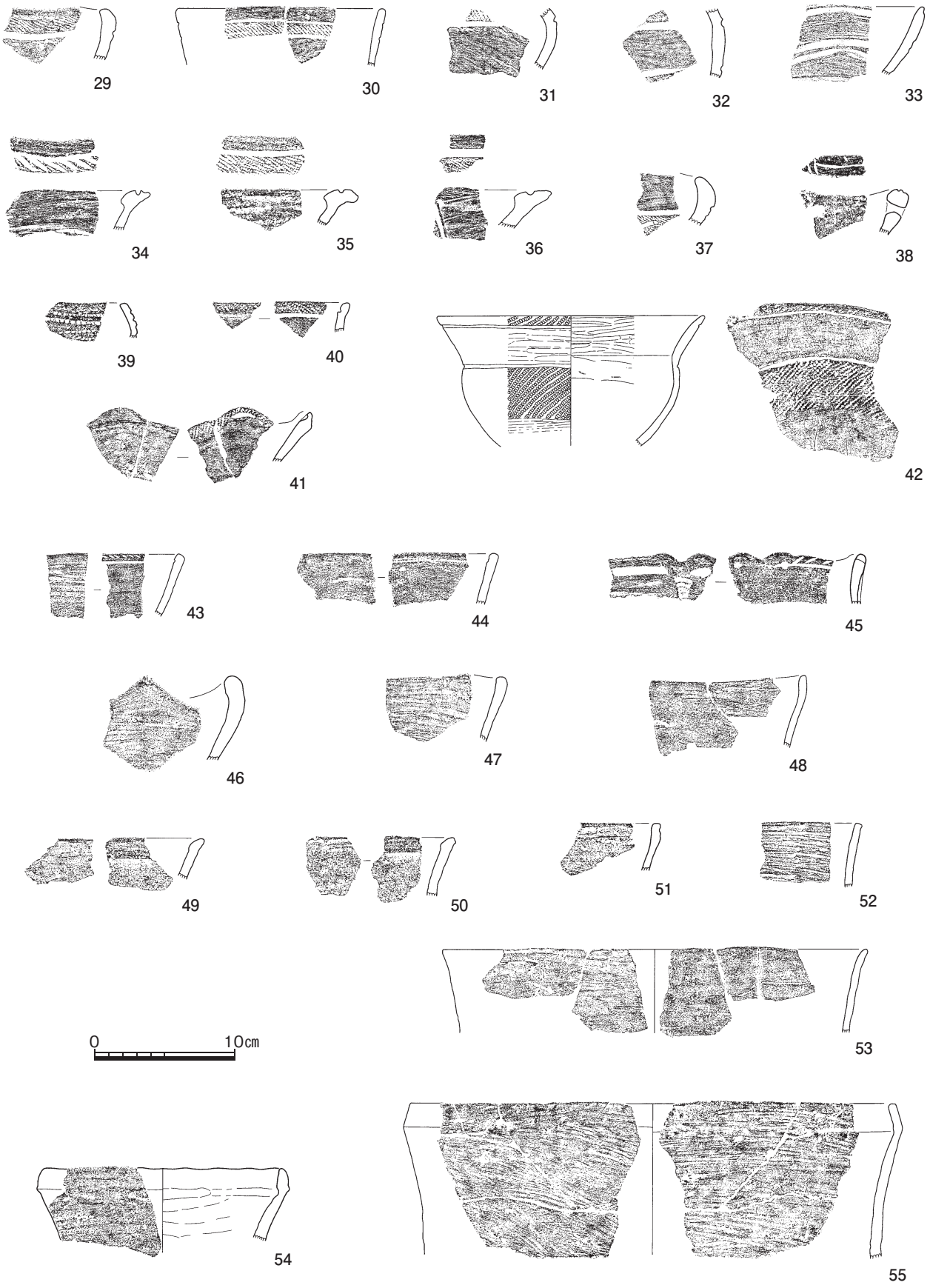
10 ～ **16**は内湾する口縁部の小片で、**10** ～ **13**には撚糸文の地文が認められる。いずれも半截竹管による平行線文や沈線文をもつ。**10**と**13**は沈線により渦巻文が描かれる。**12**は低い貼り付け突帯により渦巻文が描かれる。また、口縁に沿って引かれた平行線の中に小さな刺突を千鳥状に配し、細かく波打つ隆起線を作り出している。**13** ～ **16**にも刺突文が加えられる。**18**、**19**は半截竹管により波状文が描かれ、口縁端面に刻目をもつ。**18**の波状文は、半截竹管で描く二本線のうち上側の線のみが強調される。**19** ～ **22**は胴部で、**21**と**22**は同一個体と思われる。いずれも撚糸文地に半截竹管による平行線文が描かれる。**10** ～ **22**は里木Ⅱ式と考えられる。

23は二枚貝条痕が縦位に付けられており、里木Ⅲ式と考えられる。

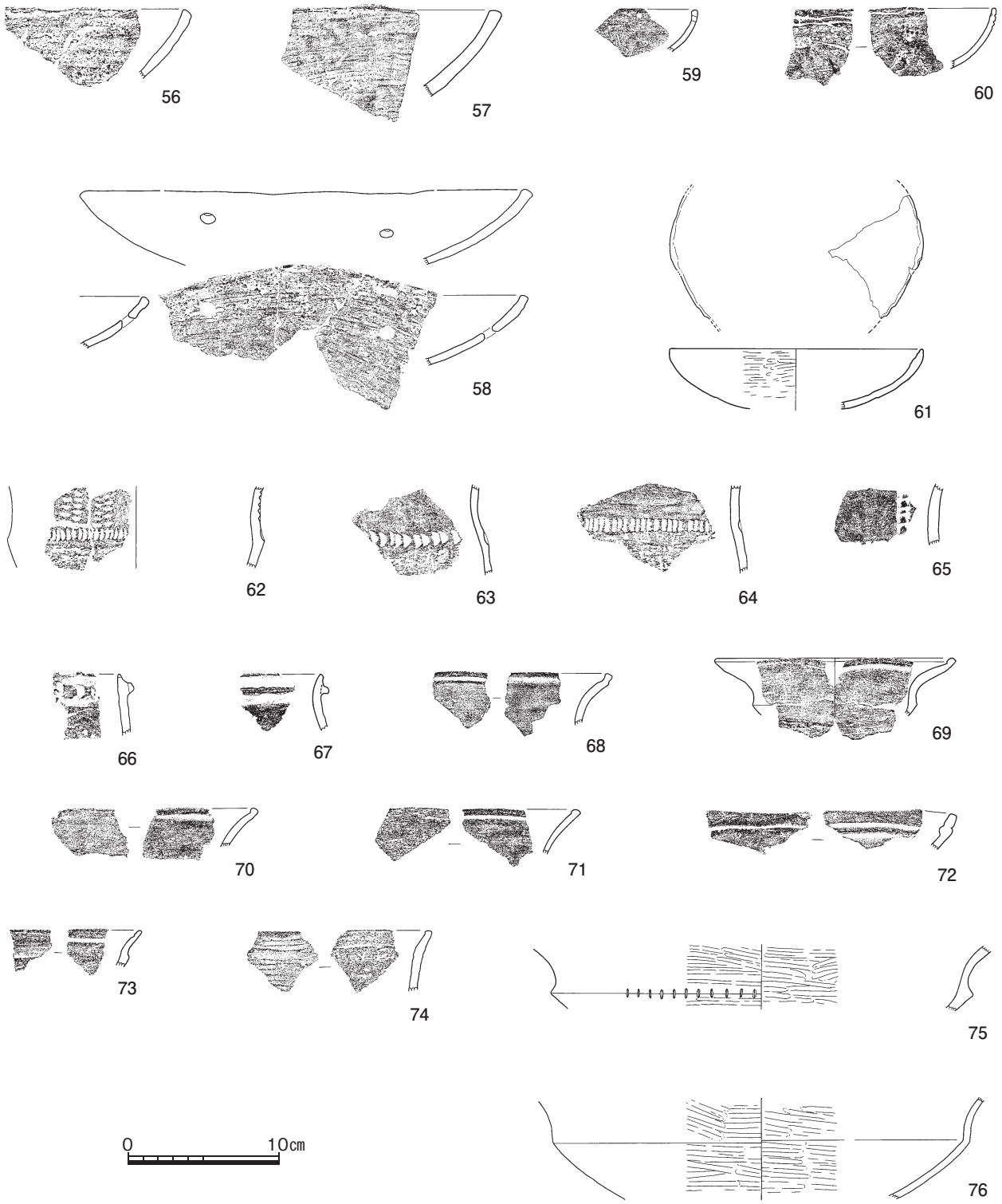
24は幅広で深い沈線で描かれた区画の中にＲＬ縄文を充填する。**25**はＬＲ縄文地に、やや幅の広い沈線文が描かれる。**26**、**27**は無文地に沈線文が描かれる。**28**は波状口縁をもち、波頂の数は6ないし7と推定される。巻貝条痕を横位に付け、口縁部には大きな隅丸方形の区画文を展開させている。波頂部にも横縞状に沈線が配される。**24** ～ **28**をひとくくりにするのは雑駁であるが、中期末から後



第71図　縄文土器１（S=1/4）



第72図　縄文土器２（S=1/4）



第73図　縄文土器３（S=1/4）

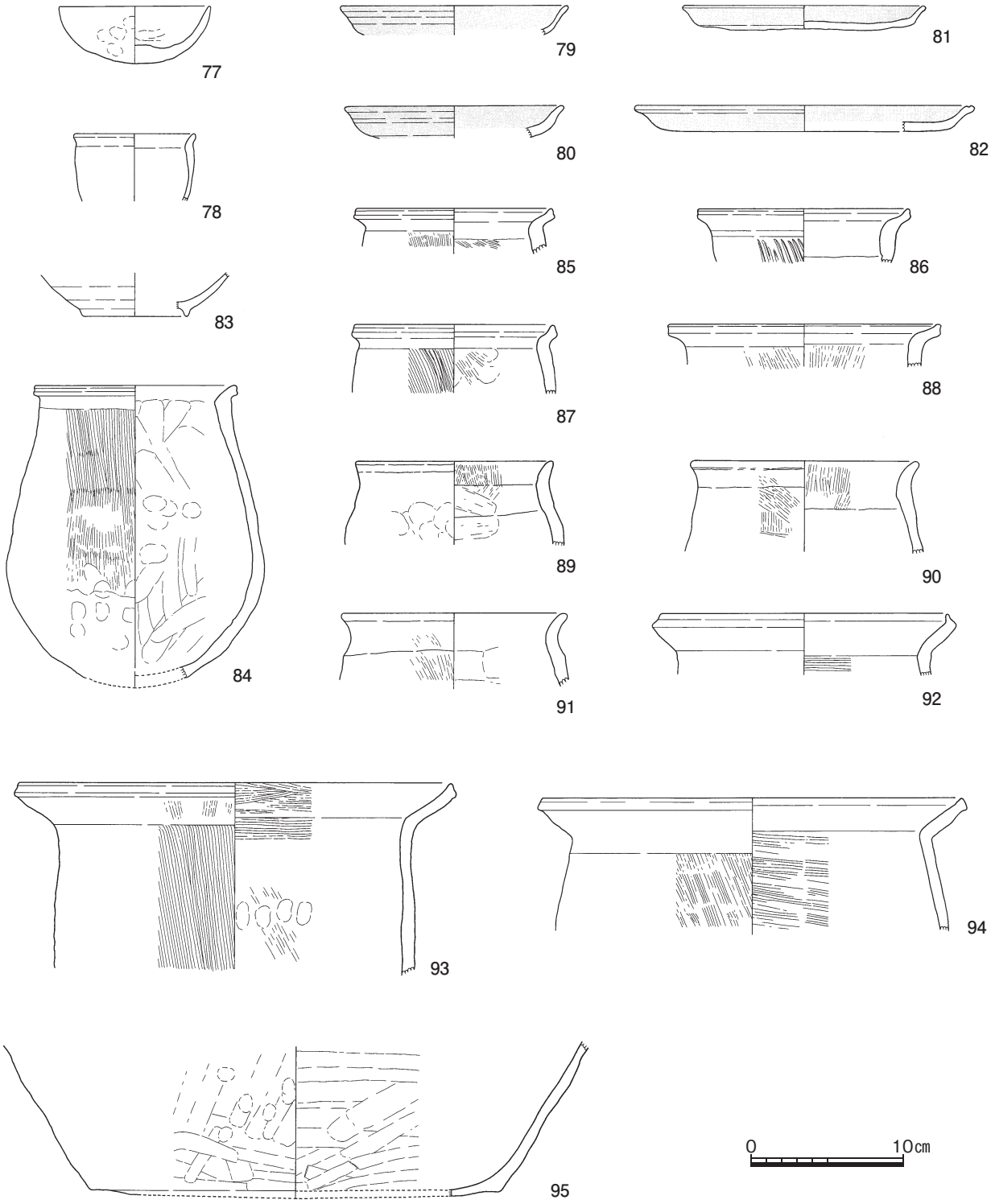
期初頭の段階のものと推定される。

29 ～ 33は中津式～福田ＫⅡ式と考えられる。29 ～ 32は磨消縄文をもち、33は巻貝条痕の地に沈線文が描かれる。

34 ～ 36は口縁の内側を肥厚させて文様帯をつくる彦崎ＫⅠ式である。36の外面には垂下線が認

められる。

37は口縁部を肥厚させ、縄文と沈線で飾る。沈線の先端には刺突が加えられている。**38**は波状となる口縁をわずかに肥厚させて沈線文を描く。波頂部には焼成前穿孔がある。**39**は沈線の中に小さな円形刺突列を加えている。沈線間には不明瞭ながら結節縄文が認められる。**40**は口縁の内外面に



第74図　土師器（S=1/4）

ＲＬ縄文帯を有し、内側は沈線で区画される。**41**は波状口縁をもつ。波頂部は半円状で、内側には三日月形の内文が描かれ、口縁にはＬＲ縄文帯がめぐる。**42**は半球形の胴部に外反する頸部が付く鉢である。口縁部と胴部上半にＬＲ縄文が施文され、頸部無文帯との境に沈線を引く。頸部は内外面ともミガキ調整されている。胴部縄文帯より下はナデのち軽いミガキ調整、胴部内面はナデ調整である。**37**～**42**は彦崎ＫⅡ式の段階に位置付けられると思われる。

43、**44**の口縁の内側には一本の沈線が引かれる。**43**では沈線の上に右下がりの斜刻線を連続的に付けて文様帯としている。**44**の沈線は半截竹管で押し引いたようである。**43**、**44**は馬取式と考えられる。

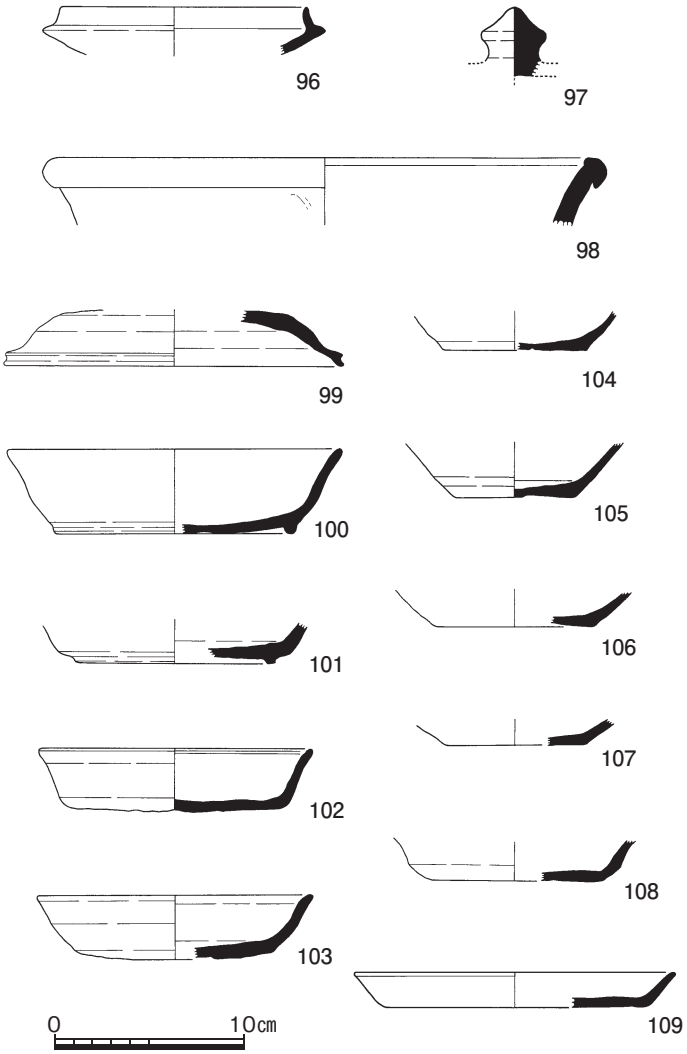
45の口縁は、隣り合う2つの半円状の突起をもつ。口縁外面には幅広で浅い沈線を複数本引いているが、2つの突起の間で途切れ、この部分にヘナタリあるいはフトヘナタリのような巻貝を押圧回転させた文様を付ける。口縁内側には左下がりの斜刻線をめぐらし、下に区画線を引いている。また、突起の部分には円形の刺突が施される。**45**はこれらの特徴から福田ＫⅢ式と考えられる。

46～**61**は後期の土器で、**60**以外は無文である。**58**、**59**には焼成後の穿孔がある。**60**は小型の浅鉢で、粗雑な作りである。口縁内側には一本の沈線を引き、外面には沈線間に円形刺突文を充填する。

62～**76**は晩期の土器である。**62**～**65**は谷尻式の深鉢と考えられ、胴屈曲部に**62**～**64**は爪形文を、**65**は押引文をめぐらす。**62**と**65**は頸部にも縦位の施文が認められる。**66**、**67**は口縁に突帯文を有する。**66**の突帯は刻目をもち、**67**の突帯には刻目がない。**68**～**73**、**75**、**76**は鉢である。**68**は口縁内側に折り曲げて端部を拡張している。外面には浅い段が付く。**72**は口縁外側に段をもつ。下の段は丸みをもって少し張り出し、段の境目には切れ込み線が引かれる。内側には、沈線と段状の削り出しによる突帯が形成される。**73**の口縁も下段が張り出すような段をもち、内側には一本の沈線を引く。**69**～**71**は口縁端部内側がカマボコ形に肥厚する。

（2）土師器（第74図）

77は手捏ねの土師器椀である。**78**は小型の甕である。**79**～**82**は皿で、内外面に丹が塗られている。**82**は高杯の可能性もある。**83**は高台の付く杯と思われる。**84**～**94**は甕である。**84**は胴長丸底で、口縁



第75図　須恵器（S=1/4）

部を外側に短く屈曲させ、端面に一本の沈線を引く。**85**～**88**も同様の器形と思われる。**89**～**91**は口縁部を少し外反させ、端部を丸くおさめる。**92**～**94**は口縁部をくの字に屈曲し、端面に工具を当てて調整する。**92**の端部はつまみ上げたような形状である。**95**は盤と考えられる大型品である。胎土内部まで赤みが強く、内外面に不定方向の工具ナデが施される。**77**は古墳時代、**79**～**95**は奈良時代～平安時代前期のものと思われる。

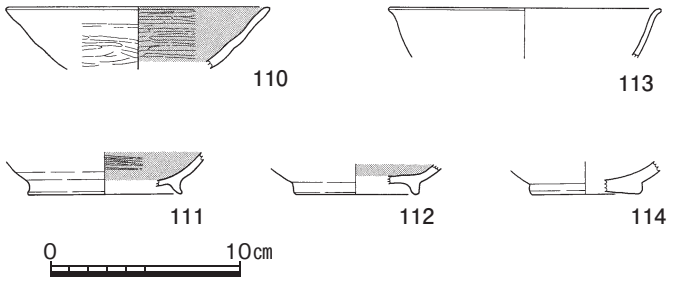
（3）**須恵器**（第75図）

96は須恵器蓋杯の身である。**97**は大型の宝珠つまみで、器の上蓋に付けられたものであろう。**98**は甕の口縁部、**99**は蓋杯の蓋である。**100**、**101**は高台の付く杯で、**100**は胎土内部まで赤みを帯びる。**102**～**108**は高台の付かない杯、**109**は皿である。**96**、**98**は古墳時代後期、**99**～**109**は奈良時代～平安時代前期のものと思われる。

（4）**黒色土器・緑釉陶器**（第76図）

110～**112**は黒色土器の椀である。**113**、**114**は緑釉陶器の椀である。**113**の外面にうっすらと釉薬が残る。**114**には削り出しの平高台が付く。内外面に釉薬が残るが、高台部分には施釉されていないようである。

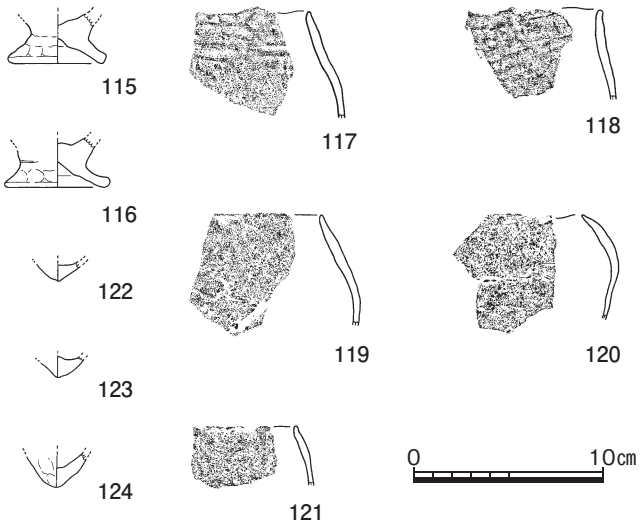
この他の施釉陶器としては、小片のために図化できなかった三彩が2点ある。



第76図　黒色土器・緑釉陶器（S=1/4）

（5）**製塩土器**（第77図）

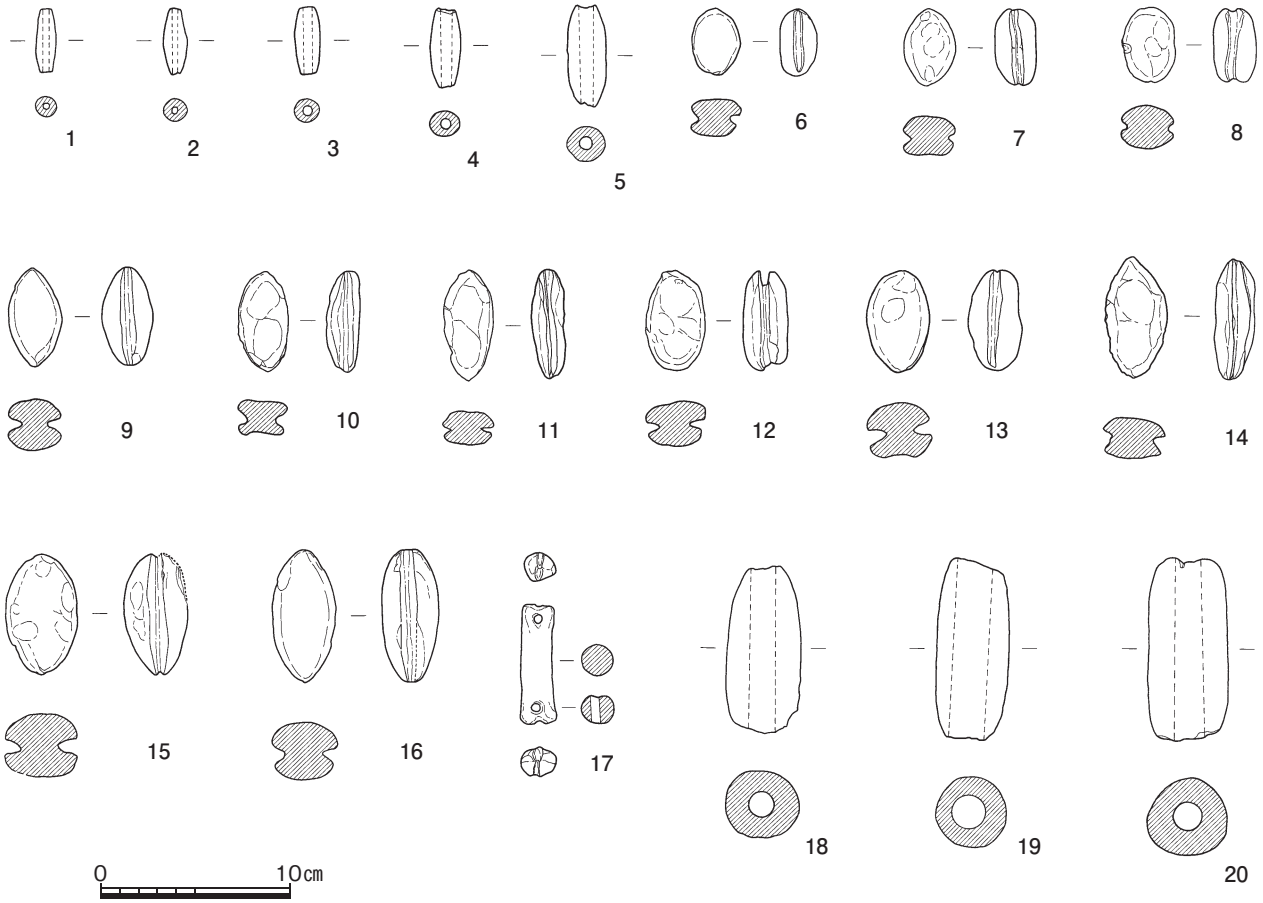
115、**116**は低い脚台が付く製塩土器である。体部はほとんど残っていない。**117**、**118**は口縁部外面に平行タタキが施される。**119**～**121**は無文薄手の製塩土器で、**122**～**124**はその底部と考えられる。**115**、**116**が古墳時代前期、**117**、**118**が古墳時代後期、**119**～**124**が概ね奈良時代～平安時代前期のものと思われる。



第77図　製塩土器（S=1/4）

（6）**土錘**（第78図）

1～**5**は小型の管状土錘である。**1**～**4**が長さ3～4cm、**5**は長さ5.3cmである。**6**～**16**は有溝土錘である。**6**が17.1gで最小、**7**～**11**が概ね20～30g、**12**～**14**が40～50g、**15**、**16**が60g以上である。**17**は双孔棒状土錘である。円柱の両端に孔を開けた土錘で、小口には穿孔方向と同じ向きに溝状の浅いくぼみがある。**18**～**20**は大型の管状土錘である。長さ8～10cm、胴部最大径4cm前後のもので、孔径は、**18**、**20**が14mm前後、**19**が18mmとなっている。



第78図　土錘（S=1/4）

（7）飯蛸壺（第79・80図）

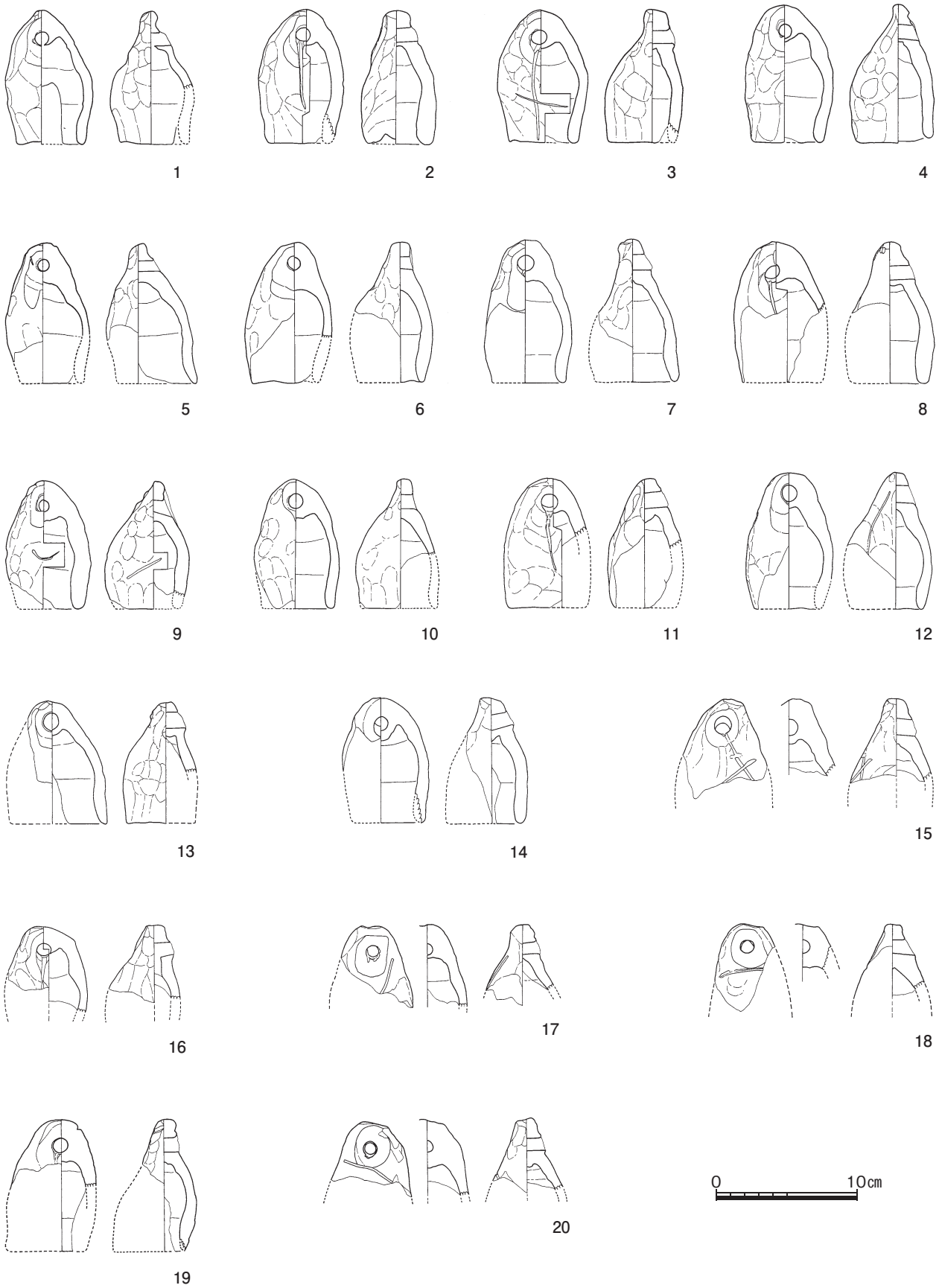
今回の確認調査で出土した飯蛸壺は全て釣鐘形のもので、直径1㎝くらいの孔を開けた吊手部と卵形の体部からなる。先行研究（乗松真也「備讃瀬戸及び沿岸地域出土の飯蛸壺」『研究紀要 XI』（財）香川県埋蔵文化財センター　2004）を参考に、2つのタイプに分類して記述する。

① 土器の体頂部を押しつぶして扁平な吊手部がつくり出されており、吊手部と体部は連続し、両者の明瞭な境が見られないもの。内面には強いナデが施される。乗松論文の6類を参照する。

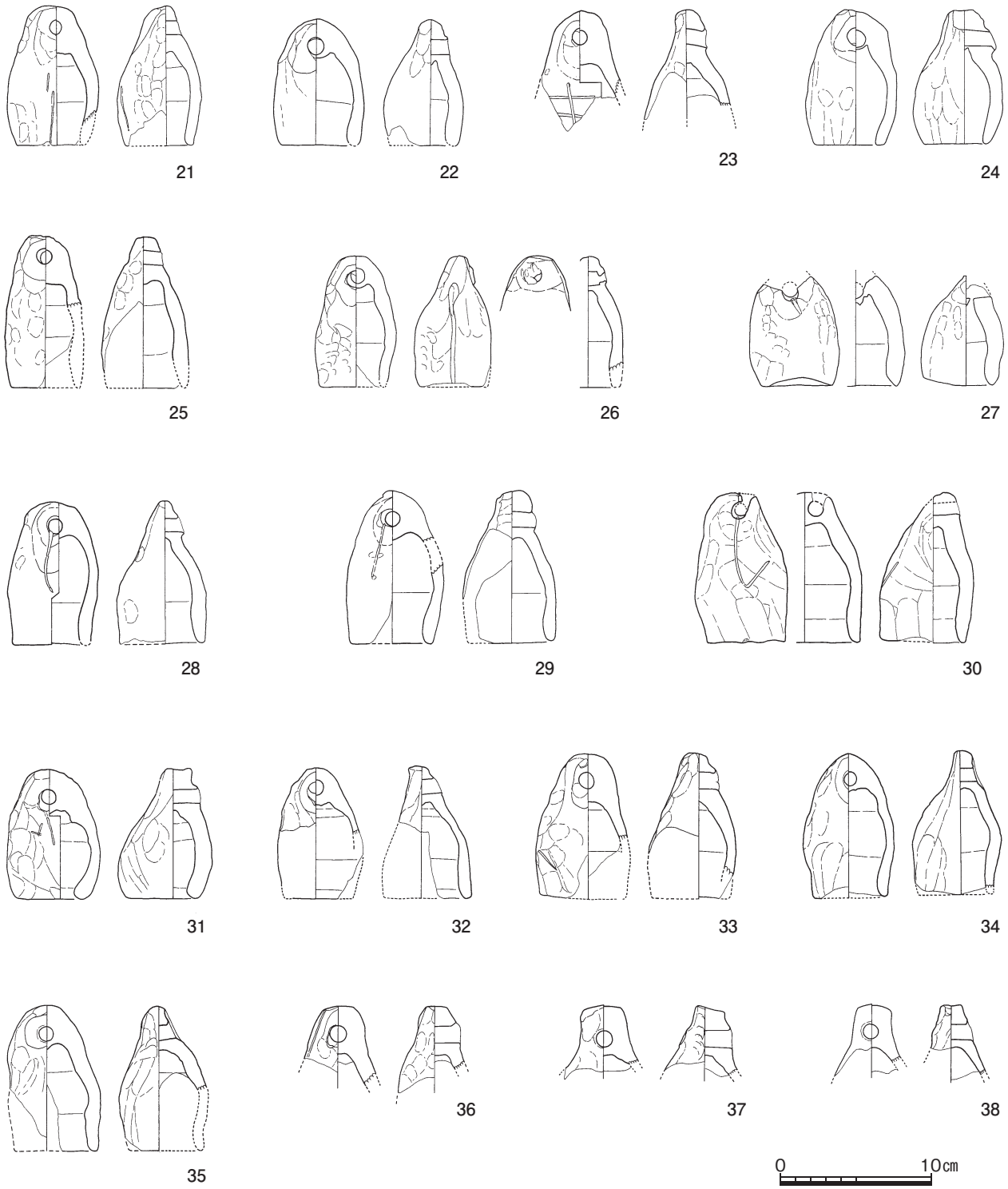
② 体部とは明瞭に区別される方柱状の吊手部をもつもの。内面には強いナデが施される。同3類を参照する。

①のタイプ（**1**～**36**）

実測図で示す正面の吊手部は大きくくぼんでいる（以下こちら側を正面とする）。反対側にも小さく目立たないくぼみがあるものと、全然くぼまないものがある。側面から見ると前後対称ではなく、人体に例えると背と腹のような形をしている。吊手部上面を丸く仕上げるものが多いが、砲弾の先のように尖らせ気味にしているもの（**1**、**10**、**32**、**34**）や指オサエが加えられるもの（**16**、**24**、**31**）もある。体部外面には指頭圧痕がみられ、多少のナデ調整が認められるものの全体的に粗雑な仕上がりである。その中で**22**、**27**は比較的丁寧なナデ調整が施される。一方内面は、強いナデを加え、滑らかな丸い形になるよう入念に調整されている。飯蛸の水揚げに影響する重要な作業として意識されたのかもしれない。内面の天井部は、押しつぶされた後さらに穿孔によって粘土壁が寄せられ、複雑な



第79図　飯蛸壺１（S=1/4）



第80図　飯蛸壺２（S=1/4）

形になっているが、この部分にも指ナデを加えるものが少しある。天井部に見られる粘土の寄せ方向、穿孔の際に孔から押し出された粘土が背面で多く認められることから、穿孔は正面側からなされたと考えられる。**26**は穿孔が不十分なため背面の孔の入口に粘土が少し残り、2/3くらいの面積がふさがれたままの状態で焼成されている。縄ずれも認められず実用に耐えなかったものかもしれないが、この状況から、穿孔具は一方通行ではなく、貫通させたのちに引き返す方法であったと想像される。

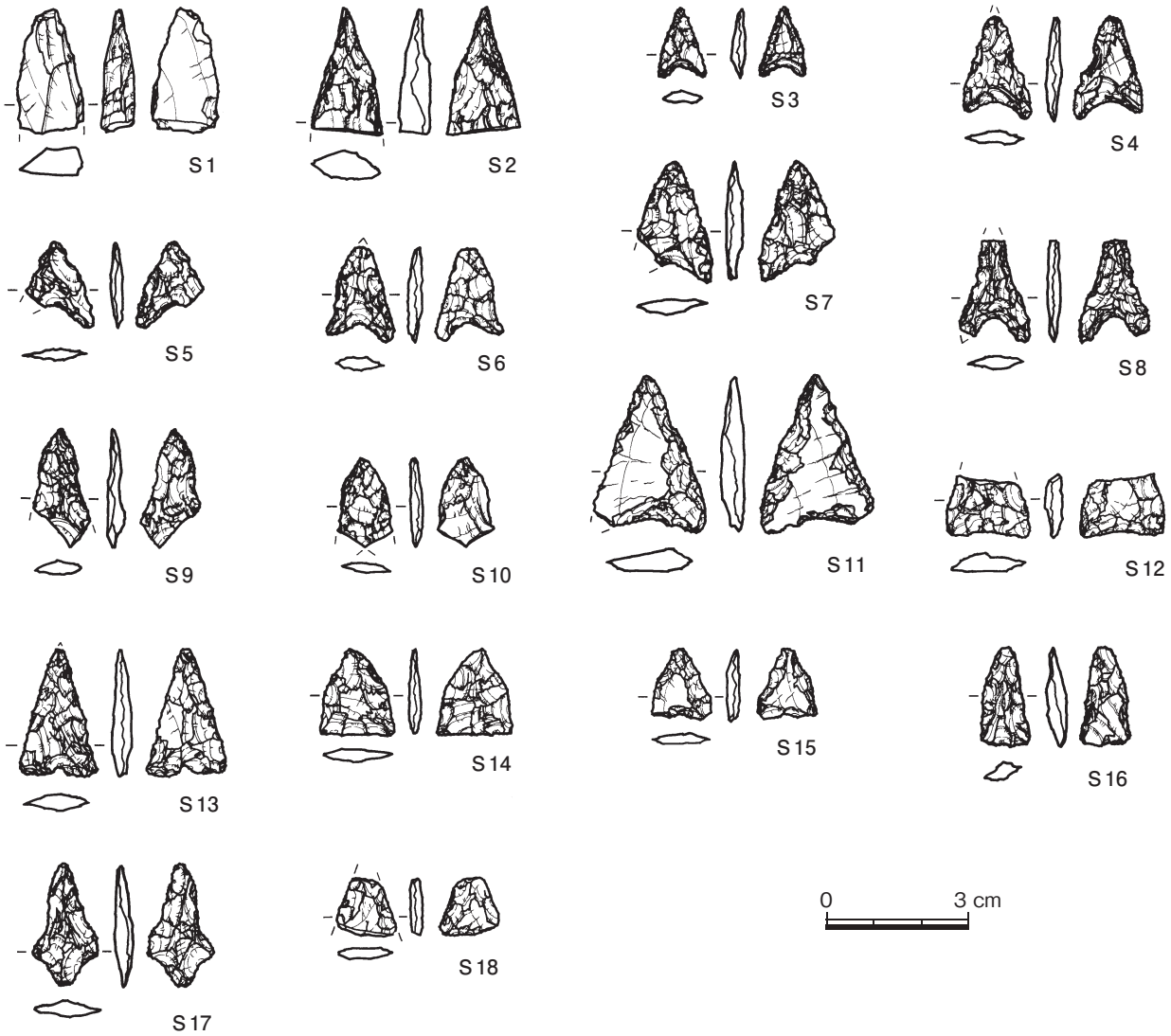
正面から孔の入口を見ると下の位置に先細りの短い線が認められる個体が多くあり、穿孔具抜き取りの痕跡と思われる。この線を延長してヘラ記号が描かれるのが**2**、**3**、**8**、**11**、**16**、**28**～**30**である。完形に近い10個体の容量を簡易的に量ると、最大が91ml、最小が46mlとなり、今回出土したこのタイプの飯蛸壺は100ml以下のサイズと言えるであろう。

②のタイプ（**37**、**38**）

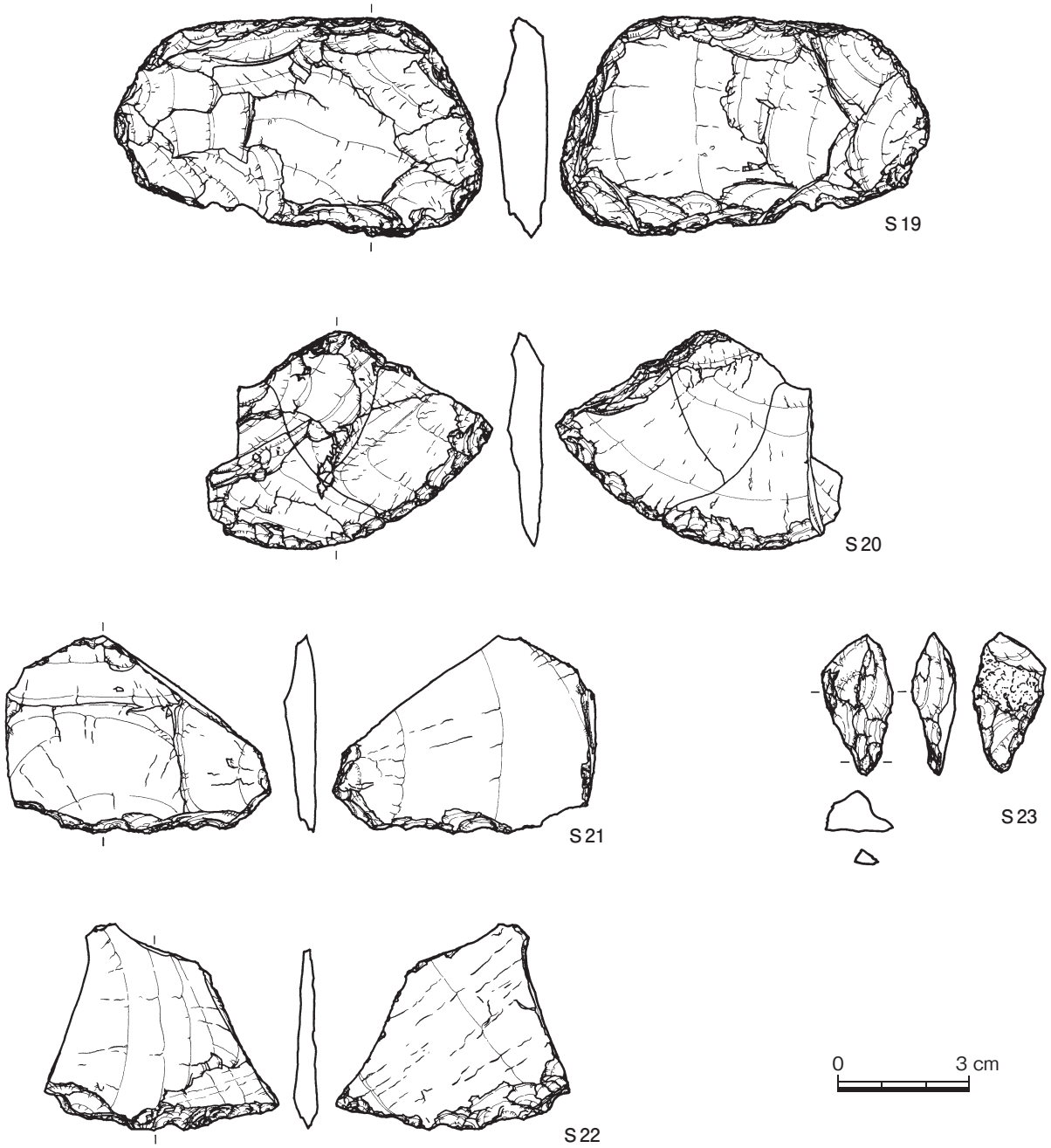
吊手部の上面に明瞭な成形意図が認められる。**37**の吊手部の上面は若干のくぼみがあるものの平坦に近く、広い。**38**にはくぼみがある。体部外面には指頭圧痕がみられ、内部の天井には丁寧なナデ調整が施される。体部上位に限っての比較となるが、①のタイプに比べてやや薄手である。

（8）石器（第81～84図）

各トレンチからはサヌカイト製（硬質安山岩含）石器・剥片など948点、流紋岩製剥片143点、砂岩製の石錘・敲石各1点が出土している。サヌカイトの総重量は4,438.97g、流紋岩は823.9gである。石材の産地分析は行ってはいないが、サヌカイトは地理的条件から香川県からもたらされたものがほとんどであると考えてよいであろう。流紋岩については、緑灰色を呈しガラス質が強いものが多



第81図　石器１（Ｓ＝2/3）

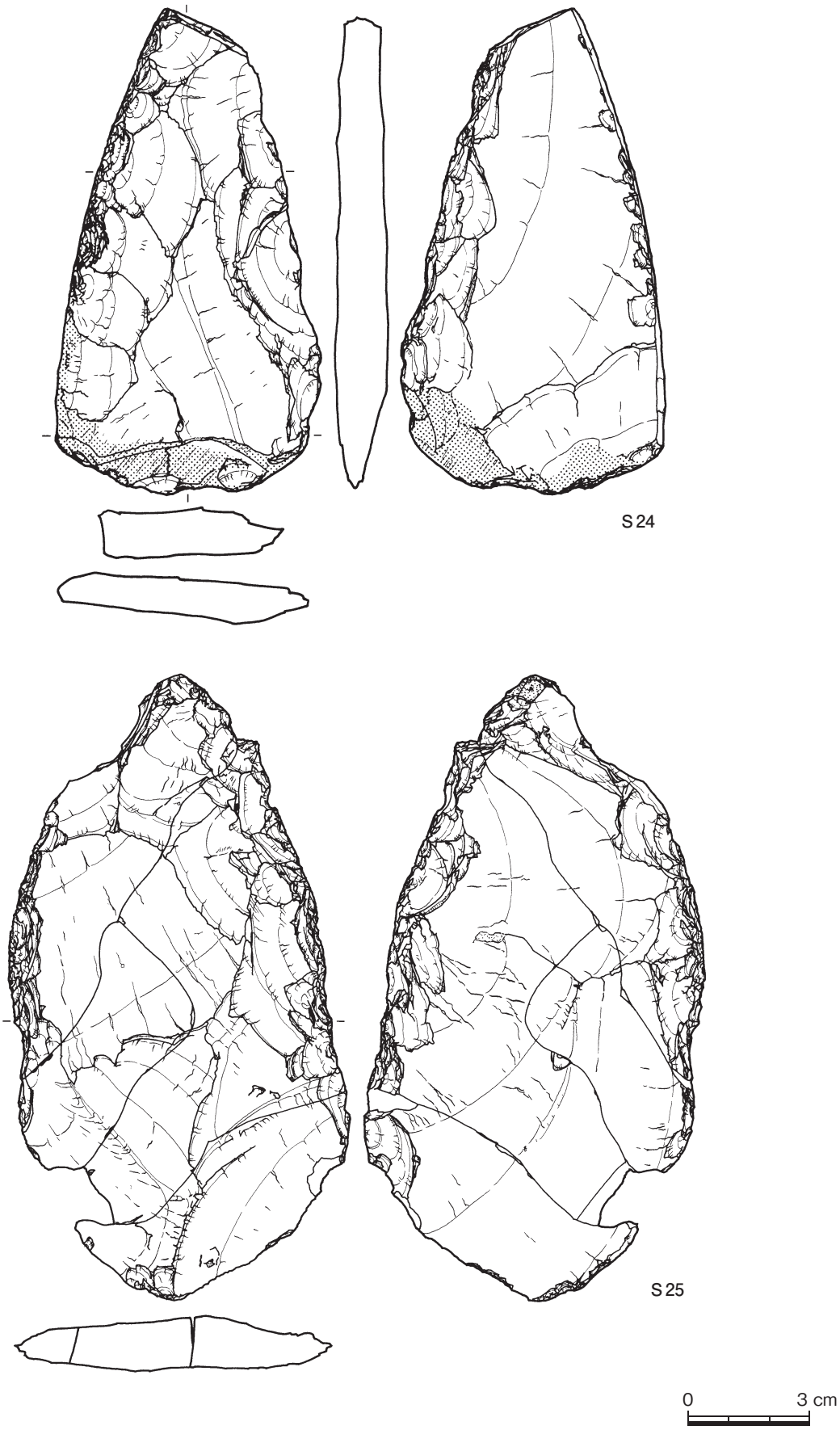


第82図　石器２（Ｓ＝2/3）

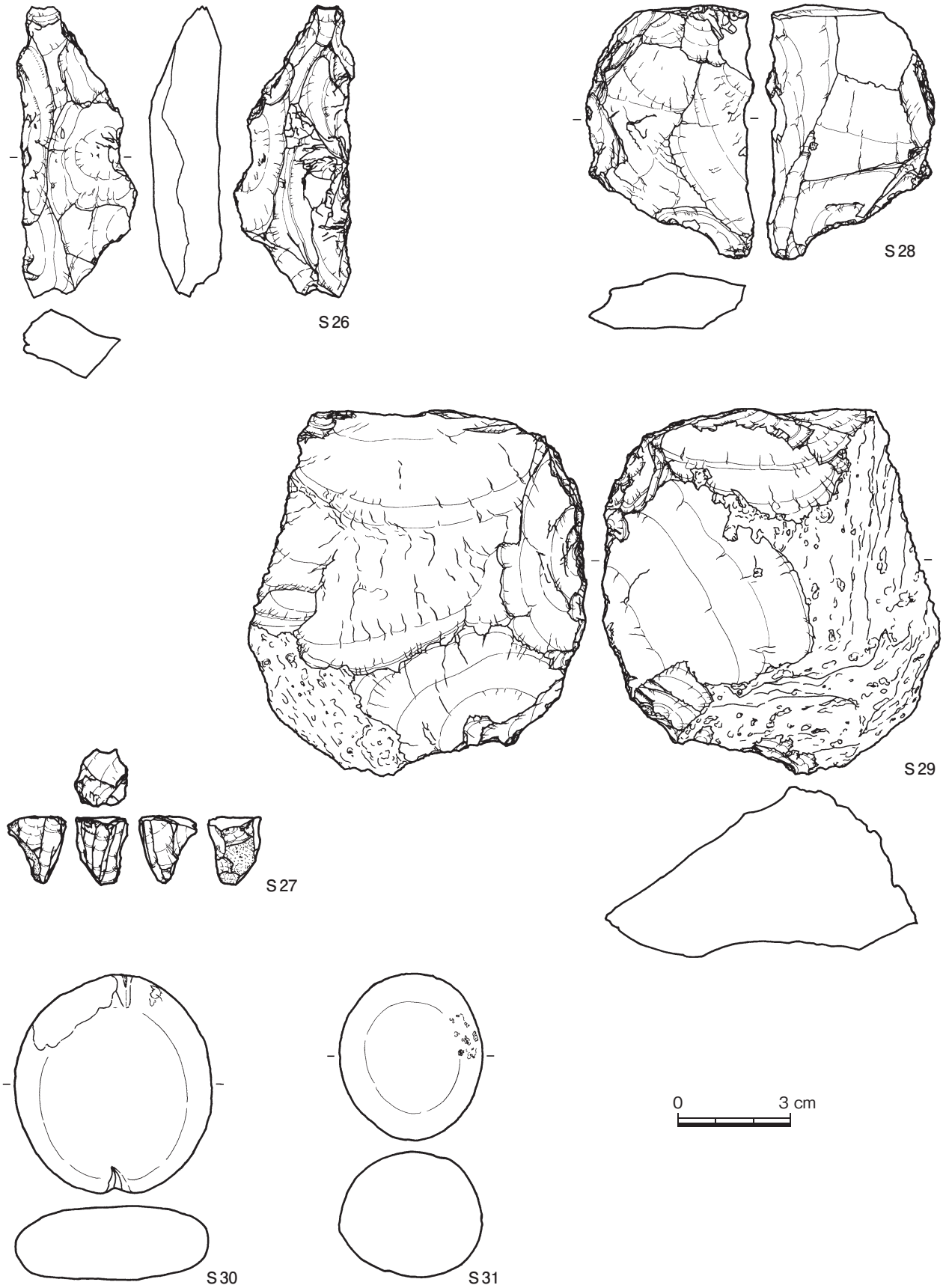
いという特徴から市内玉島黒崎で産出するものと考えられる。器種として明確なものはナイフ形石器1点、尖頭器1点、石鏃16点、スクレイパー10点、石鍬2点、楔形石器4点、二次加工のある剥片10点、使用痕のある剥片2点、細石刃核1点、石錘1点、敲石1点などがある。

S1はサヌカイト製のナイフ形石器である。欠損しているが、横長剥片を素材とする一側縁加工のものである。刃潰し加工は腹面側から行われている。また、背面のネガティブ面は2枚以上であるので、連続的に剥片を剥離する際の打点が左右に振れていることがわかる。

S2はサヌカイト製の尖頭器である。やはり欠損しているが、厚手で、比較的細かい押圧剥離によって成形されており、特に先端部は鋭く仕上げられている。



第83図　石器３（Ｓ＝2/3）



第84図　石器４（Ｓ＝2/3）

S3 ～ S18はサヌカイト製の石鏃である。S3 ～ S13は凹基鏃である。S5やS8などはやや深い抉りを持つが、全体に緩やかなカーブを描く浅い抉りのものが多い。S8・S9の側縁部はやや内湾する形状であり、S10も同様であると推定される。S11は今回の調査で出土した石鏃の中では最も大きなもので、長さ3.31㎝、重量2.6gを測る。S13は基部中央に申し訳程度の抉りが施されている。S14 ～ S16は平基鏃である。S14は側縁に変換点があり、五角形状を呈する。S16は長幅比の大きい縦長の形状を呈している。S17は凸基鏃である。調整が粗く、未製品の可能性もある。

S19 ～ S22はサヌカイト製のスクレイパーである。S19はやや厚手の剥片を素材としており、背部には丹念なつぶし加工が行われている。刃部には後世のものと考えられる欠損が認められる。S20は不定形の剥片を素材としていると考えられるが、三つに分かれて出土したものの接合したものである。刃部は大きく湾曲し、丹念な両面加工が行われている。S21・S22も不定形の剥片を素材としている。背部につぶし加工は行われておらず、刃部の加工もやや粗いものである。

S23はサヌカイト製の石錐ではないかと推定される。礫面を残す、やや厚手の剥片を素材としており、使用痕は明確ではない。

S24・S25はサヌカイト製の石鍬である。S24は長台形状を呈し、側縁は両面剥離とつぶし加工によって成形されている。また、刃部には使用による磨耗痕が明瞭に観察される。S25は楕円形あるいは短冊形を呈するものである。使用痕は認められず、未製品である可能性もある。

S26 ～ S29は石核である。S26はサヌカイト製で、打面と作業面を交互に入れ替え、打面転移を行いながら横長剥片を剥離しており、旧石器時代のものと考えられる。S27は硬質安山岩製の細石刃核である。打面長1.5㎝、打面幅1.32㎝、作業面長1.81㎝、重さ3.1gを計り、最終剥離面は長さ15㎜程度、幅3.5㎜程度の細石刃を剥離している。また、礫面を多く残しており、素材は礫の可能性がある。S28・S29はサヌカイト製で、求芯状に不定形剥片を剥離していくものである。S29は礫面を多く残している。

S30は砂岩製の切目石錘である。自然礫を磨いて扁平にした後、切目を表裏両面から入れている。縄文後期のものと考えられる。

S31は砂岩製の敲石ではないかと推定される。敲打痕1か所が確認できるが、磨耗痕は明瞭には確認できない。

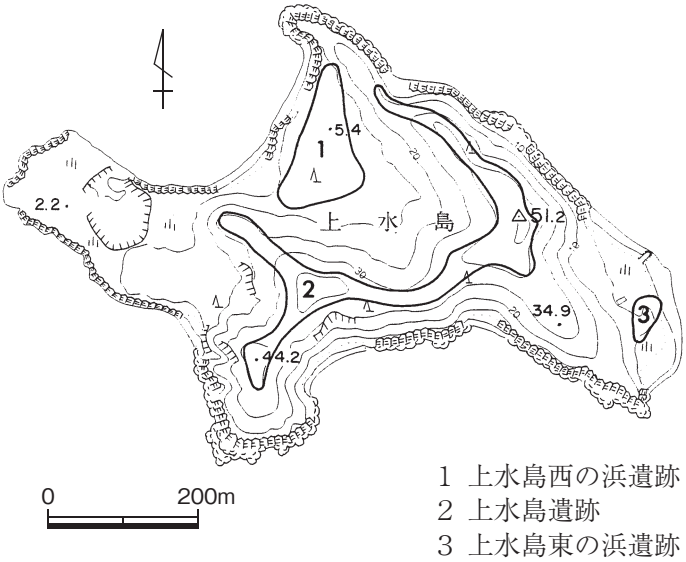
第４節　まとめ

今回の調査では、上水島遺跡の範囲及び性格を把握するため、丘陵尾根、西の浜、東の浜の3地区に分けて行った。その結果、それぞれの地区で遺跡が確認され、上水島遺跡、上水島西の浜遺跡、上水島東の浜遺跡として周知することとなった。

丘陵尾根に立地する上水島遺跡からは主に旧石器時代と縄文時代の石器、土器が出土した。旧石器時代の主な遺物にはナイフ形石器、石核、細石刃核などがあり、剥片まで含めるとこの時代の遺物は比較的高い密度で散布していると言える。縄文時代の主な遺物としては、中期前葉及び彦崎ＫⅡ式段階の縄文土器、石鏃、石鍬がある。

西の浜遺跡では、丘陵側を除く全てのトレンチで遺物包含層を確認した。想定される遺跡の範囲

は南北200m、東西は最大で100mで、その平面形はこの海岸に形成された砂州の形そのものであろう。T41 ～ T44の基盤層上面の高さの推移は2.1m・3.1m･2.8m･2.0mとなり、中央が高く、縁辺部が低くなっている。このことから、砂州の丘陵側は後背湿地になっていたことがうかがえる。9か所のトレンチでピット・土坑を検出したが、時期や性格については明らかでない。出土遺物については、土器類のほとんどが小片ではあるが、縄文時代前期～晩期、古墳時代後期、奈良・平安時代前期までの遺物が出土した。また、漁具としては、管状土錘、有溝土錘、双孔棒状土錘や比較的多く出土する釣鐘形の飯蛸壺がある。土錘については古代に限らず、中近世のものも含まれているであろう。飯蛸壺については、まだ十分な資料調査ができていない状況であるが、概ね奈良・平安時代前期のものと考えたい。



第85図　遺跡の範囲（S＝1/10,000）

東の浜でも西の浜と同様の遺跡が確認された。狭小な地形に製錬所の社員住宅が立ち並んでいたため、遺跡の保存状態は良くないが、縄文時代、奈良・平安時代前期の遺物が出土した。

参考文献

大山真充・真鍋昌宏「大浦浜遺跡」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅴ』香川県教育委員会　1988
大山真充「香川・大浦浜遺跡の国家的祭祀について」『同志社大学考古学ｼﾘｰｽﾞⅠ 考古学と古代史』1982
巌津政右衛門「岡山の島」『岡山文庫84』日本文教出版株式会社　1978
『写真集　岡山県民の明治大正』山陽新聞社　1986
吉沢利忠「聞き書き　精錬所時代の上水島」『倉敷の歴史　第3号』倉敷市　1993
「第五編　近代」『玉野市史』玉野市史編纂委員会編 1970

出土遺物観察表

１．縄文土器観察表

番号	出土トレンチ／層位・遺構	器　種	部　位	法　量（cm）	文様などの特徴	色　調	胎土中の砂粒（mm）
1	T30 ／暗赤褐色砂	深　鉢	胴部	器厚 0.5	内外面二枚貝条痕	にぶい黄褐色 10YR5/4	1 ～ 2
2	T31 ／黒褐色砂	深　鉢	胴部	器厚 0.7	内外面二枚貝条痕	にぶい黄褐色 10YR5/3	1 ～ 2
3	T46 ／土坑 1	深　鉢	胴部	器厚 0.7	RL 縄文・爪形文	褐灰色 10YR5/1	1 ～ 3
4	T31 ／黒褐色砂	深　鉢	胴部	器厚 0.6	疑口縁・RL 縄文・半截竹管による平行線文（竹管文）	褐灰色 10YR4/1	1 ～ 2
5	T42 ／淡黒褐色粗砂	深　鉢	胴部	器厚 0.5	RL 縄文	灰黄褐色 10YR5/2	1 ～ 2
6	T32 ／ピット 2	深　鉢	胴部	器厚 0.6 ～ 0.9	RL 縄文・竹管文	にぶい黄橙色 10YR6/3	1 ～ 3
7	T32 ／ピット 1	深　鉢	口縁部	器厚 0.6	RL 縄文・竹管文	灰黄褐色 10YR5/2	1 ～ 2
8	T32 ／ピット 2	深　鉢	胴部	器厚 0.9 ～ 1.0	竹管文	にぶい橙色 10YR6/4	1 ～ 3
9	T31 ／黒褐色砂	深　鉢	胴部	器厚 0.5 ～ 0.7	竹管文・波状文？	にぶい黄褐色 10YR4/3	1 ～ 3
10	T31 ／黒褐色砂	深　鉢	口縁部	器厚 0.5	撚糸文・沈線文・渦巻文	灰黄褐色 10YR5/2	1 ～ 2
11	T30 ／暗赤褐色砂	深　鉢	口縁部	器厚 0.6 ～ 0.7	撚糸文・竹管文・渦巻文	灰黄褐色 10YR5/2	1 ～ 4
12	T30 ／ピット 1	深　鉢	口縁部	器厚 0.6 ～ 0.7	撚糸文・竹管文	灰黄褐色 10YR5/2	1 ～ 3
13	T32 ／黒褐色砂	深　鉢	口縁部	器厚 0.6 ～ 0.7	沈線文・刺突文・渦巻文	灰黄褐色 10YR5/2	～ 1
14	T32 ／黒褐色砂	深　鉢	口縁部	器厚 0.7 ～ 1.0	平行線を伴う突帯文・刺突文	灰黄褐色 10YR6/2	1 ～ 2
15	T32 ／ピット 2	深　鉢	口縁部	器厚 0.6	沈線文・刺突文	にぶい黄橙色 10YR7/3	～ 1
16	T32 ／黒褐色砂	深　鉢	口縁部	器厚 0.5	竹管文・刺突文	灰黄褐色 10YR5/2	～ 1
17	T46 ／土坑（褐灰色粗砂）	深　鉢	口縁部	器厚 0.5	波状文・口縁端に刻目	灰黄褐色 10YR5/2	1 ～ 3
18	T32 ／黒褐色砂	深　鉢	口縁部	器厚 0.5 ～ 0.6	波状文・口縁端に刻目	灰褐色 7.5YR5/2	1 ～ 2
19	T31 ／黒褐色砂	深　鉢	胴部	器厚 0.7 ～ 0.8	撚糸文・竹管文	灰黄褐色 10YR5/2	1 ～ 2
20	T32 ／黒褐色砂	深　鉢	胴部	器厚 0.5 ～ 0.6	撚糸文・竹管文	にぶい黄橙色 10YR6/3	1 ～ 3
21	T31 ／黒褐色砂	深　鉢	胴部	器厚 0.7 ～ 0.8	L 撚糸文	褐灰色 10YR4/1	1 ～ 2
22	T31 ／黒褐色砂	深　鉢	胴部	器厚 0.7 ～ 0.8	L 撚糸文・竹管文	褐灰色 10YR4/1	1 ～ 2
23	T32 ／黒褐色砂	深　鉢	胴部	器厚 0.7 ～ 0.8	二枚貝による縦位の条痕	にぶい褐色 7.5YR5/4	1 ～ 4
24	T46 ／土坑（褐灰色粗砂）	深　鉢	口縁部	器厚 0.4 ～ 0.5	RL 縄文を充填する区画文	褐灰色 10YR4/1	1 ～ 3
25	T42 ／淡黒褐色粗砂	深　鉢	口縁部	器厚 0.7 ～ 0.8	LR 縄文・沈線文	灰黄褐色 10YR5/2	1 ～ 2
26	T46 ／土坑（褐灰色粗砂）	深　鉢	口縁部	器厚 0.5 ～ 0.6	沈線文	灰黄褐色 10YR5/2	1 ～ 2
27	T32 ／黒褐色砂	深　鉢	胴部	器厚 0.4 ～ 0.5	沈線文	にぶい黄橙色 10YR6/3	1 ～ 2
28	T42 ／淡黒褐色粗砂	深　鉢	口縁部	器厚 0.7 ～ 0.8	巻貝条痕・区画文	褐灰色 10YR4/1	1 ～ 4
29	T32 ／黒褐色砂	深　鉢	口縁部	器厚 0.7 ～ 0.8	磨消縄文（RL）	にぶい黄橙色 10YR6/3	1 ～ 2
30	T46 ／土坑（褐灰色粗砂）	深　鉢	口縁部	器厚 0.5 ～ 0.6	磨消縄文（RL）	にぶい黄橙色 10YR6/3	1 ～ 2
31	T32 ／淡黒褐色砂	深　鉢	胴部	器厚 0.5 ～ 0.7	磨消縄文（RL）	にぶい黄橙色 10YR6/4	1 ～ 2
32	T32 ／淡黒褐色砂	深　鉢	胴部	器厚 0.5 ～ 0.7	磨消縄文（RL）	にぶい黄橙色 10YR6/4	1 ～ 3
33	T32 ／黒褐色砂	浅　鉢	口縁部	器厚 0.6 ～ 0.8	巻貝条痕・沈線文	にぶい黄橙色 10YR6/3	1 ～ 2
34	T32 ／淡黒褐色砂	深　鉢	口縁部	器厚 0.5 ～	口縁肥厚部に沈線・RL 縄文・刻目	灰黄褐色 10YR6/2	1 ～ 3
35	T32 ／黒褐色砂	深　鉢	口縁部	器厚 0.7 ～	口縁肥厚部に沈線・RL 縄文	灰黄褐色 10YR6/3	1 ～ 3
36	T32 ／淡黒褐色砂	深　鉢	口縁部	器厚 0.9 ～	口縁肥厚部に沈線・RL 縄文・外面に垂下条線	灰黄褐色 10YR6/3	1 ～ 3
37	T32 ／黒褐色砂	深　鉢	口縁部	器厚 0.7 ～ 0.8	磨消縄文（RL）・沈線内に刺突	黒褐色 10YR3/1	1 ～ 3
38	T32 ／淡黒褐色砂	深　鉢	口縁部	器厚 0.6 ～ 0.7	口縁肥厚部に沈線文・波頂部に焼成前穿孔	にぶい黄橙色 10YR6/3	1 ～ 2
39	T30 ／黒褐色砂	鉢	口縁部	器厚 0.4 ～ 0.5	結節縄文・沈線内に刺突列	にぶい黄橙色 10YR6/4	～ 1
40	T30 ／黒褐色砂	鉢	口縁部	器厚 0.5 ～ 0.6	口縁部内外に RL 縄文・内側に沈線	褐灰色 10YR4/1	1 ～ 2
41	T42 ／淡黒褐色粗砂	深　鉢	口縁部	器厚 0.5 ～ 0.6	口縁内面に LR 縄文・波頂部に三日月形沈線	褐灰色 10YR4/1	1 ～ 3
42	T53 ／ピット 1（明赤褐色土）	鉢	口縁～胴部	器厚 0.4 ～ 0.7	口縁部と胴部に LR 縄文・頸部の上下境に沈線	にぶい黄褐色 10YR5/3	1 ～ 3
43	T32 ／黒褐色砂	深　鉢	口縁部	器厚 0.4 ～ 0.5	口縁内面に斜刻線・沈線	にぶい黄褐色 10YR5/3	～ 1
44	T42 ／黒褐色砂	深　鉢	口縁部	器厚 0.6 ～ 0.7	口縁内面に細い半截竹管による沈線	にぶい褐色 7.5YR5/4	1 ～ 2
45	T30 ／暗赤褐色砂	深　鉢	口縁部	器厚 0.7 ～ 0.8	口縁外面に沈線・巻貝圧痕・内面に沈線・斜刻線・刺突文	灰黄褐色 10YR4/2	1 ～ 2
46	T30 ／黒褐色砂	深　鉢	口縁部	器厚 0.7 ～ 1.0	外面巻貝条痕	灰黄褐色 10YR6/2	1 ～ 3
47	T46 ／土坑（褐灰色粗砂）	深　鉢	口縁部	器厚 0.6 ～ 0.9	内外面巻貝条痕	橙色 5YR6/6	1 ～ 3
48	T43 ／黒褐色粗砂	深　鉢	口縁部	器厚 0.5 ～ 0.6	内外面巻貝条痕のちミガキ	褐灰色 10YR4/1	1 ～ 3
49	T32 ／黒褐色砂	深　鉢	口縁部	器厚 0.6 ～ 0.7	口縁内側を肥厚	にぶい褐色 7.5YR5/3	1 ～ 3
50	T32 ／黒褐色砂	深　鉢	口縁部	器厚 0.6 ～ 0.7	口縁内側を肥厚	灰褐色 7.5YR5/2	1 ～ 3
51	T42 ／黒褐色砂	深　鉢	口縁部	器厚 0.4 ～ 0.5	口縁を内側に屈曲	灰黄褐色 10YR6/2	1 ～ 2
52	T42 ／黒褐色砂	深　鉢	口縁部	器厚 0.4 ～ 0.5	外面巻貝条痕	灰黄褐色 10YR6/2	1 ～ 2
53	T43 ／ピット 1	深　鉢	口縁部	器厚 0.5 ～ 0.6	内外面巻貝条痕のちナデ	灰褐色 7.5YR5/2	1 ～ 3
54	T46 ／淡黒褐色粗砂	深　鉢	口縁部	器厚 0.7 ～ 0.8	口縁を内側に屈曲	褐灰色 7.5YR4/1	1 ～ 2

（）内は復元値

番号	出土トレンチ／層位・遺構	器　種	部　位	法　量（cm）	文様などの特徴	色　調	胎土中の砂粒（mm）
55	T53／黒色砂質土	深　鉢	口縁部	器厚 0.7 ～ 0.8	口縁を内側に屈曲・内外面巻貝条痕	にぶい黄褐色 10YR5/3	1 ～ 4
56	T32／黒褐色砂	深　鉢	口縁部	器厚 0.5 ～ 0.6	内外面巻貝条痕のちナデ	褐灰色 7.5YR4/1	1 ～ 3
57	T46／土坑（褐灰色粗砂）	浅　鉢	口縁部	器厚 0.7 ～ 0.8	内外面巻貝条痕のちミガキ	褐灰色 10YR4/1	1 ～ 3
58	T31／ピット 1	浅　鉢	口縁部	器厚 0.3	内外面にミガキ・焼成後穿孔	にぶい黄褐色 10YR5/3	～ 1
59	T31／黒褐色砂	浅　鉢	口縁部	器厚 0.5 ～ 0.6	内外面巻貝条痕のちナデ・焼成後穿孔	灰褐色 7.5YR5/2	1 ～ 3
60	T43／ピット 1	浅　鉢	口縁部	器厚 0.3	内外面ミガキ・沈線文・細い竹管による円形刺突文	灰黄褐色 10YR5/2	1 ～ 2
61	T43／黒褐色粗砂	浅　鉢	口縁部	器厚 0.4 ～ 0.5	外面ミガキ	にぶい黄褐色 10YR5/3	1 ～ 2
62	T42／黒褐色砂	深　鉢	胴部	器厚 0.5 ～ 0.6	頸部・胴屈曲部に爪形文・外面頸部ナデ・胴部ケズリ	褐灰色 10YR4/1	1 ～ 2
63	T42／黒褐色砂	深　鉢	胴部	器厚 0.4 ～ 0.5	胴屈曲部に爪形文・外面頸部ナデ・胴部ケズリ	褐灰色 10YR5/1	1 ～ 2
64	T32／黒褐色砂	深　鉢	胴部	器厚 0.4 ～ 0.5	胴屈曲部に爪形文・外面頸部ナデ・胴部ケズリ	明黄褐色 10YR6/6	1 ～ 2
65	T42／黒褐色砂	深　鉢	胴部	器厚 0.5 ～ 0.6	頸部・胴屈曲部に半截竹管による押引文・外面頸部ナデ	褐灰色 10YR4/1	1 ～ 3
66	T53／暗赤褐色土	深　鉢	口縁部	器厚 0.5 ～ 0.6	刻目突帯・口縁端に刻目	にぶい黄橙色 10YR6/4	1 ～ 2
67	T41／黒褐色砂	深　鉢	口縁部	器厚 0.5	突帯	褐灰色 10YR4/1	1 ～ 2
68	T32／黒褐色砂	鉢	口縁部	器厚 0.4 ～ 0.5	口縁拡張・外面に段状の沈線	褐灰色 10YR4/1	1 ～ 2
69	T32／暗灰褐色土	鉢	口縁部	器厚 0.4 ～ 0.6	口縁内面を肥厚	にぶい黄橙色 10YR6/3	1 ～ 2
70	T32／黒褐色砂	鉢	口縁部	器厚 0.4 ～ 0.5	口縁内面を肥厚	橙色 7.5YR6/6	1 ～ 2
71	T42／黒褐色砂	鉢	口縁部	器厚 0.4 ～ 0.5	口縁内面を肥厚	褐灰色 10YR4/1	1 ～ 2
72	T42／黒褐色砂	鉢	口縁部	器厚 0.4 ～ 0.5	口縁内面を凸状に削り出す・外面に細い沈線	褐灰色 10YR4/1	1 ～ 2
73	T31／黒褐色砂	鉢	口縁部	器厚 0.4 ～ 0.6	口縁内面に沈線	にぶい黄橙色 10YR6/3	1 ～ 2
74	T42／黒褐色砂	深　鉢	口縁部	器厚 0.5 ～ 0.6	外面二枚貝条痕・内面口縁部ナデ	褐灰色 10YR4/1	1 ～ 2
75	T32／黒褐色砂	鉢	胴部	器厚 0.5 ～ 0.6	胴屈曲部に刻目・内外面ミガキ	褐灰色 10YR4/1	1 ～ 2
76	T32／黒褐色砂	鉢	胴部	器厚 0.4 ～ 0.5	内外面ミガキ	褐灰色 10YR4/1	1 ～ 2

( ) 内は復元値

２．その他の土器観察表

番号	出土トレンチ／層位・遺構	器　種	法 量(cm)	特　徴	色　調	残　存
77	T21／暗褐色粗砂	土師器椀		外面ナデ・内面指頭圧痕	明赤褐色 5YR5/6	1/3
78	T48／褐灰色土	土師器甕		摩耗が著しい	にぶい褐色 7.5Y5/3	1/8
79	T30／黒褐色砂	土師器皿		ヨコナデ・内外面丹塗り	明赤褐色 5YR5/6	口縁部小片
80	T30／黒褐色砂	土師器皿		ヨコナデ・内外面丹塗り	明褐色 7.5YR5/6	口縁部小片
81	T29／茶褐色土	土師器皿	口径（16.0） 底径（14.2） 器高 1.7	ヨコナデ・底部外面は指頭圧痕・内外面丹塗り	橙色 5YR6/6	底部 1/3
82	T53／暗赤褐色土	土師器皿か高杯	器高 1.7	ヨコナデ・底部外面はヘラ切りのち指頭圧痕・内外面丹塗り	明赤褐色 5YR5/6	口縁部小片
83	T42／黒褐色砂	土師器杯		高台付き・ヨコナデ	にぶい褐色 7.5YR6/3	底部小片
84	T30／黒灰色砂	土師器甕	口径 13.2 器高（20.0）	外面上から２／３程度タテハケ・下部指頭圧痕・内面上位ヘラケズリ・下位指ナデ	にぶい黄橙色 10YR7/4	1/2 弱
85	T30／ピット 1	土師器甕		外面タテハケ	にぶい橙色 7.5YR7/4	口縁部小片
86	T30／黒灰色砂	土師器甕		外面粗いタテハケ	にぶい橙色 10YR6/4	口縁部小片
87	T30／黒灰色砂	土師器甕		外面タテハケ・内面ヘラケズリ	明赤褐色 5YR5/6	口縁部小片
88	T30／黒褐色砂	土師器甕		外面タテハケ	褐灰色 10YR4/1	口縁部小片
89	T46／淡黒褐色粗砂	土師器甕		外面指ナデ状の凹凸・内面ヘラケズリ	明褐色 7.5YR5/6	口縁部小片
90	T31／暗茶褐色土	土師器甕		外面タテハケ・内面口縁部タテハケ	明黄褐色 10YR7/6	口縁部小片
91	T29／茶褐色土（造成土）	土師器甕		外面タテハケ	黒褐色 10YR3/1	口縁部小片
92	T46／土坑 1	土師器甕		内面上位ヨコハケのちナデ	褐灰色 7.5YR4/1	口縁部小片
93	T42／黒褐色砂	土師器甕	口径（28.4）	外面タテハケ・内面口縁部ヨコハケ・胴部ヨコハケのちナデ・指頭圧痕	暗灰黄色 2.5YR5/2	口縁部 1/4 弱
94	T34／黒褐色砂	土師器甕		外面タテハケ・内面上位ヨコハケのちナデ	にぶい褐色 7.5YR5/3	口縁部 1/6
95	T23／黒褐色腐植土	土師器盤		工具によるナデ・外面に指頭圧痕	橙色 5YR6/6	底部 1/4
96	T42／黒褐色砂	須恵器蓋杯（身）		回転ナデ	灰色 7.5Y5/1	口縁部小片
97	T31／攪乱坑	須恵器（蓋）		宝珠つまみ	オリーブ黒色 7.5Y3/1	つまみ部分
98	T30／黒褐色砂	須恵器甕		回転ナデ	灰色 N5/1	口縁部小片
99	T30／黒褐色砂	須恵器蓋杯（蓋）		回転ナデ	灰色 N6/1	口縁部小片
100	T34／黒褐色砂	須恵器杯	口径（17.6） 底径（12.8） 器高 4.5	高台付き・回転ナデ・底部外面はナデ仕上げ	明赤褐色 5YR5/6	1/3

( ) 内は復元値

番号	出土トレンチ／層位・遺構	器　種	法 量(cm)	特　徴	色　調	残　存
101	T34 ／黒褐色砂	須恵器杯		高台付き・回転ナデ	灰色 5Y6/1	底部小片
102	T31 ／攪乱坑	須恵器杯	口径（14.5） 底径（12.0） 器高（3.5）	回転ナデ・ 底部外面はヘラ切りのち指頭圧痕	灰色 5Y5/1	1/3
103	T46 ／淡黒褐色粗砂	須恵器杯		回転ナデ・ 底部外面はヘラ切りのちナデ	灰白色 2.5Y7/1	1/8
104	T31 ／黒褐色砂	須恵器杯	底径（7.6）	回転ナデ・ 底部外面はヘラ切りのちナデ	灰白色 5Y7/1	底部 1/2
105	T31 ／暗茶褐色土	須恵器杯	底径（6.4）	回転ナデ・ 底部外面はヘラ切りのちナデ	灰白色 5Y7/1	底部 1/2
106	T34 ／攪乱坑	須恵器杯		回転ナデ・ 底部外面はヘラ切りのちナデ	灰白色 5Y8/1	底部 1/4
107	T34 ／黒褐色砂	須恵器杯		回転ナデ・ 底部外面はヘラ切りのちナデ	灰白色 5Y8/1	底部 1/6
108	T31 ／ピット２	須恵器杯	底径（9.2）	回転ナデ・ 天井部外面は回転ヘラケズリ	灰白色 2.5Y7/1	底部 1/4
109	T31 ／暗茶褐色土	須恵器皿	底径（13.8）	回転ナデ・ 天井部外面は回転ヘラケズリ	灰色 7.5Y7/1	1/5
110	T31 ／黒褐色砂	黒色土器椀		内外面ヨコナデ後ヘラミガキ	内面：黒色 10YR2/1 外面：にぶい褐色 7.5YR5/3	口縁部 1/6
111	T42 ／黒褐色砂	黒色土器椀		内外面ヘラミガキ	内面：黒色 10YR2/1 外面：にぶい褐色 7.5YR5/3	底部 1/6
112	T42 ／淡黒褐色砂	黒色土器椀		内外面ヘラミガキ	内面：黒色 10YR2/1 外面：明褐色 7.5YR5/6	底部 1/8
113	T30 ／黒褐色砂	緑釉陶器椀		外面に釉薬が残る	灰オリーブ色 5Y6/2	口縁部小片
114	T46 ／灰黄褐色土（造成土）	緑釉陶器椀		平高台・内外面に釉薬が残る	透明感のある薄緑	底部小片
115	T30 ／黒褐色砂	脚台付製塩土器	脚径 5.2 脚高 1.5	脚部外面指頭圧痕	にぶい褐色 7.5YR5/3	脚部のみ
116	T30 ／黒褐色砂	脚台付製塩土器	脚径 5.6 脚高 1.4	外面指頭圧痕	にぶい橙色 7.5YR7/3	脚部のみ
117	T30 ／黒褐色砂	製塩土器		外面平行タタキ	にぶい褐色 7.5YR6/3	口縁部小片
118	T30 ／黒褐色砂	製塩土器		外面平行タタキ	にぶい褐色 7.5YR5/3	口縁部小片
119	T30 ／黒褐色砂	製塩土器		内外面ナデ、指頭圧痕	にぶい褐色 7.5YR6/3	口縁部小片
120	T34 ／暗茶褐色砂	製塩土器		内外面ナデ、指頭圧痕	にぶい橙色 7.5YR6/4	口縁部小片
121	T30 ／黒褐色砂	製塩土器		内外面ナデ、指頭圧痕	にぶい橙色 7.5YR6/4	口縁部小片
122	T34 ／暗茶褐色砂	製塩土器		内外面指頭圧痕	にぶい橙色 5YR6/4	底部小片
123	T30 ／黒褐色砂	製塩土器		内外面指頭圧痕	にぶい橙色 7.5YR7/4	底部小片
124	T30 ／黒灰色砂	製塩土器		内外面指頭圧痕	にぶい橙色 5YR6/4	底部小片

( ) 内は復元値

３．土錘観察表

番号	出土トレンチ／層位・遺構	器　種	最大値(cm)			孔径(mm)	重さ(g)	色　調
			長さ	幅・径	厚さ			
1	T44／褐灰色土	管状土錘	3.3	1.0	－	3.5	3.8	にぶい褐色　7.5YR5/3
2	T44／褐灰色土	管状土錘	3.4	1.2	－	2.9	4.0	灰黄色　2.5Y7/2
3	T44／褐灰色土	管状土錘	3.5	1.3	－	4.5	5.7	赤褐色 2.5Y4/6
4	T36／褐灰色土（造成土）	管状土錘	4.1	1.6	－	5.5	8.2	にぶい褐色　7.5YR5/3
5	T46／灰黄褐色土（造成土）	管状土錘	5.3	2.0	－	7.0	21.0	褐灰色　7.5YR4/1
6	T34／黒色砂	有溝土錘	3.5	2.6	2.0	－	17.1	褐灰色　7.5YR4/1
7	T31／暗茶褐色土	有溝土錘	4.1	2.7	2.1	－	24.9	にぶい黄褐色　10YR4/3
8	T34／暗茶褐色砂	有溝土錘	4.0	2.7	2.3	－	27.9	にぶい黄褐色　10YR4/3
9	T48／褐灰色土	有溝土錘	5.2	3.8	2.7	－	31.5	浅黄色　2.5YR7/3
10	T30／黒褐色砂	有溝土錘	5.3	2.6	1.8	－	24.0	にぶい褐色　7.5YR5/3
11	T30／黒褐色砂	有溝土錘	5.8	2.7	1.7	－	25.5	にぶい褐色　7.5YR5/3
12	T30／黒褐色砂	有溝土錘	5.3	3.1	2.4	－	39.6	にぶい褐色　7.5YR5/3
13	T34／黒色砂	有溝土錘	5.3	3.3	2.8	－	48.8	にぶい黄褐色　10YR5/3
14	T31／ピット1	有溝土錘	6.3	3.2	2.1	－	38.3	にぶい黄褐色　10YR5/3
15	T29／茶褐色土（造成土）	有溝土錘	6.4	3.8	3.4	－	71.6	にぶい赤褐色 5Y5/4
16	T29／茶褐色土（造成土）	有溝土錘	6.9	3.4	3.0	－	69.9	にぶい橙色　7.5YR6/4
17	T30／黒褐色砂	双孔棒状土錘	6.3	1.9	－	4.2	21.5	にぶい橙色　7.5YR6/4
18	T46／黒褐色粗砂	管状土錘	8.8	3.9	－	13.5	133.6	にぶい黄褐色　10YR5/3
19	T31／現代攪乱坑	管状土錘	9.5	3.7	－	18.0	116.1	にぶい橙色　7.5YR6/4
20	T30／黒褐色砂	管状土錘	9.7	4.2	－	14.1	168.8	にぶい黄橙色　10YR7/4

４．飯蛸壺観察表

番号	出土トレンチ／層位・遺構	高さ(cm)	最大幅(cm)	口径(cm)	容量(ml)	色　調
1	T30／黒褐色砂	9.6	6.1	3.8	−	橙色 7.5YR6/6
2	T30／黒褐色砂	9.5	6.0	3.8	56	にぶい褐色 7.5YR5/3
3	T30／黒褐色砂	9.5	6.4	4.2	69	浅黄色 2.5YR7/3
4	T30／黒褐色砂	9.8	6.3	4.3	84	にぶい黄橙色 10YR7/3
5	T30／黒褐色砂	9.9	6.1	−	−	にぶい橙色 7.5YR6/4
6	T30／黒褐色砂	10.0	6.3	−	−	橙色 5YR6/6
7	T30／黒褐色砂	10.2	6.2	−	−	にぶい橙色 7.5YR6/4
8	T30／黒褐色砂	10.0	−	−	−	橙色 5YR6/6
9	T30／黒褐色砂	9.1	6.0	−	−	明赤褐色 5YR5/6
10	T30／黒褐色砂	9.2	6.0	−	−	にぶい黄橙色 10YR7/4
11	T30／黒褐色砂	9.2	−	−	−	にぶい褐色 7.5YR6/3
12	T30／黒褐色砂	9.7	6.3	−	−	にぶい橙色 7.5YR6/4
13	T30／黒褐色砂	8.7	−	−	−	橙色 7.5YR6/6
14	T30／黒褐色砂	9.0	6.0	−	−	浅黄色 2.5YR7/3
15	T30／黒褐色砂	−	−	−	−	橙色 7.5YR6/6
16	T30／黒褐色砂	−	−	−	−	にぶい褐色 7.5YR5/3
17	T30／黒褐色砂	−	−	−	−	にぶい橙色 7.5YR6/4
18	T30／黒褐色砂	−	−	−	−	橙色 5YR6/6
19	T30／ピット1	9.4	−	−	−	にぶい褐色 7.5YR5/4
20	T30／ピット1	−	−	−	−	明赤褐色 5YR5/8
21	T29／茶褐色土（造成土）	9.3	6.1	3.6	63	明赤褐色 7.5YR5/6
22	T31／ピット2	9.0	6.0	4.1	49	灰黄褐色 10YR4/2
23	T31／黒褐色砂	−	−	−	−	明赤褐色 5YR5/6
24	T31／黒褐色砂	8.7	6.0	3.8	66	にぶい黄褐色 10YR5/3
25	T31／攪乱坑	10.1	−	−	−	にぶい褐色 7.5YR5/4
26	T31／攪乱坑	8.7	5.3	3.4	46	灰黄褐色 10YR6/2
27	T35／黒褐色砂	−	6.0	3.7	−	にぶい黄褐色 10YR5/3
28	T42／淡黒褐色粗砂	9.5	5.9	4.4	−	橙色 7.5YR6/6
29	T42／黒褐色砂	10.1	6.4	4.2	−	橙色 7.5YR6/6
30	T42／黒褐色砂	10.0	6.3	4.6	91	にぶい橙色 7.5YR7/4
31	T42／淡黒褐色粗砂	8.5	6.0	3.5	65	にぶい橙色 5YR6/4
32	T46／土坑1	8.7	−	−	−	にぶい橙色 5YR6/4
33	T42／淡黒褐色粗砂	9.6	−	−	−	にぶい褐色 7.5YR5/4
34	T48／褐灰色土	9.6	6.0	4.0	78	にぶい赤褐色 5YR5/4
35	T48／褐灰色土	9.6	−	−	−	橙色 7.5YR6/6
36	T53／暗赤褐色土	−	−	−	−	橙色 5YR6/6
37	T53／暗赤褐色土	−	−	−	−	にぶい黄橙色 10YR6/4
38	T53／暗赤褐色土	−	−	−	−	にぶい褐色 7.5YR5/3

５．石器組成表（礫石器を除く）

石 材	サヌカイト																流紋岩	
トレンチ・他	ナイフ形石器	尖頭器	石鏃	石鏃未製品	スクレイパー	石錐？	石鋤	楔形石器	加工痕剥片	使用痕剥片	細石刃核	石核	剥片	砕片	計	重量(g)	剥片	重量(g)
2													5		5	27.60		
4													2		2	1.50		
5													1		1	1.20		
6											1		4	2	7	4.95		
8													20		20	34.10		
10													5		5	11.00		
11	1											1	33		35	131.50		
13													7		7	30.20		
14			1						1				16		18	78.10	1	0.60
15													20	2	22	17.81		
17													3		3	2.40		
20													2		2	30.80		
21													1		1	0.50		
22													1		1	0.30		
23			2										20	1	23	56.66		
26													1		1	0.20		
27										1			5		6	10.00		
28					1		2		1				20	1	25	405.75		
29													1		1	17.30		
30									2				49		51	177.50	5	31.00
31			2										73		75	187.10	10	54.00
32			3		4			2	1	1		2	279		292	1218.60	84	431.50
34													2		2	12.50	3	19.20
35													19		19	66.10	4	10.70
36			1		1							2	43		47	308.80	3	7.50
42			5	1	2			1	3				89		101	260.40	17	132.20
43					1	1		1	2				65		70	226.40	4	24.20
44													5		5	26.20		
46			1									1	42		44	407.40	7	19.80
48													8		8	91.80	1	27.80
53					1										1	11.90		
西の浜表採		1											31		32	489.50	4	65.40
西の浜崖面			1										13		14	65.10		
不明													2		2	27.80		
計	1	1	16	1	10	1	2	4	10	2	1	6	887	6	948	4438.97	143	823.90

６．石器計測表

番号	出土トレンチ／層位・遺構	器　種	石　材	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)
S1	T11／淡茶褐色粗砂	ナイフ形石器	サヌカイト	(2.58)	1.36	0.63	2.5
S2	西の浜表採	尖頭器	サヌカイト	(1.63)	(1.49)	0.59	1.9
S3	T31／黒褐色砂	石　鏃	サヌカイト	1.43	0.95	0.24	0.2
S4	T46／淡黒褐色粗砂	石　鏃	サヌカイト	(2.10)	1.39	0.32	0.5
S5	T42／黒褐色土	石　鏃	サヌカイト	1.79	(1.40)	0.27	0.4
S6	T14／暗灰黄色土	石　鏃	サヌカイト	(1.98)	(1.42)	0.32	0.6
S7	T32／黒褐色砂	石　鏃	サヌカイト	2.50	(1.58)	0.36	1.2
S8	T36／ピット1	石　鏃	サヌカイト	(2.10)	(1.46)	0.34	0.9
S9	T42／黒褐色土	石　鏃	サヌカイト	(2.45)	(1.19)	0.35	0.7
S10	T32／黒褐色砂	石　鏃	サヌカイト	(1.82)	(1.12)	0.24	0.4
S11	T42／黒褐色土	石　鏃	サヌカイト	3.31	(2.33)	0.44	2.6
S12	T42／黒褐色土	石　鏃	サヌカイト	(1.27)	1.75	0.37	0.9
S13	T23／黒褐色腐植土	石　鏃	サヌカイト	(2.65)	1.63	0.39	1.4
S14	T42／黒褐色土	石　鏃	サヌカイト	1.81	1.56	0.29	0.8
S15	西の浜／淡黒色砂	石　鏃	サヌカイト	1.43	1.24	0.23	0.3
S16	T32／黒褐色砂	石　鏃	サヌカイト	2.03	0.99	0.41	0.5
S17	T31／攪乱坑埋土	石　鏃	サヌカイト	2.54	1.35	0.42	0.8
S18	T23／赤褐色粗砂	石　鏃	サヌカイト	(1.20)	(1.20)	0.24	0.4
	T42／黒褐色土	石鏃未製品	サヌカイト	1.77	1.65	0.33	1.0
S19	T28／黄褐色土	スクレイパー	サヌカイト	4.89	8.45	1.14	62.7
S20	T32／黒褐色砂	スクレイパー	サヌカイト	4.98	6.53	0.80	24.8
S21	T32／黒褐色砂	スクレイパー	サヌカイト	4.44	6.01	0.79	20.2
S22	T53／ピット1	スクレイパー	サヌカイト	4.38	5.29	0.48	11.9
	T32／黒褐色砂	スクレイパー	サヌカイト	4.36	6.03	1.16	27.0
	T32／黒褐色砂	スクレイパー	サヌカイト	4.08	8.82	0.93	33.9
	T36／褐灰色土	スクレイパー	サヌカイト	2.27	3.26	1.04	5.6
	T42／黒褐色土	スクレイパー	サヌカイト	2.92	3.34	0.40	4.5
	T42／黒褐色土	スクレイパー	サヌカイト	2.78	3.33	0.41	3.8
	T43／黒褐色粗砂	スクレイパー	サヌカイト	2.73	3.31	0.77	6.3
S23	T43／黒褐色粗砂	石 錐？	サヌカイト	3.16	1.59	0.93	3.9
S24	T28／黄褐色土	石　鍬	サヌカイト	11.89	6.48	1.39	133.3
S25	T28／黄褐色土	石　鍬	サヌカイト	15.39	8.09	1.39	159.0
	T32／黒褐色砂	楔形石器	サヌカイト	2.98	2.52	0.81	8.6
	T32／黒褐色砂	楔形石器	サヌカイト	2.59	2.42	0.74	4.8
	T42／黒褐色土	楔形石器	サヌカイト	2.70	2.48	0.48	4.3
	T43／暗赤褐色土	楔形石器	サヌカイト	3.31	1.83	0.75	5.9
	T14／暗灰黄色土	加工痕剥片	サヌカイト	3.58	4.03	0.98	10.3
	T28／暗赤褐色土	加工痕剥片	サヌカイト	4.11	4.55	0.89	15.6
	T30／褐灰色土	加工痕剥片	サヌカイト	4.05	3.19	1.00	13.9
	T30／黒褐色砂	加工痕剥片	サヌカイト	3.86	2.70	0.83	9.1
	T32／黄灰色土	加工痕剥片	サヌカイト	2.81	4.67	0.82	10.7
	T42／淡黒褐色粗砂	加工痕剥片	サヌカイト	3.65	3.06	0.89	10.3
	T42／淡黒褐色粗砂	加工痕剥片	サヌカイト	3.41	3.53	0.95	14.0
	T42／黒褐色砂	加工痕剥片	サヌカイト	3.04	4.00	0.57	7.3
	T43／ピット1	加工痕剥片	サヌカイト	2.21	3.23	0.57	4.2
	T43／ピット1	加工痕剥片	サヌカイト	2.58	4.12	0.77	8.6
	T27／淡褐色粗砂	使用痕剥片	サヌカイト	2.75	2.87	0.62	5.4
	T32／黒褐色砂	使用痕剥片	サヌカイト	3.12	3.37	0.97	7.3
S26	T11／淡茶褐色粗砂	石　核	サヌカイト	7.75	3.04	1.72	37.8
S27	T6／暗黄灰褐色粗砂	細石刃核	硬質安山岩	1.81	1.32	1.50	3.1
S28	T36／黒褐色砂	石　核	サヌカイト	4.55	6.84	1.59	53.2
S29	T32／黒褐色砂	石　核	サヌカイト	9.68	8.92	5.40	399.7
	T32／黒褐色砂	石　核	サヌカイト	4.78	5.75	1.75	42.5
	T36／黒褐色砂	石　核	サヌカイト	3.36	4.78	1.03	30.2
	T46／土坑1	石　核	サヌカイト	5.46	4.75	2.47	55.8
S30	T43／黒褐色粗砂	切目石錘	砂　岩	5.84	5.22	2.01	80.3
S31	T32／黒褐色砂	叩　石	砂 岩？	4.40	3.81	3.35	74.6

( ) 内は残存値

1　第4次トレンチ1断面

2　第4次トレンチ2断面

3　第5次トレンチ1断面

4　第7次トレンチ3断面

5　第8次トレンチ1北壁断面

6　第8次トレンチ3全景

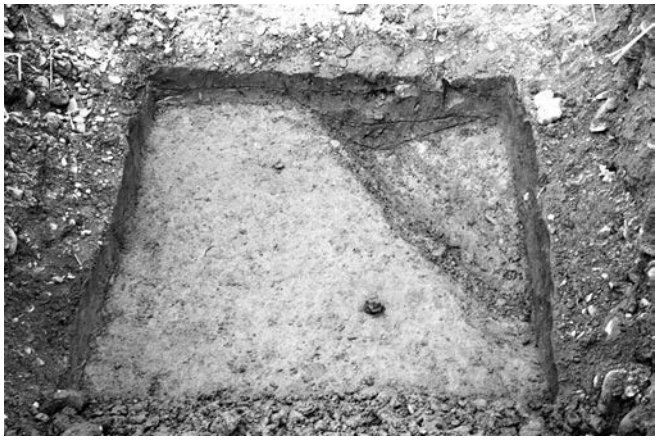
7　第9次トレンチ2北壁断面

8　第9次トレンチ7北壁断面

図版２　　酒津－水江遺跡

１　第9次トレンチ12溝状遺構

２　第10次トレンチ2ピット



３　第10次トレンチ5溝状遺構

４　第10次トレンチ7ピット

５　第10次トレンチ8ピット

６　第11次トレンチ4全景

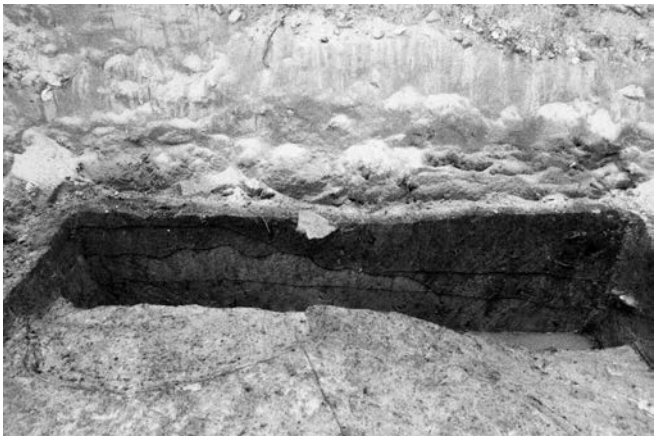
７　第12次トレンチ1西壁断面

８　第13次トレンチ1南壁断面

1　第13次トレンチ2全景

2　第13次トレンチ9東壁断面

3　第15次トレンチ8北壁断面


4　第16次トレンチ1南壁断面

5　第16次トレンチ2住居跡

6　第16次トレンチ2住居跡遺物出土状況

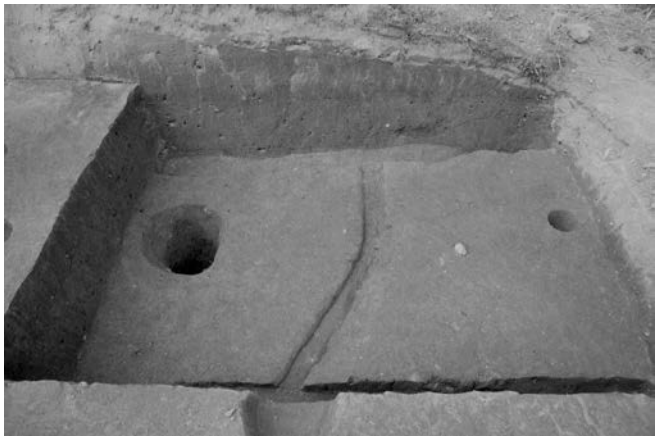
7　第16次トレンチ2住居跡近接

8　第16次トレンチ3ピット

図版４　　酒津－水江遺跡

１　第16次トレンチ３住居跡

２　第17次トレンチ１完掘状況



３　第17次トレンチ１住居跡

４　第17次トレンチ４東壁断面

５　第17次トレンチ５全景

６　第17次トレンチ８全景

７　第13次トレンチ２調査風景

８　第16次トレンチ３調査風景

21

22

25

27

28

31

34

35

36

図版６　　酒津ー水江遺跡 出土遺物（２）

37

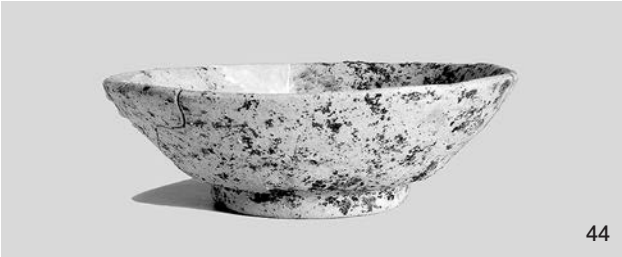
38

39

41

42

43


44

46

48

49

51

52

53

54

55

56

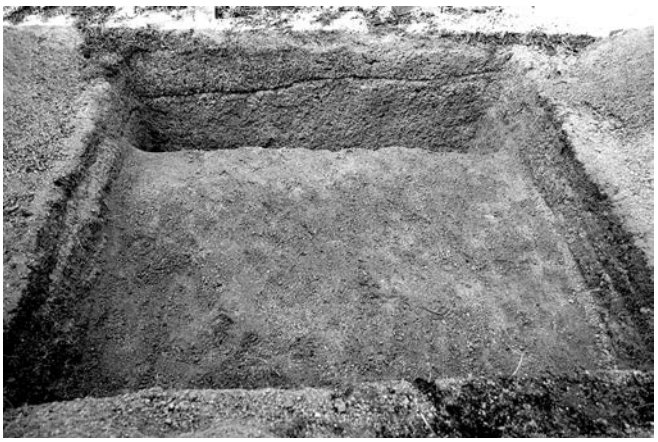
57

58

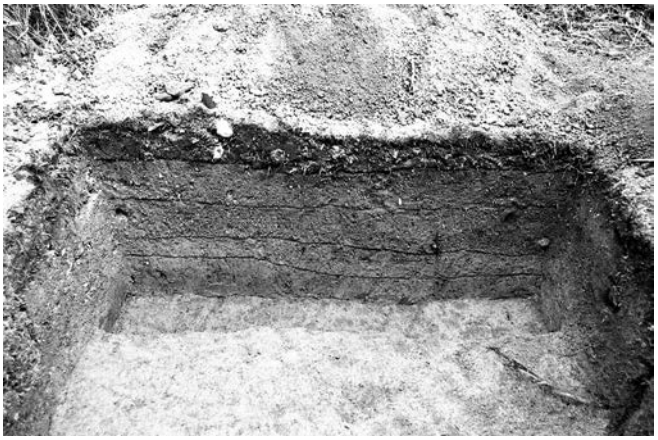
59

60

１　トレンチ3西壁断面

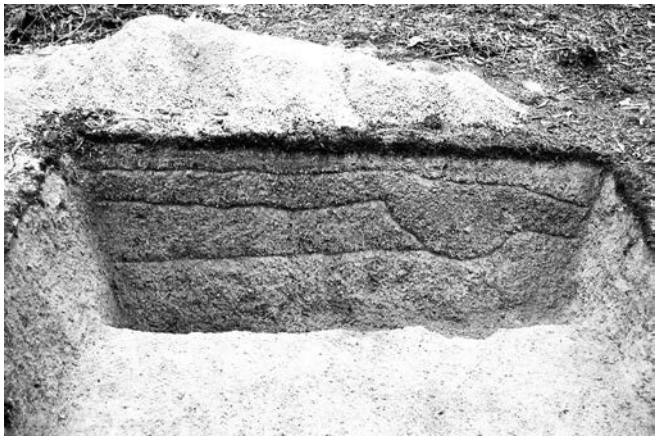

２　トレンチ6全景

３　トレンチ9北壁断面


４　トレンチ11東壁断面

５　トレンチ14遺物出土状況

６　トレンチ15西壁断面


７　トレンチ20北壁断面

８　トレンチ23北壁断面

図版８　　上水島遺跡

１　トレンチ28遺物出土状況

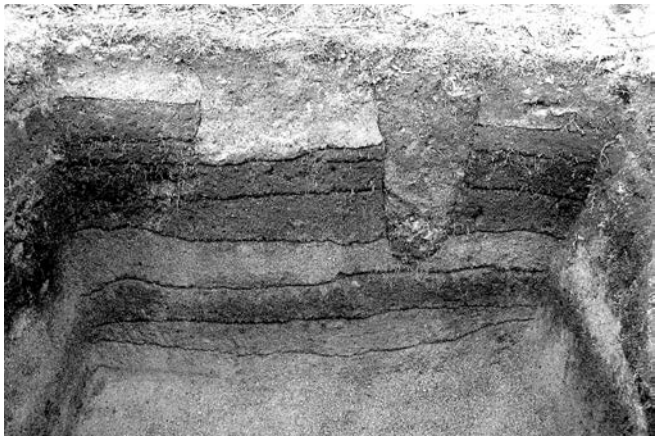
２　トレンチ28北壁断面

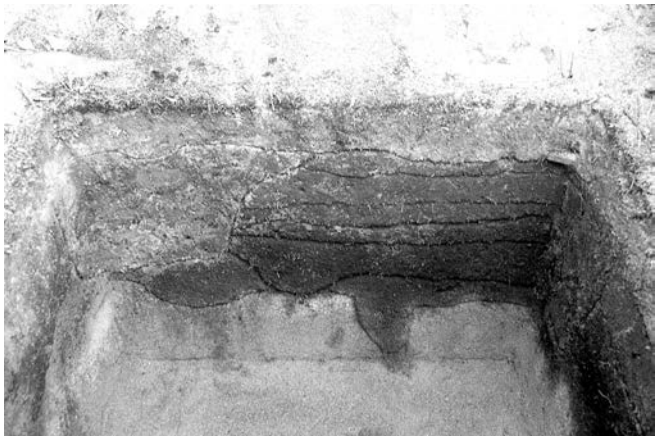
３　トレンチ30東壁断面

４　トレンチ30ピット完掘

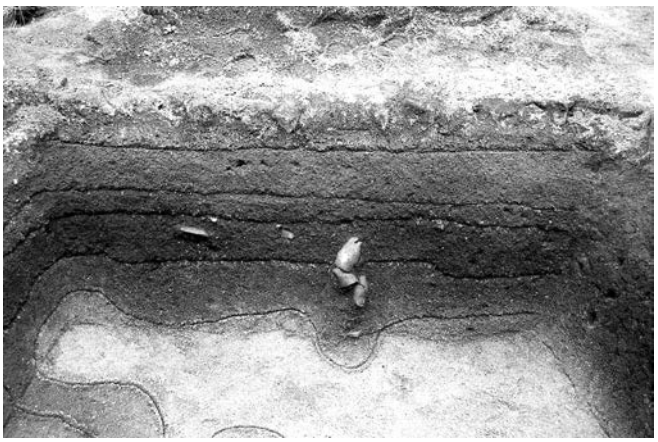
５　トレンチ31ピット上面

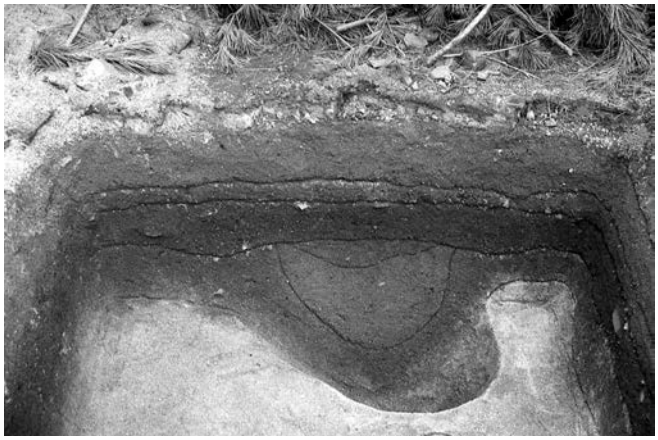
６　トレンチ31土器出土状況

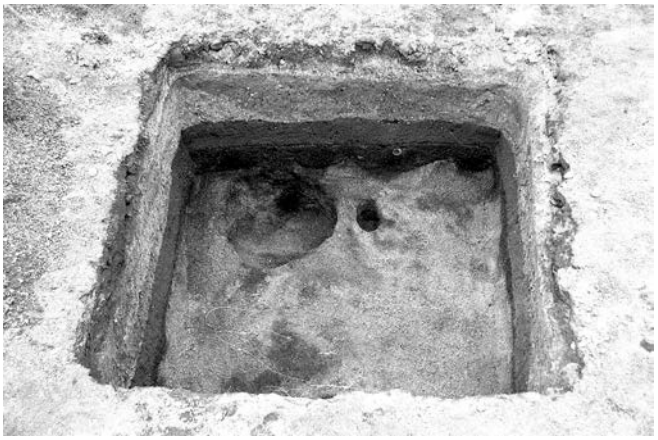

７　トレンチ31北壁断面


８　トレンチ32東壁断面

1　トレンチ36西壁断面


2　トレンチ42蛸壺出土状況


3　トレンチ42ピット1


4　トレンチ43全景

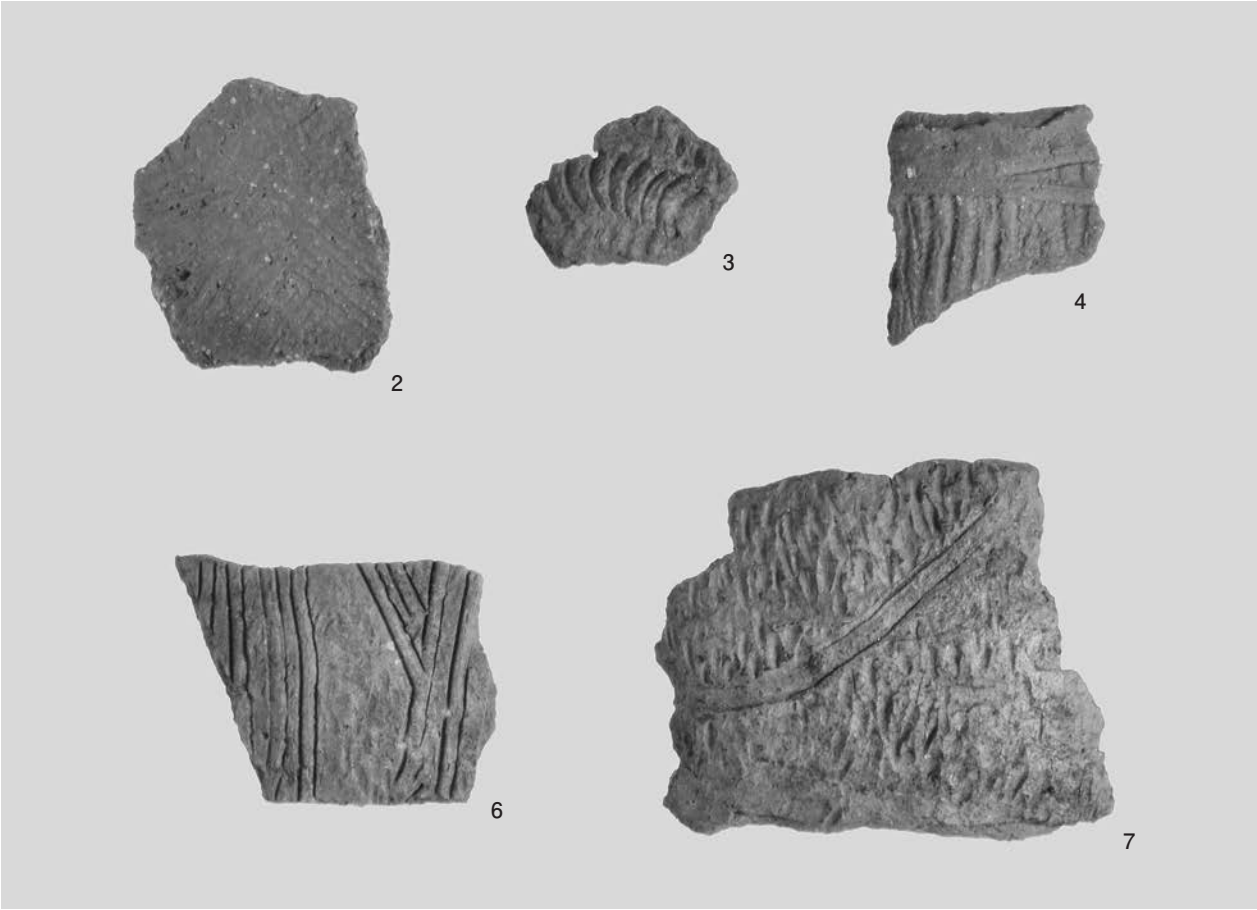
5　トレンチ44東壁断面

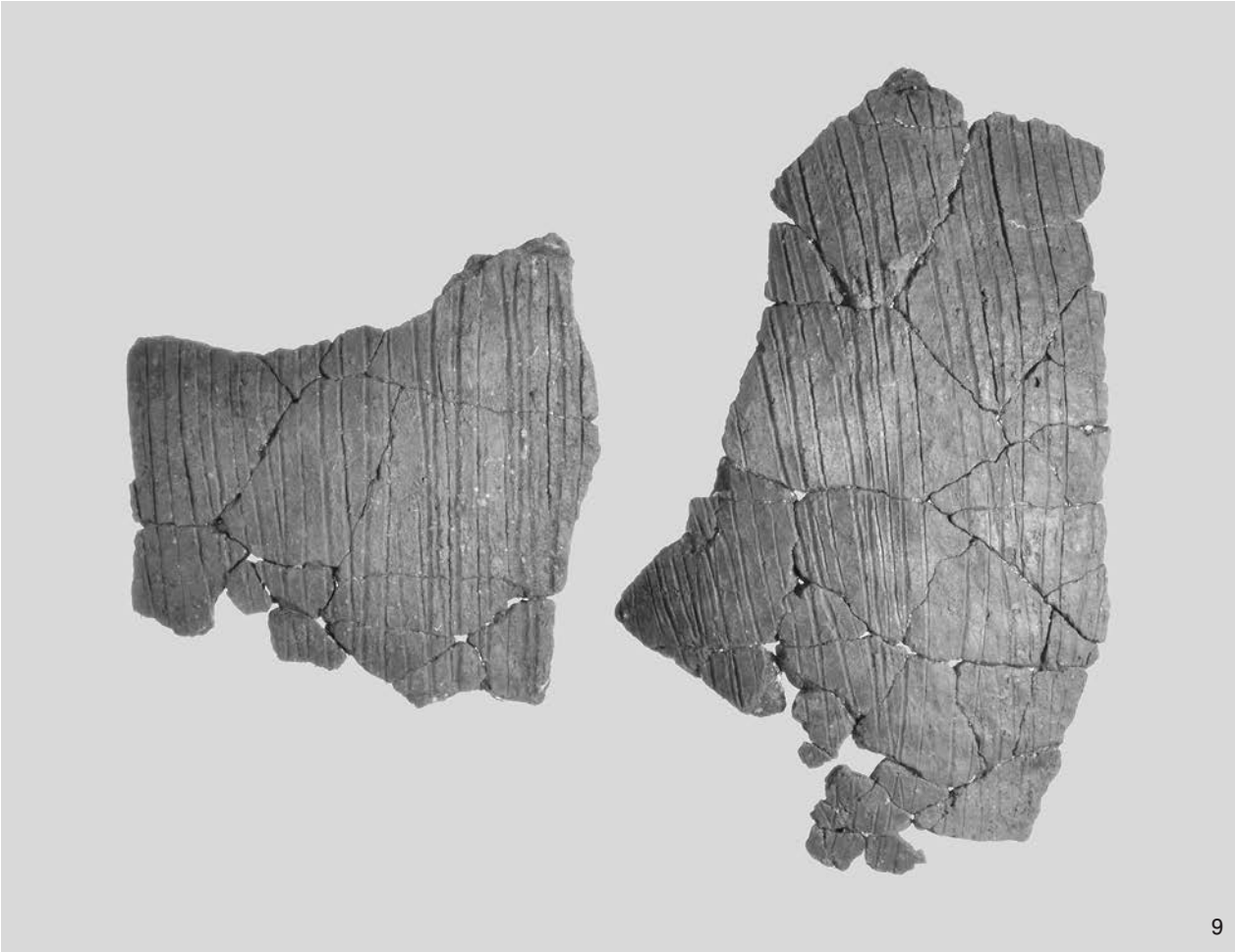
6　トレンチ46南壁断面

7　トレンチ53西壁断面

8　トレンチ54全景

図版 10　上水島遺跡 出土遺物（１）





10

11

13

14

17

18

24

27

29

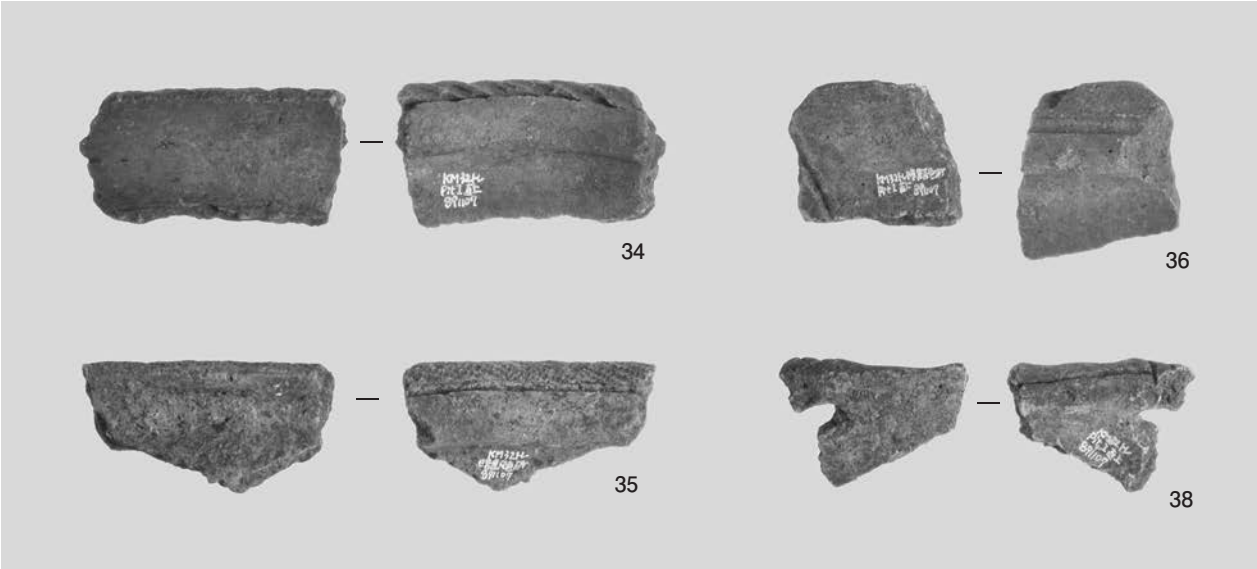
25

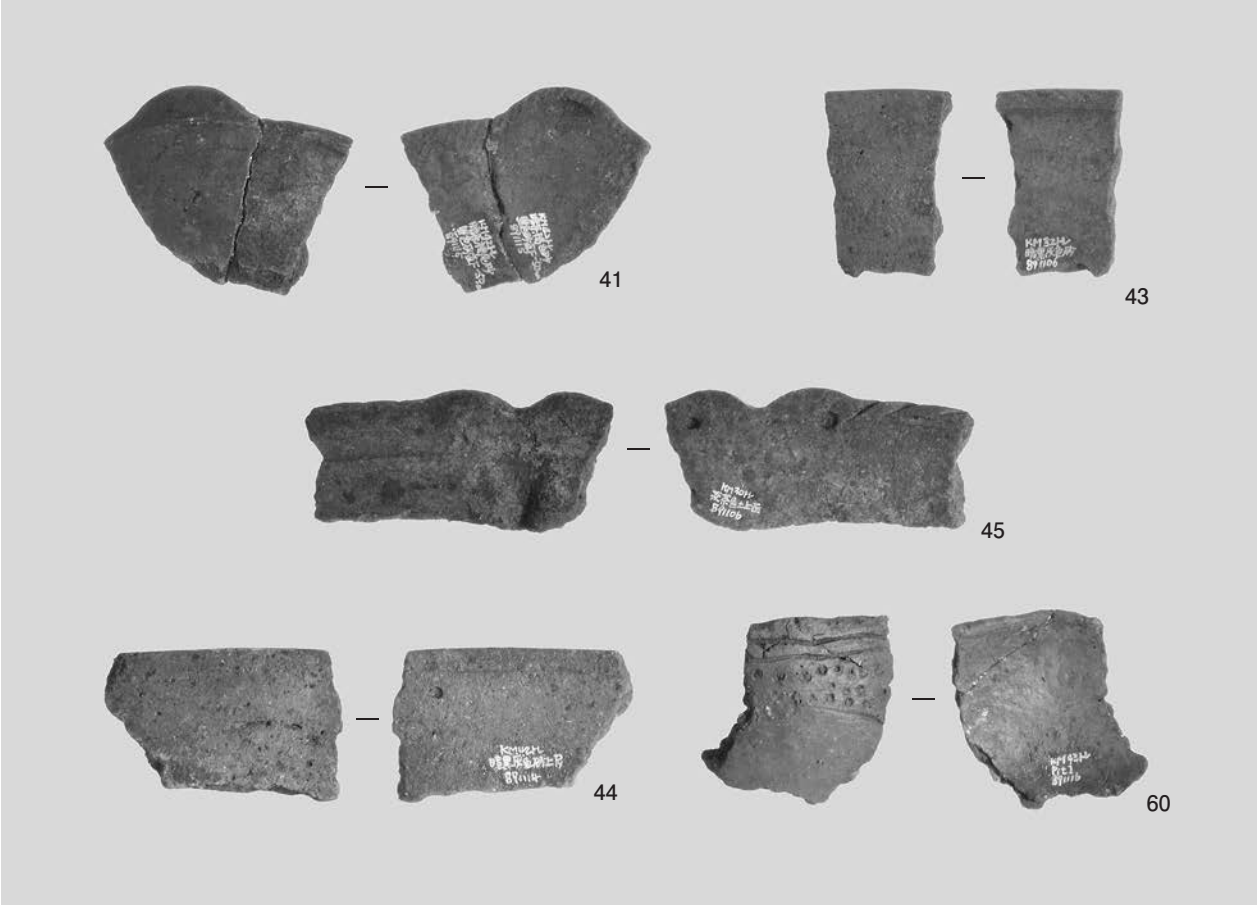
26

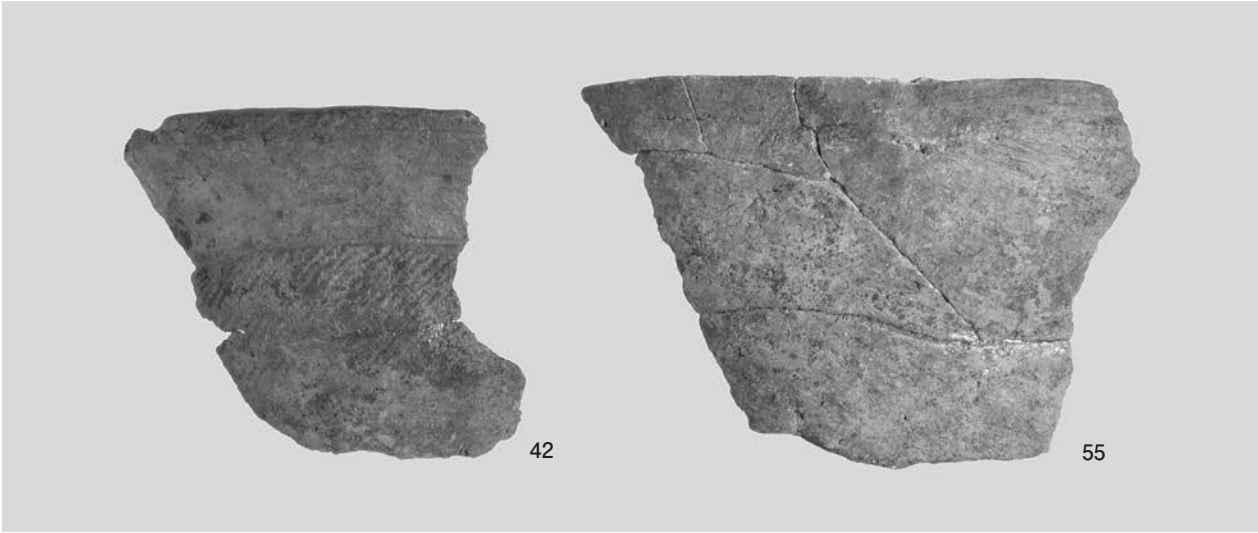
30

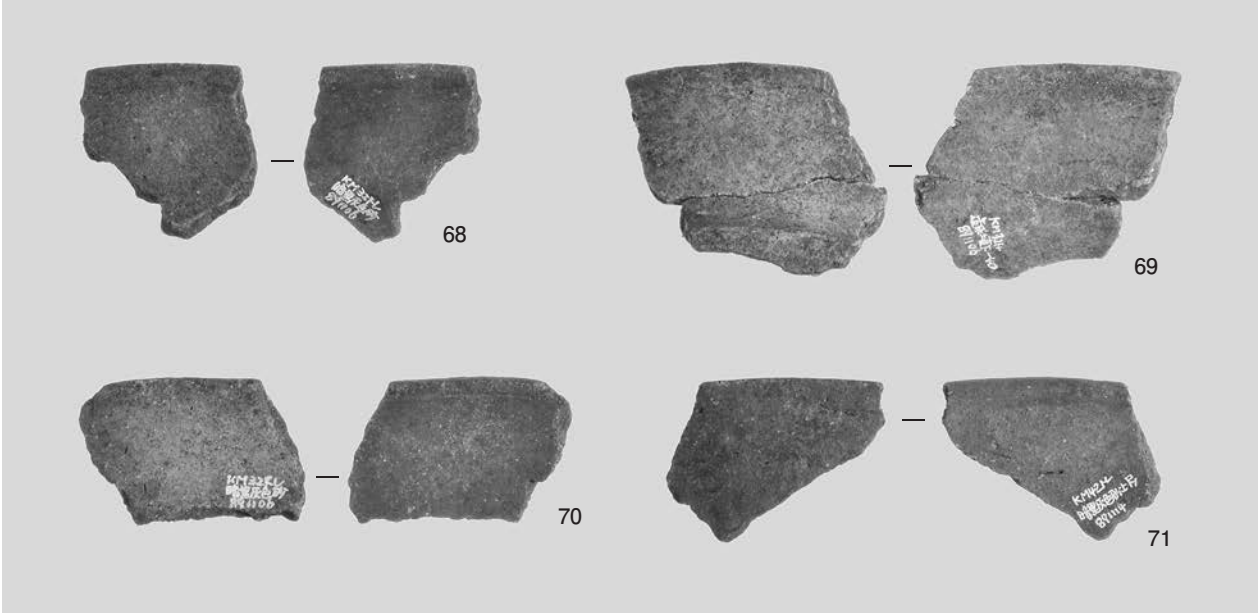
28

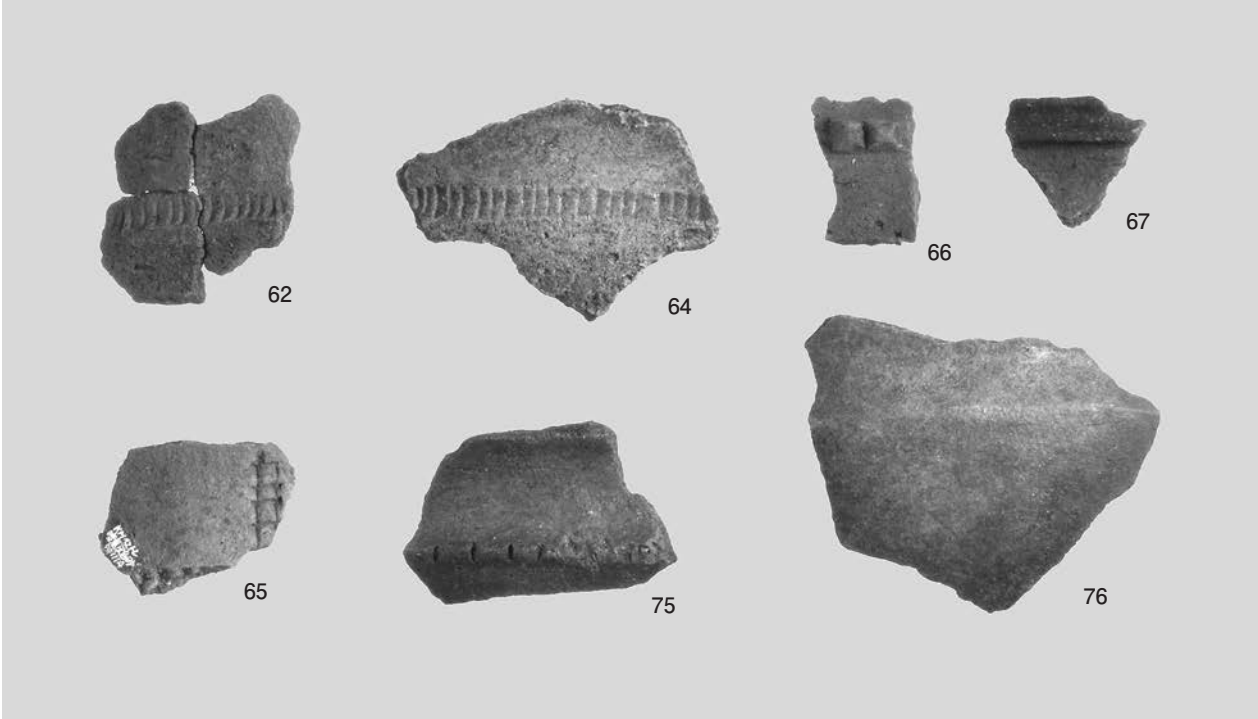
図版 12　上水島遺跡 出土遺物（３）



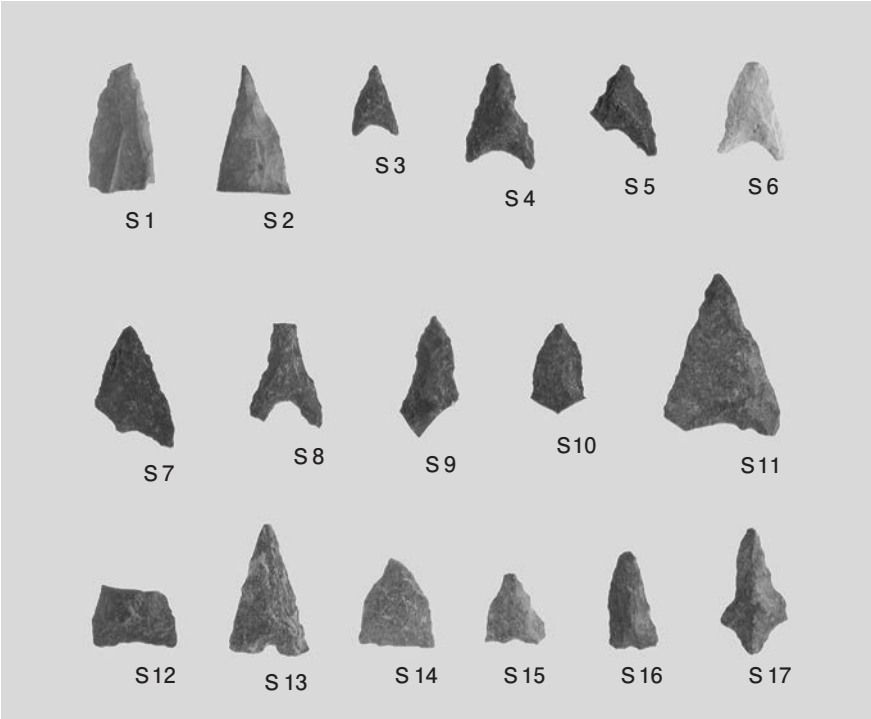


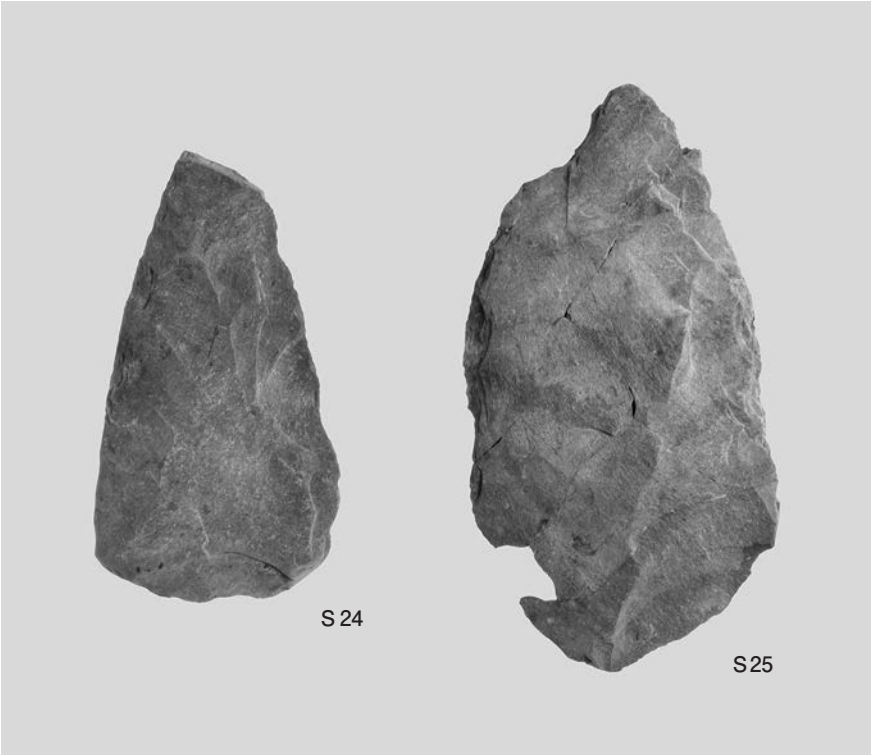

42
55

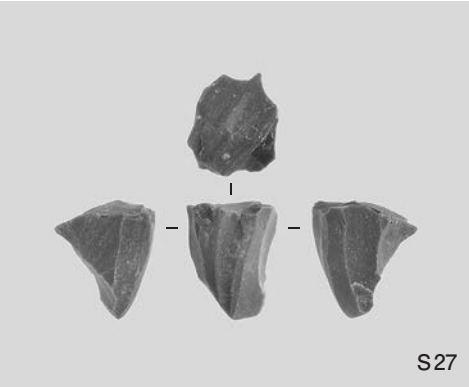

68
69
70
71


62
64
66
67
65
75
76

図版 14　上水島遺跡 出土遺物（５）


S 1
S 2
S 3
S 4
S 5
S 6
S 7
S 8
S 9
S 10
S 11
S 12
S 13
S 14
S 15
S 16
S 17


S 24
S 25


S 27

報告書抄録

ふりがな	さかづ－みずえいせき　　かみみずしまいせき
書名	酒津－水江遺跡範囲確認調査　上水島遺跡範囲確認調査
副書名	
巻次	
シリーズ名	倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告
シリーズ番号	第16集
編著者名	鍵谷守秀・小野雅明・藤原好二
編集機関	倉敷埋蔵文化財センター
所在地	〒712-8046　岡山県倉敷市福田町古新田940番地　TEL086-454-0600
発行年月日	平成29年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
さかづいせき 酒津遺跡	おかやまけんくらしきし 岡山県倉敷市 さかづ 酒津	33202	07-024	34° 36′ 47″	133° 44′ 48″	19790312～ 19960331	960㎡	範囲確認調査
みずえいせき 水江遺跡	おかやまけんくらしきし 岡山県倉敷市 みずえ　にしあちまち 水江・西阿知町	33202	07-025	34° 36′ 00″	133° 44′ 01″			
かみみずしま 上水島 にしのはまいせき 西の浜遺跡	おかやまけんくらしきし 岡山県倉敷市 かみみずしま 上水島	33202	26-001	34° 27′ 51″	133° 42′ 42″	19891002～ 19891201	228㎡	範囲確認調査
かみみずしまいせき 上水島遺跡	おかやまけんくらしきし 岡山県倉敷市 かみみずしま 上水島	33202	26-002	34° 27′ 46″	133° 42′ 46″			
かみみずしま 上水島 ひがしのはまいせき 東の浜遺跡	おかやまけんくらしきし 岡山県倉敷市 かみみずしま 上水島	33202	26-003	34° 27′ 44″	133° 42′ 59″			

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
酒津遺跡	集落跡	弥生～中世	竪穴住居・土坑 ピット群	弥生土器・土師器 須恵器	
水江遺跡	集落跡	〃	溝状遺構 ピット群	〃 石鏃・石包丁	
上水島 西の浜遺跡	散布地	縄文・古墳 奈良～平安	ピット	縄文土器・土師器 須恵器・黒色土器 緑釉陶器・飯蛸壺	
上水島遺跡	散布地	旧石器～縄文		ナイフ形石器 細石刃核・石鏃 石鍬	
上水島 東の浜遺跡	散布地	縄文・古墳 奈良～平安		縄文土器・土師器 須恵器・飯蛸壺	

印刷仕様	
紙　　質	表紙：サンマット160kg（PP張り）
	本文：書籍用紙65kg
	図版：マットアート110kg
編　　集	Mac OS 10.9.5　Adobe InDesign CS6
	Adobe Photoshop CS6
使用フォント	モリサワ OpenType フォント
	（リュウミン L-KL・中ゴシック BBB・太ミン A101・太ゴ B101・見出ゴ MB31）
製　　本	無線綴じ

倉敷市埋蔵文化財発掘調査報告　第16集

酒津ー水江遺跡範囲確認調査　**上水島遺跡**範囲確認調査

平成29年3月31日印刷発行

発 行　倉敷市教育委員会

編 集　倉敷埋蔵文化財センター

〒712-8046　倉敷市福田町古新田940番地

TEL 086-454-0600

The Excavation Report
Of
Sakazu - Mizue Site　Kamimizusima Site

Volume 16

Kurashiki
Archaeological　Center

March 2017